

# 大学入試研究の動向

令和6年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第19回）



# 大学入試研究の動向

## 42号

独立行政法人大学入試センターは、令和6年5月23日～25日、大阪公立大学との共催で、令和6年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第19回）をオンラインで開催した。本報告書は、同大会における講演、討論等を当センターの文責で採録したものである。

\*本報告書で言及されている高大接続改革の進捗状況及び講演者の肩書等は、大会開催当日のものである。

### 目 次

#### 令和6年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第19回）特集

- 全体会1（大学入試センターセミナー）  
「大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望」 ..... **3**
- 全体会2  
「見過ごされがちな高大接続課題：  
不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足」 ..... **89**
- 全体会3  
「入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは」 ..... **167**



## 「大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望」

司 会： 桜井 裕仁 (大学入試センター 研究開発部教授)  
林 篤裕 (名古屋工業大学 教授)

はじめに 大学入試センターの追跡調査研究プロジェクトの紹介と 本セミナーの趣旨説明 .....	5
桜井 裕仁 (大学入試センター 研究開発部教授)	
報告 ① 入学者選抜の効果検証, 追跡調査を俯瞰する .....	12
西郡 大 (佐賀大学 アドミッションセンター長, 教授)	
報告 ② 入学直前・直後のアンケート結果を用いた追跡調査 .....	25
平井 佑樹 (信州大学 全学教育センター准教授)	
報告 ③ 入学者選抜と大学教育とのマッチング評価に基づく PDCA サイクルの必要性 .....	37
安永 卓生 (九州工業大学 理事, 副学長(教育接続・連携 PF, 情報担当))	
報告 ④ 私立大学保育者教員養成学部における入試区分と卒業後の進路 .....	54
竹内 聖彦 (椋山女学園大学 教育学部教授)	
報告 ⑤ 教育改善のための追跡調査の活用と課題 - 早稲田大学の事例 .....	66
遠藤 健 (早稲田大学 大学総合研究センター講師)	
全体討論 .....	76

---

### 内 容：

大学入試センターでは、共通試験（大学入学共通テスト、大学入試センター試験）の妥当性検討の一環として、共通試験利用大学と協働した大学入学者の追跡調査研究プロジェクトを企画している。他方、個別大学では、入学者選抜方法や入学者に対する大学教育の改善等を目的として、各大学の事情に応じて様々なアプローチで追跡調査が行われている。後者の研究成果は、公表されないものも少なくないが、1991年創刊の『大学入試研究ジャーナル』をはじめとして、「全国大学入学者選抜研究連絡協議会」（2006年度以降、現在まで）やその前身である「国立大学入学者選抜研究連絡協議会」（1980～2005年度）の大会を中心に発表されている。『大学入試研究ジャーナル』では、毎号追跡調査関連の論文が発表さ

れており、個別大学の追跡調査に関する成果だけではなく、追跡調査研究に関するサーベイ論文も発表されるようになってきている。

追跡調査で分析対象とするデータは多岐にわたり、例えば、高等学校時代、大学入試、及び大学入学後の成績、学生や教員へのアンケート調査の結果、国家試験・資格試験の可否、大学院進学や就職等の進路までもが含まれる。加えて、卒業生に対して調査が行われる場合もある。追跡調査ではこのような種々のデータが分析対象となっており、これらをどのように取り扱うかも一つのキーになっているように思われる。

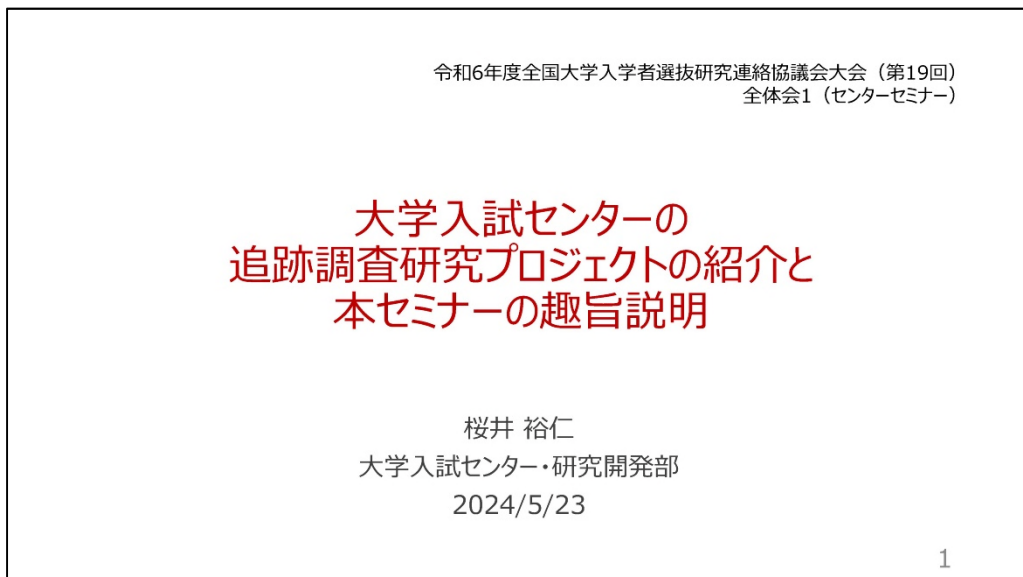
本セミナーでは、まず、大学入試センターで行われている追跡調査研究プロジェクトの準備状況を紹介する。次に、個別大学で行われている追跡調査研究について、これまでに『大学入試研究ジャーナル』に掲載されてきた追跡調査に関する論文の中から、幾つかの切り口において代表的な事例紹介を行う。事例紹介においては、各大学ではどのような目的で追跡調査を行い、それをどのように行うのか、そしてどのような成果が得られたのか、また、今後の課題としてどのようなことがあるのか等を報告いただく。これらの紹介を通して、追跡調査研究における各種の課題や今後の展望等を共有し、参加者の方々が追跡調査を計画する際のヒントにさせていただくことを願っている。

## 全体会1（センターセミナー）◎ はじめに

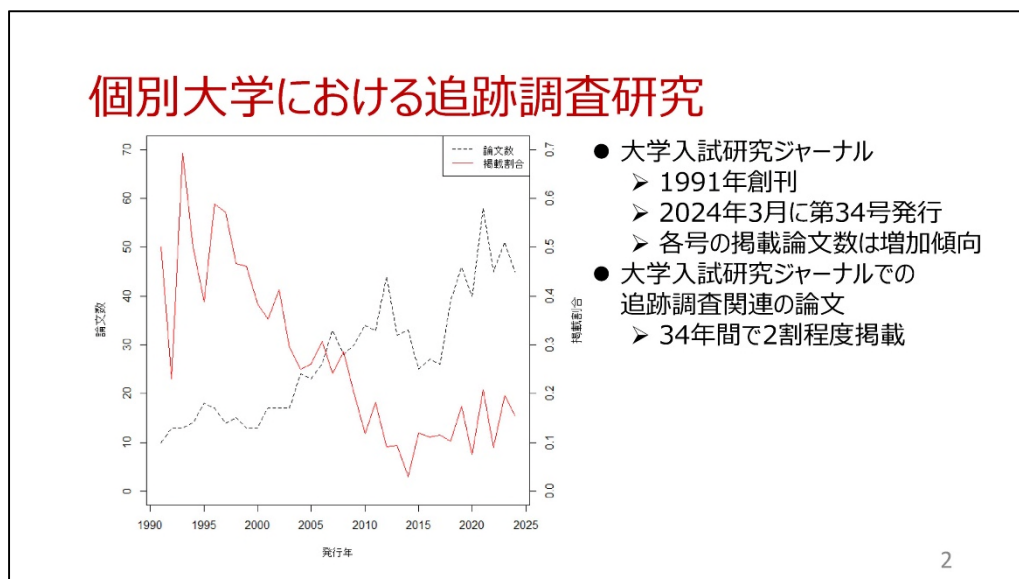
# 大学入試センターの追跡調査研究プロジェクトの紹介と本セミナーの趣旨説明

■桜井 裕仁（大学入試センター 研究開発部教授）

入研協大会（第19回）の全体会1（センターセミナー）、「大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望」を始めます。私は本セミナーの司会を務めます、大学入試センターの桜井と申します。私からは本セミナーの趣旨説明と大学入試センターで行っている追跡調査研究プロジェクトの紹介をします。



個別大学における追跡調査研究は、入学者選抜方法や入学者に対する大学教育の改善等を目的として、大学の事情に応じてさまざまな形で行われています。追跡調査研究の成果は、公表されないことも少なくないですが、入研協大会や『大学入試研究ジャーナル』を中心に発表されています。『大学入試研究ジャーナル』は1991年に創刊され、以降毎年発行されています。今年の3月には第34号が発行され、第21号以降は、J-STAGEでもご覧いただけます。



この図は、『大学入試研究ジャーナル』に掲載された毎年の論文数と、追跡調査関連の論文の掲載割合を示した折れ線グラフです。左側の縦軸は論文数を表し、図中の黒い破線と対応しています。一方、右側の縦軸は追跡調査関連の論文の掲載割合を表し、図中の赤い実線と対応しています。横軸は発行年を表しています。

追跡調査関連の論文は、『大学入試研究ジャーナル』に毎号掲載されており、900編以上の論文のうち200編ほど、全体の約2割強が追跡調査関連の論文です。直近の10年についても、1割から2割程度が追跡調査関連の論文です。

また『大学入試研究ジャーナル』では、個別大学の成果だけでなく、追跡調査研究に関するサーベイ論文も発表されるようになってきています。

## 本セミナーにおける個別大学の追跡調査の事例紹介

- どのような目的で追跡調査を行っているのか
- 追跡調査をどのように行っているのか
- どのような成果が得られたのか
- 今後の課題としてどのようなことがあるのか

本セミナーでは個別大学の追跡調査の事例紹介を行います。それぞれどのような目的で行っているのか、追跡調査をどのように行っているのか、追跡調査を行った結果、どのよう



な成果が得られたのか、今後の課題としてどのようなことがあるのかについて、お話しいただきます。

## 本セミナーの概要と流れ

- 個別大学で行われている追跡調査研究の事例紹介  
→ 事例紹介を通して、追跡調査研究における各種の課題や今後の展望等を共有し、参加者の皆様に追跡調査を計画する際のヒントにさせていただく
- 大学入試センターで行われている追跡調査研究の準備状況の紹介

時間	プログラム
14:00～14:50	発表3件(桜井, 西郡先生, 平井先生)
	休憩
15:00～16:00	発表3件(安永先生, 竹内先生, 遠藤先生)
	休憩
16:10～17:00	質疑応答

4

本セミナーは、事例紹介を通じて追跡調査研究における各種の課題や今後の展望等を共有し、参加者の皆さまに追跡調査を計画する際のヒントにさせていただくことを目的としています。また本セミナーでは、大学入試センターで行われている追跡調査研究の準備状況を紹介します。

本セミナーの趣旨説明の後に西郡先生、平井先生の発表があり、発表終了後に1回目の休憩を入れる予定です。次に安永先生、竹内先生、遠藤先生の発表があり、発表終了後に2回目の休憩を入れる予定です。そして最後の50分ほどは参加者の皆さまからの質問にできるだけ回答できるようにするため、質疑応答の時間をまとめて取る予定です。

## 大学入試センターにおける追跡調査研究

- 目的：  
個別大学の大学入学後の学修状況と共通試験（大学入学共通テスト、大学入試センター試験）との関連を調べることにより、共通試験の妥当性の検討に資する知見を得る
- 2023年度から個別大学との共同研究を開始
- 研究成果の一部は、5月25日（土）の研究会（第3セッション）で発表予定：  
桜井・林・山村(2024). 入試成績と学内成績の相関の経年変化

5

それではここで、大学入試センターで行っている追跡調査を紹介します。本調査は個別大学の大学入学後の学修状況と共通試験との関連を調べることにより、共通試験の妥当性の検討に役立つ知見を得ることを目的としています。ここでいう共通試験とは、大学入学共通テスト、大学入試センター試験のことです。

この研究プロジェクトは昨年度から行われています。この研究による成果の一部は5月25日土曜日の午前中に開催される研究会の第3セッションで報告する予定ですので、ご興味のある方はぜひこちらのセッションにもご参加ください。

## 共同研究者の募集

- ◆ 大学入試センターが行っている追跡調査研究プロジェクトでは、共同研究者を募集しています！
- ◆ ご応募・お問合せの連絡先：nyukenkyo@cen.dnc.ac.jp

- 共通試験の利用大学
- 共通試験の妥当性の検討に協力可能な大学
- 追跡調査研究の分析結果を公表可能な大学
- 分析対象とする入試成績データと学内成績データを研究で使用するの説明がなされている大学
  - (例1) 入試成績データ：募集要項で入学者選抜に関する調査・研究のために利用する旨の記載
  - (例2) 学内成績データ：新入生オリエンテーションにてデータの使用目的を説明

6

なお、センターの追跡調査研究プロジェクトでは共同研究者を募集しています。共通試験の妥当性の検討に役立つ知見を得るという研究目的に賛同いただき、共同研究を進めていただける方がいらっしゃいましたら、ぜひ入研協事務局までお知らせください。ただし、共通テストの妥当性に関する研究を行うため、共通テストを利用している大学であることや、今後研究成果を公表していきたいと考えていますので、分析結果を公表できること、また入試成績や学内成績のデータを研究で利用できることなどの点に関しては、あらかじめご確認いただきたく、どうぞよろしくお願い致します。

それではこれから本セミナーで報告いただく5名の先生方を紹介します。

## 報告①

「入学者選抜の効果検証，追跡調査を俯瞰する」

…… 西郡 大 (佐賀大学 アドミッションセンター長，教授)

- 大学入試研究ジャーナルの関連論文
  - 入学者選抜の効果検証の在り方に関する考察 (2021)
  - 個別大学の追跡調査に関するレビュー研究 (2011)

7

報告①では，佐賀大学の西郡先生にお話しいただきます。

## 報告②

「入学直前・直後のアンケート結果を用いた追跡調査」

…… 平井 佑樹 (信州大学 全学教育センター准教授)

- 大学入試研究ジャーナルの関連論文
  - 信州大学インターネット出願時アンケート結果の分析(2)  
——アンケート回答内容と入学後成績との関係—— (2023)
  - 高等学校における数学および理科の履修状況に関するアンケートの分析(3)  
——学部初年次の学業成績との関係—— (2021)
  - 高等学校における数学および理科の履修状況に関するアンケートの分析  
(2019)

8

続きまして報告②では，信州大学の平井先生にお話しいただきます。

## 報告③

「入学者選抜と大学教育とのマッチング評価に基づくPDCAサイクルの必要性」

…… 安永 卓生（九州工業大学 理事，  
副学長（教育接続・連携PF，情報担当））

- 大学入試研究ジャーナルの関連論文
  - 九州工業大学における多面的・総合的な入試の制度設計検証——評価結果および「ジェネリック・スキル」等の比較からの一考察——（2021）
  - 入学者選抜と各種評価法による伸びしろの分析（2020）
  - 九州工業大学における入試区分毎のPROG・GPAを用いた追跡調査と制度設計（2019）

9

続きまして報告③では，九州工業大学の安永先生にお話しいただきます。

## 報告④

「私立大学保育者教員養成学部における入学区分と卒業後の進路」

…… 竹内 聖彦（椋山女学園大学 教育学部教授）

- 大学入試研究ジャーナルの関連論文
  - 私立大学保育者養成学部における入試区分と卒業後の進路との関連(II)（2021）
  - 私立大学保育者養成学部における入試区分と卒業後の進路との関連（2020）
  - 私立大学教員養成学部における入試区分と卒業後の進路との関連（2019）

10

続きまして報告④では，椋山女学園大学の竹内先生にお話しいただきます。

## 報告⑤

「教育改善のための追跡調査の活用と課題 – 早稲田大学の事例」  
…… 遠藤 健 (早稲田大学 大学総合研究センター講師)

- 大学入試研究ジャーナルの関連論文
  - 大学・学部志望度と入学・卒業後のアウトプット間の検証  
——学部卒業10年後調査を事例に—— (2023)
  - 入試区分別の在学時の学びとアウトプットの関係  
——卒業生調査からの検討—— (2022)

11

最後の報告⑤では、早稲田大学の遠藤先生にお話しいただきます。

それでは各先生から報告をしていただきたいと思います。最初は佐賀大学の西郡先生です。よろしくお願いします。■

# 全体会 1 (センターセミナー) ◎ 報告 1

## 入学者選抜の効果検証, 追跡調査を俯瞰する

■西郡 大 (佐賀大学アドミッションセンター長, 教授)

佐賀大学の西郡です。



「入学者選抜の効果検証, 追跡調査を俯瞰する」というテーマでお話しします。タイトルでは「効果検証, 追跡調査」という順番となっていますが, 追跡調査から見ていきたいと思っています。

追跡調査のレビュー研究

大学入試研究ジャーナル  
No. 21  
2011年3月

『個別大学の追跡調査に関するレビュー研究』  
西郡大 31-38ページ

20年間の追跡調査を振り返る  
1991年 (No.1) ~ 2010年 (No.20)

- 入学前と入学後の2つの指標を用いて検証しているもの。

390件中, **121件**の論文に注目

(レビューの方針)

- どのような分野 (学部) で主に行われてきたか。
- どのような入試方法が分析に対象になったか。
- どのような指標が検証に用いられているか。
- 代表的な分析結果

3

まず追跡調査に関し、『大学入試研究ジャーナル』のレビューということで、1991年の創刊号から、2010年までの20年間の追跡調査を振り返ります。

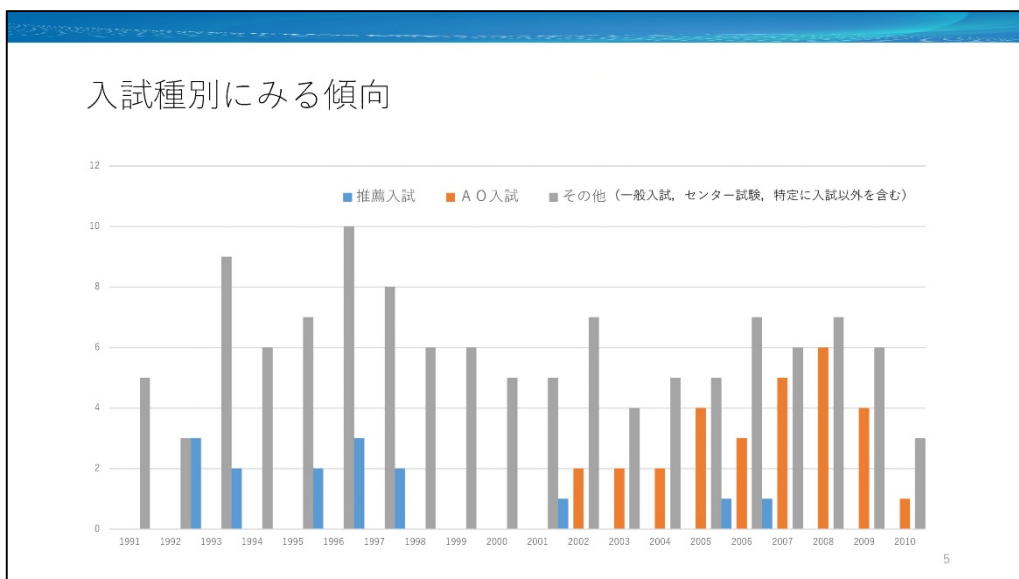
全論文390件のうち121件の、入学前と入学後の2つの検証指標を用いて検証した論文に注目して整理しました。どのような分野(学部)で主として行われていたか、どのような入試方法が分析の対象になっていたか、どのような指標を用いて検証を行ったのか、そして代表的な分析結果について整理したものです。

分野別の内訳

分野別	件数	分野別	件数
医学	38	体育	2
理学・工学	26	工芸・繊維	2
全学共通	19	教養	1
複数学部	16	経済	1
教育	6	歯学	1
情報	5	薬学	1
看護	2	その他	1
合計		121	

4

分野別の内訳を見ると、一番多かったのは医学系の分野です。そして理学・工学、全学共通、複数学部という順になっています。医学系が多いのは当時、例えば山梨医科大学、宮崎医科大学、佐賀医科大学などの医学系単科大学の先生方が非常に熱心に追跡調査をなされていて、そういった成果がこの論文数となっているためです。この内訳から理系分野の追跡調査が比較的多かったということが分かります。



## 全体会1（大学入試センターセミナー）

ではこういった入試の種別、入試区分を対象とした追跡調査が多かったのかといいますと、1990年代は一般入試やセンター試験利用入試、編入学など、さまざまな入試一般に関して、いろいろと追跡調査が行われてきました。その中で少数ですが推薦入試にも注目した追跡調査が行われています。

そして、AO入試元年と言われている2000年以降、AO入試を対象とした追跡調査が実施されてきました。2008年には6件のAO入試を対象とした追跡調査が報告されています。

指標分類	具体例
入試区分	前期日程、後期日程、推薦入試、AO入試など
入試成績	個別試験(学力検査,小論文,面接試験,実技試験,総合問題,独自入試方法), 共通試験(共通一次試験,大学入試センター試験),面接試験の評価,配点比率の影響,各種統計指標(科目間相関,評価方法間の相関,合否入れ替わり率等)など
高校成績	調査書,各科目の履修成績,推薦書など
属性	性別,現浪(年齢),出身地域,高校種別(普通科,専門系)など
高校での活動実績	出席日数,課外活動(部,クラブ活動),高大連携活動への参加有無など
高校での履修状況	選択科目において何を選択していたか(特に,理科)
入学時認識	志望動機など
入試状況	センター試験の全国平均点,受験競争倍率など

では分析に用いていた指標について、まず1つ目の指標①「入学前の情報」では、大きく8つの分類に分けられます。まずは入試区分に該当するもの、そして入試に関する成績です。個別試験の成績、共通試験の成績、面接の得点や選考に用いたスコア等が対象になります。次に調査書の評定平均や、さまざまな履修の成績といった高校の成績、そして属性に関するものです。出席日数や課外活動など、高校でどういう活動をしていたのかを対象にしたものもあります。さらには高校での履修状況として、特に医学部では、理科のうち、生物、化学、物理のどれを履修していた学生が入学後にしっかりと学習ができていたのかを見ていったものが多かったです。また、志望動機などの入学時の認識と、最後は入試の状況です。全国的な状況ということで、センター試験の全国平均や競争倍率等を使っています。



## 入学後の情報 (指標②) の分類

指標分類	具体例
入学後学業成績	教養教育, 一般課程教育, 専門教育等の修学状況(取得単位数やGPAの成績等), 教育実習参加資格など
学生の意識・活動等の調査結果 (学生対象の調査)	大学生生活や課外活動等の満足度および不満, 入学後の活動履歴, 学生自身の自己評価, 授業の理解度, 留学経験, 教員との交流, 入学前後ギャップ認識など
医師国家試験の合否	合格率や不合格者など
卒業後進路	大学院進学率, 就職先企業形態(民間, 公務員など), 教員採用実績など
留年・ドロップアウト	進学率, 卒業率, 休学者, 中途退学者, 除籍者など
教員による評価	指導教員による学生の評価
卒業研究の評価	卒業論文および卒業研究の評価など
卒業後の活動状況	卒業後所属機関の担当者による評価, 卒業後の所属機関での活動など
その他	大学独自指標, 履修パターンや入学後コース選択, 大学院入試の成績, 共用試験の成績, 就職面接(学内模擬面接の評価), 学生のピアレビューなど

一方で、入学後の成果となる指標としては、この指標②として表にまとめています。多く用いられるのは、入学後の学業成績で、主に取得単位数やGPAに関するものです。

アンケート調査が中心になりますが、学生の意識や活動等の調査から得られる情報、医学部では国家試験の合否、主に理工系学部では卒業後の進路として大学院に進学したかといったことに関するもの、更に留年・ドロップアウトに関する情報があります。そして指導教員による学生の評価であるとか、卒業研究に対する評価というものもあります。あとは卒業後の活動状況です。これはデータを取るのは大変だと思いますが、卒業後の所属機関、つまり医学部を卒業した後の研修機関における評価が材料として使われています。その他には大学独自の指標や、学生のピアレビュー、大学院入試の成績などが含まれ、多種多様な情報が成果指標に用いられたということになります。

## 「指標①」と「指標②」の利用状況

	入学後成績	学生対象調査結果	医師国家試験結果	卒業後進路	留年・ドロップアウト	教員評価	卒業研究評価	卒業後活動	その他	合計
入試区分	62	16	4	9	9	6	2		6	114
入試成績	55	5	8	3	9	3	3	2	6	94
高校成績	24	1	4	5	2	2	2	2	1	43
属性	10	1	3	3	3	1	1	1		23
高校での活動実績	7	3	2	1	2	1	1		1	17
高校での履修状況	4	1			2					7
志望動機	1	2		1			1			5
入試状況	1		2							3
合計	164	29	23	22	27	13	10	5	12	305

分野別の傾向は、論文を参照してください。

こちらは指標①と指標②の利用状況をクロス集計した表です。縦軸の緑色が指標①で、横軸の青色が指標②です。最も多く見られた組み合わせは「入試区分と入学後の成績」で、例えば推薦と前期日程と後期日程等の区別に入学後の成績はどうだったのかということを目指します。続いて、入試成績と入学後成績として、入試の得点が高かった学生は入学後どうだったのかといった、相関関係を見るようなものが比較的多く見られました。

一方でこの学生対象の調査結果に関しては、AO入試が導入されてきた後に比較的多く見られました。学業以外の側面を見るため、学生を対象としたアンケート調査のデータを用いて、学力以外の面ではどういった傾向が見られるのかを検証したものが多く見られます。それぞれの分野別にも整理していますので、それに関しては論文をご参照ください。

「指標①」と「指標②」の利用の傾向

【一般的に用いられる指標】

指標①：「入試区分」，「入試成績」，「高校成績」

指標②：「入学後学業成績」，「学生の意識・活動等の調査結果」

【分野別の特徴】

医学系：「医師国家試験の合否」

理工系：「（大学院進学率などを含む）卒業後進路」

9

①と②の利用の傾向をまとめたスライドです。一般的に用いられる指標としては入試区分、入試成績、そして高校の成績です。そして成果の②は入学後学業成績、学生の意識・活動等の調査結果の2つということになります。

分野別の特徴としては医学系では「医師国家試験の合否」が理工系では「（大学院進学率などを含む）卒業後の進路」がよく用いられています。これは教員養成系でも比較的多く見られました。

## 代表的な分析結果例①

- ① 「入試成績」と「入学後学業成績」には相関関係がみられず、むしろ調査書の評定平均を中心とした「高校成績」の方が、入学後の学業成績を予測している。(「選抜効果」の考慮：配慮なし23件，配慮あり20件)
- ② 大学入学後の学業成績において、一般教育課程および教養教育といった前半の学業成績と後半の専門教育の相関関係は強く、その後の進路(大学院進学など)にも一定の影響力を持っている。好成績者の特徴は、入試成績上位者というよりも入学後のモチベーションや勉学に対する高い意欲を持つ学生である。
- ③ 医師国家試験の可否に影響力があるのは、入試成績そのものではなく、入試入学後の成績が大きな要因となっている。属性別にみると現役生が相対的に優秀な成績を示し、推薦入試は、現役生を獲得するために有効な方法だといえる。

10

では追跡調査の分析結果について、代表的な例を少し紹介いたします。

まず1つ目は、「入試成績」と「入学後の学業成績」には相関関係が見られず、むしろ調査書の評定平均を中心とした「高校成績」のほうが、入学後の学業成績を予測しているという結果を記述している論文です。

その際、「選抜効果」の問題があります。入試成績と入学後の成績を比較すると、入試成績は入試に直接的に用いている材料のため合格・不合格に関わらずデータが存在しますが、入学後の成績については不合格者のデータは存在しません。したがって入試成績と入学後成績の相関は見かけ上小さくなる一方で、高校成績と入学後成績の相関は相対的に大きくなるため、入試成績よりも高校成績を用いる方が良いという主張があります。この選抜効果を配慮せずにそのまま相関関係を主張している論文が23件、配慮した論文が20件ありました。

2つ目に、入学後の学業成績において、一般教育課程および教養教育といった前半の学業成績と後半の専門教育の相関関係は強く、その後の進路にも一定の影響力を持っているということです。好成績の学生の特徴は、成績上位者というよりも、入学後のモチベーションや、勉学に対する高い意欲を持つ学生であるという知見が多く見られています。

3つ目は医師国家試験について、医学部系において可否に影響力があるのは、入試成績そのものではなく、入学後の成績であるということです。属性別に見ると、現役生が相対的に優秀な成績を示していて、推薦入試は現役生を獲得するために有効だという知見が得られました。

このように入学後の前半部分の成績と卒業時の成績が相関するという事は、さまざまな研究で言われていることだと思います。こういった検証を通じて、共有されて、初年次教育の重要性が言われているのだと思っています。

## 代表的な分析結果例②

### 入試区分別の比較結果の主な特徴

- **一般入試**：前期日程と後期日程入学者の入学後成績に大きな差はない
- **推薦入試**：他の入試区分入学者よりも相対的に優秀。ただし、大学の設置形態、推薦入試の方式（指定校、公募制、昼間および夜間コースなど）、競争倍率といった各種条件によって状況は異なる。
- **AO入試**：入学後学業成績は、他の入試区分の入学者と比べて遜色ない。また、彼らは受験する上で大学のことをよく調べ、高い学習意欲や積極性を持って入学する傾向があり、入学後の満足度も高いという事例もある。

11

その他には入試区分別に比較結果した主な特徴として3つ整理しています。まず一般入試では国公立大学が中心になりますが、前期日程と後期日程の入学者の入学後の成績に大きな差はないという特徴があります。

推薦入試については、他の入試区分の入学者よりも相対的に優秀ということです。ただ大学の設置形態とか、推薦入試の方式、これは私学も含め、指定校、公募制等、さまざまなものがありますが、そういった条件を加味すると、状況はさまざまです。

AO入試については、入学後の学業成績は、他の入試区分の入学者と比べて遜色はないということです。これはあくまでピックアップした論文が導いた結果ということになります。また彼らは受験をする上で大学のことをよく調べていて、高い学習意欲や積極性を持って入学する傾向があって、入学後の満足度も高い事例があるということが、対象論文からは見受けられます。

## まとめ

先述した代表的な分析結果は、一部に共通性がみられたもの。

全ての大学や学部にとって汎用的な追跡調査の方法や共通的に援用できる分析結果はほぼ存在しない。

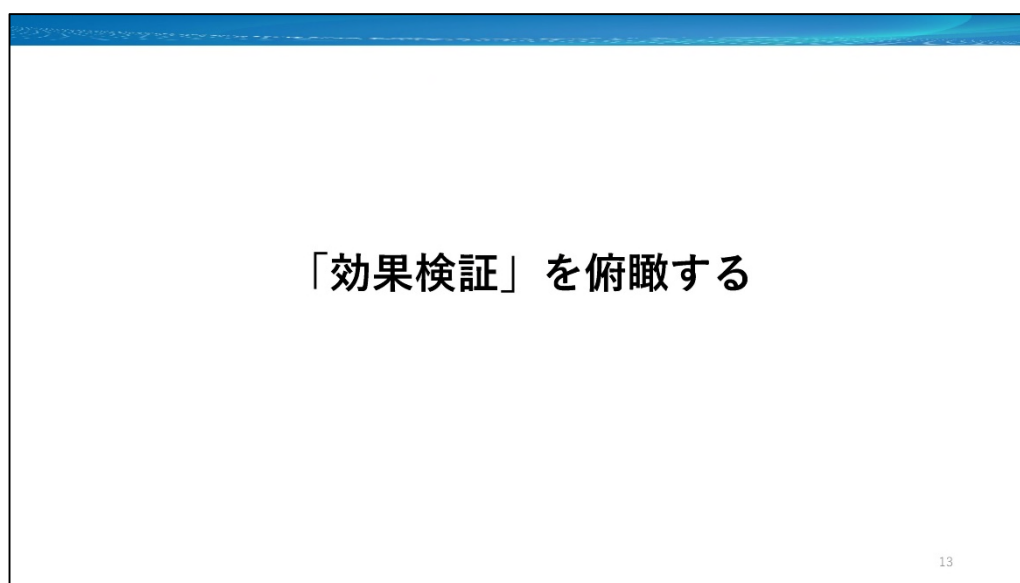
大学や学部が置かれた状況に則した形でのアプローチが必要。

大学前半の成績が後半の学習成果に影響を与えることを前提とすれば、初年次教育をはじめとする学習活動のレディネスを検討することが必要。

12

追跡調査に関するまとめです。今、幾つか代表的な分析結果をご紹介しましたが、これはいろいろとある中で、一部に共通性が見られた事例ということです。今の結果が全ての大学や学部にとって汎用的な調査の方法であるとか、共通的に採用できるようなものではありません。この方法をやれば確実に期待する効果、結果が得られるというわけではありません。

そういった意味では大学や学部が置かれた状況に即した形での追跡調査、アプローチが必要になってきます。また、そうはいっても、大学前半の成績が後半の学習成果に影響を与えているという共通する知見がありますので、そういったことを前提とすると、アドミッションポリシーにも関わってくると思いますが、やはり初年次教育をはじめとする学習活動のレディネスを検討することが必要と思われる。



続いて効果検証です。追跡調査も含めた、もう少し広い範囲の効果検証というものを俯瞰したいと思います。

どんな効果検証がこれまであったのかを整理

ISSN 1346-2629

大学入試研究ジャーナル

No. 31  
2021年3月

---

『入学者選抜の効果検証の在り方に関する考察』  
西郡大 27-34ページ

---

全国大学入学者選抜研究連絡協議会  
独立行政法人大学入試センター

**10年間**を振り返る  
2010年 (No.20) ~ 2019年 (No.29)

- **個別選抜**の効果検証と考えられるもの。
- 各大学の入試制度や評価方法等に関して、何かしらの効果や課題を明らかにすることを目的としたもの。
- ただし、各大学の個別選抜の在り方に直接的に関係ないものや入試制度の構築段階にある報告は対象外。

選定の結果、**50件**の報告に注目

- 追跡調査に関する検証
- 評価手法の精度に関する検証
- 選抜機能に関する検証

}

**3観点**で整理

14

こちらは2010年から2019年までの10年間を振り返ってレビューした内容です。この後、ご報告をされる先生方は基本的に2019年以降の研究が対象になりますので、それ以前の研究がこの対象となっています。

どのような視点で見たのかといいますと、各大学の個別選抜の効果検証と考えられる内容を対象としています。各大学の入試制度や、評価方法等に関して、何らかの効果と課題を明らかにする研究です。ただし、各大学の個別選抜の在り方に直接的に関係ない報告や、入試制度の構築段階にある報告は対象外としていて、50件を整理しました。

### 追跡調査による検証例

- **大学入学後のパフォーマンスを入試区分で比較**  
任意の入試制度を他の入試区分と比較することを通じて、当該入試の適正性を検証したもの  
【指標例】GPA、学籍状況、初年次教育の成績、卒業後進路状況、医学部共用試験のスコアなど
  
- **学業成績以外の評価指標を取り入れた分析**  
分析の視点は上記と同じであるが評価指標が学業成績以外のもの。  
【指標例】指導教員による評価、学生表彰の割合、入学後の科目履修行動、学生のピアレビュー、外部のアセスメントテスト、エンロールマネジメント的分析など
  
- **長期的な視点に立った検証**  
10年間を一区切りとして、長期的視点にたった検証を行ったもの。

15

ここにある3つの観点で整理しています。それぞれ順に見てみますと、追跡調査に関する検証例ということで、先ほど、「追跡調査を俯瞰する」というところで見たと重複する部分がありますが、大学入学後のパフォーマンスを入試区分で比較するという報告が多く見られます。任意の入試制度、例えばAO入試であれば、AO入試と他の入試区分の比較を通じて、当該入試の適正性を検証した報告です。使われている指標はここに並んでいるようなものです。

また、学業成績以外の評価指標です。先ほど入学後の情報（指標②）で紹介しました、学生を対象としたアンケート調査以外にも、外部のアセスメントテストや、コンピテンシー、リテラシー等に関するものなど、入学から卒業までよりさまざまな情報を学籍番号でつないでエンロールメント・マネジメント的分析をした報告も見られるようになりました。

また、10年間を一区切りとして長期的な視点に立った検証です。AO入試導入から10年が経過してどうだったのかという検証を行ったものも見られます。

## 評価手法の精度に関する検証例

- **面接の信頼性**について一般化可能性理論を用いた検証
- 書類審査と面接試験における**評価者の寛大化傾向**について項目反応理論からの検証
- **独自に開発した問題解決能力試験**について、センター試験との相関や合格者の特徴、学業成績との関係性などを分析することで**評価方法の妥当性を検証**
- 個別学力検査の質を検証するために、合格者を対象に質問紙調査を実施し、**入試問題の内容的妥当性を検証**

16

その他には追跡調査以外の評価手法です。今現在、用いている手法の精度を高めたり、改善点があれば見直したりしようというものです。

面接の信頼性について、一般化可能性理論という手法を用いてその精度を検証した事例もあります。

また、書類審査と面接試験における評価者の寛大化傾向について項目反応理論を用いて検証した事例もあります。

更に、独自に開発した問題解決能力試験というものがその大学にあるのですが、そういったものの妥当性について、センター試験の情報や、合格者の特徴などを分析して検証した事例も見られます。

そして、個別学力検査の質を検証するものとして、合格者を対象に質問紙調査を実施し、入試問題の内容的な妥当性を検証した事例も見られました。

## 選抜機能に関する検証例

- 入試制度の変更によって受験者や合格者の**学力水準がどのように推移**しているかについてセンター試験の得点を用いた検証
- 志願者や**合格者の学力水準に志願倍率が及ぼす影響力**についてセンター試験得点を分析
- 医学部の地域枠の導入によって、地域枠入学者と一般枠入学者の入試成績や入学後の成績を比較し、**地域枠入学者の学力水準が担保**されているかを検証
- 学力水準とは違った側面に注目し、**入試科目と志願倍率が入学者のコンピテンシーとリテラシーに影響を与えるのか**について分析
- 新設学部の入試制度について初年度の実施結果に注目し、志願者の学力水準や英語外部検定試験の活用の影響、合否入れ替わり率など、導入直後の成果や課題について検証
- 一般入試の20年間にわたる合否入れ替わり率の安定性検証、ある学科の25年間にわたる入試動向を追跡し、長期的な視点から見える入試制度変更の成果や課題を総括的に分析

17

## 全体会1（大学入試センターセミナー）

次は選抜機能に関する検証例です。受験者や合格者の学力水準が、入試制度の変更によってどのように推移したのかをセンター試験の得点を用いて、それを比較して検証したのが見られます。

次に志願者や合格者の学力水準に倍率が及ぼす影響をセンター試験の得点を利用して分析したのが見られます。

あとは医学部の事例ですが、地域枠の導入によって、地域枠の入学者と一般枠入学者の入試成績と入学後の成績を比較し、地域枠入学者の学力はどう担保されているのかを見たものもあります。

また、学力水準とは違った側面に注目して、入試科目と志願倍率が、入学者のコンピテンシーとリテラシーにどう影響を与えるのかを見たものもあります。

あとは学部が新設された際に、入試制度の初年度の実施結果に注目して、さまざまな情報を用いた検証がなされたものもあります。

そして最後に、20年間という非常に長期にわたるデータを使って、合否入れ替わり率の安定性検証ということで、ある学科の25年間にわたる入試動向を追跡し、長期的な視点からその成果や課題を見たのが見られます。

### 効果検証の事例を整理して思うこと

- 多くの追跡調査は、既存の指標や経験的な観点からみて入試制度や評価方法等の妥当性や適切性についてアプローチ。
- 教育改善の文脈よりも入試をどうすべきかという観点が中心。  
⇒ 入試に関する担当者が検証を担っているのが当然といえば当然。
- 新しい制度や手法を導入すると、その効果を示すための検証作業になりがち。

（報告者の経験から）

追跡調査を含む様々な検証を通して入試の改善を検討してきたが、教育全体の質的な向上という点からみれば、改善の効果は限定的であると感じる。

⇒ 入試部分の改善だけでなく、教育と一体的な改善こそが本来あるべき姿では？

18

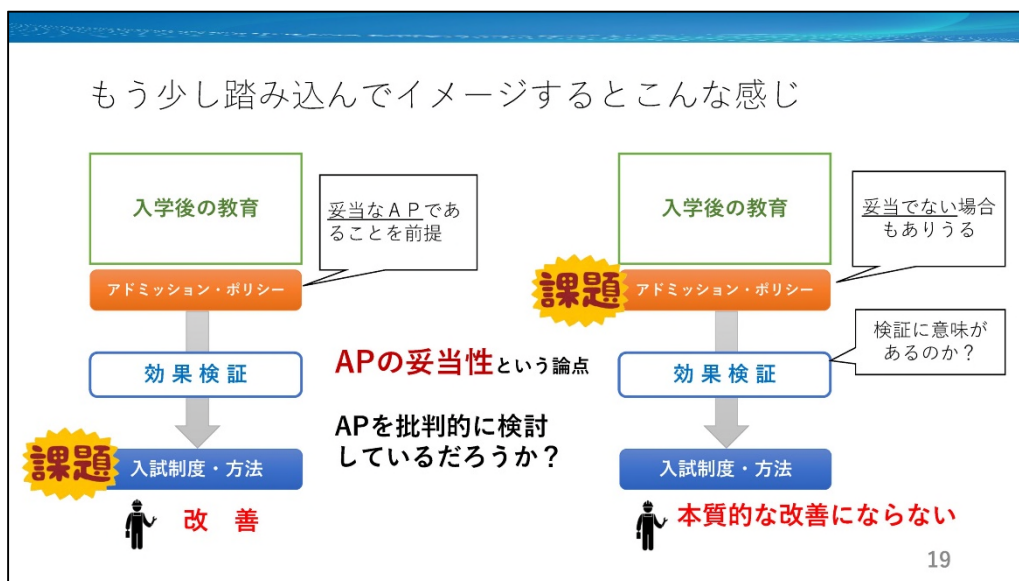
ざっくりとはありますが、こうした効果検証の事例を整理してまいりまして思うことがあります。多くの追跡調査は、既存の、これまで使われてきた指標であるとか、こういった指標が重要であるという経験的な観点をもって成果指標を設定し、入試制度や、評価方法の妥当性、適切性についてアプローチしているところがあるかと思います。

そして入試を対象にしていますので、入学後の教育プログラムとか、カリキュラムの改善という文脈よりも、今、実施している入試をどうすべきか、入試の精度をどう向上させるかという観点が中心の検証が多いです。これは、入試に関する担当者による検証だし、『大学入試研究ジャーナル』自体がそういったタイプですので、当然といえば当然なところがあります。



また、新しい制度や手法を導入すると、その効果を示すための検証作業を進めがちな面があるわけです。

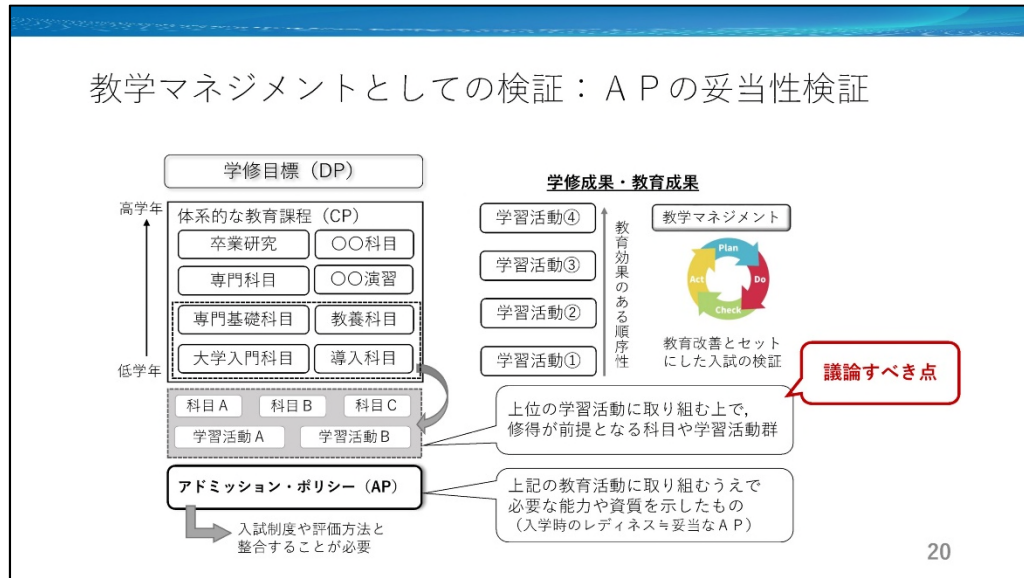
さまざまな追跡調査を含む検証を通して、入試の改善や、評価方法の精度というものを検討してきましたが、教育全体の質的な向上、学位プログラムがより効果的なものになるためにという観点からの検証はあまり見られませんでした。そういった意味では学位プログラム全体の改善の効果という意味では限定的ではあるのではないかと感じています。むしろ入試のみの改善ではなく、教育と一体的な改善こそが本来あるべき姿といますか、効果検証のあるべきアプローチになるのではないかと考えたところです。



ではこういったところに焦点を当てればいいのかをイメージした図がこちらです。これまでの入試を中心とした検証というのは、このように入学後の教育、カリキュラムがあって、アドミッションポリシーが妥当なアドミッションポリシーであるということを前提に効果検証を行って、そのポリシーに沿った入試ができているかどうか、できていないのであればそこに課題があるということでそれを改善しようというアプローチで行われてきました。

しかし、アドミッションポリシー自体がそもそも妥当でないという場合もあり得るのではないのでしょうか。所与のものとして妥当なものと認識しているアドミッションポリシーが、本当は妥当ではなくて、もっと違った要素をアドミッションポリシーに加えたほうがいいのではないかとということもあり得るわけです。

アドミッションポリシーが妥当であるということを前提にしてこうした効果検証を行っても、本質的な改善にはならないこともあるのではないと思うわけです。そうした時にアドミッションポリシーの妥当性という論点をしっかりと考えて、批判的に検討しているかという視点が重要ではないかと思っています。



最後に、ではどのようにしていくべきかについてまとめます。このようにディプロマポリシーがあって、その達成のためのカリキュラムがあります。このカリキュラムというのは教育効果が最大限になるための順序であるとか、その体系が組まれていると思います。

そうした時に、この学習活動①といった比較的 low 学年時の基盤となるもの、上位の学習活動に取り組む上で習得が前提となる科目や、学習活動群といったところに注目して、これをしっかりと取り組む上で必要な能力とか、資質、入学時のレディネスというものをしっかりと検討していくことが必要になってくるのではないかと思います。それがアドミッションポリシーということで、入試で求める能力や資質に絡んでくるのだと思います。

ではどのようにできるかということなのですが、今、教学マネジメントという言葉がよく言われていますが、そういった仕組みの中で、入試の側面からだけではなく、学位プログラム全体の視点から入試というものをどのように位置付けていくのかを考えることが今後必要になってくるのではないかと思います。

以上です。どうもありがとうございました。

【桜井・司会】 西郡先生、ありがとうございました。それでは次の報告に移りたいと思います。報告②は信州大学の平井先生です。よろしくお願いします。■

## 全体会 1 (センターセミナー) ◎ 報告 2

# 入学直前・直後のアンケート結果を用いた追跡調査

■ 平井 佑樹 (信州大学全学教育センター准教授)



改めまして信州大学の平井です。どうぞよろしくお願いいたします。

### おことわり

1

本発表は次の2論文のダイジェスト版です。

- 平井, 高野, 小山, 平野: 高等学校における数学および理科の履修状況に関するアンケートの分析 (3) —学部初年次の学業成績との関係, 大学入試研究ジャーナル31, 91-96, 2021.
- 平井, 一之瀬: 信州大学インターネット出願時アンケート結果の分析 (2) —アンケート回答内容と入学後成績との関係, 大学入試研究ジャーナル33, 199-204, 2023.

発表内容はあくまでも私見であり、信州大学としての見解ではないことにご留意ください。

よろしくお祈いします



まず初めに、「おことわり」で恐縮なのですが、本発表は次の2論文のダイジェスト版と

なっています。私の今の所属は全学教育センターというところで、全学の共通教育を担当する部署ではございますが、こちらの2論文は、まだ私がアドミッションセンターに所属していた時の研究で、それに関する発表を行いたいと思います。

青色の部分がアンケートの部分で、赤色の部分がそれとの関係性を調べる対象のものになっています。ここをご覧くださいますと、アンケートと成績との関係を調べる研究ということになっています。

発表内容はあくまでも私の私見ですので、大学としての見解ではないことにどうぞご留意していただければと思います。

## 入学直前・直後のアンケート 2



### 高校数学・理科履修状況アンケート

- 理系学部+ $\alpha$ の新入生が4月～5月初旬にWeb上で回答(任意)
- 高校数学(6科目)・理科(10科目)各科目の履修有無と理解度を回答
- 学習に対する自己効力感の確認が主目的

### インターネット出願時アンケート

- ほぼすべての選抜において、志願者が出願時に回答(任意)
- 情報の入手場所、出願理由等を回答
- 入試広報活動の検証・志願者動向の分析が主目的



まず入学直後のアンケートです。こちらは高等学校の数学・理科履修状況アンケートで、本学の理系学部+ $\alpha$ の新入生が、4月から5月初旬にWeb上で任意で回答します。高等学校の、今で言いますと旧課程に当たる部分ですが、数学の6科目と理科の10科目それぞれについて、その科目を履修していたかどうか、履修していた場合は、その科目に対する理解度を自己評価で回答をするものとなっています。このアンケートの実施の主な目的は、学習に対する自己効力感を確認することです。

もう1つは直前のアンケートです。インターネット出願時アンケートということで、本学のほぼ全ての選抜において、志願者が出願時に回答するものとなっています。この後、具体的な質問項目も示したいと思うのですが、本学の情報をどこから入手したか、あるいは本学に受験を決めた理由、出願理由等を回答してもらうものになっています。こちらの目的は、入試広報活動の検証、あるいは志願者動向の分析がメインとなっています。

## 追跡調査の意義

3



今年の入試はうまくいったかな？

入学後成績や大学卒業後の進路先を見る

西郡 (2021) による整理

- 大学入学後のパフォーマンスを入試区分で比較
- 学業成績以外の評価指標を取り入れた分析
- 長期的な視点に立った検証

どんな特徴の人が成功or失敗している？

西郡 (2021) :

「追跡調査等の検証によって明らかになったことを生かし、教育課程編成や教育体制の質的な向上に繋げる」 → **教育改善に主軸を置いた追跡調査**

この研究を始めたきっかけということで、追跡調査の意義です。こちらについては、先ほど西郡先生からご報告がありましたので、省略をさせていただきたいと思います。この上の3つも先ほどのご発表にありましたが、この中で言うと、「大学入学後のパフォーマンスを入試区分で比較」に該当し、入学時の状況を見て比較しているというものです。

こちら先ほどのご報告にありましたとおり、教育改善に主軸を置いた追跡調査がこれから報告する発表となっています。

## 高校数学・理科履修状況アンケート (1/6) 追跡調査の目的

4

### アンケートの回答結果が 調査書の代わりとなるかを調査

- 高大接続改革により調査書利用が活発化
- 学校間格差がある等の問題を指摘する声がある... → 基準を統一することに
- 回答を入学後教育に活用したい！



※回答と大学入試センター試験得点との関係については、次の2論文で発表。相関係数 0.2~0.4 程度の正相関

- 平井, 高野, 小山: 高等学校における数学および理科の履修状況に関するアンケートの分析, 大学入試研究ジャーナル29, 48-54, 2019.
- 平井, 高野, 小山: 高等学校における数学および理科の履修状況に関するアンケートの分析 (2) 一人単位の分析結果の考察, 大学入試研究ジャーナル30, 98-104, 2020.

それでは、それぞれの研究の成果等について、説明をしていきたいと思います。まず高等学校の数学・理科履修状況アンケートです。まず目的です。こちらは大きく書いてはいるのですが、もともとこのアンケートの回答結果が調査書の代わりとなるかどうかを調査することを目的として実施していました。

皆さんがご承知のとおり、現在の高大接続改革によって調査書の利用がとても活発にな

全体会 1（大学入試センターセミナー）

ってはいたのですが、学校間格差があるという報告や指摘が『大学入試研究ジャーナル』等でなされており、そのまま活用することが困難でした。そこで代替手段として、こちらのアンケートを利用して、入学後の成績と比較するというのを考えました。主な目的はその基準を統一するということです。

この回答と大学入試センター試験得点との関係については、次の2つの論文で発表していますので、ご興味のある方はこちらをご参照していただければと思います。相関係数 0.2 から 0.4 程度なので、それほど相関はないのですが、やや正相関ということが明らかになりました。


高校数学・理科履修状況アンケート（2/6）  
アンケート調査の概要
5

履修した各科目の理解度を次の4段階で回答

- 段階4: 他者に説明することができる
- 段階3: 理解している
- 段階2: やや不安がある
- 段階1: 理解しているとはいえない

表 1 2018 年度アンケート調査の対象

項目	対象
本学 学部	教育学部（数学教育コースおよび理科教育コースのみ）、理学部、医学部、工学部、農学部、繊維学部
高等 学校 の科 目	[数学]数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学A、 数学B、数学活用 [理科]科学と人間生活、物理基礎、物理、 化学基礎、化学、生物基礎、生物、地 学基礎、地学、理科課題研究



これから示す  
結果は 2018年度  
入学生のもの

こちらのアンケートの具体的な項目は、旧課程の数学 6 科目と理科 10 科目それぞれに対して、履修しているかどうかと、その理解度を 4 段階で回答していただくものになっています。3、4 がいわゆるポジティブな回答で、2、1 がネガティブな回答となっています。

下の表にはアンケートの対象学部と対象の科目を示しています。本学は 8 学部あり、その中の理系の 5 学部（理学部、医学部、工学部、農学部、繊維学部）と教育学部の理系のコースの学生を対象に実施しています。

高校数学・理科履修状況アンケート (3/6)  
追跡調査の概要
6

共通科目として開講している次の(a)または(b)に該当する科目の成績と、対応するアンケートの科目の回答(4段階)の相関関係を調査

(a)基礎科学科目で履修者が比較的多い科目

(b)特定の学科等のみが履修対象で履修者が比較的多い科目

(a)は大学全体・学科単位の傾向、(b)は学科単位の傾向を把握できる

表2 分析対象科目とアンケートの科目との対応関係

分析対象科目	開講時期	選定基準	アンケートの科目
微分積分学 I	前期	(a)	数学III
線形代数 I	前/後期	(a)	数学B/数学III
力学	前/後期	(a)	物理
力学 I	前期	(a)	物理
物理学概論	前/後期	(b)	物理
物理学概論 I	前期	(b)	物理
一般化学 I	前期	(a)	化学
一般化学 II	後期	(a)	化学
化学概論 I	前期	(b)	化学
生物学 A	前/後期	(a)	生物
生物学 B	前/後期	(a)	生物
生物学概論 I	前期	(b)	生物
ヒト生物学 I	前期	(b)	生物
生化学	前期	(b)	化学/生物
地学概論 I	前/後期	(b)	地学

このアンケート結果は 2018 年度入学生に対して実施したものです。

どの科目の成績をアンケートと比較するかというと、ここにさまざまな記載がありますが、基本的には履修者が多い科目です。学部必修科目、あるいは学科必修科目となっていて、その学部学科であれば全員が取るような科目を、成績を見る対象として選択しています。

高校数学・理科履修状況アンケート (4/6)  
結果：微分積分学 I (大学) と数学 III (高校) との関係
7

図1 微分積分学 I 成績素点と数学 III 自己評価理解度との関係 (大学全体の結果)

図2 微分積分学 I 成績素点と数学 III 自己評価理解度との関係 (有意に相関が最も強い学科等の結果)

**【図の説明】**

- ・ 成績素点は上ほど高成績
- ・ ×印は平均点
- ・ 外れ値を示さない (ひげの上下端は最大・最小)
- ・ 成績素点 0 点の学生は除いている
- ・ r はスピアマン順位相関係数, p は無相関検定結果

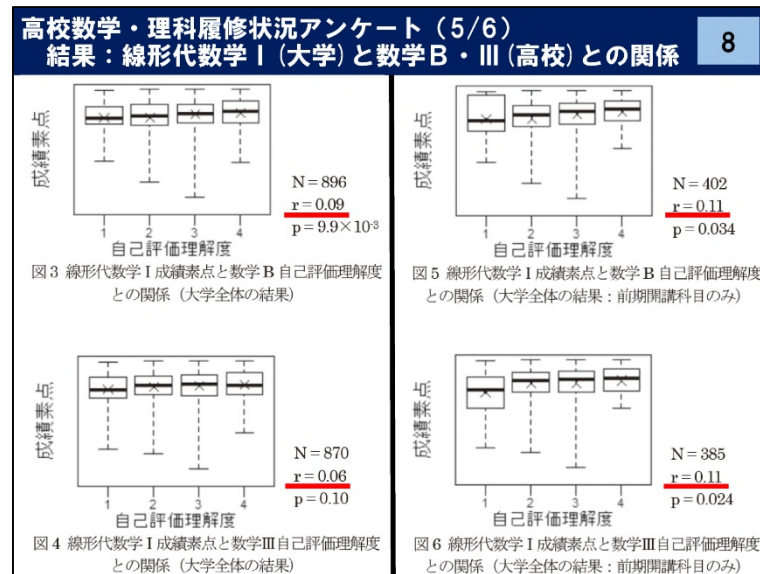
大学全体として見ると相関はほぼ無い。  
学科等ごとだと相関が強いところもある。

こちらは結果です。大学の微分積分学 I と呼ばれる科目と、アンケートの数学 III の理解度の関係を見たものです。まず図の説明をしますと、それぞれ横軸に自己評価理解度が示されていて、縦軸は諸事情で目盛りを省略していますが、上ほど好成績となっています。それぞれの自己評価理解度に対して、箱ひげ図が示されていて、×印は平均点です。外れ値を示さない形の箱ひげ図になっています。図の右側にある r はスピアマン順位相関係数で、p は無相関検定の結果です。

左側は大学全体ですので、アンケート回答者全員に対して実施、分析したものです。相関係数 0.16 ですので、それほど相関が強いというわけではないということが分かりました。

いわゆる自信がない学生、理解をしているとは言えないとか、不安があるという、1, 2 の回答をした人でも、かなり高い点を取っている方もいますし、逆に「他者に説明することができる」という 4 を付けた学生でも、結構低めのところに点数が来ている学生もいるという状況でした。

右側は学科ごとに調べてみた結果です。こちらは有意で相関が最も強い学科等の結果を示したのですが、一番強いところでも、相関係数 0.60 ぐらいですので、比較的強いとはいえませんが、それほど極端に相関が強いわけではなかったという状況です。



他の科目でも調べてみたのですが、こちらは線形代数です。線形代数は主に行列を扱います。旧課程であっても高校数学では行列は履修しませんので、それほど相関が強いわけではないということが、この結果からも分かるかと思います。

左は線形代数学 I と数 B, あるいは数 III の相関関係を見たもので、右側は、前期に開講している学科に絞って見てみました。こちらでもそれほど相関が強いということはありませんでした。

論文では理科の科目も示してはいるのですが、大学全体として見ると、そのような強い相関はなく、学科等で見ると、強いところもあるし、そうではないところもあるという状況です。




高校数学・理科履修状況アンケート (6/6)
9

**結論**

**結論：成績予測に使うのは難しそう…**

- 自己評価理解度のつけ方に関する影響
- 高等学校等と大学での学び方の違いに関する影響
- 成績素点と自己評価理解度をつける際に考慮する「学力の要素」に関する影響
- 大学による教育方法の影響



**ひとあし先生は高校までの学習をサポートしましょう!**

**合格おめでとうございます**

この入学前教育では、12月下旬から3月下旬までの間、「数学」や「統計」に関する内容を個人またはグループで学びます。すべてインターネットを通じて学びます。

※回答を入試区分ごとに分析して入学前教育実施の根拠とした学部がある

<25日の研究会で発表>

平井、高野：学校推薦型選抜合格者を対象とする協調作問演習を取り入れた入学前教育の実施

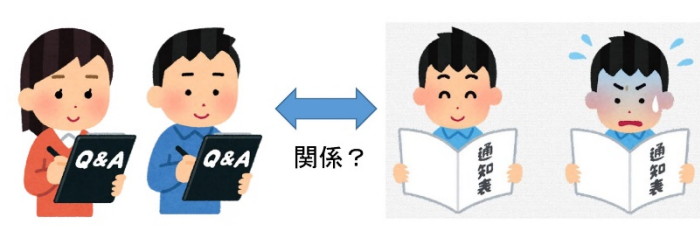
結論としてまとめますと、このアンケートを調査書の代わりにできるかどうかというところまで踏み込んだ結果にはなっていませんが、アンケートを成績予測に使うのは難しいのではという結論に至っています。

論文では、その原因等を分析しています。例えば、自己評価理解度の付け方に関する影響があるのではないか、高等学校等と大学での学び方に違いがあるのではないか、あるいは大学による教育方法との違いがあるのではないか、といったことが考えられます。

ただし、アンケート結果が入学後の成績予測にはあまり使えないということが分かりましたが、入試区分ごとに分析した結果、ある学部では学校推薦型選抜と一般選抜で比較したのですが、特に数Ⅲに対して不安に思っている学生が8割ぐらいいるということが明らかになったので、それをきっかけとして入学前教育を実施しています。こちらにつきましては、明後日の研究会で発表しますので、ご興味がある方は、ぜひこちらもお聞きいただければと思います。

インターネット出願時アンケート (1/6)
10

**追跡調査の目的**



- 出願時アンケートと入学後初年次成績との関係を調査  
→対象は2019年度および2020年度入学生
- アソシエーション分析により関係性の把握を試みる  
→関係性が明らかになれば、  
入学前から学修支援する必要性もでてくる

全体会 1（大学入試センターセミナー）


それではここで話題を変え、インターネット出願時アンケートに進みたいと思います。追跡調査の目的ですが、これも先ほどと同じです。出願時に回答した内容が入学後の成績と関係があるかどうかを見たものです。対象は2019年度と2020年度入学生です。この後、説明しますが、アソシエーション分析と呼ばれる方法で関係性の把握を試みました。

ここでもし関係性が明らかになれば、出願時アンケートで、この項目とこの項目を回答した人は入学後の成績がいいか悪いかということが明らかになりますので、入学前の段階から、学習支援をすることもできるだろうということで、分析を試みたものになっています。

**インターネット出願時アンケート（2/6）**  
**具体的なアンケート項目**

11

表1 アンケートの質問項目（平井ほか、2022）

<p><b>Q1</b> 本学を志望大学のひとつとして決めた時期 （複数選択可）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 高校入学前</li> <li>(2) 高校1年生の4～9月</li> <li>(3) 高校1年生の10～3月</li> <li>(4) 高校2年生の4～9月</li> <li>(5) 高校2年生の10～3月</li> <li>(6) 高校3年・既卒後の4～6月</li> <li>(7) 高校3年・既卒後の7～9月</li> <li>(8) 高校3年・既卒後の10月～センター試験前</li> <li>(9) 高校3年・既卒後のセンター試験後</li> </ol> <p><b>Q2-1</b> 本学の情報を得るために利用したもの （複数選択可）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 大学案内誌</li> <li>(2) 各学部の学部・学科案内誌</li> <li>(3) 本学のホームページ</li> <li>(4) 本学の携帯サイト</li> <li>(5) 先輩からの情報</li> <li>(6) 高等学校の先生からの情報</li> <li>(7) 家族からの情報</li> <li>(8) 進学相談会</li> <li>(9) 本学教職員による高校訪問</li> <li>(10) 本学の模擬講義</li> <li>(11) 信州大学オープンキャンパス in 松本（全学 OC）</li> <li>(12) 本学の学部オープンキャンパス</li> <li>(13) 本学のキャンパス見学</li> <li>(14) 受験雑誌</li> <li>(15) 進学関係 Web ページ</li> <li>(16) 模試の結果</li> <li>(17) 自己採点結果やそれに基づく予備校情報</li> </ol>	<div style="border: 1px solid gray; border-radius: 15px; padding: 10px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> <p>2019年度入試 2020年度入試 での質問項目</p> </div>  <p><b>Q2-2</b> 上記 Q2-1 で選択したもので、役に立ったもの （上位1～5位まで選択。5位まで選ばなくても良い）</p> <p><b>Q3</b> 本学に受験を決めたポイント（複数選択可）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) どうしても進学したい大学だったから</li> <li>(2) 入試の出題科目が良かったから</li> <li>(3) 長野県にある大学だから</li> <li>(4) 地域に密着した大学であるから</li> <li>(5) 自然環境豊かな地域にキャンパスがあるから</li> <li>(6) 難易度的に受験しやすい大学だったから</li> <li>(7) やりたいことが学べるから</li> <li>(8) 就職しやすそうだから</li> <li>(9) 取りたい資格が取得できるから</li> <li>(10) 高等学校の先生の勧めがあったから</li> <li>(11) 親の勧めがあったから</li> </ol> <p><b>Q4</b> 本学以外で受験する（受験した）私立大学 （3つ以内自由記述）</p>
---	---

少し字が小さくて恐縮なのですが、こちらがインターネット出願時アンケートの質問項目で、大きく5つあります。本学を志望大学のひとつとして決めた時期、本学の情報を得るために利用した媒体、その媒体のうち最も役に立ったもの上位5つ、それから本学に受験を決めたポイント、最後は私大の受験状況について書いてくださいという内容です。

インターネット出願時アンケート (3/6)  
追跡調査の概要：アソシエーション分析
12

- U : 分析対象全員, 「 $X \Rightarrow Y$ 」 : ルール (Xは複数項目可)  
 (例) X : 大学案内で信大を知る and 本学HPで信大を知る  
 Y : 成績上位者 (GPA  $\geq 3.33$ )
- ルールの評価指標 (Pは確率)

前提確率	$P(Y)$	判別可能なこと
支持度 (Support)	$P(X \cup Y)$	「出現頻度が高いパターン」かどうか。
信頼度 (Confidence)	$\frac{P(X \cup Y)}{P(X)}$	「XとYは結びつきが強い」かどうか。 X発生時にYも発生する条件付き確率。
リフト値 (Lift)	$\frac{(\text{信頼度})}{(\text{前提確率})} = \frac{P(X \cup Y)}{P(X)P(Y)}$	「 $X \Rightarrow Y$ は意味があるルール」かどうか。 値が高いほど or 1以上の値だと良い。

- 支持度や信頼度が高い : もちろん良いルールだが平凡かも
- これらが低すぎなければ, リフト値で判断する場合がある

アソシエーション分析とは, 簡単に言いますと, 「何々ならば何々」というルールを発見するというものです。「 $X \Rightarrow Y$ 」と書いていますが, Xを「出願時アンケートで回答した項目」とし, Yを「成績上位者・中位者・下位者のどれに当たるか」にしています。成績の上位か中位か下位かの分け方は, 学部の初年次のGPAで分けています。

多数の組み合わせがあるので, いろいろなルールが出てくるのですが, そのルールを評価する指標として, 支持度と信頼度とリフト値という3つの指標があります。

支持度は, 全体の中でそのルールがどれくらい出現しているかを示した物です。支持度が高いとそのルールに該当する人が多いということを示します。

信頼度は, Xが発生した時にYも発生するという条件付き確率となっていて, XとYの結びつきが強いかどうかを示す指標になっています。

最後, こちらは少し聞きなれない言葉かもしれないのですが, このアソシエーション分析はリフト値という指標で評価していることが多く, このリフト値が高い, あるいは1以上の値だと良いと言われてしています。

リフト値が高いほど, 良いルールということにはなるのですが, 支持度や信頼度が低い場合は, 良いルールだが, それほど出現頻度は高くないのであまり良くない可能性もあるということで, 3つの値を総合して判断することになっています。



が選んでいるため、これらを選んだ学生さんは、実は上位にも下位にもどちらにも転がりやすいことが明らかになりました。さほど回答率が高くなくても、上位になっているという観点で、これらの要素が入るルールを調べ、組となる項目を見てみました。

論文では、11位から25位も出ていますが、成績上位者の傾向としては、大学案内や学部案内、家族からの情報、更には学部のオープンキャンパスなどで情報を入手したと回答している傾向が強かったです。あとは出願理由として、長野県にある大学を選択している入学生も比較的上位者になりやすかったということが分かりました。

**インターネット出願時アンケート (6/6)**  
**分析結果：成績下位者を結論とするルール と 結論** 15

対象および 支持度順位	X1	X2	X3	支持度	信頼度	リフト 値	
成績 下 位 者	1	Q3(2) 出題科目	Q3(7) やりたい事	—	0.038	0.203	1.186
	2	Q2-1(3) 本学 HP	Q3(2) 出題科目	—	0.031	0.188	1.099
	3	Q3(6) 難易度	Q3(7) やりたい事	—	0.027	0.181	1.060
	4	Q3(2) 出題科目	Q3(5) 環境豊か	—	0.025	0.218	1.278
	5	Q2-1(6) 高校の先生	Q3(2) 出題科目	—	0.025	0.230	1.345
	6	Q3(2) 出題科目	Q3(6) 難易度	—	0.024	0.205	1.202
	7	Q2-1(6) 高校の先生	Q3(5) 環境豊か	—	0.023	0.172	1.009
	8	Q2-1(6) 高校の先生	Q2-2(6) 高校の先生	—	0.022	0.225	1.317
	9	Q2-1(3) 本学 HP	Q3(6) 難易度	—	0.022	0.178	1.041
	10	Q1(9) セ試験後	Q3(7) やりたい事	—	0.021	0.195	1.140

スライドでは11~25位を省略していますが…、**成績下位者**では、

- Q1(9) セ試験後
- Q2-1(17) セ試自己採点
- Q2-2(6) 高校の先生
- Q3(2) 出題科目が良い
- Q3(6) 難易度が良い
- Q3(11) 親の勧めがあった

が組になっているルールが上位

**結論：入学後成績をある程度予測できそう**

- 成績上位者は本学の情報を「大学案内」や「学部案内」から得たと回答
- 成績下位者は入試科目・難易度に関する項目を選択

一方で、成績下位者を結論とするルールで見えていきますと、センター試験後に出願を決めた、自己採点の結果で本学の情報を入手した、あとは出題科目や難易度がいい、親の勧めがあった、ということを出願理由としている学生が下位者になりやすいということが今回の分析で明らかになりました。

このように上位者と下位者の傾向を見る時に、それぞれ選んでいるものが違うということが明らかになりましたので、ある程度、入学後成績を予測できるのではないかと結論付けています。

**まとめと今後の課題** 16



- 入学直前・直後のアンケートと入学後成績との関係を調査  
→ 回答を入学後教育に活かせる場合がありそう
- 今後の課題  
→ このような分析の全学展開（教学IRの観点）  
→ アンケート疲れに気をつける（学生の負担減の観点）  
→ やはり、調査書を利用して何かを導き出したい！

では、まとめと今後の課題です。今回、入学直前・直後のアンケートと、入学後成績との関係を調査しました。一部ですが、回答を入学後教育に生かせる場合がありそうということで、こういう選択をした学生さんは、成績上位者になりやすいとか、下位者になりやすいということが、今回の研究で分かったという状況です。

あくまで研究ですので、このような分析を全学展開できればいいと感じているところではあります。気を付けなければいけないのは、このようなアンケートを取って、いい相関が見つかったとか、入学後教育に生かせそうだということが明らかになるのはいいことなのですが、はたしてアンケートばかりを取るのはいいのかということではなく、学生さんもしろいろなアンケートに答えるとアンケート疲れになってしまいます。最後に記載したとおり、高校の先生方が一生懸命作ってくださった調査書を何とかしてうまく使えないかと、引き続き、研究を進めているところです。

以上で発表を終了します。ご清聴ありがとうございました。

---

【桜井・司会】 平井先生、どうもありがとうございました。報告③は、九州工業大学の安永先生です。よろしくお願いします。■

## 全体会 1 (センターセミナー) ◎ 報告 3

# 入学者選抜と大学教育とのマッチング評価に基づく PDCA サイクルの必要性

■安永 卓生 (九州工業大学理事, 副学長 (教育接続・連携 PF, 情報担当))

九州工業大学で教育接続・連携プラットフォームの担当理事・副学長をしています, 安永と申します。

国公立大学法人  
九州工業大学

110 Anniversary

### 入学者選抜と大学教育との マッチング評価に基づく PDCA サイクルの必要性

九州工業大学 理事・副学長 (教育接続・連携PF担当)  
安永 卓生

九工大における教育接続：  
初等中等教育(STEM) → 入学者選抜 → 入学前教育  
→ 大学 (キャリア教育) → 就職支援  
→ リカレント・リスキリング教育  
まで, 九工大というPFの上で, 生涯学び続けることを目指して


110 Anniversary

九州工業大学  
創立110周年  
Since 1909

- 未来を思考する「モノづくり」と「ひとづくり」 -

九州工業大学では, 現在, 教育接続という形で, 初等中等教育から入学者選抜, 入学前教育, キャリア教育, 就職支援, リカレント・リスキリング教育まで, 正課授業に加えて, 一生涯にわたる学びの全体を見ていくことが1つのミッションとなっており, これらを担当しています。以前副学長として入試担当を4年間, その後学部長を2年間, そして現職を2年間努めていまして, その間に報告した内容を基に, 本日は発表をさせていただきます。

国立大学法人  
九州工業大学




—背景—

## 入試における多面的評価 3ポリシーと教育接続

2

それでは背景から少しお話をさせていただきます。「入試における多面的評価 3 ポリシーと教育接続」というところです。

<small>国立大学法人 九州工業大学</small> <span style="float: right;"></span> <h3 style="margin: 0;">九工大・学位授与方針：DP</h3>	
「学士課程教育の構築に向けて」(H20)に対応 各専攻分野を通じて培う「学士力」－学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針－	
1. 知識・理解	<b>【専門基礎知識・理解】</b> ・技術者に必要な基礎学力と工学専門分野の知識を修得している。 ・自然現象を科学的に理解できる。 <b>【多様な文化等の知識・理解】</b> 人、社会及び文化に関して理解できる。 <b>【工学・技術と社会関連知識・理解】</b> 工学・技術が社会で果たす役割を理解できる。
2. 汎用的技能 (スキル)	<b>【基礎的な問題解決スキル】</b> 問題解決に必要な論理的思考力、分析力、説明能力を修得している。 <b>【コミュニケーションスキル】</b> ・背景や文脈を理解して適切に説明できる日本語能力を修得している。 ・外国語によるコミュニケーションのための基本的能力を修得している。
3. 態度・志向性	<b>【技術者の基本的態度・志向】</b> 技術者としての倫理観と責任感を備え、社会に貢献する志を有する。 <b>【自律性】</b> 自己を律する自己管理ができ、自発的な活動ができる。 <b>【チームワーク志向】</b> 人々と協調でき、個人の能力も発揮できる。

3

九州工業大学の現在の学位授与方針，DP はご覧のとおりです。工学系の単科大学ではございますが，一般的な意味で言う専門知識と，それから工学等に関する知識はもちろんのこと，それに加える形で問題解決スキルや，コミュニケーションスキル，そしてそれらのための基本的な態度，自律性，チームワーク等がディプロマポリシーの中にうたわれていて，これらを培っていくことを目指しています。



国立大学法人 九州工業大学 **九工大・カリキュラム：CP** 

建学の理念である**技術に堪能なる士君子の養成**へ向けて――

九工大の教育：**厳格さ**、**実習の多さ**、**協働的なカリキュラム**が特徴。  
 → 最先端の研究・開発の担い手、製造業の現場、それらのマネージメントを支える  
**産業界のニーズにマッチした学生を育てる**ことに繋がる。

九工大・教育実践の具体的なポイント

- 技術に対し **幅広い知識** を与える教育を実施
- 低学年から **ものづくり** を体系的に学習できる科目を必修化
- **国際交流** を積極的に推進し世界に通じる技術者を育てる
- 学習成果の確認とその質の保証を重視した **厳格な教育** が特徴
- 教員の約3分の1が企業経験者  
教育研究が可能
- 先端的教育環境のもとで授業に **アクティブ・ラーニング** の手法を採用



ディプロマポリシーの達成に向けた、カリキュラムポリシー、カリキュラムとしましては、専門性に関する部分を一般的に教育していくと同時に、国際交流、それからアクティブ・ラーニング等を含めた形で、先ほど来の協働的なカリキュラムを通じて学びを進めていきます。


国立大学法人 九州工業大学 **九工大学・カリキュラム：GCE教育** 

―― **GCE : Global Competency for Engineer** ――

九工大は、グローバル化が加速する社会で活躍する技術者（**グローバルエンジニア**）に必要な能力（要素）を**GCE**と定めて、それらを育成するための様々な取り組み（3C）みを実施。

Competency	Circuit Program	Learning Complex
GCEの定義とそれらを涵養するための方策を策定	GCEを獲得するための教育プログラム（Circuit Program）の開発及びそれらを効果的に実施するための制度設計	GCE教育を効果的に行うための <b>複合的学習環境</b> をキャンパスの中（X on Campus）とともに学外（Campus on X）にも、整備
 <ul style="list-style-type: none"> <li>A 多様な文化の受容</li> <li>B コミュニケーション力</li> <li>C 自律的学習力</li> <li>D 課題発見・解決力</li> <li>E デザイン力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>6年一貫</b>教育プログラム（グローバル・エンジニア・養成コース）教養教育を高学年へ</li> <li>● <b>クォーター制</b>の導入</li> <li>● 海外派遣プログラムの拡充 Study Abroad Work Abroad Research Abroad</li> </ul>	

九工大は工学系の大学ですので、私どもとしては、このGCE（Global Competency for Engineer）という、グローバルに活躍できるエンジニアの素養はどういうものかということ、こちらのAからEの5つで定義しています。そしてこれらをいかに培うかということで、さまざまなプログラム、それから場を用意するような教育のシステムで進めさせていただいています。


国立大学法人 九州工業大学 **九工大学：中期目標・中期計画** 

### 第4期中期目標・中期計画（教育）

- (1) 産業界に輩出する学生の需要と供給のマッチングを図る**
  - (1-1) 社会ニーズに対して**順応性に富んだ、学び続ける姿勢**を持った学生を養成
  - (1-2) 教育のDXを推進し、社会に柔軟に対応した教育プログラムを充実
  - (1-3) 時代に即した質の高い教育を提供するため、教育組織の全学的な改組を行う
- (2) 社会人のキャリアアップを支援する**
  - (2-1) 社会人の学び直しを促進するための社会人教育プログラムを構築・実施
- (3) 国際感覚を持った人材を養成する**
  - (3-1) 戦略的重点協定校と合同で実施する国際教育研究連携プログラム
  - (3-2) 学生の国際交流の高度化、グローバル・コンピテンシーの向上

6

第4期に入り、この2年も過ぎたところになりますが、第4期中期目標・中期計画の中で、社会ニーズに対して順応できる、学び続ける姿勢を持った学生の養成が改めてうたわれています。また国際感覚を持った人材を育成するというで、先ほどのグローバルコンピテンシーを改めて今回、第4期の中で向上していくことがうたわれています。

国立大学法人 九州工業大学 **九工大学：学長方針** 

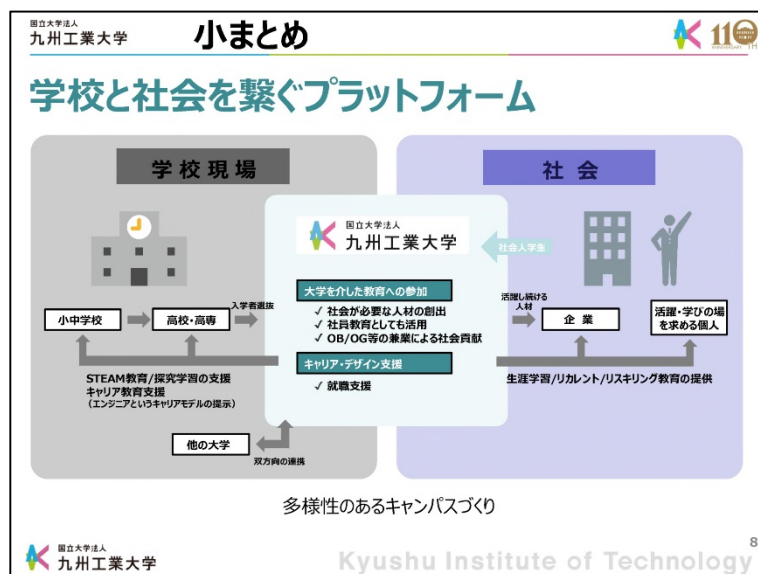
### 学長方針

#### 3. SDGsを念頭に、キャンパスの多様性を促進

3-1. 共創空間の利用・学内設備の充実	先端研究・社会連携本部
3-2. 未来思考キャンパスの充実 (B5G、カーボンオフセット)	先端研究・社会連携本部 管理本部
3-3. 多様な学生が学ぶキャンパスの実現 (女子学生、OB/OG、社会人など)	教育総務・連携PF推進本部
3-4. プレンディッド (リアル+遠隔) 国際連携交流等	国際本部
3-5. スタートアップ拠点化	先端研究・社会連携本部 教育高度化本部

7

第4期に入ると同時に学長が代わり、学長方針でキャンパスの多様性を促進することが掲げられています。いかに多様な学生が学ぶキャンパスを実現するかということ自身がカリキュラムになるという方針をもって現在進めているところです。



そこで私どもとしては、学校、小中高の現場と、それから社会をつないでいくような仕掛け作りを使いながら、先ほどのようなカリキュラムおよびディプロマポリシーにつないでいきたいと考えています。

九州工業大学

入試における多様性の確保と主体性の評価  
多様な人材が学ぶキャンパスの実現

**APと総合型選抜・一般選抜**

9

副学長だった時に、いわゆる当時の AO 入試、現在の総合型選抜を導入することとなりました。現在では、九州工業大学は一般選抜が 7 割、学校推薦型選抜と総合型選抜で 3 割という入学区分になっています。そのような形で多様な人材が学ぶというところを主体に考えていこうとしています。

国立大学法人  
九州工業大学

## APと選抜システム

- **基礎学力、理系学力の評価**
- **主体性、協働性、自律・協働・持続的学び (大学での学び)**  
 高校時代までの活動の「結果」の評価ではなく
  - 過程： 「なにをどのようにやってきたか」
  - アウトカム： 「なにを身に付けたか」
  - 企画力： 「なにをしたいか」
- **多様性確保：地域性、ジェンダーなど**
  - 全国展開できるしなげ： **情報システムの活用**
- **評価の公正性の保証：事前提出に対する評価**  
 総合型選抜Ⅰ：学びの計画書  
 総合型選抜Ⅱ：高校入学後の活動に対する記述  
 学校推薦型選抜Ⅰ：主体性等評価  
 高校入学後に取り組んだ主体性、多様性、協同性をもつ活動に対して申告
  - 「入試」から、マッチングのよい学生の「選抜」
  - **評価観点の明確化**
    - ループブックを利用し
  - **評価者の多様性**も認めつつ、精確な評価 (大数の法則)
    - 多人数による評価

⇒ **JBSの利用**

10

アドミッションポリシーとしましては、基礎学力や理系の学力を一定数は確保しながらも、主体性、協働性、自律・協働・持続的な学びといったディプロマポリシーにつながるような資質は身に付けてほしいということで、高校までの活動について何をどのようにやってきたかを中心に評価をしていくような入試を進めています。

それから多様性確保としましては、地域性やジェンダーなど、いかに多様な人材がキャンパスにいる環境を作れるかという視点で、総合型選抜、学校推薦型選抜も多様性確保の手段の1つとして、現在、検討しています。

その上で、総合型選抜と推薦型選抜等における評価の公正性をいかに担保するかという課題に対し、評価者の多様性を認めつつも精緻な評価になるように、できるだけ多くの目が入るような仕組み作りを行ってきました。

また、事前提出の書類に関する評価については、生成AIへの対応も含め、改めて評価方法等を検討しています。

国立大学法人  
九州工業大学

## 九工大：選抜区分による評価軸の違い

多様性を確保しつつ、工学系の人材の確保

選抜区分	「学力の3要素」のなかで重視する割合			合格者に期待する力
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体性・多様性・協働性	
一般選抜 前期日程	★★★★★	★★★	★	理数系科目の高い学力 総合的な基礎学力
一般選抜 後期日程	★★★★★	★★★	★	理数系科目での高い学力
学校推薦型選抜Ⅰ	★★★	★★★★★	★★★★★	論理的なコミュニケーション力 リーダーシップ 理数系科目での学力
学校推薦型選抜Ⅱ	★★★★★	★★★	★★	理数系科目での高い学力
総合型選抜Ⅰ	★★	★★★★★	★★★★★	新しいことを学ぶとする態度 他者と共に学びあおうとする態度 情報を書きだし他者に伝える力
総合型選抜Ⅱ	★★★	★★★★★	★★★★★	他者と共に学びあおうとする態度 コミュニケーション力 メタ認知

CBT(タブレット)  
・佐賀大  
共通テスト  
個別選抜

課題解決型記述  
レポート  
グループワーク、面接  
学びの計画書 (JBS)

: 論理的に書く力  
: 新しいコトを学ぶ態度  
: 他者と学び合う力  
: メタ認知

11

九工大では、一般選抜の前期・後期と、学校推薦型 I・II, それから総合型選抜 I・II という 6 種類の入試を行いながら多様な人材を確保しています。その中では、CBT を使って教科学力に近いような知識を問うものもあれば、課題解決型記述問題という形で論理的思考力を問うもの、あるいはグループワークのような形で他者と学び合う力等を問うものもあり、それぞれの中で多様な評価軸を設けています。

国立大学法人 九州工業大学

## 入学者選抜で測る学力の変化

- 一般論：知識・技能を中心に学力を問う、従来のペーパー試験に加え、**多様な試験（活動）**を行い、**学力の3要素を総合的に**判定
  - 学力の3要素
    - 「基礎的な知識及び技能」
    - 「それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力」
    - 「主体的に、かつ、多様な人々と協働して学習に取り組む態度」
- 選抜のポイント：「**大学での学び**」に**接続**できる能力・態度
  - 主体的、かつ、対話的で深い学びができること
    - 主体的な学び：自ら問題・課題を設定し、学びにつなげる
    - 対話的な学び：他者との相互作用を通して、学びにつなげる
- **総合型選抜**：大学に適した学生を選抜
  - 多様な評価と**公正性**の担保：**JBSの利用**など、多くの多様な目で選抜
    - ※ AO (アドミッション・オフィサー) だけではなく、学部の教員も選抜に関与
    - ※ ルーブルックによる絶対評価、及び大数の法則による公正な評価

12

入試で測る学力は時代とともに変化しており、学力の3要素という形で①知識・技能、②それを基にした思考力、判断力、表現力、③主体的に、かつ、多様な人々と協働する力が定められています。実際に彼らが卒業後に活躍する社会そのものがそういった学力の3要素を求めるようになってきていますので、選抜のポイントとしましては、大学での学びや出口のディプロマポリシーに繋げていけるような能力や態度をどういう形で測るかということがあります。その1つの解が総合型選抜ということで、公正性を担保しながら、大学に適した学生の選抜を現在進めています。

国立大学法人 九州工業大学

## 総合型選抜 I / II における多面的評価

目的：学習方略の定着と学ぼうとする意欲を多面的に評価

聞いて整理してまとめて書き出す  学びとる力	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1; padding: 5px;"> <p><b>POINT 01</b> 「わからないこと」にも向き合い、その内容をまとめて書き出す力を評価</p> <p>一方的に「教わる」ことから抜け出して「学びとる」楽しさを実感しよう</p> <p>レポート</p> <p>1 総合型選抜 I</p> </div> <div style="flex: 1; padding: 5px;"> <p><b>POINT 02</b> 学んできたことを、実社会で課題解決に応用する力を評価</p> <p>これまでに学んできたことを、課題解決に向けて経験しよう</p> <p>課題解決型記述問題</p> <p>1 総合型選抜 I 2 総合型選抜 II</p> <p>小・中学校(総合型選抜 I・II)、高校(総合型選抜 I)で学んだ理科や数学の内容をテーマにした、正解がひとつとは限らない課題を把握します。これまでに身につけたことを活用して解決方法をデザインし、他人が読んでわかるように記述します。</p> <p><a href="https://www.admission.kyutech.ac.jp/psst/">https://www.admission.kyutech.ac.jp/psst/</a></p> </div> </div>	読み取り、知識を使って問題解決(理数系課題)  利活用できる力「知っている」から「分かっている」
キャリアデザイン・オーナーシップ + メタ認知  事前提出 (JBS) ↓ 面接	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1; padding: 5px;"> <p><b>POINT 03</b> 高校までを振り返り、やりたい自分がイメージできているかを評価</p> <p>過去と未来を見つめることから、将来のデザインをはじめよう</p> <p>学びの計画書</p> <p>1 総合型選抜 I</p> <p>体験してきたこととそこから学んだことを振り返りながら、大学入學には何をどのように学びたいかを記述します。</p> <p>高校入學後の活動に関する記述</p> <p>2 総合型選抜 II</p> <p>高校入學以降に関与してきたことを振り返り、何をして、何を身につけ、それらを大学入學後の学びにどう活かそうと考えているかを記述します。</p> </div> <div style="flex: 1; padding: 5px;"> <p><b>POINT 04</b> 他者と協働しながら、ともに高め合おうとする態度を評価</p> <p>理工系の技術者・研究者にとって欠かせない「協働作業」をやってみよう</p> <p>グループワーク</p> <p>1 総合型選抜 I 2 総合型選抜 II</p> <p>多様な意見でグループとなり、与えられるテーマについてディスカッションします。他のメンバーの意見を尊重させ、グループの課題を全員で解決させるため、リーダーシップやフォローアップなど、それぞれに役割を担わせているかが詳細の計画に表れます。</p> <p>アイディアの抽出 アイディアの共有 アイディアの検証と調整 振り返り</p> </div> </div>	協調性 + コミュニケーション力 + メタ認知力

+ これらを総合的に評価する面接

13

## 全体会 1 (大学入試センターセミナー)

こちらに挙げるような、大学の授業を聞いてレポートを書く、それから教科を超えたような知識を使った課題解決、自分自身を理解するキャリアデザインに当たるようなメタ認知の学びの計画書、あるいは自分自身の高校入学後の活動に関する記述、更には他者と協働する態度を問うためのグループワークなどを通じて多面的に評価するような選抜方法となっています。

国立大学法人  
九州工業大学

### 小まとめ：IRの必要性

- 多面的（と思われ）、総合的な  
九工大・エンジニア教育へのマッチングの高い  
入学者選抜方法の開発（は行った）
- 本当に、  
九工大・エンジニアにマッチした学生を獲得できているか、  
そもそも  
カリキュラム(CP)が対応しているか

を含めて、  
継続的な調査（IR）の実施に基づく、  
継続的なPDCAサイクルによる改善が必要

※ アンコンシャス・バイアスから逃れるには、**データ駆動・IR**での評価

14

多面的・総合的でエンジニア教育にマッチングが高いと思われるような入学者選抜の開発を行い、実施をしてきましたが、期待どおりになっているかの検証結果を今回ご報告します。

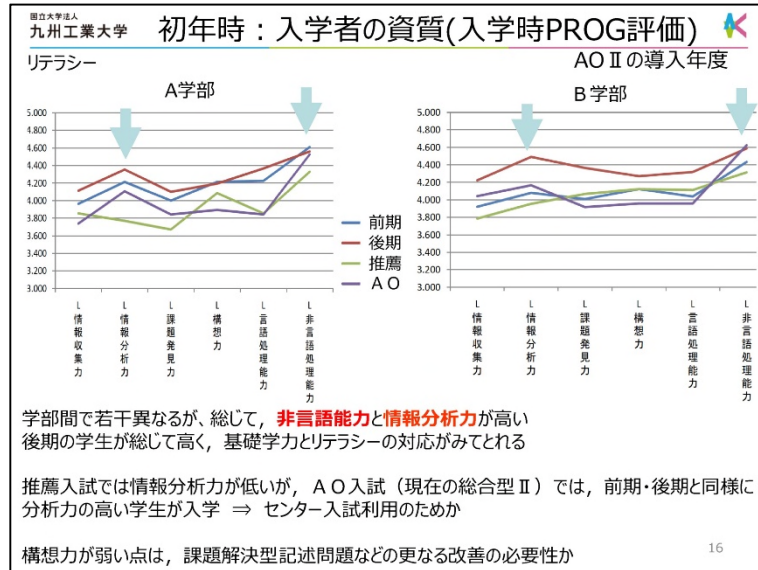
最初のAO入試で入学した学生が、卒業したというところもありますので、選抜方法がカリキュラムポリシーに対応していたのかを継続的に検証しながら、アドミッションポリシーの見直し、選抜方法の見直しも含め、PDCAサイクルによる改善が必要な時期になってきました。そこでデータ駆動・IRを中心に、継続的に評価しているところです。

国立大学法人  
九州工業大学

入学から卒業までの評価  
総合型選抜Ⅱ（旧AOⅡ）の卒業までの履歴

### IRによる学習成果の評価

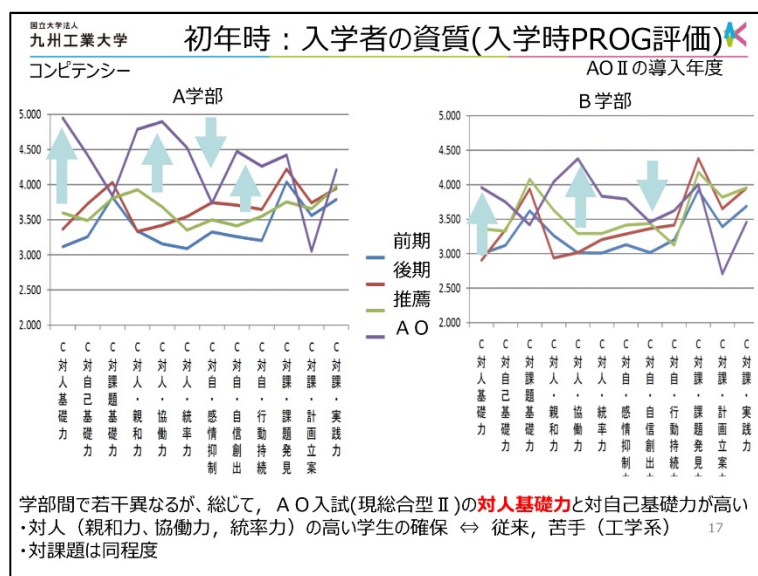
15



ここからは実際の評価についてご報告させていただきます。まず、AO入試を導入した時に、どのような学生が入ってきているのかを、先ほどのような選抜を設計した上で、評価をしていこうというわけです。従来のGPAといった学力調査だけでは見えにくいので、先ほどの西郡先生のご発表の中にもありましたが、外部の評価指標ということで、PROGを使ってリテラシー評価、およびコンピテンシー評価を行いました。

前期、後期、推薦、AO(今の総合型選抜)という入学選抜区分ごとの折れ線グラフを示しています。2学部ありますので、2つの学部の間で、どのような振る舞いがあるかを少し見ていきます。

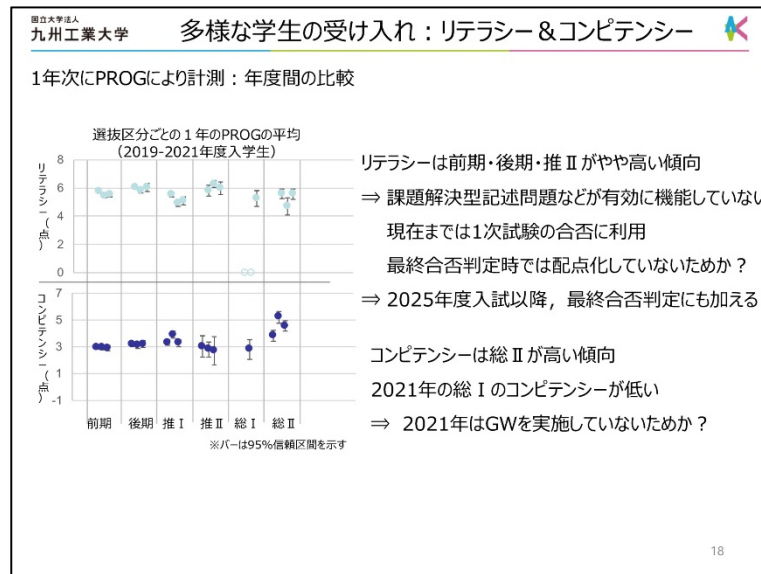
AOは紫色で示していますが、特に情報分析や非言語処理能力が比較的高く、AO入試で問えているということが分かります。また、まずはリテラシーとしても一定の評価があるような学生に来ていただけているということが分かりました。



## 全体会 1 (大学入試センターセミナー)

一番大きく異なるのは、このコンピテンシー評価です。これまでの学生に比べて、対人、それから対自で非常に高い数値が出るような学生が取れています。対人基礎力が非常に高く、対自、つまり自分に対するものも一定の高さを持っているような学生が入学しているということです。

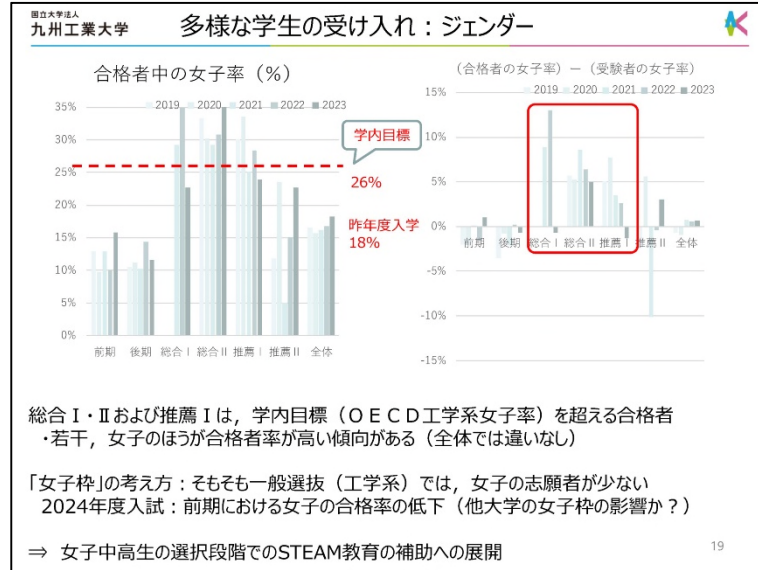
確かに入試方法の手法も違い、それから最終的な合格時期も少し異なりますが、当時のAO入試で、センター試験も使ったような形ではある中で、こういうコンピテンシーの異なる学生が取れているということが明らかになりました。



実際、多様な学生がその後も取れているかを示した図です。PROGを前期、後期、推薦I、推薦II、総合I、総合IIの6つの選抜区分ごとに、その後も継続的に計測しました。

総合Iは始まって間がないところの2001年の1回目、2回目のみではありますが、このような形で出ています。コンピテンシーに関して、総合IIが比較的高いという状況はずっと維持できています。それからリテラシー的なところは、少し低めに出ているかもしれませんが、一定基準は取れているような状態で推移しているということも分かってきました。



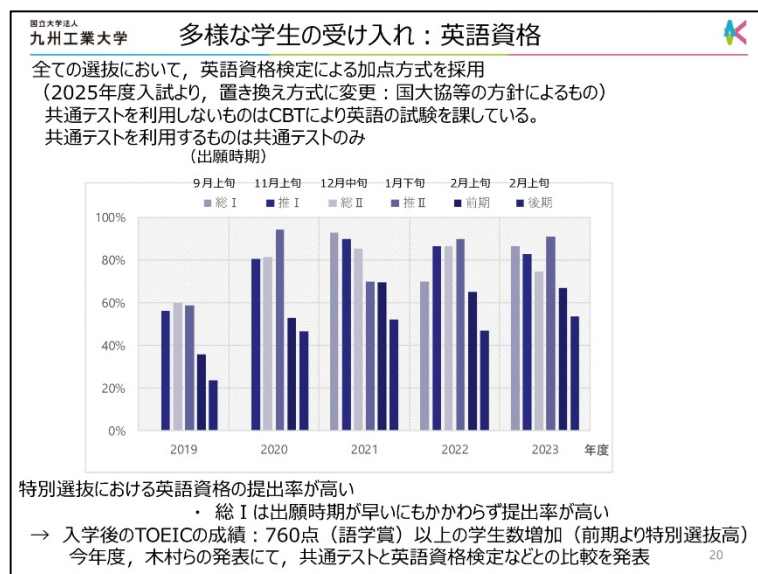


一方で、もう1つの目的はこの多様な学生の受け入れです。昨今、女子枠の話もありますが、ジェンダーという意味などで今回の総合Iとか総合IIとか推薦Iが寄与できているかを見ていきます。

赤い点線は女子比率を26%以上にするという学内目標で、OECD標準の工学系の女子比率が大体26%であることを踏まえて、現在の学長から言われている目標値です。

これを上回っているのは、総合I、総合II、推薦Iで、あるいは推薦IIも年によって一部という形です。前期・後期では本学に進んでこない学生たちの受け皿となっていることが分かります。また合格率を見ましても、特に女子枠という形は設けていないのですが、総合I、総合IIでは若干、女子の合格率が高くなっています。

問題は志願者の少なさです。既に多くの大学が女子枠を設定するなど、大きく変化してきている状況もありますので、その辺りも見直しながら対応していければと思っています。



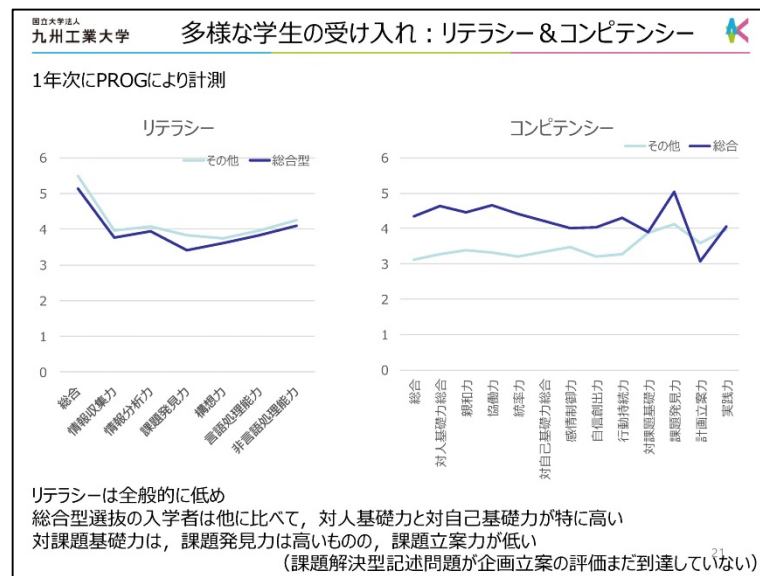
全体会 1（大学入試センターセミナー）

それからもう1つ多様な学生を受け入れる方法として、英語資格があります。本学は一般選抜を含めた個別選抜で、英語の入試がありません。その代わりに、共通テストを利用する者は英語の割合を若干上げたり、共通テストを利用しない総合Ⅰおよび推薦ⅠではCBT方式で英語の試験を課したりしています。また、全ての選抜区分において、外部の英語資格・検定試験のスコアを提出することで、加点する方式を採用しています。

令和7年度以降は、国大協の方針なども踏まえて加点方式ではなく置き換え方式に変更します。今回、本学の発表の中で、共通テストと英語資格・検定試験の比較表も用意されていますので、もしご興味がありましたら見ていただけたらと思います。

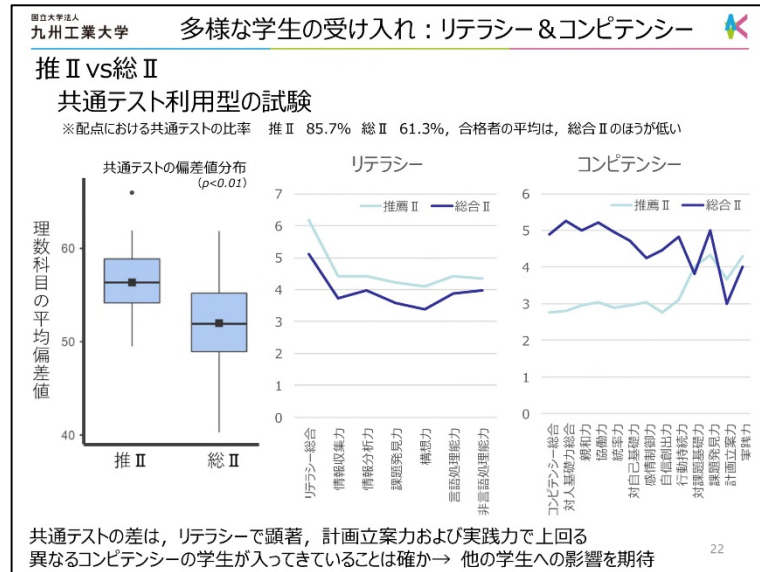
さて、戻りますと、こういう英語検定の試験というものが使われており、令和6年度までは置き換えではなく加点ですので、スコアを持っていけば加点します。推薦Ⅰ、推薦Ⅱを含め、共通テストを利用しない者に関しては、英語資格の提出率が非常に高いです。特に総合Ⅰは9月～10月の早い時期の試験ではあるのですが、非常に提出率は高いです。

私どもとしては、高校時代に英語の学びを継続している学生さんを取っていきたいということで行っているわけですが、そこで確かにそういう学生が取れているということがここで分かってきます。



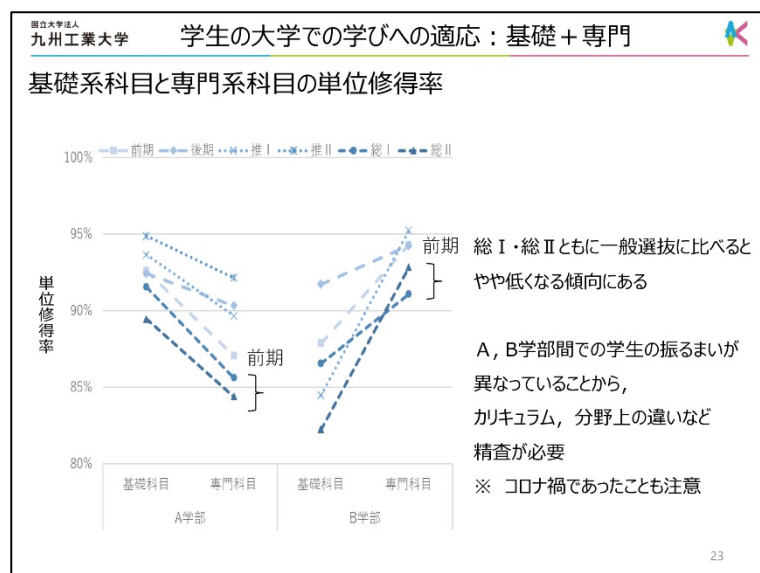
先ほどのリテラシー、コンピテンシーも継続的に計測していますので、総合型とそれ以外との比較を見ていきます。やはり総合型選抜の学生が総じてコンピテンシーが高い状態にあるということは継続的に見られます。ただ1点だけ、計画立案力という、私どもとしては課題解決型記述という問題の中で問うている力が少し低く出ています。まだここは評価がそこまで達していないのではないかと少し危惧しています。

ここは、情報Ⅰが教科として追加されることを受けて、課題解決型記述問題を、情報、数学、物理も含めて、1つの課題として教科の壁を超えたような形に見直す予定としています。



こちらは共通テスト利用型の推薦Ⅱ，総合Ⅱという2つの特別選抜で比較しています。推薦Ⅱに比べて総合Ⅱが若干やはり理数の平均点が低めになっています。それに対応するようにリテラシーも総合Ⅱが低めに出ることが分かります。

ただやはり推薦Ⅱはどちらかという、共通テストと事前の提出物で見えています。それに対して、総合Ⅱはグループワーク等々を含めて見えていますので、やはりコンピテンシーは高めの学生が入学してきています。こういったところはやはり選抜としては十分見えてきているのではないかと考えています。

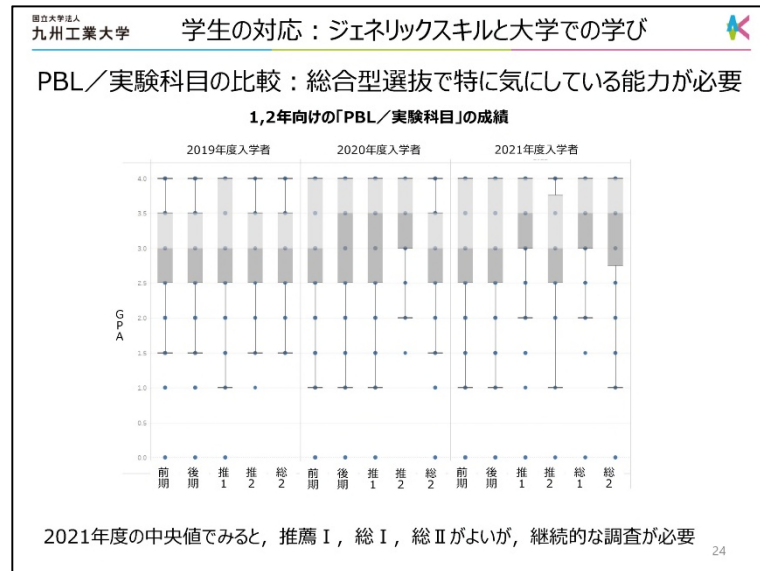


こちらが大学での学びの適応度を見たものです。入学後の単位習得率に課題があり、下にある2つが総合Ⅰ，総合Ⅱです。学部によって少し振る舞いが異なります。やはり単位の取得率で少し低めではありますが、基礎科目から専門科目になるにつれて、B学部を中心として少し良くなってきています。

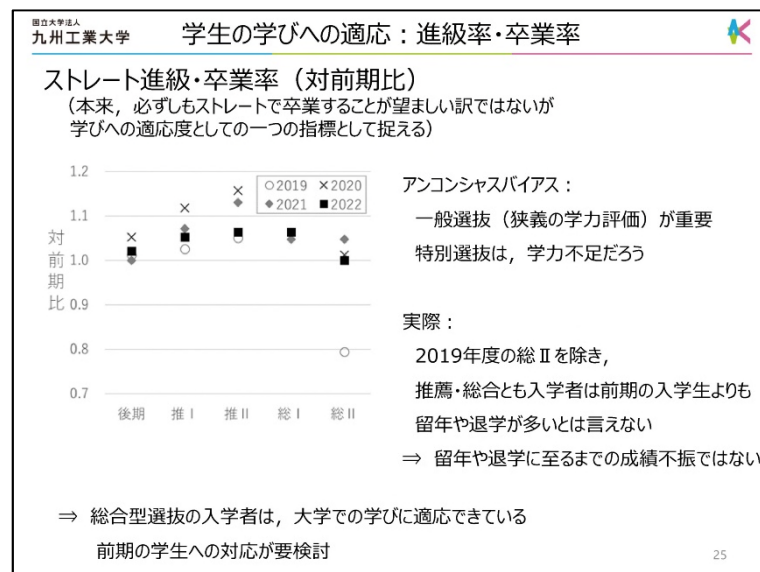
全体会 1（大学入試センターセミナー）

初年次を含めた科目をやはり今後対応していかなければいけません。アドミッション側としては、ここに対応できる理数系の科目の学力をもう少し問うような形に切り替えなければいけないだろうと考えています。

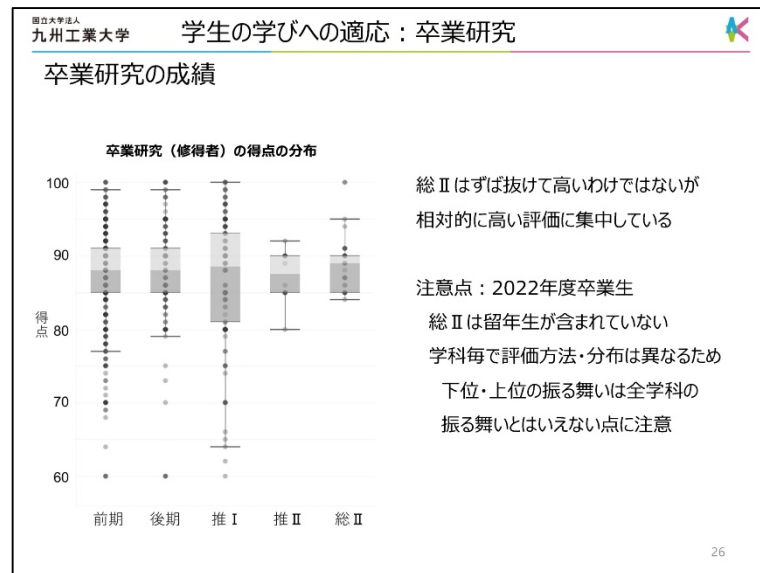
総合型Ⅰは2段階選抜にしていますが、これまでは第1段階では、このいわゆる狭義の学力を問うていませんでしたので、CBTを使った学力検査を第1段階に移行することによって、一定の学力を問うていくこととしています。



こちらは、大学に入ってから各入試区分で入学した学生がPBL(Project-Based Learning)や実験科目の中で、十分に対応できているか、あるいは良い成績が取れているかを示したグラフです。なかなか比較が難しいグラフになっていますが、縦軸がPBLの科目と実験科目のGPAです。中央値等を見ていくと、総じて、総合Ⅰ，総合Ⅱは比較的高め、もしくは同等で推移していることが見えています。この辺りは継続的に調査をしていく必要があるかと思っています。



もう1つ、私たちが注目しているのは、このストレート進級率です。成績自身がとてつもなく高くなくても、ある種の大学への適応度ということで、ストレート進級・ストレート卒業ができていたかを前期入試と比較したグラフです。前期入試を1としています。総合Ⅱの1年目を除きますと、総合Ⅱ、総合Ⅰともに比較的高めです。推薦Ⅰ、推薦Ⅱも高めに推移していて、留年や退学は多いとは言えないということです。留年・退学に至るまでの成績不振ではありませんが、成績面で苦勞している部分があるのは見て取れます。



最終的には卒業研究等を含めたところでの対応ができていますか。推薦Ⅱ、総合Ⅱで入学した学生が卒業研究の時期まで達しましたので測ってみますと、比較的高めに推移していて、下位者がいません。少し注意が必要なデータではあるのですが、相対的には高めに推移しているのではないかとこのところ、本来課題解決等を見ていきたかったところには対応できているのではないかと考えています。

国立大学法人 九州工業大学 学生の学びへの適応：卒業研究での評価

### 総Ⅱ 入学者の卒業研究の指導教員アンケート

入学時の期待	質問項目	平均	B/A比
○	【研究における協働的な活動】において、中心的な役割を果たしていた。	1.91	1.30
○	【研究以外の協働的な活動】において、中心的な役割を果たしていた。	2.15	2.80
○	他の学生を尊重し、一緒に活動しようとする態度が見られた。	2.52	3.80
○	学生プロジェクトや学外の活動等、多様な人々との活動に熱心に取り組んでいた。	2.27	3.60
○	卒業研究に主体的に取り組んでいた。	2.91	4.00
○	卒業研究に取り組む上で必要な学力を身につけていた。	2.58	3.50
○	卒業研究に取り組む上で必要となる専門的な知識や技能を身につけていた。	2.42	2.57
	学会発表等につながるようなレベルの高い研究活動に取り組んでいた。	2.27	1.89
	卒業研究や研究室の諸活動において、創造性や独創性を発揮していた。	1.82	0.93
	失敗しても、試行錯誤を繰り返すようとする態度が身につけていた。	2.39	2.43
○	困難な課題にも挑戦しようとする態度が身につけていた。	2.36	2.25
○	より高みを目指そうとする態度(向上心)が身につけていた。	2.33	2.83

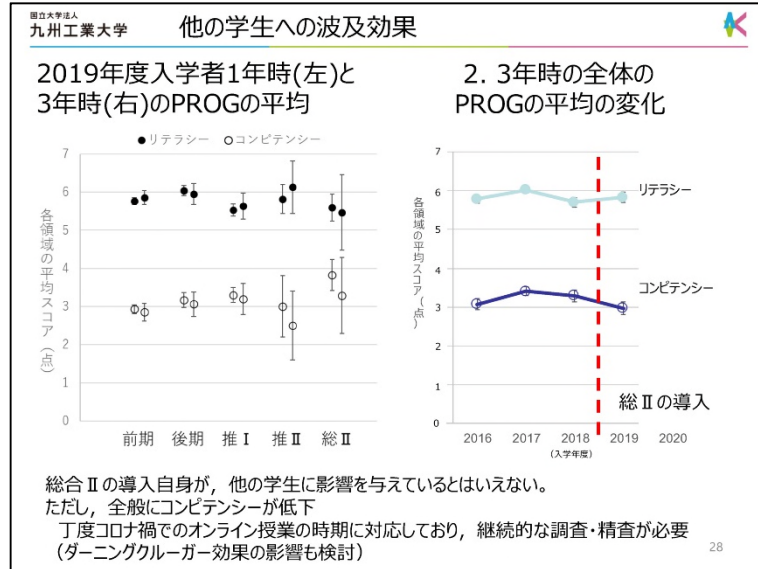
総Ⅱの学生は、卒業研究時に、コンピテンシーの高さを生かしたといえる

※ B/A比は、総Ⅱの学生評価/それ以外の学生評価

27

全体会 1 (大学入試センターセミナー)

総合Ⅱ入学者の指導教員に対しアンケートを実施しました。こちらで入学時に期待していた項目に丸を付けていますが、これらに対しては、一般で入ってきた学生に比べて高い評価をされていますので、コンピテンシーの高さが実際、生かしているのではないかと考えています。



ただ、他者への波及効果については、総合Ⅱが始まってから影響が出ているかを見ているのですが、多様なキャンパスの中で期待していたようには影響は出ていません。ただ、ちょうどコロナが広がった時期と重なっていることもあり、今後、継続的に見ていかなければいけないところかと思っています。

九州工業大学

まとめ

- 入学者選抜とIR
  - 総合型選抜を取り入れることにより、**多様な学生の集うキャンパス**は実現：確認
    - 学士力のうち、コンピテンシーに関わる能力の高い学生が入学している。
      - ただし、総合型の学生は計画立案力、実践力は低め
    - 企業が求める人材とは対応
  - ⇒ 課題解決力、リテラシーに対応できる様に、入試制度を2024年度入試から変更 : PDCAの事例
- 学習成果
  - 総合型選抜入学学生
    - PBL/実験系での高い評価
    - 卒業研究での高い評価
- 波及効果
  - コロナ禍の影響もあるのか、まだ見えない
  - 今後も継続的評価

※ 今後、卒業後評価にもつなげる：卒業生の人材バンクを開始（2024年度～）  
 ※ 高大接続—入試—教育—教育成果を繋ぐPDCAサイクルは、腰を据えた長い取り組みであり、各種の評価（データ取り）を継続的に行った、エビデンスベースとなることが必要  
 ※ 高大接続：2年前予告、STEAM教育連携など  
 ※ 教育成果：卒業後（3年後以降の調査）

29

以上、入学者選抜とIR、総合型選抜等で多様な学生は集うことができるようになってきましたし、総合型選抜がPBLや卒業研究において高い評価を得ていることもありますが、

まだ継続的に考えなければならず、今後、卒業後の評価を含めて行っていければと思っています。

報告は以上です。どうもありがとうございました。

---

【桜井・司会】 安永先生，ありがとうございました。次の発表に移りたいと思います。続きまして，報告④は椋山女学園大学の竹内先生です。よろしくお願いします。■

## 全体会 1 (センターセミナー) ◎ 報告 4

# 私立大学保育者教員養成学部における入試区分と卒業後の進路

■ 竹内 聖彦 (梶山女学園大学 教育学部教授)

梶山女学園大学教育学部の竹内です。

大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望  
**私立大学保育者教員養成学部における入試区分と卒業後の進路**  
令和6年5月23日(木)

梶山女学園大学  
教育学部 子ども発達学科  
竹内聖彦

私学連のついで、わたし。  
Sugiyama i Sugiyama Jogakuen University

今回、ここで発表させていただく内容は10年ほど前の情報を使った2020年前後の報告内容です。

**入試区分による学生の特徴**

- 推薦入試により相対的に学力水準の低い層が多く入学する  
その結果入学生の学力水準が低下している
- 公務員を希望するのは一般入学生が多い
- 推薦入学生は留学する割合が高い
- AO入試入学生はチャレンジ精神が高くリーダーシップを持つ

[石井秀宗2014], [林寛子2013]

(国立大学においては推薦入学生は全入学生の15%~25%)

私学連のついで、わたし。  
Sugiyama i Sugiyama Jogakuen University



報告内容としては、いろいろな種類の入試区分について、それぞれの入試区分による学生の特徴を見ていくものです。本日、先生方により様々なご報告がありましたが、推薦入試と一般入試、それぞれによってやはり学生の質が違うのではないかとということがよく言われ、実際に、そういった報告もすでになされていたわけです。

私立大学においては、推薦入試の学生が半数ほどいて、その割合が非常に大きいです。推薦入試での入学生と、それから一般入試での入学生の比率も考えるとそれぞれの特徴をきちんと出して、それぞれの学生に対応するような教育をしていかなければ、全体としてうまくもたないのではないかとということで、そういったことを目標に、学部の IR で始めたものです。

その後、2017～19 年頃に、当時は情報が一元化されていなかったため、大学全体として IR 室を作るということになりました。教務の情報は教務に、入試の情報は入試に、就職情報は学生課に、とばらばらでしたので、それをまずは一元化することを目的として IR 室を立ち上げました。

教育学部のことを調査してほしいということで私も IR 室に関わることとなり、さまざま取り組んできた中で興味深かったことを当時の報告にまとめました。それを本日ここで話しさせていただきたいと思います。

**(私立大学における)入試区分による学生の特徴**

- 学力水準
- 興味関心
- 職業志向
- 生涯設計

保育者養成系学科

職業志向・生涯設計・興味関心:比較的均質

学生の資質・教育成果の指標:進路選択状況

---



なまなまのほ、わたし。  
**Sugiyama**
i Sugiyama Jogakuen University

私の所属は教育学部ですが、教育学部は教員養成を目的としているため、進路が決まっています。卒業後、入学時に希望していたとおりの進路に進めるかについて、入試区分によって違いがあるのではないかと現場で見ていると感ずることがあり、それについて検証したいと考えました。

いわゆる入試区分によって学力水準や興味関心が異なるといったことはあるかもしれませんが、それでも学生の進路の方向性は皆一緒です。それゆえに多少の違いは見えなくなってしまう可能性がありますが、その学生がどのように育っていったかを見るために、卒業時に採用試験に合格するかどうかを指標に学生の特徴を見ていこうとしました。



全体会 1 (大学入試センターセミナー)

保育系の課程もありますが、やはり同じように進路がカギとなります。保育系の場合は、保育士になるか、あるいは幼稚園の教員になるかによって少し学生の質が異なります。それから公立か私立かによっても、やはり質が違うということがあります。現場の学生の様子を見てみると、そういった違いが見えてきますので、そういったところも注意して見ていきたいということによってやってみたわけです。

調査対象	
椋山女学園大学 教育学部 2012, 2013, 2014年度入学生(2015, 2016, 2017年度卒業生) 保育・初等教育専修(定員80名) 入学者数 82名, 84名, 87名(卒業生数 80名, 82名, 86名) 初等中等教育専修(定員80名) 入学者数 89名, 87名, 84名(卒業生数 89名, 85名, 75名)	
椋山女学園 1905年 名古屋裁縫女学校(椋山正式、いま夫妻) 1949年 椋山女学園大学家政学部開学 2007年 教育学部開設	
 	

対象としているのは、私の所属している椋山女学園教育学部の保育・初等教育専修という、保育士、幼稚園の教員を養成する専修と、もう1つは、初等中等教育専修という、小学校の教員になるということを目指とする専修の学生です。

試験区分	保育・初等教育		初等中等教育		合計	
	定員	入学(卒業)者数	定員	入学(卒業)者数	定員	入学(卒業)者数
推薦	併設校制推薦入試	20 61(60)	20 60(55)	40 121(115)		
	指定校制推薦入試	20 60(57)	20 57(56)	40 117(113)		
一般	一般入試A(2教科型)	20 86(86)	11 48(47)	31 134(133)		
	一般入試A(プラスセンター型)	10 20(19)	17 48(45)	27 68(64)		
	一般入試B(1教科型)	3 9(9)	1 9(9)	4 18(18)		
	一般入試B(2教科型)	3 10(10)	4 16(16)	7 26(26)		
センター利用	センター利用入試A(3教科型)	2 4(4)	2 12(11)	4 16(15)		
	センター利用入試A(5教科型)	— —	2 8(8)	2 8(8)		
	センター利用入試B(2教科型)	1 3(3)	— —	1 3(3)		
	センター利用入試B(3教科型)	— —	2 2(2)	2 2(2)		
	社会人特別選抜	1 0(0)	1 0(0)	2 0(0)		
合計		80 253(248)	80 260(249)	160 513(497)		

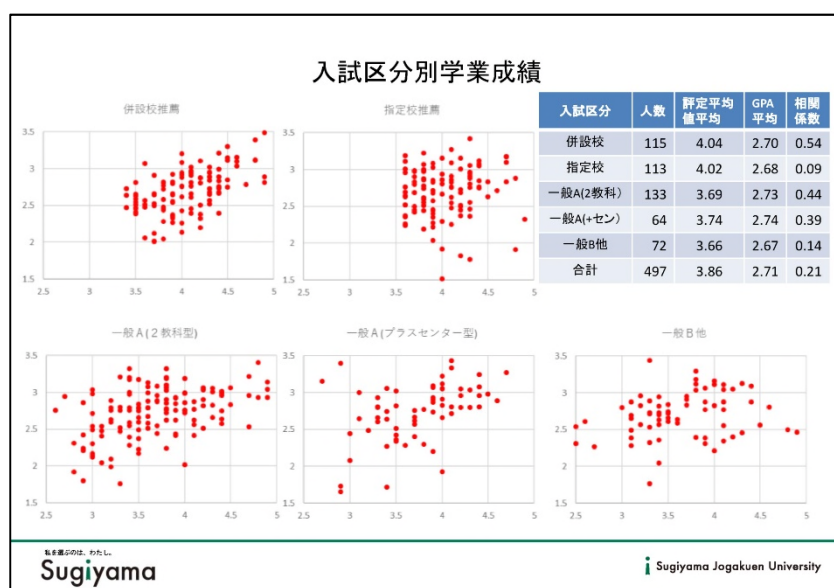
まず、入試区分について説明させていただきます。私学では多くの場合、推薦入試と一般

入試とで入学定員を大体半々に分けています。本学では、当時はどちらの専修も 80 名定員でした。保育も 80 名、それから小学校教員も 80 名として、推薦がどちらも 40 名ずつという形です。一般入試等では残りの 40 名ずつを取っています。

ただし、小学校の教員はいろいろな分野の教育を受けてきてほしい、いろいろな科目を勉強してきてほしい、たくさんの科目を受けてほしいということで、センター利用型に少しシフトして定員を分けていますので、少し後半の数字がばらついています。

一般入試 A というのは、通常の私立大学の入試時期に行われる入試で、一般入試 B というのは 3 月ぎりぎりのところでまだ進路が決まっていない人たちが多く受けるものです。一般入試 B でエントリーしてくる人たちは、学力的には高いかもしれないが、希望が叶わなかった人である可能性が高いです。それからセンター入試も国立大学を目指していて、不本意な結果となった人たちが来るので、やはり学生の質が少し違うということが入学当初は見えます。

表中に赤枠で囲った箇所は少し学生の質が異なるといえます。ここは人数が少ないので全部まとめて、今後のお話では一般 B 他という形で分類して 4 つ、あるいは 5 つの入試区分でお話ししていきたいと思います。



まず高校の評定平均と大学の GPA の相関を見た全体図です。推薦入試では、評定平均に一定基準を設けて区切っていますので、評定平均が低い人はいません。そのため GPA の関係を見ると、相関はほとんどないという状況になってくるはずです。

ただし、本学は大学の下に併設校といって高校を持っています。そこから進学する学生たちを比較すると、高校の成績が良かった学生はやはり大学に来て成績がいいということがあり、併設校推薦に関しては比較的相関があります。

それから全体として見た時も一般 A はやや相関があります。高校での成績があまり芳しくない学生さんは、大学でも、GPA があまり伸びないということはあるようです。しかしこの相関はあまり大きくありません。これまでの先生方のお話でもありましたとおり、あま

り関連性はなさそうだということは何となく分かっていました。

入試区分		保育園 幼稚園	小学校 中学校	一般企業 その他	合計
推薦	併設校制推薦入試	42 36.5%	46 40.0%	27 23.5%	115 100.0%
	指定校制推薦入試	46 40.7%	44 37.9%	23 20.4%	113 100.0%
	<b>推薦入試合計</b>	88 38.6%	90 39.5%	50 21.9%	228 100.0%
一般	一般入試A(2教科型)	64 48.1%	48 36.1%	21 15.8%	133 100.0%
	一般入試A(プラスセンター型)	13 20.3%	39 60.9%	12 18.8%	64 100.0%
	一般入試B他	19 26.4%	38 52.8%	15 20.8%	72 100.0%
	<b>一般入試合計</b>	96 35.7%	125 46.5%	48 17.8%	269 100.0%
<b>合計</b>		184 37.0%	215 43.3%	98 19.7%	497 100.0%

私を導くのは、わたし。  
Sugiyama Sugiyama Jogakuen University

卒業後に教員になるのか、あるいは保育士、幼稚園教諭になるかといった進路について、それぞれの入試区分によってどのように分かれているかを見てみますと、このような形になっています。

黄色の箇所は人数が多いところです。保育士は一般で科目数が少ないほうで人数をたくさん取っていて、小学校は科目数が多いほうでたくさん人数を取っており、入試の仕組みから必然的にこうなっているのであり実はあまり関係ありません。

緑色の箇所を見ていただくと、教員養成なのに、保育士養成なのにそれ以外の進路を希望する人たちの割合がこの辺りだけ高いのです。やはり推薦の学生さんは、高校の先生に「ここへ行け」というように言われて進学するため、教員や保育士になる気持ちが薄いのかもしれない、あるいは最後のところまでどこでもいいからとにかく大学に入りたいという人も同様のことがあるのかもしれないということが、何となくこの割合で見えてきます。そういった学生さんたちを学部としてはどのように方向付けていくかを教育の中で見ていく必要が出てきます。

**入試区分別教員採用試験合格状況**

入試区分		合計	合格	一次合格	不合格
推薦	併設校制推薦入試	44 20.8%	27 61.4%	11 25.0%	6 13.6%
	指定校制推薦入試	43 20.3%	22 51.2%	5 11.6%	16 37.2%
	<b>推薦入試合計</b>	87 40.3%	49 56.3%	16 18.4%	22 25.3%
一般	一般入試A(2教科型)	48 23.4%	32 66.6%	14 29.2%	2 4.2%
	一般入試A(プラスセンター型)	39 24.5%	22 56.5%	10 25.6%	7 17.9%
	一般入試B他	38 11.7%	25 65.7%	5 13.2%	8 21.1%
	<b>一般入試合計</b>	125 59.7%	79 63.2%	29 23.2%	17 13.6%
<b>合計</b>		212 100.0%	128 60.4%	45 21.2%	39 18.4%

私学運営の心は、わたしたし。 Sugiyama Sugiyama Jogakuen University

続いて、小学校教員を志望する学生について、教員採用試験の合格状況を入試区分別にもう少し詳しく見たいと思います。これが3年分の人数ですが、それぞれ推薦で87名、一般入試で125名、全体で212名が教員を志望し、教員採用試験を受けたということですが、もともと推薦と一般とで50%程度の割合だったものが、推薦では教員以外の進路を選ぶ学生が多くなっており、教員採用試験の受験者数は少なくなっています。

合格状況については、入試区分ごとの違いが表れています。一般Bは国公立を目指していたものの不本意な結果となったというような学生が多いため、学力が高く合格しやすいのではないかと、また、指定校推薦の学生さんは、不合格率が比較的高く、一次試験の学力のところで落とされてしまうからではないかということが見えてきています。

本調査結果を踏まえ、こういった学力が少し足りない学生さんたちに対して、卒業年度の採用試験の直前時期に学力向上講座というものを開始するなど、多少なりとも教育に反映させることができていると思います。

**評定平均値/GPAと教員採用試験合格状況**

	高等学校評定平均値				大学GPA				
	合格	一次合格	不合格	合計	合格	一次合格	不合格	合計	
上位群	44.7 63.0%	10.6 15.0%	15.6 22.0%	70.9	上位群	50 70.4%	15 21.1%	6 8.5%	71
中位群	40.6 57.9%	14.5 20.7%	15.0 21.4%	70.1	中位群	42 60.0%	17 24.3%	11 15.7%	70
下位群	42.7 60.1%	19.9 28.0%	8.4 11.8%	71.0	下位群	36 50.7%	13 18.3%	22 31.0%	71
<b>合計</b>	128 60.4%	45 21.2%	39 18.4%	212	<b>合計</b>	128 60.4%	45 21.2%	39 18.4%	212

私学運営の心は、わたしたし。 Sugiyama Sugiyama Jogakuen University

## 全体会 1 (大学入試センターセミナー)

次に、高等学校での評価平均と大学の GPA との関係を見ていきます。高等学校の評価は上位群と中位群と下位群と 3 分割して 212 人を 70 名ずつぐらいにしています。それから GPA もやはり 70 名ぐらいずつに分けてみました。


少しご説明が遅れましたが、当時の教員採用試験は一次試験で学力を測り、二次試験で面接などをして合否判定するというのが一般的でした。今回の表では不合格の人を、一次試験のみ合格した人と、一次試験で不合格となった人とに分けて記載しています。例えば上位群を見ますと、不合格の割合 37%のうち、一次合格が 15%、不合格が 22%とあります。最終的には不合格だったが一次は合格していた人の内訳が分かります。

このように見てみますと、左側の高等学校の成績に基づいて分割した表からはあまり有意差が無いことが分かりました。ところが大学の GPA で見るとかなり差が出ています。下位群では合格する人が半分程度にとどまる一方で、上位群では 70%が合格していて、不合格の者がほとんどいないという状況です。大学で勉強を頑張った人ほど、合格に結び付くということが分かり、この結果に学部の教員たちは非常に喜びました。

したがって高等学校での成績や入試区分とは関係なく、大学でどの程度勉強をしたかということが採用試験にそのまま反映されているという状況になっているわけです。

**教員採用試験合格状況を指標とした入試区分別学生特性**

- 推薦入試区分学生は、一般入試区分(特に指定校制推薦入試)学生と比べて  
学業面でやや劣る(GPA値の低い学生の割合がやや高い)  
教員養成課程である教育学部においては、教員採用試験の合格が目標となるため  
それを大学での学修成果を示す指標の一つと考え得る
- 教員採用試験合格率は、(指定校制推薦入試を除いて)入試区分との関連は低い
- 教員採用試験合格率は、高等学校での評定平均値との関連は低い  
コミュニケーション力や人間性が評価され、学業面の劣勢を補っている可能性がある
- 教員採用試験合格率は、大学の授業内容の理解度を示すGPAとの関連が高い

私と違ふのは、わたし。  
**Sugiyama** Sugiyama Jogakuen University



採用試験の結果を指標として入試区分ごとの特性を見てみますと、一般入試と比べると推薦入試は少し学業面で劣る面がありますが、教員採用試験の結果に関してはそれほど違いが見られませんでした。特に最後のほうにまとめましたが、高校での評定平均とはほとんど関係なく、大学での GPA との関係は高いことが分かりました。また、それだけではなく、コミュニケーション力や人間性など、そういったことも評価されているので、学業面で少し足りないというような推薦系の学生さんたちもうまくいってやっていると考えられます。

確かに、教育現場、大学の中で見てみますと、推薦の学生さんはすごく活力があって良い

面が多く見られますので、教育現場に出た時に良い教員になっていくのではないかと、指導をしているこちらとも思うところです。

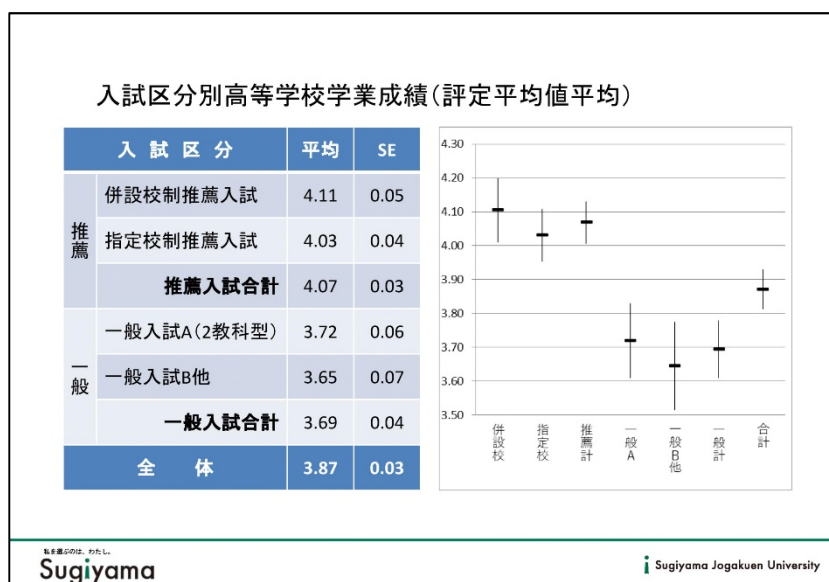
**保育・初等教育専修**  
入試区分別定員および卒業生数(2012+2013+2014年度)

入 試 区 分		入 学 定 員		卒 業 者 数	
推 薦	併設校制推薦入試	20	25.0%	60	24.0%
	指定校制推薦入試	20	25.0%	58	23.2%
	<b>推薦入試合計</b>	<b>40</b>	<b>50.0%</b>	<b>118</b>	<b>47.2%</b>
一 般	一般入試A(2教科型)	20	25.0%	86	34.4%
	一般入試A(プラスセンター型)	20	25.0%	46	18.4%
	一般入試B他				
	<b>一般入試合計</b>	<b>40</b>	<b>50.0%</b>	<b>132</b>	<b>52.8%</b>
<b>合 計</b>	<b>80</b>	<b>100.0%</b>	<b>250</b>	<b>100.0%</b>	

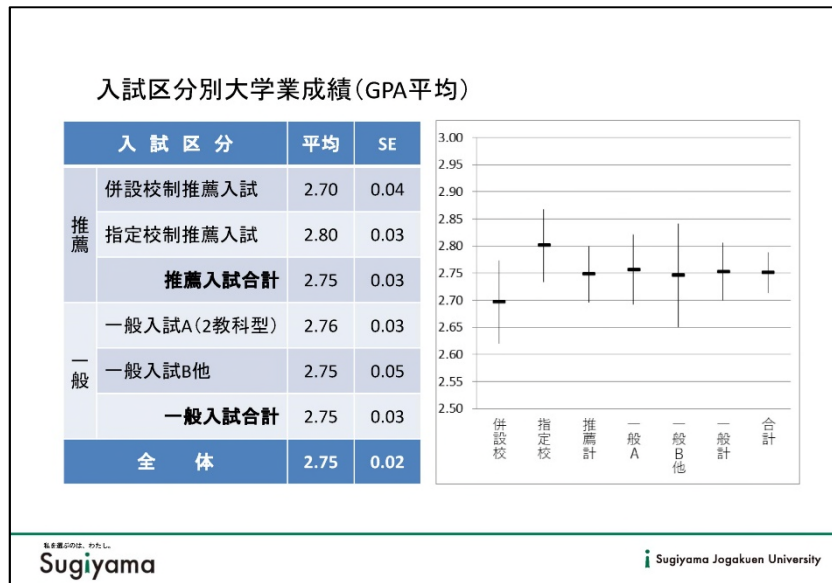
残りの時間で保育系の分析結果についてお話ししたいと思います。先ほどの教員養成と同様に、推薦と一般入試の定員が半分ずつで、これだけの学生が保育系の課程にいるわけです。

多少、ズレがあるのは、うまく推薦の定員に収まらず、たくさん推薦を出していただいたのでたくさんいるとか、一般入試のほうがかうまく集まらずに少なかったとか、そのような理由がありますが、お示ししたとおりです。

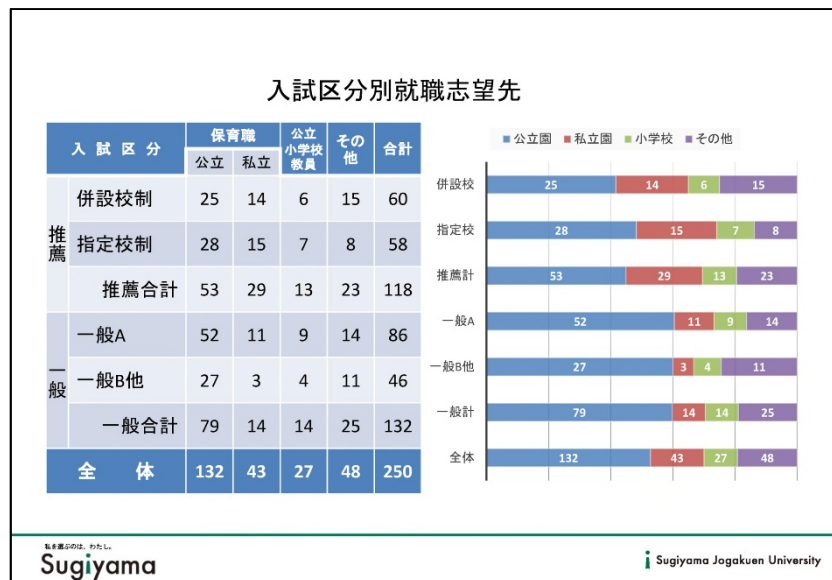


入試区分別の学業成績については、推薦のほうは高いです。見ていただくともうかなり上のほうにあって、一般入試のほうは低く、見るからにかなり差があることはお分かりいただ

けると思います。



それが大学でどうかというと、GPAで見るとそんなに変わりません。ただ指定校のほう  
が少しだけ成績が良く、併設校は学業以外にも一生懸命なため成績はやや低くなっていま  
す。併設校の学生さんたちというのは、非常に活力があって、いろいろなことをやりたい学  
生が多いため、勉強以外のところで頑張ってしまう、大学の勉強は少しだけ弱いという状  
況が出ています。



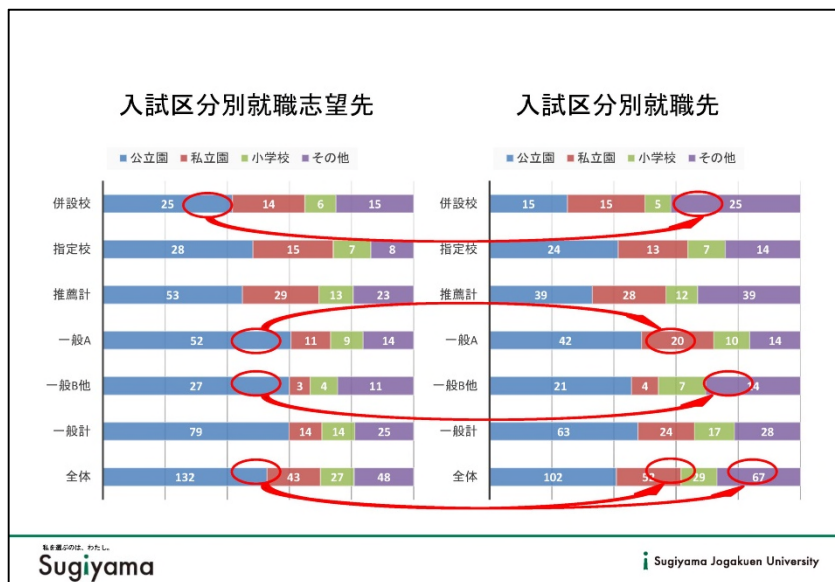
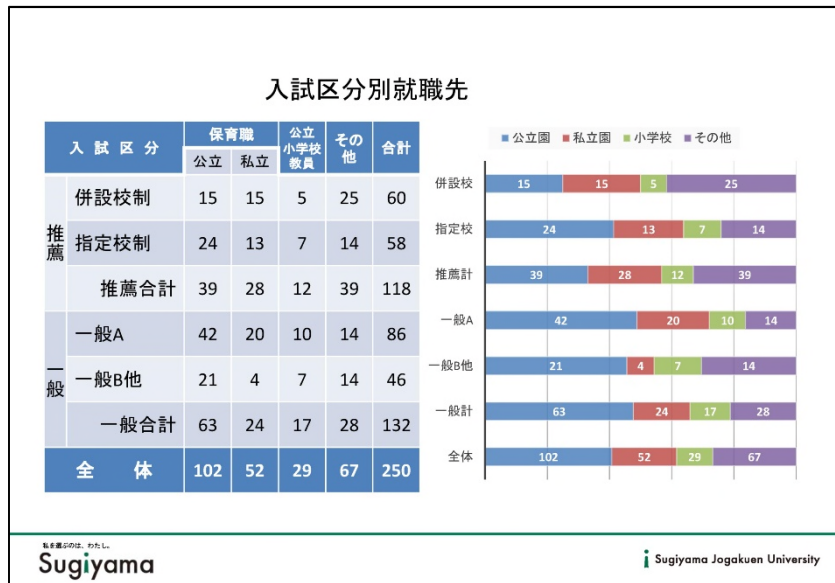
そのような学生さんの就職志望先を見ていきます。保育職というのは保育士、あるいは幼  
稚園教諭のことで、その中でも公立に行きたい学生さんたちと、私立に行きたい学生さんた  
ちとでは若干カラーが違います。それは接している中で感じられることなので、実際にどの  
ような状況なのかを見たいと思います。



保育系の養成課程ではありますが、それでも小学校の教員を目指す人が約 10%います。その他というのは保育も小学校教員も志望せず、他を志望する学生さんたちです。そういう学生さんたちの割合が 20%ほどです。

つまり入試区分に関わらず、保育士あるいは幼稚園教諭になりたいという人が 7 割程度いるわけです。小学校教員にシフトした人たちも入れると、全体の 8 割近くが志望しているという状況です。

赤いところは私立の園で、推薦の学生は私立園志望が相対的に多いです。推薦の学生さんたちは、私立高校から来ることが多いので、公立の硬いイメージではなく、私立のにぎやかな明るいそういうものを想像して志望しているのではないかと思います。



実際の就職先について、公立園への就職が難しい学生は、その他や私立園に就職することが多いです。その変更先の違いで顕著なのが、一般 A の場合は、公立から私立に逃げますが、一般 B その他は、「もう教員は辞めます」、「幼稚園の教諭はやめます」、「保育士はやめ

全体会 1 (大学入試センターセミナー)



ます」ということでその他へ逃げてしまいます。

これらについては入試区分とその学生さんたちの特性ということで、学生指導に対して少し注意しなければいけない点です。

**就職志望先・就職先別学業成績**

	公立園			私立園	
	志望者	就職者	私立他	志望者	就職者
人数	132	101	31	43	35
評定平均値	3.84	3.81	3.94	3.97	3.97
GPA	2.79	2.78	2.80	2.69	2.69

保育職公務員試験においては、評定平均値やGPAで評価される学業成績以外の特性が職業適性として重視される






公立の幼稚園教諭，保育士になりたい人と，私立を希望する人とで比較すると，評定平均やGPAがすごく不思議な関係になっています。公立の人たちのほうが私立を望む学生さんたちよりも評定平均値は低いですし，GPAも表の真ん中を見ると残念だった人たちのほうが高いです。

残念だった人たちというのは，成績は良いが，面接で点が伸びなかった人たちではなかろうかということで，公立園が求める人材像にマッチしなかったのではないかとということです。

**入試区分別小学校教諭免許状取得状況**

入試区分	取得学生群			未取得学生群			
	人数	総単位数	GPA	人数	総単位数	GPA	
推薦	併設校制	47	156.8	2.74	13 (21.7%)	133.4	2.55
	指定校制	44	156.0	2.83	14 (24.1%)	134.0	2.71
	推薦合計	91	156.4	2.78	27	133.7	2.63
一般	一般A	79	156.6	2.77	7 (8.1%)	131.7	2.56
	一般B他	41	156.5	2.81	5 (10.9%)	133.2	2.20
	一般合計	120	156.7	2.79	12	132.3	2.41
合計	211	156.6	2.79	39 (15.0%)	133.3	2.56	

小学校教諭の免許取得状況との関係で、小学校教諭の養成課程を受けている人のほうが学習量が多くなるので、GPA が低くなりそうですが、実際は取得者の方が成績は良いです。

<p style="text-align: center;"><b>保育職採用試験合格状況を指標とした入試区分別学生特性</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>● 推薦入試区分学生は、一般入試区分学生と比べて 高等学校の評定平均値は高いが、GPAでみた大学での学業成績には差がない</li><li>● 全学生に関しては、評定平均値とGPAとの間には中程度の正の相関がある</li><li>● 指定校制推薦入試区分に限ると、評定平均値とGPAとの相関は弱い</li><li>● 入試区分「一般B他」は、卒業後の進路選択に私立園を避ける傾向がある</li> <li>● 保育職採用試験は、大学におけるGPAによる学業成績とは異なる視点での学生評価が行われている可能性が高い(コミュニケーション力、明朗さなど)</li><li>● 小学校教諭免許状を追加取得しようとする学生はGPAが高い</li></ul>	
<p style="text-align: center;"><small>私を愛するのは、わたし。</small> <b>Sugiyama</b></p>	<p style="text-align: center;"><small>Sugiyama Jogakuen University</small></p>

こちらは保育のまとめです。推薦の学生は私立園への就職を希望する傾向があることと、それから就職先に関しては、GPA や成績とはあまり関係がないということです。コミュニケーション力といった、学力とは異なる部分を評価されているのではないかということが分かったというのがこの時の報告です。以上になります。

---

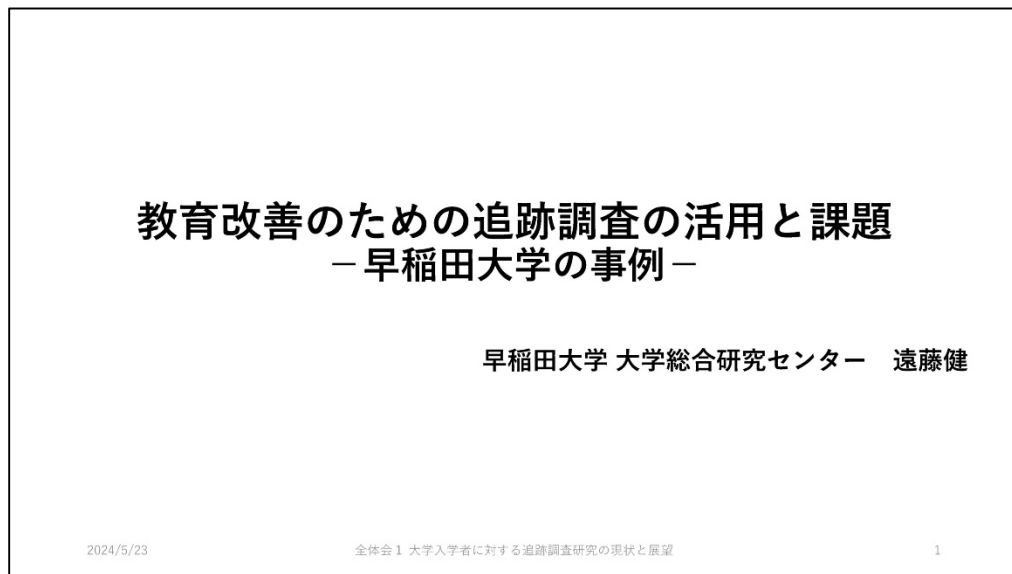
【桜井・司会】 竹内先生，どうもありがとうございました。それでは次の報告に移りたいと思います。最後の報告⑤は，早稲田大学の遠藤先生です。よろしくお願いします。■

## 全体会1（センターセミナー）◎ 報告5

# 教育改善のための追跡調査の活用と課題 －早稲田大学の事例

■ 遠藤 健（早稲田大学 大学総合研究センター講師）

今回、報告をさせていただきます早稲田大学総合研究センターの遠藤と申します。



今回は、「教育改善のための追跡調査の活用と課題」について、全体会のテーマである追跡調査をどうデザインしてきたのかということ、そこから何が明らかになったのか、そしてどのような課題があるのかということをお早稲田大学の事例を通して、お伝えしたいと思います。

## 内容

1. センターの位置づけと調査の目的
2. 各調査の設計 (追跡調査)
3. 成果
4. 課題と展望
5. まとめ

2024/5/23

全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

2

今回の内容を、私の所属しているセンターの位置付けと調査の目的、追跡調査のデザイン、そしてそれらの成果や課題と展望について、順に沿ってお話しをしていきます。

### 1. センターの位置づけと調査の目的

- 早稲田大学が掲げる中長期計画である「Waseda Vision150」の施策の一環として2014年に大学総合研究センターが創設、高等教育研究部門はIR (Institutional Research) を教育方法研究開発部門はFDを担う。
- 教育改善の支援を目的に、大学教育の効果とその要因分析を行っている。「早稲田大学で学ぶことを通して学生は成長したか (していないか)? それはなぜか?」を探求し、科学的根拠に基づいて教育改善を支援する。
- 具体的な調査として①卒業生調査 (2018年度～) と②学生調査 (学生生活・学修行動調査) (2020年度～) を実施している。

2024/5/23

全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

3

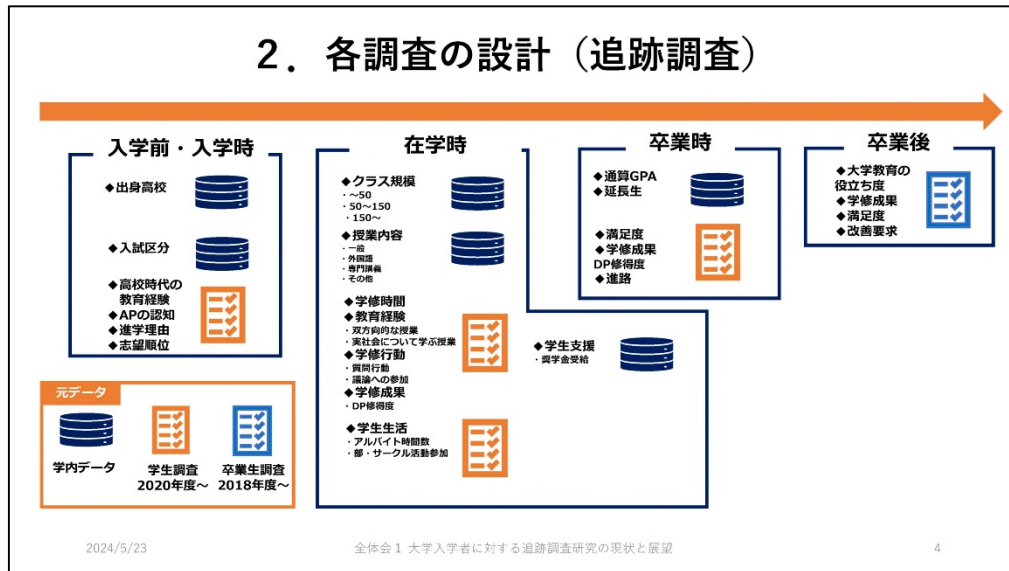
まず「センターの位置づけと調査の目的」について、私自身が入試関連、あるいは入学時点に関する業務に直接的に携わっているわけではありません。早稲田大学では大学が掲げる中長期計画である「Waseda Vision150」があります。2013年あるいは2014年にできたものですが、これの施策の一環として2014年に大学総合研究センターが創設されました。

部門としては、私が所属している高等教育研究部門がIR (Institutional Research) を、もう1つの教育方法研究開発部門がFD (Faculty Development) を担う体制です。

この大学総合研究センターの高等教育研究部門に関しては、教育改善の支援を目的に大学教育の効果とその要因分析を行っています。端的に言えば、早稲田大学の入学者が早稲田大学での学びを通して成長しているのだろうか、あるいは成長していないのだろうか、成長

しているあるいはしていないのであれば、それはなぜかということを探求し、科学的根拠、データに基づいて、教育改善を支援するという機能を有しています。

科学的根拠に基づいた教育改善の支援には調査が必要なわけですが、このセンターでは具体的な調査として、卒業生調査を2018年から、そして学生調査、正式名称は学生生活・学修行動調査と呼びますが、そちらは2020年から実施しています。



こちらのスライドは各調査の設計を簡単に図にまとめてものです。入学前から入学時に関するデータ、学士課程4年間に関するデータ、そして卒業時に関するデータに加えて、今回ご紹介する卒業生調査では卒業後の状況についても把握できるように、データを一貫して取ることができるようデザインされています。

早稲田もそうですが、教務関連のデータは調査前から当然あったわけですが、その学生たちの意識や動機、主観的な学修成果の修得度合は調査をしなければ得られない部分もあります。そのためオレンジ色の枠内にあるように、2020年度から学生調査を通じてデータを取得しています。特に最近では、入学前の状況に関して、高校時代の経験なども取るようにしています。

学生調査から先んじて行われた卒業生調査ですが、卒業以降の状況、例えば大学教育が実際のどの程度役立っているのかという学修成果や満足度、卒業後に考える大学への改善要求についても意見を求めています。

## 学生調査の概要

	調査時期	調査方法	調査対象数	回収数	回収率
2020年調査	11～12月	全学部生・大学院生に対してウェブ調査ツールを用いた回答を依頼。	46,309	10,665	23.0%
2021年調査	6～7月		45,884	10,835	23.6%
2022年調査	6～7月		45,587	14,535	31.9%
2023年調査	6～7月		46,112	13,175	28.6%

※回答データは暗号化した上で、①回答者の教学等データと結合が可能であり、②複数年回答している場合、各年度調査間の結合も可能（パネルデータ化）。回答者はその旨、同意した上で回答している。

各年度調査の報告書は以下大学総合研究センターのHPから閲覧ができる。

<https://www.waseda.jp/inst/ches/cher/about/>

- 各年度の集計結果や記述統計に加えトピックの分析結果も掲載
- 大学在学時の学修行動の規定要因分析
- アドミッション・ポリシーの習得度
- 出身高校タイプの差異など

2024/5/23

全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

5

続いて学生調査の概要です。2020年から実施しており、昨年度の調査で4回が終了しました。調査方法は全学部生と大学院生に対してウェブ調査ツールを用いて回答を依頼しています。全学部生と大学院生を合わせると非常に数が多く4万人以上が対象となりますが、実際の回収数は1万件を超えるような状況で、回収率は20%から30%程度の間で推移しています。

入口から出口まで一貫してデータを取るという目的に沿い、回答データは暗号化した上で、回答者の教学等のデータと結合が可能な状態になっています。もう1つのポイントは、複数年回答している場合、各年の調査間の結合も可能であることです。例えば1年生の時にも、2年生の時にも回答した場合には、その回答自体を結合することが可能になります。パネルデータになるということになります。当然その回答者は説明に同意した上で回答をしているということになり、各報告書等に関してはホームページで公開しています。

## 学生調査の回答傾向

表2-2 4年間の回答パターン

No.	2020年	2021年	2022年	2023年	件数	%	通算GPAの平均
1	—	—	—	—	4,305	48.2%	48.2%
2	—	—	—	回答	480	5.4%	2.569
3	—	—	回答	—	469	5.2%	2.538
4	—	回答	—	—	429	4.8%	2.477
5	回答	—	—	—	817	9.1%	2.524
6	—	—	回答	回答	204	2.3%	2.578
7	—	回答	—	回答	104	1.2%	2.599
8	回答	—	—	回答	182	2.0%	2.629
9	回答	回答	—	—	389	4.4%	2.642
10	回答	—	回答	—	214	2.4%	2.661
11	—	回答	回答	—	153	1.7%	2.670
12	回答	回答	回答	—	268	3.0%	2.776
13	回答	回答	—	回答	188	2.1%	2.706
14	回答	—	回答	回答	136	1.5%	2.774
15	—	回答	回答	回答	133	1.5%	2.770
16	回答	回答	回答	回答	463	5.2%	2.875
					8,934	100.0%	100.0%

出典：早稲田大学大学総合研究センター（2024）、p.7

### ● 継続回答している群の特徴

1. 部・サークル活動の充実を期待して早稲田大学に入学している割合は相対的に低い。
2. 科目登録にあたっては、大学からのオフィシャルな情報をより参考にしていた。
3. 履修コマ数や授業出席率については相対的に多い（高い）。
4. 課外活動に所属・参加していない割合が高い。
5. 心身の健康状態は相対的に必ずしも良いとは言えない。
6. 悩みを話す対象として「友人」を選択する割合は相対的に低い。
7. 進路としては、1年次から早稲田大学を含む大学院を希望している割合が高い。

2024/5/23

全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

6

## 全体会1（大学入試センターセミナー）

先ほど説明したとおり、本調査は2020年から4回実施しています。最初の頃はコロナが生じた時ですが、当時1年生だった人たちが、その後も回答をしているケースもあるなど、こういった回答状況について整理、分析をして、今年報告書を刊行しました。まさにこの追跡調査にとって、調査そのものを検証したということになります。

少しその事についてお示ししたいと思います。まずこの調査に回答を1回もしなかった学生が48.2%で、半分弱になりますが、逆に半分強はいずれの年に1回は回答をしています。4年間連続で回答をしていたというのがこのナンバー16で、2020年度当時1年生だった人たちのうち5.2%になります。右側に通算GPAを併記していますが、これは回答回数が多くなるほど、きれいにGPAが高くなるということになります。報告書では、この群の特徴を幾つか書いています。例えば、授業など大学教育に対して真面目に取り組んでいて、全体の平均からすると、課外活動等には2020年の時点ではあまり参加していない傾向であるということが分かってきています。調査自体の検証なども最近行ってきたところです。

### 卒業生調査の概要

	調査時期	調査方法	調査対象数	回収数	回収率
2018年調査	6～7月	学部卒業から10年経過した卒業生に対し、調査票	9,026	432	4.8%
2019年調査	12～2月	(QR)をダイレクトメール	9,193	543	5.9%
2020年調査	12～2月	で郵送し、かつ生涯アドレス宛に送付(2021～)して	8,762	1,350	15.4%
2021年調査	12～1月	ウェブ調査ツールを用いた	9,807	1,013	10.3%
2022年調査	12～1月	回答を依頼(例:2023年調査は2010年度入学者)。	9,848	970	9.8%
2023年調査	12～1月		9,897	1,292	13.0%

※回答データは暗号化しており、①回答者の在学時の教学等データと結合が可能であり、回答者はその旨、同意した上で回答している。

※※10年後を設定した意図は、大学が掲げるビジョン達成に向けた評価・改善に資するため(2008年「Waseda Next 125」、2013年「Waseda Vision 150」詳しくはEduA記事)。

各年度調査の報告書は以下大学総合研究センターのHPから閲覧ができる。

<https://www.waseda.jp/inst/ches/cher/about/>

● 各年度の集計結果や記述統計に加えトピックの分析結果も掲載

● 入試区別の学修行動・学修成果

● 大学学部志望度別の学修行動・学修成果

● 出身地域別の学修行動の分析など

2024/5/23

全体会1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

7

もう1つの追跡調査に当たる卒業生調査は、先ほどの学生調査よりも早く実施することになりました。2018年から始め、今、2023年調査まで終わり、6回の実施となりました。

調査方法としましては、学部卒業から10年経過した卒業生に対して、調査票をダイレクトメールで郵送しており、2021年から生涯アドレス宛てに回答案内も送付しています。こちらでもウェブ調査ツールを用いた回答を依頼しています。

ストレートで進学してくる学生であれば30代前半の方に調査票が行くというようなイメージです。調査対象者数は1学年で、最初始めた時は回収率が極めて低い5%程度だったのですが、直接メールで送るようになってからは回収率が少し高くなりました。更には、コロナの影響もあったかと思いますが、自宅にいる時間が増えたことで回答に繋がった可能性もあり、近年では10%を超える回答を得られている状況です。

こちらでも回答データを暗号化していて、在学時のデータと結合が可能です。10年後に設定した意図というのは、大学が掲げているビジョン達成に向けた評価・改善に資するため



す。特に2008年、あるいは2013年に公表されていましたが、「Waseda Next125」でありますとか、「Waseda Vision150」というものが掲げた教育改善・教育改革の検証を意図して10年後を想定しています。こちら各ホームページに報告書を掲載しています。

### 3. 成果

#### 1. 教育改善のチェックから改善に向けたエビデンスの提供

→大学点検・評価委員会等の全学会議体で報告

- 大学教育の現状把握：AP・DP、学修時間の評価と課題改善への示唆を提示。
- ビジョンに基づいて展開している教育と改善の妥当性の検証：ST比、対話型授業など

#### 2. 先行研究で指摘された観点からの分析

→報告書や論文で学術的探求と発信

- 入試区分別の学修経験・成果
- 志望度別の学修成果
- 愛校心と入学・在学時の経験との関連分析

2024/5/23

全体会1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

8

こういった2つの大きな調査を踏まえた成果を簡単にまとめます。

1つは、調査の目的は早稲田大学の教育改善支援ですが、その教育改善のチェックから改善に向けたエビデンスの提供ができているということです。全学的な大学点検・評価委員会において報告しています。具体的には大学教育の現状把握ということで、アドミッションポリシーやディプロマポリシー、あるいは学修時間の評価と課題改善の示唆を提示しています。

それから先ほども言及したとおり、早稲田大学が掲げているビジョンです。例えば対話型授業であるとか、双方向型授業の促進であるとか、ST（Student-Teacher）比を小さくするとか、国際化を進めるとか、そういったビジョンに基づいて展開をしている教育と改善の妥当性の検証を行っていることが、大学行政的観点からはそういった成果と言えるのではないかとこのところでは。

もう1つは先行研究で指摘された観点からの分析を、研究センタ88-ということもあるので進めています。こちらに関しては、報告書や論文で学術的探求と発信ということを、『大学入試研究ジャーナル』もそうですが、行っています。観点としては、例えば入試区分別の学修経験や成果の違い、それから志望度別の学修成果の違い、そして3番目は今回少し紹介しますが、愛校心と入学・在学時の経験との関連分析といったことを、大学行政的な観点からというよりはむしろ、学術的観点から成果を出しています。

### 入試区分の分析 (遠藤 2022) 卒業生の在学時の学び

表 正課教育の熱心度の分布 (入試区分別)

一般教育科目		経験しなかった				不熱心		やや不熱心		やや熱心		熱心		計	平均値の差
		1.1%	11.6%	25.8%	44.5%	17.0%	100.0%	5) > ①*							
一般教育科目	①一般入試	1.1%	11.6%	25.8%	44.5%	17.0%	100.0%	5) > ①*							
	②指定校	0.0%	1.0%	13.6%	57.3%	28.2%	100.0%	2) > ①***							
	③自己推・AO	2.0%	3.9%	21.6%	45.1%	27.5%	100.0%								
	④附属・系属校	0.0%	4.1%	21.4%	48.0%	26.5%	100.0%								
	⑤その他	1.8%	9.1%	9.1%	38.2%	41.8%	100.0%								
専門科目	①一般入試	0.3%	8.0%	20.1%	43.2%	28.3%	100.0%	5) > ①**							
	②指定校	0.0%	0.0%	14.6%	47.6%	37.9%	100.0%	2) > ①*							
	③自己推・AO	0.0%	2.0%	9.8%	47.1%	41.2%	100.0%								
	④附属・系属校	1.0%	4.1%	15.3%	41.8%	37.8%	100.0%								
	⑤その他	0.0%	7.3%	3.6%	34.5%	54.5%	100.0%								
ゼミ	①一般入試	12.1%	8.2%	15.3%	32.2%	32.2%	100.0%								
	②指定校	12.6%	4.9%	15.5%	33.0%	34.0%	100.0%								
	③自己推・AO	2.0%	3.9%	25.5%	29.4%	39.2%	100.0%								
	④附属・系属校	5.1%	5.1%	13.3%	31.6%	44.9%	100.0%								
	⑤その他	12.7%	5.5%	9.1%	32.7%	40.0%	100.0%								
卒業論文	①一般入試	18.2%	7.2%	15.7%	33.8%	25.0%	100.0%								
	②指定校	21.4%	1.9%	14.6%	35.9%	26.2%	100.0%								
	③自己推・AO	15.7%	2.0%	17.6%	33.3%	31.4%	100.0%								
	④附属・系属校	13.3%	4.1%	15.3%	28.6%	38.8%	100.0%								
	⑤その他	23.6%	7.3%	7.3%	25.5%	36.4%	100.0%								

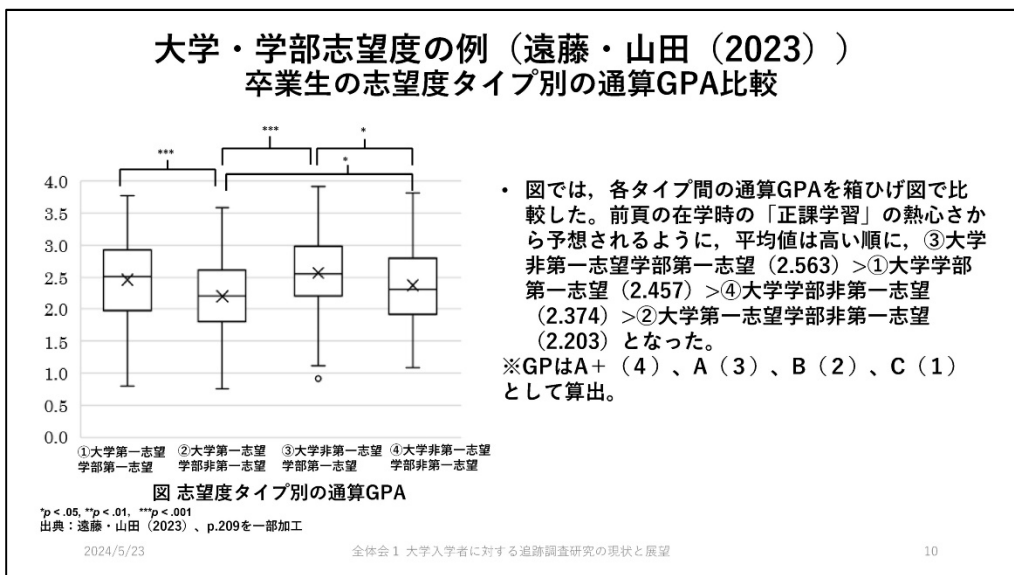
\*p < .05, \*\*p < .01, \*\*\*p < .001  
(注) 平均値の差の検定は、「経験しなかった」、「不熱心」、「やや不熱心」、「やや熱心」、「熱心」にそれぞれ0~4を割当てて分析した。  
出典：遠藤 (2022)、p.50

2024/5/23 全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望 9

それらの成果を3つご紹介しますが、まず入試区分に関する分析です。これまで、先生方がご報告を幾つかされているとおり、まずシンプルに正課教育の熱心度を入試区分別に見ます。

例えば一般教育や専門科目では差が出る部分があるのですが、一般入試に比べて指定校の卒業生は、一般教育科目や専門科目に対してはやや熱心であったということが明らかになっています。

その他、差は出ていませんが、附属・系属の卒業生たちは割と卒業論文に熱心な傾向などを示しています。これは自由回答のデータからも幾つか抽出できているのですが、中等教育段階で卒業論文が課される傾向がありますので、それが実際、大学でも行われ、より熱心に取り組んでいたという結果が出ていました。



2つ目の成果は2023年に『ジャーナル』で出したものですが、卒業生の志望度タイプ別の通算GPAの比較です。これも同じく卒業生のデータを使って、実際の学修成果の1つ、GPAをシンプルに見て比較したものです。

志望度はどういうふうにタイプを分けたのかというと、大学が第1志望であったか否かということと、もう1つは学部が第1志望であったか否か、このそれぞれ2つのタイプを掛け合わせた4つのタイプを作成しました。

一番左が早稲田大学に来たかったし、入学した学部は第1志望だったというようなケースです。それ以外にも3つありますが、要するに不本意入学であるとか、そういう問題・関心があって、志望度タイプ別に見た時の学修成果を見ました。

そうすると、この箱ひげ図、GPAの散らばり、平均と分散を見てみますと、必ずしも早稲田大学が第1志望ではないが、学部は第1志望であったという人が一番高く出ます。逆に早稲田は第1志望だったが、進学した学部は必ずしも第1志望ではなかったという学生のGPAを見ると、相対的に低いような状況になっていました。これが学修成果指標をGPAとした時の1つの分析結果になりました。

**愛校心 (山田ほか (2024))**  
卒業生の「大学への誇り」を目的変数とした分析

表5 「早稲田誇り」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 (N = 657)

	Step 1 β	Step 2 β	Step 3 β	Step 4 β
現在居住地関東ダミー	0,01	-0,01	-0,01	0
現在年取	0,01	0,02	0,02	0,02
生活満足度 (仕事を除く)	.12**	.12**	.09*	.07†
第一志望 (大学) ダミー		-.15***	0,06	.07†
第一志望 (学部) ダミー		-.09*	-.07*	-.07*
奨学金受給有無ダミー		-0,03	-0,01	0
受験理由_伝統・校風が好き			.27***	.27***
DP獲得_全体			.15***	-.10*
受験理由_就職に有利と思った			.09*	.07*
大学経験_積極的・良好な学修			.09*	0,07
大学経験_仕事役立ち_課外活動				.09*
大学経験_仕事役立ち_学業総合				.09*
R <sup>2</sup>	.02*	.05***	.19***	.21***
adj. R <sup>2</sup>	.01*	.04***	.18***	.20***
ΔR <sup>2</sup>		.03***	.14***	.02***
AIC	1303,33	1289,36	1189	1177,42

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05, †p<.10

出典：山田・遠藤・丸川 (2024)、p.60

2024/5/23 全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望 11

- 愛校心・行動全体的に、早稲田大学の「受験理由\_伝統・校風が好き」ということが、卒業後の愛校心・行動の変数への影響が大きい。
- ・・・さらに「早稲田誇り」には、「第一志望 (大学) ダミー」がプラスの影響を、「第一志望 (学部) ダミー」がマイナスの影響を持つことがわかった。
- また「早稲田誇り」と「早稲田関わり行動」のモデルには、「大学経験\_積極的・良好な学修」が含まれており、・・・授業内容について教員や他の学生と議論したり、よい教員に巡り合えたことも、卒業後の愛校心・行動の変数へ影響する。

最後なのですが、一方で違うアウトカムの設定もできないかということを考えています。例えば大学教育の満足度でも結構なのですが、1つは自大学への愛校心、早稲田大学に対する愛着、誇りといったものの分析を昨年行いました。これは今年刊行された『ジャーナル』、『紀要』に掲載されており、必ずしも学修成果とは言えないですが、アウトカムの1つとして、大学への愛着や誇りといったものがどのように規定されるのかを分析しています。

実際に分析をしていますと、先ほどの通算GPAとは違う絵が見えてきます。例えば早稲田大学がそもそも第1志望であったということが効いてくるということと、受験理由がそもそも早稲田の伝統や校風が好きだということの説明力が大きいということです。アウトカムの設定、卒業生調査に対して、違うものを設定することで、どのような結果が出てくる

のか、少し観点を変えた分析も近年進めているところです。

## 4. 課題と展望

### ●課題

- ・ 選択バイアスや回顧バイアス等とその対応：対象を卒業後10年に設定している影響の検討。
- ・ 調査コーホートの意味と解釈：示された結果が学年による効果か、社会的なイベントか（新型コロナウイルス感染症拡大・全面的なオンライン授業の実施等）。

### ●展望

- ・ 学生調査と卒業生調査の連続性：学生調査対象者がいずれは卒業生調査対象者になる。この時に、在学時のデータと結合し、より深い分析が可能になる。
- ・ 縦断研究の充実：現在、学生調査は縦断研究が出来る段階になっており、卒業生調査もいずれは縦断的な研究へ（※個人的意見）。
- ・ 卒業生調査における目的変数の説明力：モデルの説明力が小さい。それは現在の状況に関する仕事や生活の項目をあまり尋ねていないから生じている可能性がある。生活や仕事に関する質問項目を含めた調査票の設計を。

2024/5/23

全体会1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

12

課題と展望としてまずは課題の1つ目ですが、実際に回答をしている人たちは通算 GPA が高い傾向がありますし、卒業生を対象にした場合、回顧バイアスみたいなものが生じています。その対応をしなければならないということが1つです。

もう1つは、調査コーホートの意味と解釈です。示された結果が、学年による効果、つまり学年が上がって成長した結果なのか、あるいは社会的なイベント、今回2020年からの調査ということが、非常にその解釈を難しくしている部分でもあるのですが、コロナウイルスによる全面的なオンライン授業実施等の影響なのかということがまだはっきりとしません。ただこれはデータが積み重なっていけば、しっかり分析ができるようになります。

展望に関しましては3点ほどありますが、まずは学生調査と卒業生調査を連続性をもって分析することです。今、実際に在学している学生調査の対象者はいずれ卒業生調査の対象者にもなりますので、その際にはより深い分析が可能になります。

次に縦断研究です。横断というよりは、その個々人を追っていくような縦断研究ができる段階になっていますので、卒業生調査も30代前半だけではなく、違う年齢の時に取ってもいいのではないかと個人的には思っています。

最後ですが、卒業生調査における目的変数の説明力があまり高くないのです。それは現在の状況に関する仕事ですとか、生活の項目を尋ねていないからこそ生じている可能性もあります。この辺に関しては、大学教育という枠を少し超えているのかもしれませんが、生活や仕事に関する質問項目を深めた調査設計を今後していくことによって、説明力が上がっていく可能性があると考えています。

## 5. まとめ

- 大学総合研究センターでは、教育改善の支援を目的に、大学教育の効果とその要因分析を行っている。調査としては学生調査と卒業生調査を実施している。
- これらの調査は学生の入学後、卒業後の追跡調査として位置づけることもでき、大学教育の効果を短期・中期的な視野から、多面的に測定できる。
- 現状の評価や教育改善の妥当性検証に科学的根拠をもって学内にフィードバックが可能となる。
- 追跡調査自体の検証も継続的に行い、その信頼性を検証することも重要となる。

2024/5/23

全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

13

まとめとしては繰り返しになりますが、教育改善を行うことを目的に学生調査、卒業生調査を実施しています。大学教育の効果を、短期、あるいは中期的な視野から多面的に測定できます。

教育改善の妥当性検証に科学的根拠をもって、成果として学内にフィードバックができています。あとは追跡調査そのものの検証です。これは西郡先生が発表されていたとおりに、継続的に行い、その信頼性を検証することも重要となることを最後の課題に挙げています。

## 参考文献など

- 朝日新聞EduA、「早稲田大が初の卒業生調査 一般入試組と附属・系属校出身に違いは？」  
<https://www.asahi.com/edua/article/14359437?p=1> (2024年5月15日閲覧)。
- 遠藤健 (2022) 「入試区分別の在学時の学びとアウトプットの関係－卒業生調査からの検討」『大学入試研究ジャーナル』32、pp.49-55.
- 遠藤健・山田寛邦 (2023) 「大学・学部志望度と入学・卒業後のアウトプット間の検証－学部卒業10年後調査を事例に」『大学入試研究ジャーナル』33、pp.205-211.
- 山田寛邦・遠藤健・丸川拓己 (2024) 「大学卒業生の愛校心・行動に対する在学時の経験・学修行動の影響」『早稲田教育学研究』15、pp.49-65.
- 早稲田大学大学総合研究センター、各年、『卒業生調査報告書』。
- 早稲田大学大学総合研究センター、各年、『学生生活・学修行動調査報告書』。

謝辞：調査回答者、学内関係者各位に感謝申し上げます。

2024/5/23

全体会 1 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

14

参考文献は以上になります。報告は以上です。

---

【桜井・司会】遠藤先生、ご報告をありがとうございました。■

## 全体会 1 ○ 全体討論

# 大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望

■西郡 大（佐賀大学 アドミッションセンター長，教授）/平井 佑樹（信州大学 全学教育センター准教授）/安永 卓生（九州工業大学 理事，副学長（教育接続・連携 PF，情報担当））/竹内 聖彦（椋山女学園大学 教育学部教授）/遠藤 健（早稲田大学 大学総合研究センター講師）/林 篤裕（名古屋工業大学 教授■司会）/桜井 裕仁（大学入試センター 研究開発部教授■司会）

---

【桜井・司会】 それでは全体会1を再開します。ここからの司会は，名古屋工業大学の林先生にお願いしています。林先生，よろしくお願いします。

【林・司会】 名古屋工業大学の林です。このセッションの総合討論の部分を仰せつかっています。午前のセッションにも参加された方はご存知かもしれませんが，いろいろと活発な意見が出ていましたので，この後，意見交換ができればと考えています。

まず1つ目のコメントです。「感想ですが，現状ではAPに妥当性を求めると学生募集に影響が出るので，多くの大学で「抽象的な関心・意欲・態度」の有無に特化し，その水準や学力水準については言及できない大学が多いように感じています。特に大学数の大多数を占める私立大学においては，選抜が効かず実質的にはほぼ全入状態の大学も相当数あるものと思いますので，西郡先生がおっしゃる通り，現状では検証にあまり意味はなく，教学マネジメントを学生募集～入学者選抜～入学前教育～初年次教育～学位プログラム～卒業後までを一貫したもの＝EMとして捉え直して再設計しなければならない段階にまで来ているのではないかと感じています。EM・IRの重要性が増していると思いますし，第4期認証評価のポイントである学修成果に重点を置いた内部質保証にも直接的に繋がるとも思います。」と，追跡に関してコメントという形で仰っています。これについて，今日の登壇者の中では西郡先生が一番近いのではないかと感じますので，まず西郡先生からどのようにお感じになっているかをお聞かせいただけますか。

【西郡】 まず感想と伺いますか，ご意見を頂き，どうもありがとうございます。本当にお

っしゃるとおりだと思います。私自身もそう思います。選抜性が高くて、学生を選べるような立場にあれば、学力が高くて主体的に学べるとか、興味・関心が高いということで、入試に贅沢な能力や資質を求めて、それで選抜するということである程度の学生の質を確保できると思います。

しかし今はもう選抜性がかなり低下してしまって、学力のばらつきもかなり大きくなっていますので、入試だけで学生の質を求めるとするのは難しくなっています。

そうなるを受け入れた学生をどう伸ばせばいいのかということで、カリキュラムや教育の仕組みを工夫していかなければいけないということを考えると、そこでどういった教育ができるのかを議論する中で、少なくとも入試では最低限、こういった能力や資質、スキルを持っている人を求めたいという議論になると思います。

つまり能力や資質において優先順位を付けることで、これだけは譲れないというものが出てきます。そういったものが今、必要なアドミッションポリシーの妥当性というところに議論が行くのではないかと思います。入試だけを見てはそこを議論できませんので、やはり教育のカリキュラムの中で議論する必要があるという意味では、EM・IRと書かれていますが、そういった材料を基に入口から出口までという視点の中で、教育全体を考えて、そしてアドミッションポリシーで何を求めるのかを議論する必要があると思います。

**【林・司会】** ご回答をありがとうございました。やはりこの議論には AP の妥当性が非常に大きく関わってくるのだらうと、西郡先生のご講演も含めて感じていました。AP を今後どのようにすればいいのかは、悩ましい問題です。続いて順番に平井先生、これに関して何かコメント等いかがですか。

**【平井】** 私も西郡先生と一緒に、今、大学全入時代がもうそのとおりになってきてしまっています。入試の検証だけではなく、教育の改善に向けた追跡調査も今後必要になってくるでしょうし、エンrollment・マネジメントとして、そのような観点で今後体制づくりをしていくということも重要になるのではないかと思います。以上です。

**【林・司会】** ありがとうございました。次、安永先生、いかがですか。

**【安永】** ありがとうございます。おっしゃるとおりの部分です。卒業後の部分が今まで大学のほうで抜け落ちていたというか、なかなか卒業生にリーチできなかったのですが、この辺りも大学としては、卒業生とつながり続ける形をどう作っていくかということを通して、評価に繋げていながらフィードバックできるように仕掛けていかなければいけないのではないかと考えています。以上です。

**【林・司会】** ありがとうございました。では次、竹内先生、いかがですか。

**【竹内】** 私どもは、卒業生の同窓会のようなものがあり、そこを通じてやりたいというこ

全体会1（大学入試センターセミナー）

とを、数年前から計画をしているのですが、なかなかそれがうまくいっておらず、卒業後の学生さんたちの動向をどのように見ていくかは、今も課題となっています。

【林・司会】 ありがとうございます。女子大学は比較的OGの活動が活発なので、その辺りの使い方もあるのでしょうか。そうしたら遠藤先生、いかがですか。

【遠藤】 ありがとうございます。私も先生方や質問を頂いた方と同意見だと思います。入口から出口まで、そしてそのポリシー自体、APとCP、DP、これらの関連性を元に一貫した分析体制であるとか、教育体制というのを整えるということが重要だと思います。

【林・司会】 ありがとうございます。では次のご質問です。「調査書を活用し選抜する場合、どのような項目を使って評価したら効果的でしょうか。評定平均値は、全国で高校ごとや私立と公立で評価が異なるような気がしており、使いにくいと感じています。」という事で、調査書の利用は非常に悩ましい問題のような気がしています。

遠藤先生、調査書の利用の仕方について、貴学での工夫などについていかがでしょうか。

【遠藤】 調査書については現在分析の観点等はありません。すみません。

【林・司会】 分かりました。次、竹内先生はいかがですか。

【竹内】 調査書を入試にどのように利用するかというのは非常に難しく、一応それを評価するような形にしようとはしているのですが、どのようにやるかがやはり人それぞれご意見があり、難しいところではあります。ですからまだ全然具体的には進んでいません。

【林・司会】 ありがとうございます。安永先生、いかがですか。

【安永】 ありがとうございます。おっしゃるように非常に難しく、評定平均のばらつきも含めて考慮しなければいけないところはたくさん残っているところで、私どもも苦慮しているところです。

あとは先ほどもありました高校での教科の学びの状況などは、これは逆に調査書で見させていただいでいて、どの科目をどのくらい取っているかという辺りの情報を参考にして面接等で使うケースもあります。

【林・司会】 選抜に際しての利用の仕方という意味ですね。

【安永】 そういう意味です。

【林・司会】 平井先生、いかがですか。



【平井】 ありがとうございます。皆さんがおっしゃるとおり難しいところですが、英語ができるかどうかを見るなら、英語の学習成績の状況とか、資格取得の欄を見ればいいわけですが、資格取得をそのまま使うとなると、ご家庭の経済状況などを考慮する必要があります。

あるいは自由記述の部分を使うということになった場合は、例えば国語の先生が調査書を書くとなると、書き手の文章力に左右されることもあります。そうすると、なかなかその自由記述の部分は使えないのではないかと、選抜で使うのは難しいのではないかと思います。

本学では一般選抜で調査書の全体の学習成績の状況を点数化して使用しています。それにつきましては、本学のアドミッションセンターの一之瀬が研究会で報告しますので、こちらに譲りたいと思います。ご興味があればお聞きいただければと思います。以上です。

【林・司会】 ありがとうございます。最後、西郡先生はアドミッション室長でもおありですので、この辺の選抜の仕方は何か工夫とかはされていますか。

【西郡】 他の先生方がおっしゃるように、調査書を活用して、それを入試でまた直接的に点数化するというのは極めて難しいと思います。評定平均であるとか、あとは活動記録という何らかの評価尺度の下で程度を比較して順位付けするというのは極めて難しいのではないかと思います。

そう考えれば調査書単独で点数化するのではなく、他の選考資料や面接の内容を確認・補足するような、参考情報としての活用に留めるのが良いと思います。先ほど平井先生が言われましたが、記述的なところで上手、下手というのではなくて、証明機能として、例えば英検何級に合格したといったような情報しか選抜には使えないのではないかと考えています。

佐賀大学でも医学部が調査書を 100 点満点で点数化していた時期がずっと長かったのですが、一昨年から調査書の点数化はやめて、あくまで補足資料の 1 つというような形で入試では利用しています。以上です。

【林・司会】 ありがとうございます。大学側としては高校側に調査書を提出していただいている中で、調査書を工夫して使っていく方策を模索して行く必要があるのではないかとこの気はしています。

次のご質問です。「追跡調査に関して、私たちも可能であれば実施したいと常々考えているのですが、入試課・アドミッションセンターでは通常「入学まで」を調査等の対象としているので、入学後や卒業後の調査を自由に行うことが難しいです。マンパワーの不足に加え、学生支援課やキャリア就職センターといった他部局の管轄になるのでなかなか手を出しづらいといった状況にあります。皆様はどのように追跡調査を実現されていますか。」というご質問です。

これに関しては早稲田大学の遠藤先生にお聞きしたいのですが、先生のご発表をお聞きしていると、IR 部というのは結構人数がいらっしゃるのではないのでしょうか。つまり単年

## 全体会1（大学入試センターセミナー）

度で大体1万人ぐらいの卒業生に対していろいろな調査をされているということからすると、先生がご所属のIR部門というのは結構な人数がいらっしゃるのではないかとって拝聴していました。ご質問の中にも「マンパワー」という言葉がありますが、先生のところの高等教育研究部のIR部門というのはどのぐらいのマンパワーでどのような業務をされているのか、その辺も含めてご紹介いただければと思います。

**【遠藤】** ありがとうございます。まずマンパワーという点では、今の私の組織は分析担当者が私ともう1人の教員とで実質的に2人体制です。職員の方も3名いますが、他部署と兼任しており、100%エフォート投入をしているという状況ではありません。

職員の方々は質問紙の配信ですとか、あとは当センターのホームページにあるBIツール（Power BIを使って可視化するようなツール）の更新といった業務を担っています。教員の私ともう1名は、より詳細な分析をするというような体制で進めています。

我々もこの追跡調査をデザインするのに時間がかかりかかって、合意形成を得るのも非常に大変だったということがありますので、この質問者の意見というか、現状の課題には非常に共感します。

**【林・司会】** ありがとうございます。本学でも入試課と学務課で管理するデータが異なるといったことがあります。IR部門の権限といいますか、各データにアクセスできるような体制が整備されているということなのですか。

**【遠藤】** 引き続き回答をしますと、データの権限というのは、主には教学データに関しては情報企画部というところが扱っていて、そこと連携をすることによって、より充実したデータを使えるようになってきているという状況です。こういったことが可能になったのも、この調査をデザインする当初、副総長や教学担当の先生に対して、IRが重要だという説明を繰り返して理解いただいたという経緯がありました。

**【林・司会】** もう1つ、すみません。遠藤先生に立て続けに質問して恐縮なのですが、データを利用する時には、学生から承諾を得なければいけないと思います。入試に関しては募集要項等にデータを利用することの一文を記載することで了解が得られているとするケースがあると思うのですが、学内成績に関してはどのように了解を取られているのでしょうか。

**【遠藤】** ありがとうございます。こちらに関しては、学内の研究倫理に関し申請をして、当該研究をすることに承認を得ることと、あとは学生に対しても、こういう目的で研究をしますという説明文章をウェブ上で閲覧できるようにしています。また当然成績等に影響が出ることはないということを説明して、「回答する」あるいは「しない」という選択肢を設けているという状況になります。

【林・司会】 では逆に言うと、一部の学生さんは「いや、それは遠慮してくれ」というご意向を示されるということなのですか。

【遠藤】 そうです。数%の学生は、実際にウェブページの設問フォームにアクセスするのですが、回答に協力しないという形になります。

【林・司会】 分かりました。後でもう1つ、遠藤先生には伺いたいことがあるのですが、先にこのご質問に対して、他の先生からもご意見を伺いたいと思います。竹内先生、このデータを串刺しにする（各部署が独立して保有しているデータを統合して活用する）という点で、貴学ではどのような工夫をされているのですか。

【竹内】 それぞれの部署によってバラバラにデータを管理していましたが、つい最近、それを全部統合しました。ただそれをそれぞれの部署で今までと同じような使い方をしているので、それを活用したIR的な処理はまだできていません。

【林・司会】 IR部があるということではないのですか。

【竹内】 IR室が一応あるのですが、そこは他部署と兼務している職員しかいないので、IR業務をメインでやっている方はいらっしゃいません。

【林・司会】 ありがとうございます。次、安永先生、いかがですか。

【安永】 私は情報統括という職も担当しています。IR室があったのですが、そのIR室をこちらの情報統括の情報基盤センターに移して、DXも担当するということで、DX/IR推進室という形になりました。

データに関しても情報基盤センターでだいぶ整理できるようになってきたので、データレイクの形でデータを集める仕掛けがようやく動き始めたところです。まだそれぞれのデータをどこの権限でどう取り扱うかということが決まっていないために、まだお互いの部署で確認を取りながら動いているのが現状というところになります。

学生の承諾という部分に関しては、今のところ入試も含め、ホームページ等に大学の教育の改革に資する部分に関しては個人データにならない範囲で利用するというのを記載して運用しています。

【林・司会】 ありがとうございます。平井先生はいかがですか。

【平井】 私もアドミッションセンターに着任した頃は、なかなか学部のデータを使えないということがあったのですが、地道に学部回りをして学内のコネクションを強化し、学部の先生方に「こういう分析をしたらこういういいことがある」ということを伝えることで、学

## 全体会1（大学入試センターセミナー）

部の情報を使えるようにしました。学内広報とも言えると思いますが、学内でアドミッションセンターや、入試課の存在感を高めていくのがいいのではないかと思います。

【林・司会】 ありがとうございます。西郡先生はいかがですか。

【西郡】 私も15年ぐらい前は一個一個、各部署で頭を下げながらデータを提供してもらい、それらを繋げて分析していました。その後、IR室ができ、私はその室長を10年ぐらいいやっていました。その体制が整備されると、比較的全学からデータが集まりやすくなりました。

しかし、データをどう活用するかは結果的に非常に課題になっていまして、特に教学部分については、入口から出口までしっかりとやりたいということで、今は教学マネジメント推進室が新たに立ち上がっています。そこに専任1人、そして私がアドミッションセンターと兼任、更にキャリアセンターと兼任で1人の3人が入ることで、入口から出口まで一気通貫で見ていこうとしています。

【林・司会】 やはりいろいろな部署との連携が必要で、それをマネジメントする方が必要ということのようです。ありがとうございます。

では、先ほど後回しにした遠藤先生に改めてお聞きしたいのですが、生涯メールを使って卒業生にはアクセスをしていると報告がありました。生涯メールというのはどのぐらいの割合で卒業後も使ってくれるのかということと、ご説明の中で、「今後学内データとリンクできるようになるから」という将来的な言葉をお使いになったような気がします。生涯メールであれば、もともと個人が特定できているわけですから、学内のデータもやろうと思えばリンクが取れるのではないかと、すでにアクセス可能ではないかと思いついていたのですが、2点いかがですか。

【遠藤】 ありがとうございます。まず生涯メールの稼働率に関しては、この場で確実な情報は言えませんが、少なくとも10%強は回答をしてくれているという状況を見ると、例えばそこからGmailなどの普段使うメールに転送されている可能性はあるのではないかと思います。

2番目のその調査の学内データとの結合は、私の言い回しがややこしくて申し訳ありませんでした。現段階で、卒業生調査を当時在籍していた方々の在学時データと結合すること自体は可能になっています。また分析もしているのですが、先ほど説明したのは、今、学生にやっている学生調査と卒業生調査が結び付くようになるには、まだ始まったばかりですので、数年後先であるという説明でした。分かりにくくてすみません。

【林・司会】 いえ、分かりました。聞いてみたいと思って少し時間を取らせていただきました。

では次に遠藤先生宛のご質問で、「継続回答している群の特徴に興味があります。部・サ

ークル活動の充実を期待しておらず、課外活動に所属・参加していない割合が高いのは勉強しか興味がないということでしょうか。進路は大学院を希望していて実際進学したのでしょうか。愛校心などはいかがでしょう。」ということです。遠藤先生、いかがですか。

【遠藤】 ありがとうございます。まずこの調査がやっと4年経ったところで学士課程を一貫した調査が取れたのですが、この傾向を分析したのが2020年次の当時の回答者の傾向です。1年次のみ回答をした群、2年次、あるいは3年次、4年次で継続して回答した群を比較したというようなものになっています。かつこの時期がちょうどコロナもありましたので、解釈に関しては、非常に難しい部分があります。

これは今回の報告では触れていないのですが、この継続回答者に対して、昨年度から試験的にインタビュー調査を行っています。インタビューをすると、正課教育はもちろんのこと、課外活動にもかなり幅広い知的好奇心を持って活動をしている人たちが少なくないという印象を持っていますので、この結果に関してはどうなるのかを今後見ていきたいと思いません。

大学院に関しては、実際に入ったかどうかというのは、まさにこれから検証することができるかと思えます。愛校心に関してはおそらく高いということが予想されますが、これもデータを実際に取ってみて明らかにできることではないかと思えます。

【林・司会】 ありがとうございます。続いて「調査書の信ぴょう性に関して、高大で議論の必要があるのではないですか」というご質問が来ています。これは司会としては、「そのとおりだと思います」としか言いようがないと思っています。あまり過激なことをここで言うのは適切ではないと思いますが、調査書をどういうふうに使えばいいかということも含めて、やはり高校側、大学側で一定程度、意見交換をしながら、着地する点があればいいということぐらいしかないとはいえないかと思えます。

ご登壇の先生方からこの信ぴょう性に関して、何かコメントがございましたらご発声をお願いしたいと思います。...、無いようですね。なかなか難しい問題なのだと思います。ご了承いただければ幸いです。これで現時点でお寄せいただいたご質問には全部お応えしたように思います。

ではこの際ですので、私から質問させていただきますが、今回、西郡先生、平井先生、安永先生は、ご所属が国立大学で、竹内先生、遠藤先生に関しては、私立大学ということになっています。これは意図してこうしたわけではなかったのですが、今日、改めてプログラムを拝見して、「こうなっていたのか」と先生方のご講演の途中で気が付きました。

特に私立大学のお二人の先生方のご講演を聞いていて面白いと思ったのは、高校の特性が卒業生の特性になっているということです。つまり指定校の場合はこういう特性を持って卒業まで繋がっている、といったことです。私は国立にいる期間が長かったからか、高校時代のカラーや特性というものが卒業まで繋がっているというのは、非常に面白いと思いました。と同時に、聴衆の中には高校の先生もいらっしゃると思うのですが、大学の先生方の能力は当然求められるのですが、高校の先生方が、3年間、教育を請け負っておられる中

## 全体会1（大学入試センターセミナー）

で、その子どもたちの特性が決まっているとすれば、大学の先生以上に、高校の先生方に頑張っていたかなければいけないと、エールを送りたいような気がしました。

そこで竹内先生、遠藤先生にお聞きしたいのですが、各学生に接している中で、入試区分や高校によって特性が異なるというふうにお感じになるものなのですか。まず竹内先生からお聞かせいただけますか。

【竹内】 やはり学生の特性というか、指定校でいらっしゃる学生というのは、高等学校の先生から「頑張ってやってこい」ということを言われてきているので、非常に前向きです。併設校からでもそうですが、「自分がやりたい」という気持ちがすごく前に出ていて、元気いっぱいいろいろやるという印象をすごく感じます。

それに引き換え、一般入試で入ってくる学生さんたちは、私どもの学部がそういう特徴を持っているのですが、国立大学を狙っていたが残念でしたという感じで入ってくる人がかなりいます。そういう人たちは、特に最初のうちは大学に対して、少し横を向いているようなところがありますが、学年が上がるにつれて、みんな同じ方向を向くようになるのではないかと思います。

【林・司会】 遠藤先生はいかがですか。

【遠藤】 指定校推薦というか、一般入試選抜以外ということがあり、本学の全体的な平均的な様子というのは、相対的に高いということになります。先ほど少し言及したように在学生に対してインタビュー調査を行ったのですが、指定校の学生は高校時代の探究活動の経験を動機にしながら、その連続性を持って大学でも学習をしているということが1つポイントとしてありました。

その探究活動が正式に授業として行われているケースであるとか、あとは先生が学外のクラブ活動で応援してくれた経験でありますとか、そういうことが少なくない影響を当人に与えているのではないかと感じた次第です。実際に、今後はより詳細な分析をしていく必要がありますが、卒業後もそういった学習を続けていくようなスタンスが中等教育の段階で身に付いているのかもしれないと感じています。

【林・司会】 ありがとうございます。今、お二人の私立大学にご所属に先生方にお聞きしましたが、国立大学におられる三人の先生方はどういう感触をお持ちなのかにも非常に興味があります。特に安永先生は高大接続のご担当ということで気になりますがいかがですか。

【安永】 ありがとうございます。いわゆる指定校推薦というのは、国立大学には枠がないので、そこを直接比較するというのは難しいです。最近は高大連携の中で、あるいは中学までを含め、探究科目にさまざまなところで関わる機会も増えてきていますが、そういうことをされている高校さんとされていない高校さんがいます。知識重視のいわゆる従来の入

試に関わる学習を中心としてされているところなど、方向も多様になってきたという印象を持っています。

実際には、今だと総合型選抜で受けるのか、一般選抜前期で受けるのか、後期で受けるのかとか、それぞれ高校さんの性質に応じて、実は選抜区分が少しずれていたりします。その辺りがこれからどのように繋がっていくのかを我々も模索しながらの状況であります。

さらに申しますと、九工大の場合は理系の単科の大学です。他県の事情は存じ上げないのですが、福岡県では高校1年生の5月にはもう理系、文系を決めなければいけないというところがあります。高校での学びと、文理選択や専攻の志望が繋がってこないという中で、入試制度がどうしても高校時代の科目の選択とそこがリンクしてしまうということがあります。その辺りも高校さんごとでその振る舞いが少し違ってきますので、少し意見がずれているかもしれませんが、各高校さんの進学に対する考え方の違いというのはそのまま大学に繋がってきているのではないかとこのころでは高大でいろいろ検討していきたいと思えます。

いろいろな意味で繋がりを広げていながら検討できればと思っています。少しずれてくるかもしれませんが、すみません。

**【林・司会】** いえ、ありがとうございます。文理の選択時期というのは、日本全国高校の1年生で行われることが多いようです。それがいいか悪いかという議論は、これだけで別のセッションができるぐらいの話題になるのだろうとは思えます。

次、平井先生はいかがですか。高校からの教育がカラーとして分かる、もしくは違うということが、国立大学としてそういうことをお感じになるということはあるですか。国立大学の場合は、学生に「あなたはどこの出身か。どの選抜で入学したのか」と聞くことがあまりない気もしますが。

**【平井】** ありがとうございます。本学は県内シェアが25%、県外シェアが75%という形で、本当に全国から集まってくるので、高校ごとのカラーというものを逆にいうと、出しづらいところがあります。本学ではどこから来たのかということは特に気にしていないという感じです。皆さんがそれぞれいろいろな高校でいろいろなことをされてきていると思えますので、それを生かして学んでくれればと、そういう感じで受けています。

**【林・司会】** 苦しい回答を要求してしまいすみません。西郡先生はいかがですか。

**【西郡】** 私もあまり高校の特性を意識することはないかと思えます。特に都市部の大学と我々のような地方の大学では、中高一貫校も一部の地域に限られますし、そういった違いはかなりのものではないかと思えます。逆に付属校とか指定校からの学生の特別性というものを聞けて、「なるほど、見方が違うのだな」と思いました。

むしろ私たちの大学では、専門高校系から来た学生がどういった特性を持っているとか、そういったところに比較的注目しているところがあります。

【林・司会】 ありがとうございます。そういう意味では、私もお2人の私立大学にご所属の先生のご発表を聞いていて、「なるほど」と思った部分でした。

全体会1 登壇者ごとの「4つの観点」

4つの観点	西郡 大 (佐賀大学)	平井 佑樹 (福州大学)	安永 卓生 (九州工業大学)	竹内 聖彦 (相山女学園大学)	遠藤 健 (早稲田大学)
●どのような目的で追跡調査を行っているのか	「追跡調査」および「効果検証」の総括	高等学校の履修状況やアンケートと学内成績の関係、アンケートの回答結果が調査書の代わりとなるか	狙った学生が確保できているかの調査、CPの適合性	選抜単位別の学生の特徴把握	大学教育の効果把握
●追跡調査をどのようにしているのか	論文サーベイ	アンケート調査、学内成績	PROG、学内成績、ストレート進級率・卒業率	学内成績、進路希望調査、就職先	卒業生調査、学生調査(学生生活・学修行動調査)
●どのような成果が得られたのか	追跡調査・検証方法の事例把握	入学後成績の予測	選抜単位ごとの特性	選抜単位別の学生の特徴	教育改善の支援に向けたエビデンスの提供
●今後の課題としてどのようなことがあるのか	入試部分のみならず教育全体の改革に資する調査	全学展開、アンケート疲れの軽減、調査書の有効な利用方法	高大接続から教育成果までのPUGAサイクルの構築	教員採用試験の見直しに対応した学生の変化	バイアスの影響、調査コーホートの取り扱い

質問が途切れましたので、参考にさせていただけるかは判りませんが、1つ話題提供させていただきます。桜井先生がスライドの3ページ目に載せておられた追跡調査をどのように実施しているかという4つの観点について、ご登壇の先生方のスライドを事前に拝見して、分類したものが上の表のようになりました。

追跡調査というのは、いろいろな観点や手法があって、もしくは部局もいろいろと横断しなければいけないということがあり、様々なご苦労というのか、方策が要るのだろうということを、この表にまとめていて感じた次第です。

本日はIRという話もありました。いろいろな観点で追跡が行われているということが分かっていただけたのではないかという気がしています。加えて言えば、高大接続をどういふふうに進めていけば良いのかについて、調査書の利用に関する話題も出てきました。これらが皆さんの参考になれば幸いです。

新たな質問が届きました。「アサーティブ入試というものがありますが、育てる入試というものについてどのようにお考えですか」ということです。

アサーティブ入試は追手門学院大学が先駆的に行っているものですが、これについて先生方のご感想などお聞かせいただけますか。では今度は、西郡先生からお願いします。

【西郡】 やはりこういう大学の大量化と言いますか、全入時代と呼ばれている時代においては、選抜を考えれば、こういった方法というものは非常に重要な入試の1つの形ではないかと思えます。

もちろんこのアサーティブ入試を実施されている方から話を聞きますと、非常に手間暇と言いますか、丁寧にやられているため、継続性という面を考えると非常に大変だと思いま



すが、この視点というのは、今の大学入試を考えれば、あるべき1つの形だと考えています。

【林・司会】 ありがとうございます。では次に平井先生はいかがですか。

【平井】 ありがとうございます。このような育成型の入試ができると、その学生さんに対して、愛校心というようなものを育てられます。確かに入学後のモチベーションにつながるのでもいいなとは思ってはいるのですが、本学は全国から集まるような状況ですので、なかなか対応ができないというのが正直なところですが。しかしこのような入試でファンを集めているというのは大事なことではないかと思います。

【林・司会】 ありがとうございます。安永先生はいかがですか。

【安永】 ありがとうございます。まさに高大接続というところではとても重要なポイントではないかとは思っています。ただやはり平井先生からもありましたが、うちは大体今、福岡県出身者率が45%ぐらいです。とはいえ、外からやってきているという中で、ここをどう捉えていくのかは非常に難しいところではあります。一緒に教育プログラムを作っていくということで、広くやっていくことは適切ではないかと思いつつ今は進めているような状態です。

【林・司会】 ありがとうございます。竹内先生はいかがですか。

【竹内】 連携校みたいなものが作られてはいるのですが、まだなかなか具体的に何をするというところまでは行っていません。大学の授業を聞いて、入学した時に、それを単位化できるようにしたいとか、そういったことは進めてはいるのですが、まだなかなか実態としてうまく動いていないというか、まだ始まったばかりなので、何も進んでいないというのが現状です。

【林・司会】 ありがとうございます。では遠藤先生はいかがですか。

【遠藤】 このアサーティブ入試にすごく詳しいわけではないのですが、入試を通して育てていくということは非常に有効だと思います。指定校であれば大学入学前にまとまった時間があるので、その大学について詳しく調べたり、自分はどういうことを学べるのかということを考えているということが、学生からのインタビューの中でもありました。こういった入試制度や時期の問題もありますが、非常に有効ではないかと思いました。

【林・司会】 ありがとうございます。入試というのは、本当にいろいろなことを考えながら実施していかなければいけないという意味では、このアサーティブ入試も1つなのだ

## 全体会1（大学入試センターセミナー）

ろうという気がしています。

特色ある入試というのは、丁寧、時間がかかる、ロードが高いといった言葉が出てくるのは仕方がないというか、当然だと思っていますが、これは私個人の意見ですが、丁寧にした分、魅力的な受験生が選抜できるという観点を持つ必要があるのではないかと思います。手間がかかるからというだけで排除するのは、寂しいような気が私はしています。

他にご質問もないようですのでこの辺で締めたいと思います。追跡調査というのはいろいろな切り口がありますし、どのようにすれば良いのかは、各大学の先生方、ご所属の私学だとか、国公立だとか、それから規模だとか、加えて言えば専門性でしょうか。工科なのか、文系の何かということもあります。先ほど、信州大学からは全国から来ることに対してのいろいろなケアをされているということで、各大学の特性に応じて、追跡調査というのはいろいろと考えていかなければいけないのだろうということをご紹介いただいたように感じています。

他にも高校と意見を擦り合わせて運用していかなければいけない部分もあるのだということが分かったというか、最初から分かっていたのかもしれませんが。あまりきれいなまとめにはなっていないと自己嫌悪に陥っていますが、この辺でほぼ時間になりましたので、桜井先生に返そうと思います。

ご登壇していただきました5名の先生方と質問を寄せてくださいました聴衆の皆さんに感謝申し上げます。何かの参考になる部分が多少なりともあったのであれば幸いです。ありがとうございました。

**【桜井・司会】** 林先生，どうもありがとうございました。それではちょうど17時になりますので，以上で全体会を終了したいと思います。ご登壇していただいた先生方，それから司会の先生，どうもありがとうございました。■

「見過ごされがちな高大接続課題：  
不本意入学， ミスマッチ入学， 学力不足」

司 会： 竹内 正興（香川大学 アドミッションセンター長）  
山地 弘起（大学入試センター 試験・研究統括官）

趣旨説明	全入時代の高大接続で表立って語られない重要課題 .....	91
	山地 弘起（大学入試センター 試験・研究統括官）	
報告①	置き去りにされてきた大学進学者たち .....	98
	朝比奈 なを（元高校教員， 教育ジャーナリスト）	
報告②	ミスマッチ入学の実態と， 高・大に求められる改善策 .....	108
	倉部 史記（追手門学院大学客員教授， 高大共創コーディネーター）	
報告③	農業高校に入学してきた学力不足・不本意入学者を， 四大には本意入学者へ変えていく取組み .....	124
	宮田 晃宏（熊本県立鹿本農業高等学校 進路指導部長）	
報告④	学生の成長を最優先する大学へ： 入学前教育， 自校教育， 初年次教育の包括的な取組み .....	141
	杉森 公一（北陸大学 高等教育推進センター長， 教授， 教務部長）	
全体討論	.....	157

---

内 容：

近年，大学教育改革や高校教育改革が精力的に進められてきたが，その一方で高校間格差，大学間格差は厳然として存在し続けており，しかも社会経済的背景による進路格差は増大しつつある。少子化が急速に進行し，異次元の子ども支援策が矢継ぎ早に打ち出される中，「置き去りにされた高校生たち」（朝比奈，2019）の課題はなお十分顧みられることがない。学生の多様化がいわれて久しいが，全入時代の高大接続における個別最適化は，学生自身のキャリア形成に資するだけでなく人材育成・人材確保の観点からも大幅に進展させることが必要ではないだろうか。

上記の問題意識に立って，本シンポジウムでは，学生の不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足に焦点を当て，こうした課題に長く取り組んでこられた専門家からの問題提起と高

校・大学の現場からの実践報告を行う。それらをふまえたパネルディスカッションを通して、高大接続の現状を問い直し、社会的・制度的に疎外されがちな若者に対してよりインクルーシブなケアを提供できる高大接続のあり方を探りたい。

## 全体会 2 ○ 趣旨説明

## 全入時代の高大接続で表立って語られない重要課題

## ■ 山地 弘起 (大学入試センター 試験・研究統括官)

【山地・司会】 皆さん、おはようございます。大学入試センターの山地弘起です。平日の朝、午前中ではありますが、この全体会 2 にご参加いただき、誠にありがとうございます。

令和6年度(第19回)  
全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会  
全体会2 令和6年5月24日(金) 10:00~12:30

西洋医学・経済学×SDGs  
学生の成長No.1  
マネジメント力を身につける  
確かな語学力で異文化理解

朝比奈なを著  
「教育困難校」  
加進する高校改革の中で  
置き去りにされた高校生たち

大学入試改革対応!  
ミスマッチをなくす  
進路指導  
倉部史記著

熊本県立  
菊池農業高等学校

司会: 竹内 正興(香川大学・アドミッションセンター長)  
山地 弘起(大学入試センター・試験・研究統括官)  
報告: 朝比奈なを(元高校教員, 教育ジャーナリスト)  
報告: 倉部 史記(追手門学院大学客員教授, 高大共創コーディネーター)  
報告: 宮田 晃宏(熊本県立鹿本農業高等学校・進路指導部長)  
報告: 杉森 公一(北陸大学・高等教育推進センター長, 教授, 教務部長)

本セッションは、今、共有画面でお示ししていますように、「見過ごされがちな高大接続課題」というものをテーマとしています。

考えてみますと、約 5,000 ある高校、それから 800 ほどある大学、そして毎年 60 数万人の四大進学者がいるという中で、標準的な高校生や大学生をイメージして、高大接続を議論するというのは、時には空虚なものになりがちです。実際には高校間の格差や、大学間の格差は厳然として存在し続けていますし、しかも社会経済的背景による進路格差は増大しつつあるという状況です。すでに全入時代と言われていますが、この全入時代には義務教育段階のつまずきをクリアできないまま、大学に入ってくるという学生もいるわけです。

そうしたことで、今回このようなテーマを設定させていただき、4 人の登壇者をお招きしました。最初に朝比奈なを先生です。朝比奈先生は、公立高校の地歴・公民科の教諭として約 20 年間勤務された後に、教育相談や大学教育に携わる一方で、教育ジャーナリストとして、特に教育困難校の取材・発信を広くなさっておられます。ご著書は幾つもあるのですが、ここでは今回のテーマに直結するものとして、『置き去りにされた高校生たち』をお示し

## 全体会2

ています。それでは朝比奈先生、ごあいさつをお願いします。

**【朝比奈】** 皆さん、おはようございます。朝比奈です。本日はよろしくお願いします。

**【山地・司会】** ありがとうございます。続きまして、倉部史記先生です。倉部先生は私立大学の職員、それから予備校の研究所での研究員等をなさった後で、「高大共創」のアプローチで高校生の進路開発に取り組んでおられます。現在、追手門学院大学ほかの客員教授もなさっています。ご著書のうち、やはり今回のテーマに直結するものとして、『ミスマッチをなくす進路指導』をお示ししています。倉部先生、ごあいさつをお願いします。

**【倉部】** 倉部です。今日はよろしくお願いします。

**【山地・司会】** よろしく申し上げます。後半は現場での実践をされておられるお二方です。まず宮田晃宏先生です。宮田先生は地歴公民の専修免許もお持ちということなのですが、熊本県で長く農業教育に携わってこられ、現在は、県立鹿本農業高等学校で進路指導部長をなさっています。今、お示ししているものでは県立菊池農業高等学校となっていますが、本日のご報告は、「心の幹」と書いて、「心幹」を育む「書かせる教育」のご実践について、この菊池農業高校におられた時の実践を紹介していただくことになっています。宮田先生、ごあいさつをお願いします。

**【宮田】** 宮田です。本日はよろしくお願いします。

**【山地・司会】** よろしく申し上げます。そして最後に杉森公一先生です。杉森先生はもともと化学がご専門と伺っていて、しかも、かつて高校教員を志しておられたということなのですが、石川県の金城大学、金沢大学を経て、現在は北陸大学の高等教育推進センター長、また教務部長もなさっています。本日はこの北陸大学のビジョン、「学生の成長力 No.1」に向けた包括的な学修支援について、ご紹介いただきます。杉森先生、ごあいさつをお願いします。

**【杉森】** 北陸大学の杉森です。よろしくお願いします。

**【山地・司会】** よろしく申し上げます。ちなみに杉森先生にご登壇をお願いしたのが、能登半島地震からあまり日を置かない時期だったかと思いますが、今現在、影響はいかがですか。

**【杉森】** しばらくは能登出身学生の安否確認がすごく大変でした。現在は安否確認が取れ、生命等は安全だということは確認していますが、職員、教員も含め、ご家族、ご実家が大変な状況にあるということは続いています。また大学コンソーシアム石川でも、1月より能登

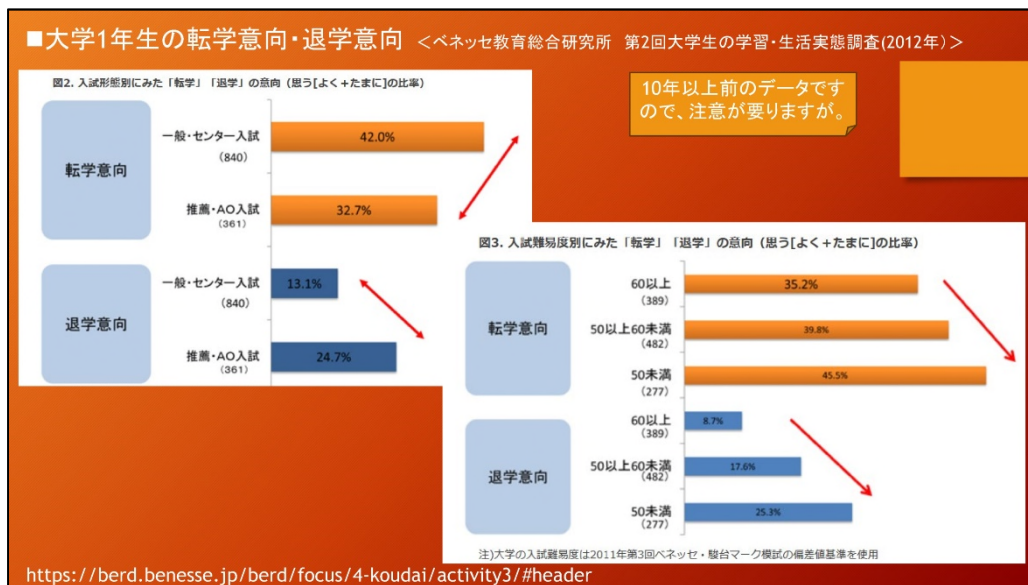
の緊急支援セミナーを開催して、各地の情報発信をしています。私は大学コンソーシアム石川のFD/SDの部会長としても、役割を担っていますので、できましたら、そちらにも目を向けていただけたらと願っています。

【山地・司会】 そのような中でご登壇いただき、本当にありがとうございます。ひょっとすると、本セッションにも能登半島地震で被害に遭われた方、影響を受けた方がご参加くださっているかもしれません。復旧がまだ十分でないという報道もありますし、仮設住宅の完成にまだ時間がかかるというところもあるようですので、心からお見舞いを申し上げますとともに、今回、ご参加くださったことに感謝申し上げます。杉森先生、ありがとうございます。

そして最後に、私と一緒に今回、司会を担当する香川大学アドミッションセンター長の竹内正興先生です。竹内先生は、不本意入学に関する研究もなさっているということでしたので、本日のモデレーターには適任であると考え、お願いした次第です。竹内先生、ごあいさつをお願いします。

【竹内】 おはようございます。香川大学の竹内です。本日、後半の全体討論の進行を担当させていただきます。よろしくお願いします。

【山地・司会】 以上の布陣で、本日の全体会 2 を進めてまいりたいと思っています。

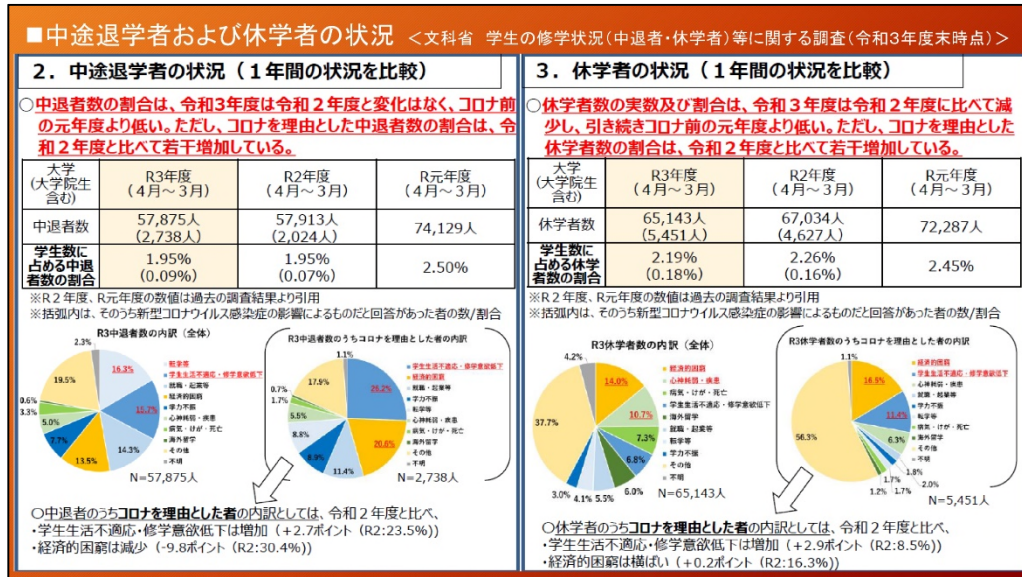


それではここからは、簡単に私から趣旨説明をさせていただきます。まずこの図をご覧ください。これは少し前の2012年の調査データですが、大学1年生に転学意向や退学意向を聞いてみたというものです。恐らく現在もあまり変わっていないだろうと思われま

す。比率を見ますと、大学1年生の段階では数十%の人たちが転学意向を持っています。それよりも比率は低くなりますが、退学意向も持っているということで、左上の図を見ますと、推薦・AO入試で入ってきた場合では転学意向は少ないのですが、退学意向のほうはむしろ

一般入試よりも多くなっているという傾向がうかがわれます。

それから右下です。これは入試難易度別に見たものです。入試難易度が高いほど、転学意向、退学意向は低いのですが、この入試難易度の易しい方向に行くにつれて、この意向が高まっていくということで、これまた数十%のほうに向いていくということです。大学によって、このような傾向というのはかなり違うということが想像されるわけです。



もう1つの図をご覧ください。これは昨年、文科省が出した「中途退学者および休学者の状況」という調査結果です。もちろん中途退学あるいは休学にはポジティブな理由もあり、例えば留学であるとか、あるいはいったん長期的に働いてみるとかといったこともあるのですが、多くの場合には、やはり学業を続けるのが難しくなったという理由が表れてきます。

例えばこちらは中退者の理由を示している図ですが、左側をご覧くださいと、転学等というのが比較的多く16%となります。これは制度的な転学というものもあるでしょうし、あるいは非制度的という意味では、日本の特有の現象と言われる仮面浪人、これにより他の大学に再入学するというものも入っているかと思えます。

ただ、このすぐ次にある15.7%というのは学生生活不適應・修学意欲低下、次に多い就職・起業等はポジティブな方と考えることもできるかと思えます。次に経済的困窮が続きます。右側にはコロナを理由とした者において調べたものですが、ここでは学生生活の不適應や修学意欲の低下、経済的困窮が約半数を占めてくるのが分かります。

実際には調査によって、どのような理由で中退していくかということは若干違うわけです。例えば労働政策研究・研修機構が行っている調査では、学業不振あるいは意欲低下といったものが主たる原因として出てきます。これは調査によって違うのですが、いずれにしても不適應とか、無関心とか、修学意欲の問題というのは無視できない要因として挙がってきます。

こうしたことから考えますと、冒頭で触れましたように、大学、専門、入試区分によって、先ほどの数値もだいたい変わってくるということがあります。高校も大学も極めて多様化しているという状況で、全入時代の大学入学者というのは、学力や適性、能力、関心などにお



いて誠にさまざまであるということです。現在のところ、異次元の子ども支援策が矢継ぎ早に出てくるのですが、これはいわば高等教育へのアクセスのハードルを低くするということになります。実際にはその内側にいる高校生・大学生の学習意欲や学力などについては、手つかずのままになっていないかということです。これが朝比奈先生の表現されている「置き去りにされた高校生たち」が「置き去りにされた大学生たち」になっていないかということです。

**少子化が急速に進行し、異次元の子ども支援策が矢継ぎ早に打ち出される中、「置き去りにされた高校生たち」(朝比奈, 2019)の課題はなお十分顧みられることがない**

■用語の確認:

不本意入学……偏差値による大学序列化が主たる要因  
学力高位～中位層の高校生にみられる

ミスマッチ入学……進学実績重視の高校, 安全志向の保護者・生徒意識が主たる要因  
どの学力層の高校生にもみられる

学力不足……進学率上昇, 入試の多様化(1990年代～), 少子化・全入化に加え,  
修学支援新制度(2020年～)等が背景

(参考) 私大入学定員502,635, 私大入学者数500,599, 充足率99.59%, 定員割れ大学320(53.3%)  
<日本私立学校振興・共済事業団 令和5(2023)年度 私立大学・短期大学等 入学志願動向>

■課題意識:

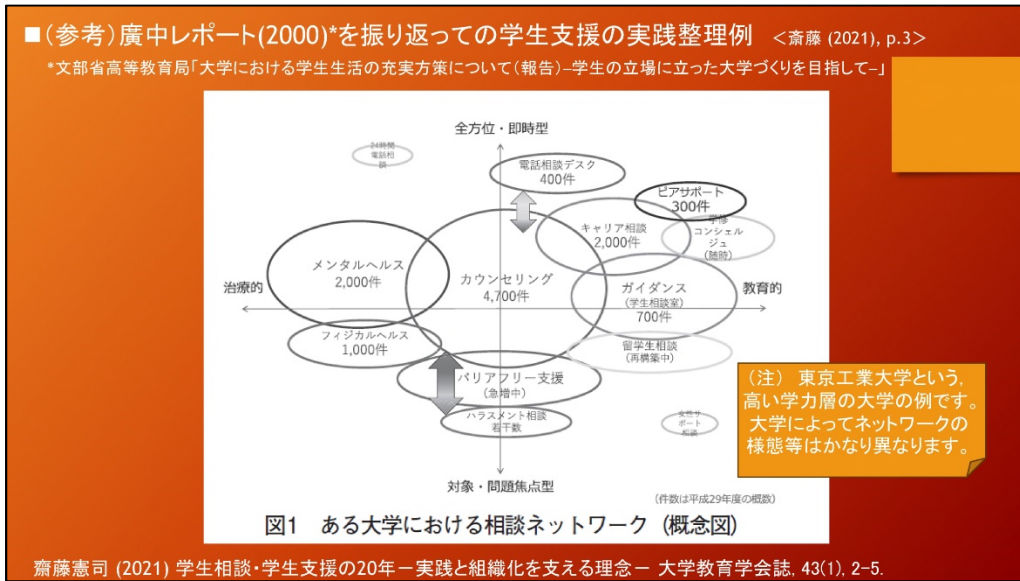
全入時代の高大接続における個別最適化は、学生自身のキャリア形成に資するだけでなく  
人材育成・人材確保の観点からも大幅に進展させることが必要では?

ここで用語の確認なのですが、今回、テーマに副題として挙げています不本意入学、ミスマッチ入学、学力不足です。不本意入学というのは、多くは学力の高位から中位層に見られるものと言ってよいかと思います。偏差値によって大学が序列化されているために、多くの場合は第1希望に行けなかったということで、不本意ながら別の大学に入っているというケースです。

それからミスマッチ入学ですが、これはどの学力層にも見られるでしょう。これは進学実績重視の高校で行われる進学指導とか、それから安全志向の保護者・生徒意識といったものが主たる要因になるであろうと思われます。

学力不足ですが、これは先ほどの不本意入学、ミスマッチ入学とは少し概念レベルが違うのですが、ユニバーサル化した高等教育の中では、これはもうある意味では必然的に表れてくる問題であります。背景にあるのは進学率の上昇、入試の多様化、あるいは少子化・全入化に加えて、2020年から始まっています修学支援の新制度等があると考えられます。

ここで、ご参考で示していますのは、日本私立学校振興・共済事業団の令和5年度の入学志願動向の調査で、今や定員充足率が99.59%ということで100%を切っており、事実上全入ということが確認できます。令和5年度につきましては、定員割れ大学が320、全体の半分を超えていたという状況です。



そのように極めて多様化した高大接続の在り方ということを考えますと、課題意識に示しましたとおり、こうした全入時代の高大接続における個別最適化、学生それぞれに対するケアというものは、学生自身のキャリア形成に資するだけでなく、現在、よく話題になりますが、人材育成・人材確保の観点からも大幅に進展させることが必要ではないだろうかと考えた次第です。

このようなことをお伝えしますと、ご参加の方々はひょっとすると 2000 年の廣中レポートを思い出す方もおられるのではないのでしょうか。そこでは、大学の重点は多様な学生に対するきめ細かな教育指導に置かれるべきということ、「学生の立場に立った大学づくりを目指して」ということがこの提言の副題になっていました。

これは教育相談体制の充実に向かう契機ともなりました。今、お示ししているのは、これは数年前に大学教育学会で、廣中レポートの 20 周年と言いますか、20 年後に改めてこのレポートの意義を振り返ったセッションが持たれた際の資料の一部です。その時に基調講演をされた東工大の齋藤憲司先生は学生相談学会の元理事長で、東工大の学生相談をずっと続けておられる方ですが、「相談ネットワーク」というものがやはり必要であって、東工大の場合には、このような相談ネットワークがあるということでした。これはかなり広範囲にわたって、メンタルヘルスであるとか、ガイダンスであるとか、留学生相談、バリアフリー、電話相談、ピアサポート等々といった学内外のリソースをうまくつなげながら、まさに個別最適化に向けたケアを行っていくという試みを示しておられました。

もちろん、これは東京工業大学という極めて高い学力層の大学の例でありますので、大学によってこのネットワークの様態等はかなり異なると思われる。このためにはかなりお金も人も手当てしなければいけないということがありますから、そのようなリソースが十分でないところはこのようなネットワークをなかなか整備できません。

それから東工大の場合には前面に出てきませんが、やはり学修支援です。学力が不足していて、学修をサポートしなければいけないということが重点化されている大学もあるでしょう。あるいは、転部・編入学等の制度的な堅さを何らかの形で工夫して、もう少し柔軟

にしたいというところもあるかもしれません。そういったことで、大学によって求められるネットワークの様態はかなり違って来るであろうと思われます。

先ほどの廣中レポートはその後、2018年のグランドデザイン答申であるとか、それを踏まえた教学マネジメント指針等につながっていて、現在の学修者本位の教育への転換というところにつながっていると考えることができるかと思います。

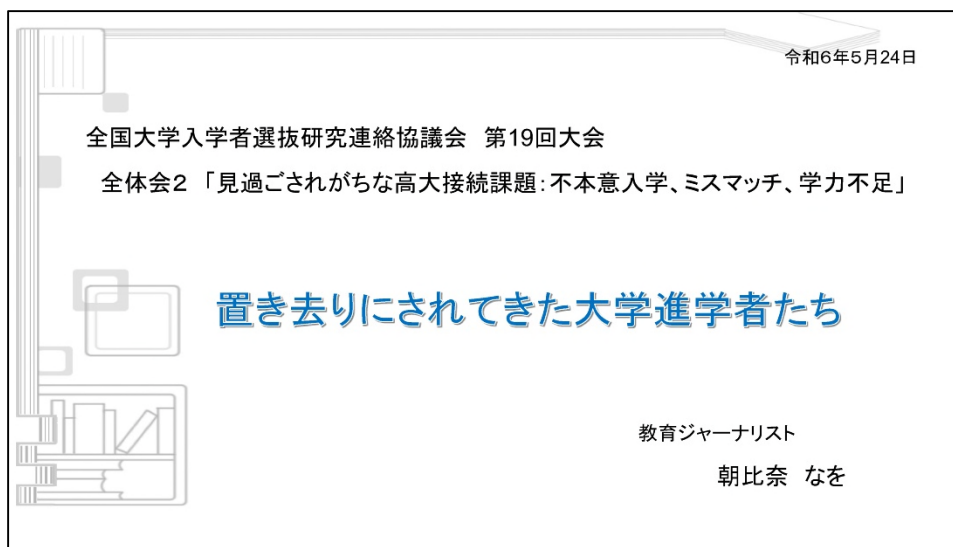
以上を踏まえまして、この全大会では社会的・制度的に疎外されがちな若者に対して、若干オーバーな印象を持たれるかもしれませんが、大学によってはこうしたことが極めて重要な課題となっていますので、よりインクルーシブな、置き去りにしない働きかけや支援、つまりケアを提供できる高大接続の在り方を探りたいと考えています。

それでは朝比奈先生、ご報告をお願いします。■

## 全体会 2 ○ 報告 1

# 置き去りにされてきた大学進学者たち

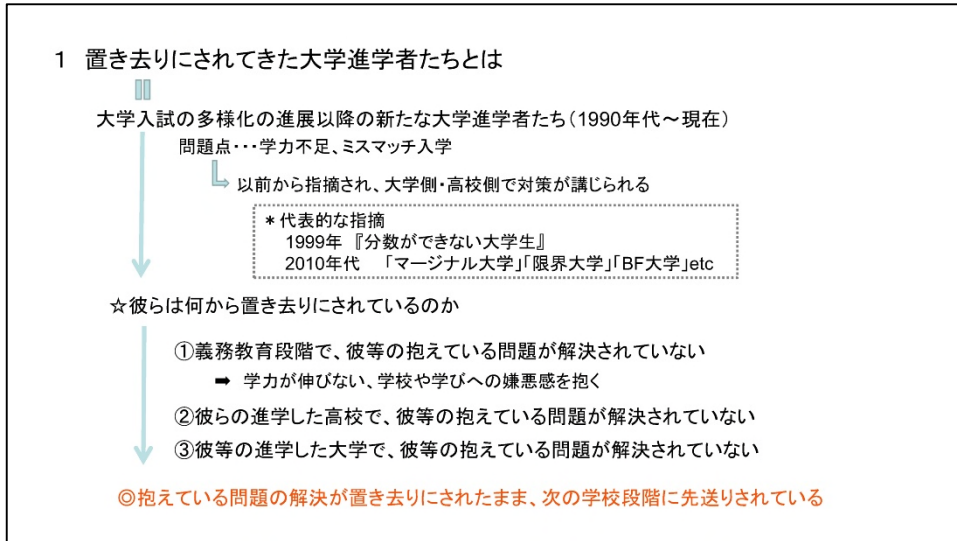
■ 朝比奈 なを (元高校教員, 教育ジャーナリスト)



先ほど、山地先生から非常に詳しい紹介をしていただきましたが、改めて簡単な自己紹介をさせていただきます。私はもともと、公立高校の教員でした。公立高校には転勤がありますので、それを通して同じ高校と言っても、生徒の学力により、あらゆる面で大きな差が存在することに気付き愕然としました。

そしてその後、早期退職し、入試選抜性の高くない大学で、初年次教育を、そしてある自治体の教育支援センターで教育相談などを担当しながら、特に困難を抱えている高校生の実態、その進路について執筆や講演活動を行っています。

その活動の1つである『置き去りにされた高校生たち』が山地先生のお目に留まり、そして今回、発表の機会を頂くことになりました。本日の私の発表は「置き去りにされてきた大学進学者たち」です。それでは発表の内容に移らせていただきます。



「置き去りにされてきた」という表現はどのような人たちのことかと言いますと、大学入試多様化の進展以降の新たな大学進学者たちであると私は考えています。彼らが大学入学後に抱く問題点としては、特に学力不足とミスマッチ入学であると思っています。これらに対しては大学入試多様化が始まった90年代以降から気付かれていて、そして対策が練られていると見ることもできます。代表的な指摘についてはそこに書いてあります。

ちなみに私は2010年代に『高大接続の“現実”』という本を出しており、新たな層の大学進学者たちの実態を世に問うてきました。そのようなことをやってきたのですが、今回、この大会で学力不足などが改めて取り上げられているということは、この問題が未だに解決されていないということの証明になると思います。では彼らは何から置き去りにされているのでしょうか。スライドをご覧ください。

彼らが抱えている問題が義務教育での学びをつまずかせます。そしてそのつまずきが学びや学校への嫌悪感を生み出してしまうということが多くあります。そして彼らの問題は解決されないまま、②、③に先送りにされていきます。つまり抱えている問題の解決が置き去りにされたまま、次の学校段階に先送りされているという状態なのです。このスライドには書いていませんが、彼らは社会の関心からも置き去りにされていると、私は長年思います。

表1 近年の大学進学率・・・新たな大学進学者はどのような学校から来るのか

	全卒業生数	進学率	全日制・定時制					通信制
			普通科	専門	総合	中等教育	特別支援	
2018年3月卒業生	1056378人	54.7	63.8	28.4	35.9	75.5	2.0	18.5
2019年3月卒業生	1050559人	54.7	63.9	27.9	34.4	77.6	1.7	18.0
2020年3月卒業生	1037284人	55.8	65.3	28.3	34.9	79.8	1.7	17.6
2021年3月卒業生	1012007人	57.4	66.9	30.0	35.6	82.0	1.9	19.5
2022年3月卒業生	990230人	59.5	69.0	32.0	38.8	82.4	1.9	23.1
2023年3月卒業生	962009人	60.8	70.3	33.1	39.5	81.6	1.7	24.1

(数値は%)

生徒数増減 (2023-2018)	▽94369	▽65901	▽24134	▽4334	▽239	▽634	△23074
----------------------	--------	--------	--------	-------	------	------	--------

(数値は人数 ▽は減、△は増)

学生支援機構の給付型奨学金  
(2020年4月～)

(文部科学省 学校基本調査各年度より作成)

\* 学生支援機構の給付型奨学金制度が新たな大学進学者を生んでいる  
\* 高校生数が減少しているが、通信制高校の生徒数は増加し、大学進学率も増加

ではここで近年の大学進学の様子を見てみます。表 1 をご覧ください。2018 年から 2023 年の高校卒業生数と大学進学率を示すデータです。大学進学率の右側の横軸には、高校の種類を書きました。この全ての高校から現在、大学進学が可能になっているわけです。

この他に大学に進学する方法として、高等学校卒業程度認定試験があります。こちらは近年、毎回 8,500 人前後が受けているということですが、今回はこちらに関しては省略させていただきます。

またこの表にはありませんが、日本の大学進学率を概観しますと、多様な入試方法が導入され始める 1990 年には 24.6%、そして分数が分からない大学生が指摘され始めた頃の 2000 年には 39.7%、そしてマージナル大学などが話題となった頃の 2010 年には 50.9%です。2010 年から数年間は微減の年もありましたが、2015 年からは再び上昇するもその上昇率は鈍くなっています。この表は 2018 年からになっていますが、進学率を見ていただきますと、やはり上昇しているということが分かると思います。

私は 2010 年代に、ある大学教員から聞いた言葉が非常に印象に残っています。少し過激な言葉なのかもしれませんが、学生募集を担当していたその大学教員は、当時、「地引網で海底にいる魚を集めて、大学を受験させているような感じがする」と私に嘆いたのです。その教員はすでにもう退職されていますが、その方から見れば、近年は海底に潜り込んでいる魚を掘り起こして受験させているとも言えるような状況かもしれません。

冗談のような話はさておいて、表 1 を見る時に注意していただきたい点は次の諸点です。まず右側に緑色でお示したとおり、日本学生支援機構の給付型奨学金の新設が大きな影響力を持つと思われます。実際にこの進学率の表などを見ますと、進学率に、この給付型奨学金の新設がさほど大きな変化を与えていないように思われるかもしれませんが、それは高校の内部を知っている私から見ると、ちょうどコロナ禍に重なって、情報が保護者や生徒に伝わりにくかったという理由があります。現在、じわじわと認知度が上がっていますので、この大学進学率の上昇率はさらに加速するのではないかと予測できます。

それから 2 点目ですが、大学進学率の増加は 2020 年 4 月で、このラインから給付型奨学金の新設が関わってくるわけですが、全日制、定時制の中で、普通科、専門学科、総合学科、それぞれの進学率が上昇しているという点です。当然だろうと思われる方が多いかもしれませんが、専門学科や総合学科では、職業教育も行われているため、国語などの教科の内容、授業の実施時間数も普通科とかなり異なります。また普通科についても留意するべき点があります。こちらでも私は 2022 年に『進路格差』という新書を出しており、高校生の学力グループ別の進路を検証しています。そして学力が標準以上、俗に偏差値 50 が標準とされますが、それ以上の生徒が通う普通科高校では、すでに 2010 年代に進学率 100%の状態になっているということが分かりました。

そうなるそれ以降の大学進学率の増加分は、学力が標準以下の高校生たちと推測できます。高校でも多様な学びをしている人たち、そして新たに学力が低い層の人たちが入っているということは、もう当然気付かれていることだと思いますが、彼らを迎える大学側はこれらの点を十分に知っておいてほしいと考えています。

そして最も注意すべきは、この一番右側の通信制なのです。表 1 で大学進学率の上昇は明

らかですが、さらに表1のこの下の部分をご覧ください。こちらは、2023年と2018年の卒業生数を比べた物です。全卒業生数も、通信制以外の全ての区分でも減少しているのに、通信制だけは人数も増加しています。通信制は最近では私立の広域通信制高校が主流なのですが、毎日学校に行く習慣が付いていない生徒が、大学進学で増加しているということを大学の関係者の方々にぜひ知っておいていただきたいです。このスライドのまとめになりますが、右の下のほうにありますので、また後でぜひご覧ください。

**2 新たな大学進学者の実像・・・最大の問題点は「学力の3要素」が十分に備わっていないこと**

☆何が学力不足の原因か

ア. 不登校経験者・・・10年連続で増加。在学児童・生徒に占める割合(小 1.7%、中 6.0%、高校 2.0%)  
小学校 105112人、中学校 193936人、高校 60575人(令和4年 文部科学省発表)

イ. 本人が病気の者・・・病気による長期欠席者の増加  
小学校 31955人、中学校 43642人、高校 30976人(同)・・・いずれも前年より増

ウ. 家庭の問題がある者・・・経済的困窮、ヤングケアラー、不安定な人間関係etc

エ. 先天的な特性、障がいがある者・・・発達障がいの認知度の高まりが増加の背景に  
通級指導を受けている児童・生徒 約18万4千人(令和3年、文部科学省)  
通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒 小中 約8.8%(同省試算)

オ. 外国につながる児童・生徒・・・日本語教育の必要性が高まる  
日本語指導を必要とする児童・生徒 約5万8千人(令和3年、文部科学省)

カ. 勉強以外のことに集中してきた者・・・スポーツ、芸術etc

☆原因が複数、相互に関連するケースも多い・・・不登校の裏に他の原因が存在する可能性

☆対策は講じられているが、現状では不十分・・・地域、自治体の格差が大きい、指導の専門家不足etc

それでは、先ほど新たな大学進学者たちが問題を抱えて、それが解決されていないと言いましたが、簡単にお話をしたいと思います。その最大の問題点は、「学力の3要素」が十分に備わっていないことです。

学力の3要素が十分に備わっていないということは、学力不足と言い換えることもできますが、それはなぜなのかという原因をこのスライドでは併記しています。

一つ一つが非常に重要なのですが、まず不登校経験者があります。そこに細かい数値が出ていますが、実態はこの数値以上に深刻です。統計上、不登校は年間30日以上欠席者となっています。しかし現実には、教室に入れず、校内の別の場所において、放課後に担任に会いさつをするだけでも登校とされているのです。そのため、この統計上の数値以上に、学校で授業に参加できていない児童・生徒は存在していると考えています。

次にイです。本人が病気の者です。これも増加しているのですが、特に最近では中高生にメンタルの病気が増えています。例えば起立性調節障害です。これは大学生にも多いはずですが、小学生のうちに診断されて病欠となり続けているという生徒もいます。

次のウ、家庭の問題がある者です。経済的困窮、ヤングケアラーは、最近ずっと話題になっています。不安定な人間関係というのは、DVやネグレクトが代表的です。

次に先天的な特性、障害がある者です。この中で発達障害は、認知度が高まりどんどん増加しています。発達障害の場合、通級指導というものを受けている生徒が多いのですが、こちらも非常に増加しています。

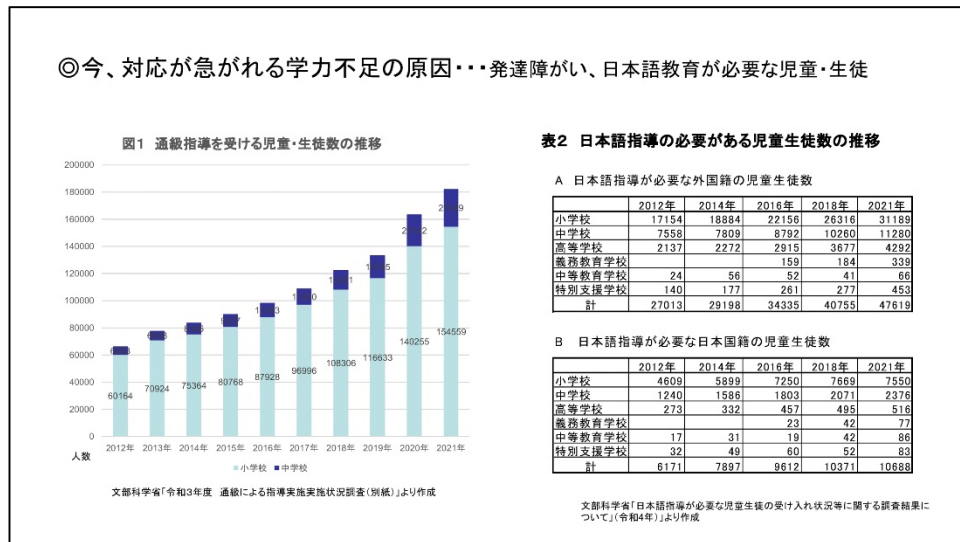
その次にオ、外国につながる児童・生徒です。「日本語教育の必要性が高まる」とあります。この日本語教育の必要性と先の先天的な特性、障害がある生徒については、次に少しお

話をしたいと思いますので、ここでは省略します。

そして最後が勉強以外のことに集中してきた者です。こちらはスポーツや芸術などに集中してきた生徒です。

このスライドでは、学力不足の原因を併記して書いていますが、複数の原因が相互に関連している場合が多いです。例えば外国につながる児童・生徒で、発達障害の特性を持つなどのケースには、2つの原因への対策が必要となります。特に不登校となる子どもたちの背景を探ると、虐めなどによって不登校になることが多いと思われるかもしれませんが、よく探してみると、他の原因が存在する可能性が高いです。これは私の体験上から言えることとなります。

もちろんこの学力不足の原因に対しては、さまざまな対策が行われています。とはいえ、結局、地域・自治体の格差が大きいと思われます。これは地域・自治体の意欲や経済力の問題などが関わってきます。そして指導の専門家が不足するなどの状況で、なかなか十分な成果が上げられていないのが実情なのです。



先ほど挙げた 5 つのさまざまな原因があるわけですが、先の複数の原因の中で、私が注目しているのはこのスライドの 2 点です。左側の図 1 「通級指導を受ける児童・生徒数の推移」です。通級指導とは、先ほど簡単に言いましたが、これは通常の教室と異なる別の場で、主にソーシャルスキルトレーニングの指導を受けている生徒たちになります。

実は高校も 2018 年度から通級を置くことが制度化されていますが、まだ拡大には至っていません。そこで推移を見るために、ここでは小学校、中学校の物だけにしています。この簡単なグラフの細かい数字は省略するとして、一気に急増しているということが読み取れます。

そして表 2、こちらは「日本語指導の必要がある児童生徒数の推移」ですが、こちらに関しては、地域によって対応が非常に進んでいます。先進的な地域もあります。また、現在の時点では、この日本語指導の必要性の高さが、これも地域によって非常に異なっています。しかし今後は外国人労働者の受け入れが拡大されるでしょうから、そうすると必要性の高まりは必定となります。



この2点はどちらも今、喫緊の課題なのですが、その一方で、どちらも教育関係者の努力で何とかなる問題と言うこともできます。継続的な指導が必要でもありますので、大学も含めた教育関係者が協力していく対応が今後、望まれていくと思います。

### 3 新しい大学進学者たちの高校生活

○日本の高校進学率 約99%    ⇨    ○高校入試は、各地域での選抜性が高い

↓

○学力が十分でない生徒は、受験偏差値の低い高校に進学  
○不登校経験者は、私立広域通信制高校への進学者が増加

○高校側の対策

- ◎目標としていること
- ・基礎学力の向上と定着
- ・自己肯定感の向上
- ・基本的な生活習慣の獲得と定着
- ・主体的に考え、行動する姿勢の確立
- ・社会への興味・関心を高める
- ・コミュニケーション能力の育成

↓

成果は不十分

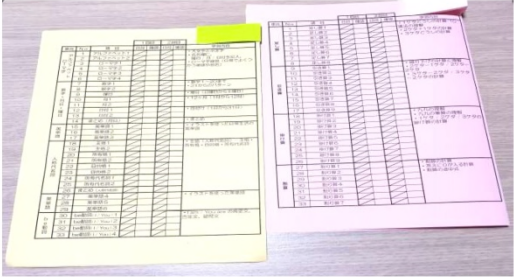


図2 基礎学力向上のために高校で使用されている教材

そこで、新しい大学進学者たち、つまり今日の私の発表の中心である、「置き去りにされた大学進学者たち」の高校生活の特徴を見ていきたいと思います。日本では高校は義務教育化しており、どのような問題を抱えている中学生も必ずと言っていいほど高校に進学しています。しかし高校入試は各地域での選抜性が非常に高いので、結果としてこのスライドにあるようなこういう高校に進学していくようになるのです。

彼らを受け入れている高校も、当然彼らの学力を伸ばすべく努力しています。高校側は大體スライドにあるようなことを目標として、非常に熱心に対策を練っています。その対策の中で、最も重要視されているのは、やはり何といたっても基礎学力の向上と定着なのです。

ここで基礎学力の向上と定着を言うこと自体、高校としてはある意味、恥ずかしいことなのかもしれませんが、最近では自校の社会的存在意義を考えた高校が覚悟を決めて、小学校からの学び直しを学校の目標として掲げているという高校もあります。

そのような高校は、全国にたくさんあるのですが、その高校の1つで実際に現在使用されている教材がこの図2の写真なのです。参加者の方々はどうぞ後で拡大して詳しく見ていただければと思います。左側の黄色は英語の学習内容のスケジュールで、この最初には「アルファベット、ローマ文字」と書いてあります。

右のピンクの教材は、数学です。数学の最初は「足し算」と書いてあります。「生徒は1つの項目の練習問題をやって、指導員のチェックを受けます。内容の理解が十分でないときには、同じ作業を繰り返し何度も行います。学力不足の高校生たちが通っている高校では、このような学びが現在行われているのです。

実はこの図2に示しましたこの教材を使っている高校の卒業生を、私は大学で何人も教えています。私が今、皆さんにお見せしているスライドは非常にシンプルです。これは私の作成スキルが高くないということもあるのですが、自分が教えている学生、あるいは話をする時の高校生を意識して、シンプルさを心掛けているということでもあるのです。

私が接する学生たちは、発達などの障害を持つ者がかなりいます。そういう特性を持つような彼らの中には、脳と目の動きが連動しないということから、例えば動画とか、あるいは急に出てくるイラストに反応できない、見るのが苦手という子もいます。それから多くの色が使われていると文字が埋没してしまうという子たちもいます。

そしてダブルタスク、トリプルタスクができないなどのさまざまな特性を持っています。図 2 のプリントも非常にシンプルではないですか。このような学力不足に取り組んでいる高校では、シンプルで分かりやすい教材や指導を心掛けています。

左側の「目標としていること」を見ていただきますと、主体的に考え、「行動する姿勢の確立」、「社会への関心」、「コミュニケーション」など、多岐にわたっていることが分かります。しかし高校が一生懸命努力をしても、どうしても成果は不十分です。「9年間の積み残しを3年だけで全てカバーをすることは無理」と、このような生徒たちを指導している教員や学習支援員からしばしば耳にすることがあります。

#### 4 新たな大学進学者たちが大学に求めるもの・・・取材から読み取れること

**1) 大学進学目的**  
「就職」が圧倒的の第1位・・・「大学に行かないと就職できない」との生徒・保護者の思い

**2) 選択する選抜方法と受験準備**

i) 選抜方法

- ・学力検査を回避
- ・学校推薦型、中でも指定校推薦を希望する者が多い
- ・「聞いたことのある」大学を志望

ii) 受験準備

- ・受験参考書・問題集は不使用。全国模試の受験経験なし
- ・教員主導での文章指導、面接指導が中心
- ・自主的な学習習慣を身に付けていない

**3) 大学で身につけたい能力**

- ・学力、知識、社会人のマナー、コミュニケーション能力等多岐

**4) 大学生活への不安**

- ・学力への不安が最大

\*参考 大学新入生の意識

	2012年	2024年
大学進学目的		
就職のため	57.5	61.8
学修のため	20.0	33.8
受験準備		
特になし	45.0	33.8
面接指導	17.5	43.8
文章指導	18.0	15.0
大学生活の不安		
学力・学修	33.8	63.0

(数値は%)

・2012年5月 筆者担当の初年度教育講演受講者80名に実施  
・2024年4月 筆者及び協力者の初年度入学受講者80名に実施  
・両年度とも、受験の選抜性の高い大学で実施

進学の目的や受験準備等の傾向は、以前とほとんど変化がないのでは・・・

それでは今、お話ししたような高校生たちが大学に進学する時に、大学に求めるものは何なのかということをお話を進めます。こちらは取材から読み取れることをまとめてみました。

まず大学進学目的ですが、こちらは就職が圧倒的な1位です。実際には近年は高卒の求人倍率が非常に高いのですが、大学に行かないと就職ができないとの強迫観念にも近いものを生徒や保護者から感じます。

では、彼らが考える就職は何なのかと言いますと、それはまともな会社で、ホワイトカラー的な仕事に就くことを意味しているようなのです。そういう就職を目的として、大学進学をします。その時に選択する選抜方法と受験準備に関しては、スライドに書いてありますので、ご覧ください。

「指定校推薦を希望する者が多い」とあるのですが、その理由は合格の可能性が一番高いということなのです。今は学校推薦型、総合型なども合格の可能性が高い大学が多いと思うのですが、指定校推薦が合格の可能性が一番高いという思い込みがあるので、希望する者が多い

ようです。

そして次に、「『聞いたことのある』大学」と書いてあります。「聞いたことのある」大学というのは、いわゆる大学の知名度とイコールではないのです。生徒も保護者も大学受験の情報を積極的に集めるというタイプではありません。それよりも彼らの限られたコミュニティや人間関係の中で聞いたことがあるというものです。

例えば「知り合いのお兄ちゃんが行った」とか、「先輩が行った」という大学を選んで行くというのが、この「『聞いたことのある』大学を志望する」という特徴になります。

それから受験準備に関してもご覧ください。一般の学力試験を受けて、大学入試をクリアしてきた者からみれば、とても信じられないような受験準備を行っています。それから大学で身に付けたい能力は、スライドにあるように非常に多岐にわたります。

そして大学生活への不安は、学力への不安が最大になっています。右側に「参考」と書きましたが、こちらを見ていただければと思います。私は 2010 年代から、入試の選抜性が高くない大学の初年次教育を担当しているのですが、毎年新入生にこれまでの学習についての簡単なアンケートを行っています。2012 年と 2024 年はどちらも入学の選抜性が高くない大学で実施しました。進学の実質は就職で変わりません。受験準備に関しては、2024 年は面接指導を受けたとの回答が多くなりました。これは高校が新しいタイプの選抜方法に対して、組織的に面接指導を行うようになってきたことの表れだと思っています。

しかしより注目したいのは、大学受験者なのに、特に何もしていないという回答が多いということです。そして大学生活の不安は学力・学修ということです。もちろん差はありますが、全体的な傾向としては、この 10 年間ほど、ほとんど変わっていないのではないかと私は考えています。

**5 指導する高校教員の大学及び大学入試に関する意見…取材から読み取れること**

**1) 大学入試に関して**

- ・どのような学力レベルの受験生でも合格させる大学への失望感
- ・入試問題には大学入試改革の意図が反映されている
- ・受験生の合否判断には、入試改革の意図が反映されていないのではないか
- ・どの選抜方法においても、基礎学力を問うべきではないか
  - 高校教育の質の向上につながる
  - 各大学の教育活動の方向性を決めるのに有効
- ・面接試験を、より深い内容にしてほしい

**2) 卒業生の大学生活に関して**

- ・大学生活が続くのかという不安がある
- ・専門学校に比較して、大学進学者の満足度は低い傾向にある
- ・最終学校段階として、高等教育の前の段階の「学びの保障」を実現してほしい
- ・入学前の「学び」を確かめて、学生の「カルテ」を作成し、活用してほしい
  - ⇒ どこで、どのように学んで、今の学力や学習態度に至ったか、学習歴の把握を

最後は新たな大学進学者たちを実際に教えている高校教員の大学および大学入試に関する意見です。これも取材からまとめてあります。

まず大学入試に関してですが、「どのような学力レベルの受験生でも合格させる大学への失望感」です。高校教員には、大学教育は、向学心としかるべき適性がある者が受けるべき

だという考えが根強くあります。そのような思いが失望感を生むのかもしれませんが。

そして 2020 年からの共通テストなど、大学入試の改革については、「入試問題には大学入試改革の意図が反映されているが、その一方、合否の判定には、何ら影響がない」というシビアな意見が随分とありました。また「どの選抜方法においても、基礎学力を問うべきではないか」という意見もありました。こういう意見が出るのは意外と思われるかもしれませんが、かなりあります。その理由として、まず大学に進学したいのなら、高校の勉強を頑張らないといけないというように生徒のモチベーションを上げて、高校教育の質を上げたいという意図があるためです。

それから受験偏差値が 40 台前半のある公立高校の英語の教員は私に、「共通テストを進学希望者全員に受けさせてみてはどうか」と提案をしてきました。その教員に、「もしあなたの学校の生徒が共通テストを受けたとしたら何点ぐらい取れると思いますか」と訪ねたところ、「多分 20 点ぐらい」と答えたのです。

しかし問題のでき方や間違い方、どの問題ができて、どの問題には手を付けていないかといった事実は大学の教育に生かせるのではないかという意見でした。私もこの意見に基本的には賛成です。本来、今回の大学入試改革は、高校教育の質の向上も一体として考えられていたはずなのです。

文科省の「高校生のための学びの基礎診断」という測定ツールもありますが、民間委託で料金もかかるため、高校側では利用する意欲はあまり高まっていません。だからこの基礎学力をどのような形で問うか、問うてほしいという高校の先生方の意思是ぜひ汲み取ってもらいたいという思いもします。

そして面接試験をより深い内容にしてもらいたいという意見があります。こちらは大学入試で試験官になられた方は、受験生の答えが定型化していることに気付かれているはずです。どのような質問が出るかを高校が把握して指導をしているからです。これでは本来の人間性や学習意欲などを聞き出すことはできません。個人情報の問題もあるので、聞けない問題もあると思いますが、より深い質問で生徒の向学心や、いろいろなもの、彼らの本当の姿を見てほしいと考える教員は少なくないのです。

面接試験に関連して、最近プレゼンテーションを行う試験が随分と多くなっています。これについて、高校の教員からは結構疑問に思われているところがあるのです。どういうことかと言いますと、まずプレゼンテーション試験の準備は事前に教員の指導が相当入っています。その結果、見栄えの良いスライドが作れる、人前で話せるなどのスキルがその内容や、本人の特性、適性よりも前面に出てしまいがちなのではないかという高校の教員からの疑問です。これも少し心の中に留めておいていただけるとありがたいです。

それでは最後ですが、卒業生の大学生活に関しての高校の教員の意見です。大学進学後、大学生活が続くのかという不安は、新たな大学進学者層を送り出している高校の教員にはとても強くあります。卒業から半年後、今の生活の満足度についてアンケート調査している高校があります。その高校の方からお話を聞いたのですが、それによると大学進学者の今の生活の満足度は専門学校進学者の満足度よりも低くなっているそうです。大学進学者たちは、放っておかれているようで不安という類の感想が多いです。それに対して専門学校進学

者からは「面倒見がいい。自分を気にかけてくれている感じがする」といった感想が多いのです。

成人年齢が18歳となった今、大人である彼らが放っておかれることに不満があること自体が問題だと私も考えます。しかし大学入学までに自立性や主体性が確立していない学生が多く入学していることを大学側はもっと踏まえるべきではないかと思います。

そして教員に共通する思いです。最終学校段階として、高等教育の前の段階の「学びの保障」を実現してほしいという声があります。「学びの保障」ができる最後の場である大学が、それまで積み残してきた、置き去りにしてきた学習の保障をしてほしいという悲願のようなものを多くの先生方から感じます。

そのためには、入学してきた者たちの真の姿を知ることです。どこでどのように学んで、今の学力や学習態度に至ったのかといった学習歴の把握、医療機関のカルテのような物を作成し、そして活用してほしいという声があります。

実際に小学校から中学校に進む時、同じ地域の公立校の場合には、書類には書かれていない物も含め、生徒の情報交換をしています。また問題を抱えている生徒が多く入学する高校では、出身中学に行って生徒の情報を入手します。どちらもより良い学校教育を実現するための努力なのです。大学でも、学生のこれまでを知る努力、そして個々の学生への個別の対応をより深く考えるべき時期に来ているのかもしれない。

高校の先生方の熱い大学への思いをお話ししたところで、私の発表は終わりにしたいと思います。ご清聴いただき、ありがとうございました。

---

**【山地・司会】** ここで問題提起された事柄というのは、朝比奈先生の高校の教員としてのご経験を踏まえて、いろいろな方に取材をされて、これまでのご本に詳しく表現してこられた内容のエッセンスかと思います。朝比奈先生、ありがとうございました。

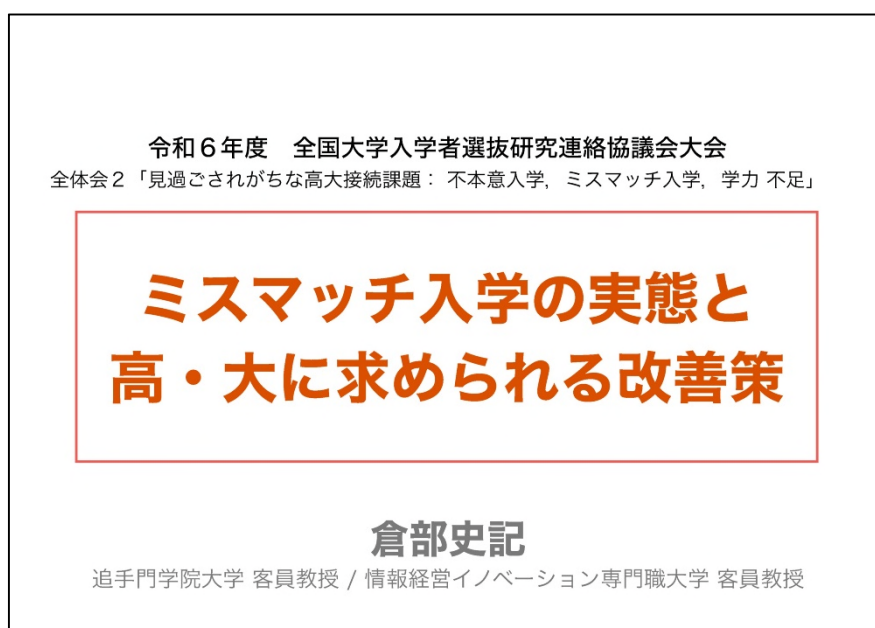
続きまして、倉部先生、ご用意をお願いします。■

## 全体会 2 ○ 報告 2

# ミスマッチ入学の実態と，高大に求められる改善策

■ 倉部 史記（追手門学院大学客員教授，高大共創コーディネーター）

---



本日の登壇者の方々，大学関係者の方，高校の先生方，そして朝比奈先生のようなジャーナリストの方とそれぞれいらっしゃいます。私の報告内容は，その高大の間で起きている問題についての内容です。

## 倉部史記（くらべしき）

### ● 高校、大学双方からの高大接続事業支援に従事

- 追手門学院大学 客員教授
- 情報経営イノベーション専門職大学 客員教授
- 専門は進路学習・キャリア教育、高大接続

#### 【兼任・公務実績】

- 三重県「県立大学の設置の是非を検討するための有識者会議」有識者委員（2021-）
- 三重県立看護大学 高大接続事業 外部評価委員（2015-）
- 文部科学省「教育と研究の充実に資する大学運営業務の効率化と教職協働の実態調査」有識者委員（2020）
- 文部科学省 大学教育再生加速プログラム【AP】（入試改革・高大接続分野）ペーパーレフェリー（2014、2016）

先ほどの朝比奈先生は元高校教員でしたが、私は元大学事務職員です。工学院大学という私立大学の教務部で学生の支援を行っていました。その後、予備校に転職して、高校生の進路指導のようなものに関わり、現在は独立した立場で高大接続のお手伝いをしています。

## 「進路指導」がテーマの講演や研修をしています

- 全国高等学校進路指導協議会
- 埼玉県高等学校進路指導研究会
- 茨城県高等学校教育研究会 進路指導部
- 千葉県高等学校教育研究会 進路指導部会
- 千葉・千葉南職安管内高等学校就職対策連絡協議会
- 東京都高等学校進路指導協議会
- 東京私立中学高等学校協会
- 栃木県高等学校教育研究会
- 京都府立高等学校進路指導研究協議会
- 大阪府高等学校進路指導研究会
- 兵庫県高等学校進路指導研究会
- 高知県進学協議会
- 熊本県高等学校進路指導研究会
- 鹿児島県高等学校進路指導研究協議会

- 毎年、全国80~100校ほどの高校で、進路講演を実施
- 進路多様校、定時制、通信制等様々な高校でも

ほか多数

スライドにあるように全国に高校の進路指導の先生方の自主的な協議会があります。そのようなところで現状の進路指導の課題を話したり、毎年全国の100校ぐらいの高校で、高校生や保護者と直接お話をしたりしています。その中には、放っておいても東大や京大にどんどん合格するような学力の高い高校もあれば、朝比奈先生のお話に出てきたような学力に課題を持っている高校もあります。進路多様校、定時制、通信制とさまざまです。

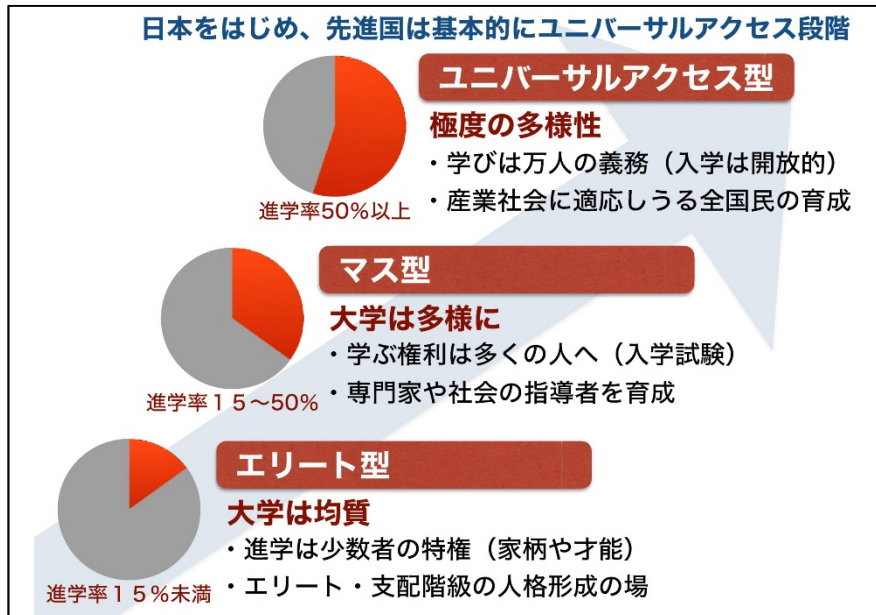
# トロウ・モデル

by マーチン・トロウ

社会における大学進学者の比率によって  
大学の役割や、あり方は大きく変わる

ご存じのとおり、18歳人口はどんどん減っていきます。それはそれで大変気になりますが、今日のテーマはどちらかというと、大学進学率が上がっているというところに関わりが深いと思います。実際にこれまでなら大学に来なかった層も大学に来ています。今後はますますそれを受け入れていくことになると思うわけです。

大学の皆さまであれば、トロウ・モデルという言葉聞いたことがあるかもしれません。大学進学率が上がっていくと、大学の役割だとか、在り方も当然変わっていきます。大学を取り巻くいろいろなインフラも変わっていくはずだというモデルです。



現在、日本でも進学率は50%を超えています。このマーチン・トロウが言うユニバーサル段階に移行しているのです。こうなってくると、一言で「大学はこうだ」などとは言えません。先ほど、朝比奈先生のご説明で、高校の先生は大学にはこうあってほしいという思い

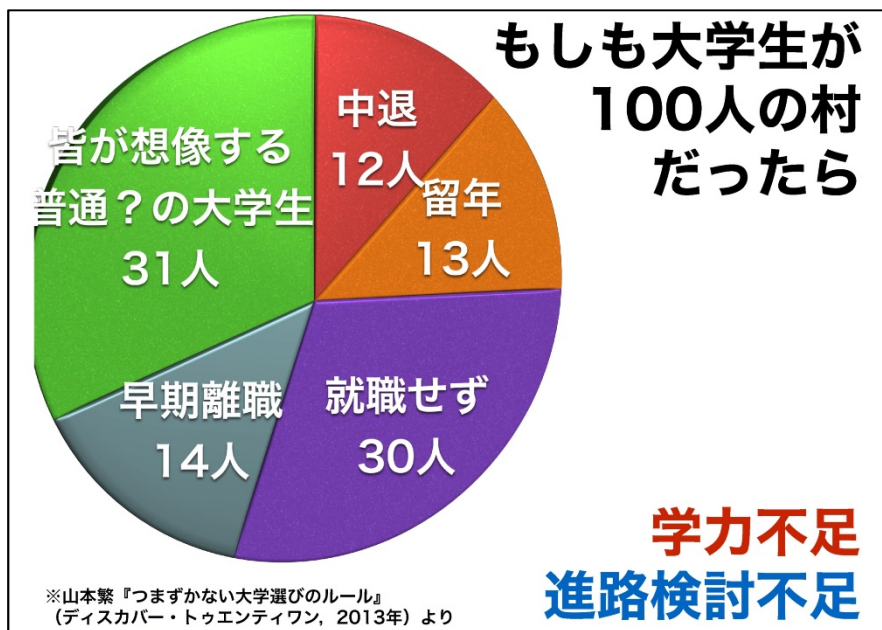


もあるということでしたが、とはいえ今は本当に多様です。四則演算が怪しいから大学に行く、就職ができないから大学に行く、周りの人が行くから大学に行くという子もいるわけです。

- **大学側の学生募集**
- **高校側の進路指導（キャリア教育）**

これらは  
**【ユニバーサルアクセス段階】に  
 変化できているだろうか？**

これ自体、私は悪いとは思いません。むしろ多くの方が誰でも高等教育にアクセスができるというのは素晴らしい社会だと思うのです。しかし、当然ながら進路指導であるとか、学生募集であるとか、もちろん皆さまが関わっている入試もユニバーサル段階に合わせて変えなければいけないわけです。でも、本当に変わっているだろうかというのが、私が日々感じていることです。



これは 2013 年に出版された本のデータなので、少し古いのですが以前、『世界がもし 100 人の村だったら』という本がありました。あれに合わせて、「大学 1 年生が 100 人の村だっ

たら」というデータをまとめたものです。

100人中12人は中退、13人は留年をします。ここまでの4分の1です。30人は4年で卒業しますが就職はしません。14人は3年以内に離職します。残ったのは31人です。これがいかが悪いかは人によると思います。先ほども山地先生がおっしゃっていましたが、海外留学をして留年したなどというのは、むしろ勧めたいぐらいです。しかし高校生や保護者、あるいは高校の先生は、大学入試に受かりさえすれば、この最後の31人になると本当に信じているということが問題なのです。このグラフを高校生や保護者、先生に見せると皆さん驚かれます。

大学	学部系統	退学率	一般	AO	指定校	公募制	付属	留学生	他
B大学	経済	15.4	12.7	27.1	10.3	10.1	66.7	0.0	40.0
B大学	経営	13.9	14.1	16.1	11.2	10.1	22.2	10.0	21.7
C大学	農	4.3	4.3	33.3	-	3.8	0.0	9.1	-
D大学	経営	17.9	8.3	40.0	18.2	0.0	18.8	18.2	9.5
E大学	理	9.2	8.0	47.1	9.7	3.0	×	0.0	×
F大学	看護	18.8	16.0	-	28.0	15.4	-	-	-
G大学	芸術	19.0	8.1	24.4	31.8	8.7		100	
H大学	理工	25.2	11.2	40.4	32.1	23.1	47.2	0.0	-
I大学	薬	20.8	14.6	-	50.0	26.7	-	-	-
J大学	スポーツ	11.9	9.7	13.2	57.9	0.0	-	-	-
K大学	薬	48.1	42.2	52.6	81.8	33.3	×	-	0.0
L大学	経営	28.3	32.1	34.7	16.3	50.0	×	50.0	-
M大学	国際	27.7	29.4	26.3	24.4	100	-	-	-
N大学	福祉	16.8	38.9	7.7	10.7	10.7	33.3	25.0	0.0
O大学	国際	27.7	100	42.9	9.1	0.0	25.0	100	66.7

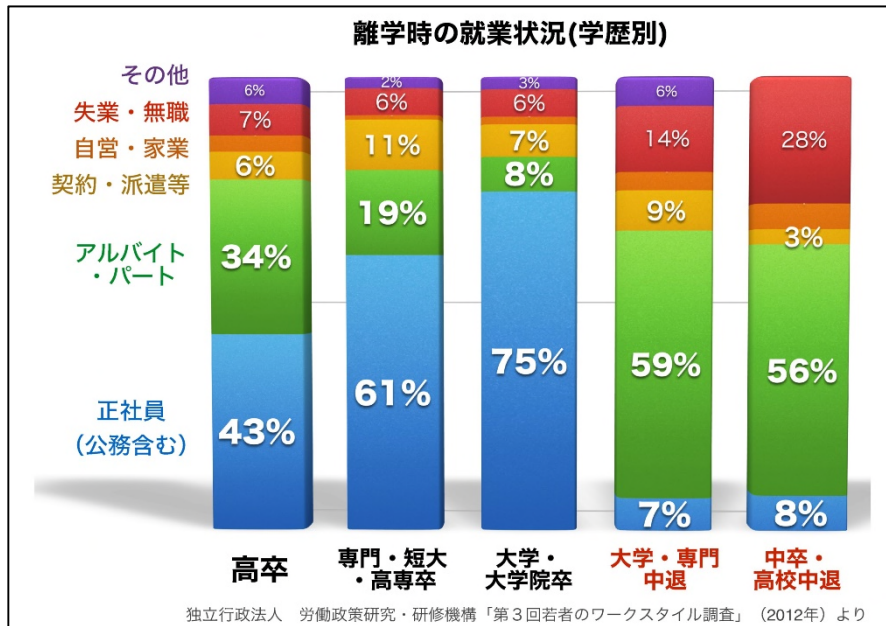
※読売新聞教育ネットワーク事務局「大学の実力2019」より

読売新聞社が2019年まで「大学の実力」という調査を行っていました。全国の大学の標準年限の卒業率だとか、中退率だとかをしっかりと調べたという物です。こうして見てみると、結構中退率の高い大学や学部が身の回りに普通にたくさんあったということに、高校側が本当に驚かれるのです。例えばこちらの表にある、K大学薬学部です。

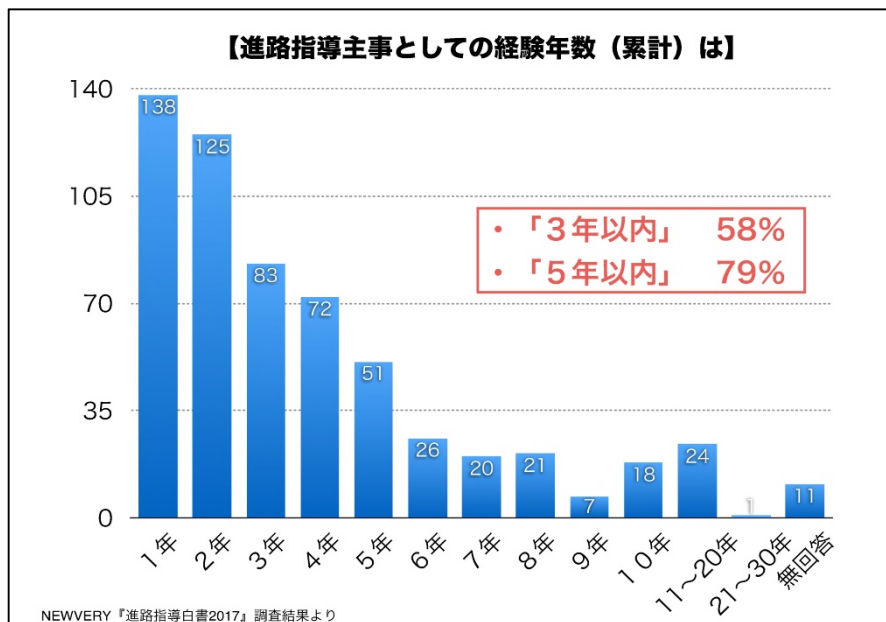
指定校推薦入試で入った人の81.8%が退学をしています。この大学が存在する県の進路指導協議会で、私が「こういうデータを知っていますか」と言ったら、会場の先生方がものすごく驚かれています。「聞いたことがない、高校訪問でもこういう話は聞いたことはない」とのことです。指定校というのは、高校が大学に生徒を推薦する入試です。しかしこういう情報は大学からは出てこないのです。

これを見ていると、どの入試が悪いとも一概に言い切れないということも分かります。世間では、総合型選抜あたりが結構悪者にされがちですが、実はその入学者が進学後に一番伸びているとか、一般選抜で入った人が一番中退しているなどという大学もあるわけです。

大学の職員の方は、このような情報を日常的に扱っています。大学と高校の間で、情報が途切れてしまっています。別に中退が悪いと言うつもりはありませんが、事実としてこういうデータもあります。

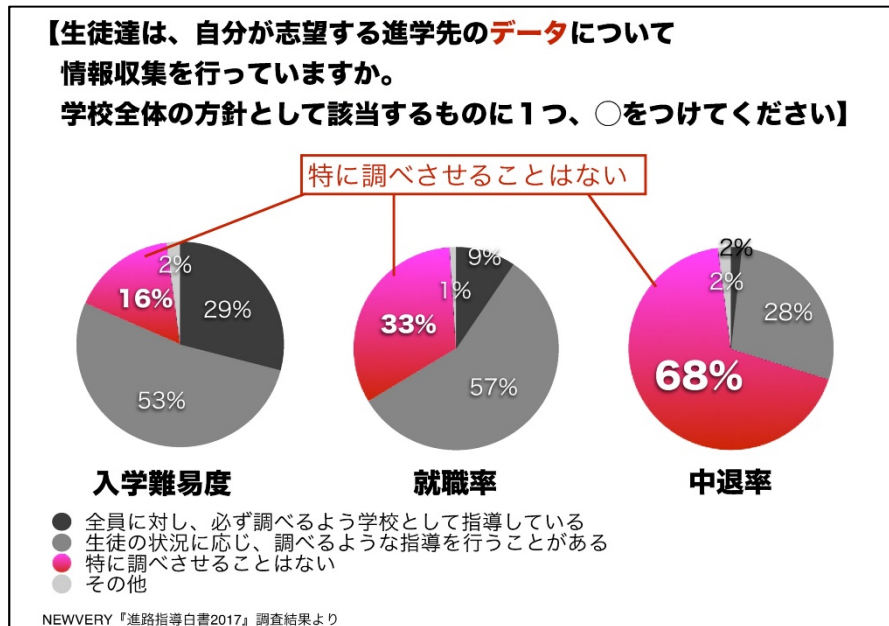


大学や専門学校を中退した方に、日本の社会は残念ながら冷たいです。少し社会の仕組みが良くないです。さらに進学者の過半数は今、貸与型奨学金だとか、経済支援を受けて進学します。しかし留年や中退が決まってしまうと、これらの給付が止まることが多いのです。中退の場合は、4カ月後ぐらいから返済が始まったりします。これも高校の先生や保護者は知りません。多くの方は知らないのです。なぜならば、中退などはほとんどないことだと思っているからです。

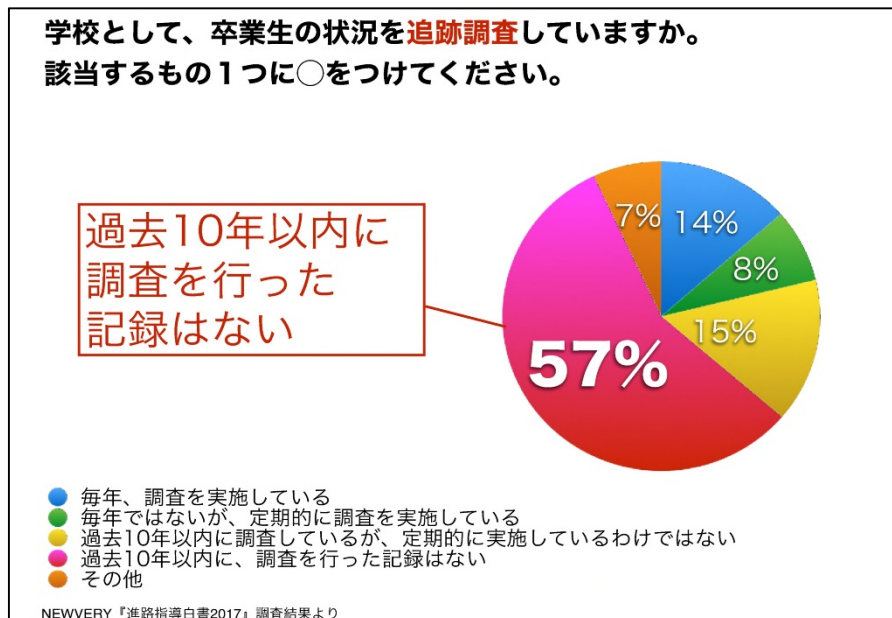


私は以前、NPOの理事として、『進路指導白書』を作りました。全国の進路指導の先生方にお力添えをしていただいたのです。ここで分かったことは、進路指導の先生も進路指導についてものすごくキャリアが長いわけではないということです。進路指導主事をやって3年以内という方が6割、5年以内で8割ぐらいでした。中高一貫の高校などですと、中1に受

け持った学年が高3まで上がる間に6年です。6年もあったら大学入試の在り方は相当入れ替わっています。



「進路指導の中でどういうデータを生徒に調べさせますか」と聞いた時に、入試難易度とか、就職率は多くの高校で調べなさいと指導をします。しかし中退率はほとんどの高校で調べさせることはありません。



さらに卒業生の追跡調査を高校はやっていないのです。就職をした子たちのことは結構気にかけています。何なら職場を訪ねて行ったりします。しかし大学や専門学校については、「もう預けました。多分大丈夫ですよ。中退などないようですね」という感覚です。

https://www.pha.nihon-u.ac.jp/media/outline-promotion20230501-2.pdf

**薬学部 6年制学科における修学状況**

日本大学  
薬学部 薬学科  
令和5年5月1日現在

①平成29年～令和5年までの各年度における入学者数と進級者数

入学年度	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年
1年次入学者数	258	254	259	254	257	293	252
2年次進級者数	241	238	238	233	237	260	
3年次進級者数	216	222	229	205	214		
4年次進級者数	205	221	220	200			
5年次進級者数	203	221	218				
6年次進級者数	199	219					

②令和4年度卒業者のうち、標準修業年限内（6年間）の卒業者及び国家試験合格者の割合  
(令和4年度後の卒業生については、平成29年度入学者/標準修業年限内の卒業生として該当)

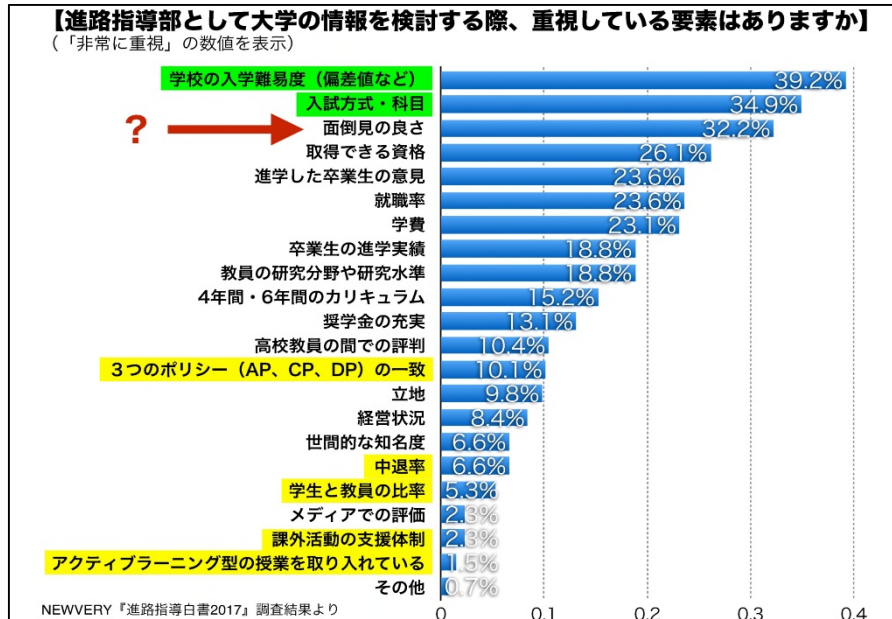
入学年度	平成29年
入学者数 (a) (一括算集の場合は総数)	258
卒業者数 (b) (標準修業年限内の卒業者数)	176
卒業率 (b/a)×100 (標準修業年限内の卒業率)	68.2%
国家試験合格者数 (c) (標準修業年限内の合格者数)	131
国家試験合格率 (c/a)×100 (標準修業年限内の合格率)	50.8%

**進路指導主事ですら  
ご存じないケースが  
ほとんど**

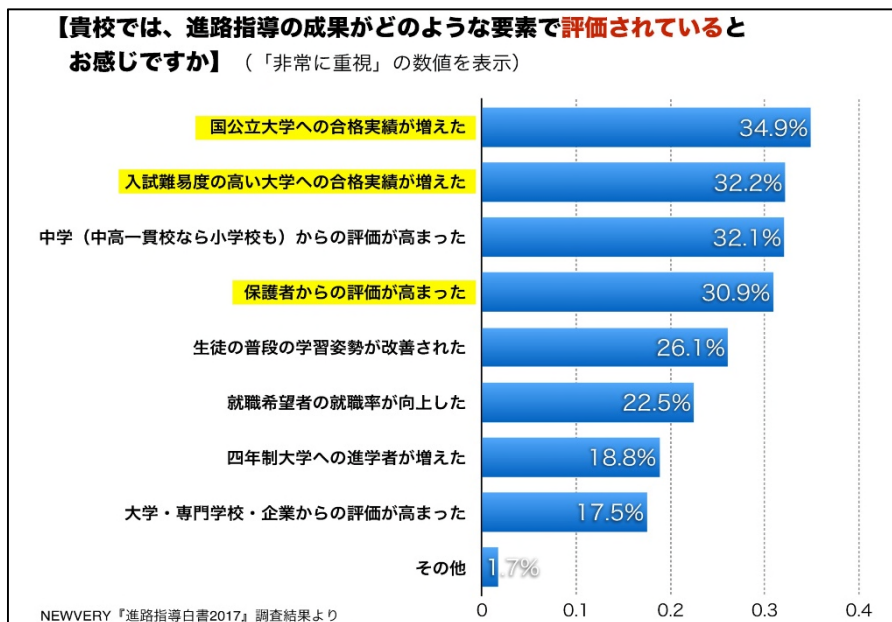
ちなみに薬学部や歯学部、6年制のこういった学部では、今、就学状況をかなり詳細に公表することが義務付けられています。これは薬学部の例です。1年生の時、258人だった子たちが、2年生、3年生、4年生になるにつれてどんどん減っていきます。これによるとこの大学の場合、6年間で卒業して薬剤師の国家試験にそのまま合格したのは半分ぐらいだというデータが出ています。進路指導を行う上ではすごく有用なデータだと思うのですが、進路指導主事ですら知りません。

こういったデータを初めてご紹介した時に、先生方は「教えてほしかった」と言うのです。もちろん「こんなに低いのだったら、ここはうちの生徒には勧めない」という人もいますでしょう。しかし多くの場合はそんなに単純ではないです。結局、行くのです。自分のなりたい職業に就くために地元で行けるのはここだけだ、この大学だけだとなれば行きます。その時、「なぜ中退するのかという理由が分かっていたら、高校でできることがあったはずだ」というのが先生方がよく言われることです。

薬学部だったら、化学とか、生物とか、恐らくそういう基礎学力も大事でしょう。それがあある種の留年や中退の原因になっているのだとしたら、「それを先に言ってほしかった。それであれば指定校で送り出す時にもちゃんとその事実を伝えた上で、3年生の卒業まででできることがあるはず」ということです。逆に言えば、変えられる余地が結構たくさん残っているということです。



同じく進路指導白書のデータですが、「進路指導部として大学の情報のどこを重視していますか」というものです。トップ 2 に入試のデータが出るのは仕方がないと思います。問題はこの黄色いところ。3つのポリシー、中退率、学生と教員の比率などで。大学が学生のために一生懸命整備をして力を入れていることを、進路指導の先生はほぼ見ていません。もしかしたらこの辺りもお互いの努力や課題を伝えてきていないのかもしれない。不思議なのは、「面倒見の良さ」は常にトップのほうに来るのです。この「面倒見の良さ」というのは何でしょうか。私からすると中退率だとか、学生と教員の比率だとか、そういった物はものすごく「面倒見の良さ」の重要な要素だと思うのです。しかしこの辺りも何だか印象が先行するような広報だとか、進路指導のあたりで課題があるのかもしれない。



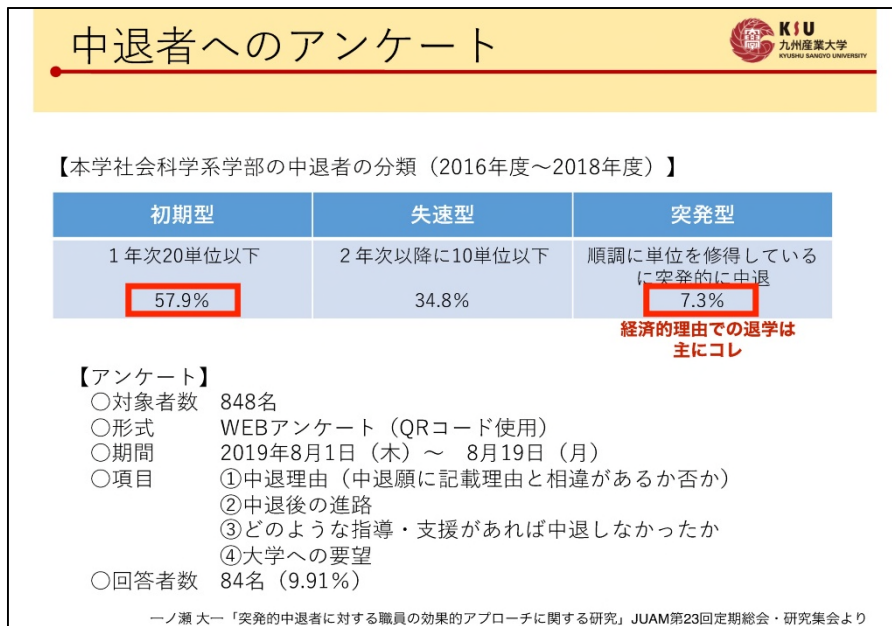
高校の先生にも悩みがあります。「進路指導主事の先生としては、どういうことを大事に

していますか」と聞くと、「本人の興味関心や特性に合った進路のマッチング」などが上位に来ます。

一方で、「入試難易度の高い大学に受からせることは、私にとって重要ではない」というお話が出ます。なるほどと思います。しかし聞き方を変え、「先生の進路指導はどこで評価されていますか」と問うと、皆さんの予想どおり、逆転するのです。「国公立大学にどれだけ合格させたかが私の評価になります」ということです。

先生方もやりたくてやっているわけではなかったりするのです。別に国公立大学の合格を狙わせることが悪いと言うつもりはありません。ただし、これが行き過ぎてしまうと、学校の中に大学の関係者を呼んでイベントをする時に、国立、公立大学の方しか呼ばず、地元の私立大学の関係者を意識的にシャットアウトするなどという指導が起きたりするのです。

できるだけ第 1 志望の国立大学の方に目を向けさせたい、地元の私大にうっかり魅力を感じて、推薦などで入ってしまったら困る、という意見が出てくるのです。ここまで来ると少し大人のエゴのような気もします。しかし先生もこういう事情を抱えています。何だか生徒や学生たちにそのしわ寄せが行っている気がします。



こちらはとても重要なデータだと思うのでご紹介します。福岡県にある九州産業大学の 一ノ瀬さんという職員の方なのですが、その方が九産大の中退者の分析をされたのです。ここに初期型、失速型、突発型というものがあります。突発型というのは、順調に単位を取っていたのですが、ある時、急に中退してしまうという人です。経済的な理由で中退する人はこのパターンが多いのです。

しかしこの大学の社会科学系学部では、突発型は 7.3% だけです。圧倒的に多いのは初期型で、最初から単位が取れていないのです。つまりお金だけが原因ではないわけです。失速型も結構多いです。初期型と失速型を合わせるとこれで 9 割以上です。

	回答	全体		退学者(回答者)		アンケート回答(複数回答あり)	
		割合	人数	割合	人数	割合	人数
初期型	修学意欲が低下したため	25.4%	10	22.2%	32	32.0%	32
	成績不振のため(低修得単位のため)	15.7%	7	15.6%	31	31.0%	31
	就職のため	18.3%	11	24.4%	12	12.0%	12
	経済的事情のため	23.3%	9	20.0%	6	6.0%	6
	家庭の事情のため	-	-	-	5	5.0%	5
	怪我、病気治療のため	2.1%	1	2.2%	2	2.0%	2
	留学のため	1.2%	1	2.2%	2	2.0%	2
	他大学・専門学校に入学するため	11.6%	4	8.9%	1	1.0%	1
	その他	2.3%	2	4.4%	9	9.0%	9
	合計	100%	45	100%	100	100%	100
失速型	修学意欲が低下したため	23.8%	3	18.8%	15	31.9%	15
	成績不振のため(低修得単位のため)	17.3%	5	18.8%	15	31.9%	15
	経済的事情のため	28.6%	6	25.0%	6	12.8%	6
	就職のため	16.7%	2	12.5%	4	8.5%	4
	家庭の事情のため	-	-	-	3	6.4%	3
	怪我、病気治療のため	2.7%	2	12.5%	3	6.4%	3
	留学のため	0.9%	0	0.0%	0	0.0%	0
	他大学・専門学校に入学するため	6.5%	2	12.5%	0	0.0%	0
	その他	3.6%	0	0.0%	1	2.1%	1
	合計	100%	20	100%	47	100%	47
突発型	経済的事情のため	56.3%	8	42.1%	6	18.2%	6
	家庭の事情のため	-	-	-	6	18.2%	6
	他大学・専門学校に入学するため	14.1%	6	31.6%	6	18.2%	6
	就職のため	9.9%	3	15.8%	6	18.2%	6
	修学意欲が低下したため	8.5%	1	5.3%	5	15.2%	5
	成績不振のため(低修得単位のため)	0.0%	0	0.0%	2	6.1%	2
	怪我、病気治療のため	0.0%	0	0.0%	1	3.0%	1
	留学のため	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0
	その他	11.3%	1	5.3%	1	3.0%	1
	合計	100%	19	100%	33	100%	33

一ノ瀬 大「突発的中退者に対する職員の効果的アプローチに関する研究」JUAM第23回定期総会・研究会より

中退理由についても一ノ瀬さんたちは調べたそうです。退学する時には多くの大学が、学生と面談をします。その面談の時に本人が挙げた理由は「就職のためです」とか、「経済的事情のためです」と言うのだそうです。しかし5年後ぐらいに「本当はなぜ中退したのか」と、もう1回聞いたそうです。そうすると学生たちが言う理由が全然違う「修学意欲が低下した」、「成績不振だった」だそうです。

実態としては複合的なのだと思います。興味が持てない内容だし、単位も取れていない、こういうことだったら授業料を払って通う意味もないだろうとって辞める方も多いのかもしれない。だからいろいろなところで紹介をされている中退の理由の分析データというのは、必ずしも実態を反映していない可能性もありそうです。

質問項目	回答	初期型		失速型		突発型	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
どのような制度・支援があれば、中退しなかったか	奨学金などの経済的支援	8	10.1%	5	19.2%	7	35.0%
	レポート指導などの学修支援	8	10.1%	5	19.2%	3	15.0%
	学生生活などについて気軽に相談できる制度	18	22.8%	6	23.1%	4	20.0%
	友人ができるようなイベント等	19	24.1%	3	11.5%	1	5.0%
	高校時代に、大学や将来について考えるプログラム	26	32.9%	7	26.9%	5	25.0%
	その他(自由記述)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	合計	79	100.0%	26	100.0%	20	100.0%

【初期型】  
 ①高校時代に大学や将来について考えるプログラム：32.9% ②友人ができるようなイベント24.1%  
 ③学生生活などについて気軽に相談できる制度：22.8%

【失速型】  
 ①高校時代に大学や将来について考えるプログラム：26.9% ②学生生活などについて気軽に相談できる制度：23.1% ③奨学金などの経済的支援：19.2% ④レポート指導などの学修支援：19.2%

【突発型】  
 ①奨学金などの経済的支援：35.0% ②高校時代に大学や将来について考えるプログラム：25.0%  
 ③学生生活などについて気軽に相談できる制度：20.0% レポートなどの学修支援：15.0%

一ノ瀬 大「突発的中退者に対する職員の効果的アプローチに関する研究」JUAM第23回定期総会・研究会より

さて、一ノ瀬さんのグループが、「どのような制度・支援があれば、あなたは中退しなか



ったと思いますか」と中退者に聞きました。最多は、「高校時代に大学や将来について考えるプログラムがあれば自分は中退しなかったと思う」です。これがすごく多いです。

ここから分かるのは、大学だけで頑張っても恐らくミスマッチや中退を完全に減らすことはできないということです。高校だけでも難しいと思います。大学と高校で連携しなければ、こういったものはなかなか発見することも難しいです。問題の原因は高校のうちに発生しており、それが大学に入ってから顕在化する構図です。

このような中で、先ほど朝比奈先生のお話にもあった指定校推薦で大学に進学する方は増える一方です。私立大学に関して言えばもはや最多です。絶対にそれが悪い、と言うつもりはありませんが、中退や留年の実態も分からないまま、それを防ぐ理由も知らないで、高校側として十分な施策が行われず、大学も進学後の実態を明かさず、指定校だけが増えていくというのは果たして大丈夫なのでしょうか。ユニバーサル段階に必要な施策など、見直さなければいけないことがあるのではないかと私は思うわけです。

私はNPOで長く仕事をしてきました。高校側に立っていて思うのは、例えば入試難易度がそんなに高くない大学の中にも、社会でものすごく重要な位置、役割を担っている大学はあるのですが、入試難易度が高くない大学の中で、ここはちゃんと教育力がある大学なのか、そうではないのかという違いが外からは全く分からないということなのです。せっかく努力をしている先生方もいらっしゃるのにもったいないです。

各大学が持っている教学IRデータ		
平均値	A大学	B大学
入試偏差値	50	45
中退率	7%	10%
就職率	80%	72%
ある高校の、評定平均2.8の卒業生だと		
中退率	15%	10%
就職率	60%	80%
<b>高大で協力して活用できないか？</b>		

NPOとしてやってきたことの中で、少し手応えを感じたものを最後にご紹介します。教育力の違いを伝える方法はざっくり言えば、私はこの2種類なのではないかと思いました。データで分かる教育力とデータでは伝わりにくい教育力です。

データに関して言えば、大学の皆さまは教学IRというお言葉をご存じかもしれません。学生の入学前から卒業後までのいろいろなデータを分析して、中退予防の施策を打たれていたりします。これを入試の開発につなげていたりもします。

例えば、A大学、B大学のこういうデータがあります。平均値だけを見るとA大学のほう

が何となく勧めたい大学のように思えます。しかし、ある特定の高校の特定の学力層の卒業生だけを抽出すると、B大学のほうが伸ばしているということはよくあることです。

しかしこれは大学の方々でも多分、気付いていないこともあります。また教務部の人は気付いていても入試広報の人は全く知らないなどということもよくあります。ですが、ものすごく重要なデータであると思います。大学がこれから学生を持続的に集めていこうと思った時にも、ここに活用の余地はないですか。高校にとってもすごく聞きたいところだと思います。



## WEEKDAY CAMPUS VISIT (WCV)

「普段の授業に高校生が参加する」  
高大接続型キャリア教育プログラム

高校生のために用意された「模擬授業」ではなく、  
大学生が実際に受講している「普段の授業」に参加する。

開催した大学・短大・専門学校 91校  
開催回数（公募型）約600回  
学校行事に取り入れた高校 17校  
参加した高校生 延べ15,620人（※判明分のみ）  
（2013年4月～2019年7月末日までの実績値）

そしてもう1つ、実際の教育を体験してもらうということもNPOでやってきました。「WEEKDAY CAMPUS VISIT」といって、普段の大学の授業を学生が受けているところに高校生を混ぜてもらってプログラムを2013年からずっとやっています。コロナが始まる前

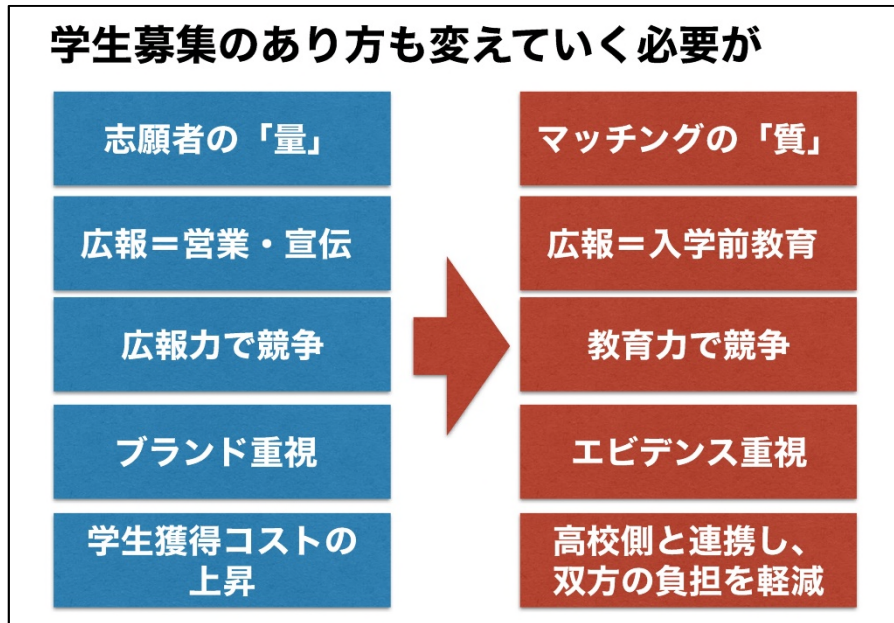
らいまで、2万人近い高校生が参加しました。



ただいきなり普通の授業の途中の第3回目などに突っ込んでも分からないことが多いので、きちんと気付きを引き出すようなワークを入れたりしました。これをやってみて分かったことは、こういったものをきちんとやっていると、最終的にその大学に進学した時に、中退率を抑制する効果が確認できたということです。先ほどの九州産業大学でもそうでした。

もう1つは、入学手続き率にかなり大きな影響を与えていました。幾つかの大学に受かった場合、最終的に入学しようと思うのは、実際の授業を体験した大学のほうだったのです。いろいろな理由があるのだと思います。これはあらゆるケースで万全のプログラムというわけではありません。ただ、意識したのは、オープンキャンパスのように、「お客様・消費者」として扱うことはやめよう、「学習者」として迎え入れようとしたことです。

授業はちゃんとノートを取らせるし、最後に発表もさせます。振り返りワークを高校生同士でやらせることでお互いの気付きを共有させました。学問の中身についての理解もですが、アクティブラーニングなどの教育の特色をはじめとする、大学の理解、あと「自分がもし大学生になったら、どういう態度でこの授業を受けるのだろう」という、自分に対する理解を深めることにもなっていたのです。単純に模擬授業のように学問の中身を説明するだけではない、少し違うところに触れていたのが良かったのかもしれません。



別にこのプログラムのことをお話ししたいわけではないのです。皆さまも全国の大学、高校で、探究学習を取り掛かりにして、いろいろな連携をされていると思います。そういった大学との接点を、何かお見合いの場だとか、お客さまとして吟味する場ではなく、学びの場にする工夫はあるかもしれないと思うのです。

大学側のほうも恐らくお金をかけてオープンキャンパスだとか、広告をやっている、そのうち頭打ちになる状況がやってくると思います。18歳人口が減っていますから、費用対効果とか、労力対効果は絶対に下がっていきます。そうなった時に、数も大事ですが、いかにしてマッチングの質を高めるかという発想もそろそろ必要な気がするのです。広報は営業とか宣伝ではなく、入学前教育だとか、できるだけ先ほどのデータのようなものも伝えていくことが重要です。

### 必要なことは

#### 【大学側】

- ・教育力の可視化
  - ・データの積極的公開
  - ・教育のリアルを体験させる仕組み

#### 【高校側】

- ・進路指導のゴールを、「出口指導」から「7年後に後悔していないこと」へ。

双方の課題を共有し合おう

この後のパネルセッションでもまたいろいろと議論ができたと思いますが、私が見ているのは、大学側の教育の中身がやはり伝えてきていないということです。何とかそれを、高校側から見えるようにしてほしいと思います。

国としてやってほしいこともあります。それぞれの大学でできることもあります。高校側もそういったデータが見えてくると、恐らくは単に進学を決めるところだけではなく、その後、辞めないできちんと卒業できるかと指導の軸足を移せるのだと思うのです。お互いに力を合わせる余地はあるのではないのでしょうか。

最後に、今日、お集まりの皆さまは、国立大学や公立大学の方々も多いようです。国公立大学には高校側はすごく期待をしています。例えば先ほどの「WEEKDAY CAMPUS VISIT」ですが、これまでで一番、私が感動したのは、とある県にある国立大学からのお問い合わせでした。その県には離島がたくさんあるのです。その国立大学の方は、「本学で授業公開を積極的にやっていきたい。誰が一番やりたいかという、離島で学んでいる高校生だ。この子たちはオープンキャンパスなど、気軽に大学に行けるような環境ではない。しかし今はオンラインでいろいろと授業を見ることができるようだから、本県の離島の高校生のために、国立大学である自分たちが何かをやらなければいけない」というお問い合わせだったのです。

公立はなおさらそうかもしれません。皆さんの大学の進学する層だけを見ていけば、やらなくていいことかもしれませんが、せっかくなら地元の高校生と大学をつなぐようなことを、国公立の垣根を超えて模索していきたいと私は思う次第です。

ご清聴いただき、ありがとうございました。

---

【山地・司会】 倉部先生、本当にありがとうございました。時間もほぼぴったりに終えてくださりまして、ありがとうございました。続きまして、宮田先生、ご準備をお願いします。

■

## 全体会 2 ○ 報告 3

# 農業高校に入学してきた学力不足・不本意入学者を，四大には本意入学者へ変えていく 取組み

■宮田 晃宏（熊本県立鹿本農業高等学校 進路指導部長）

先ほど，ご発表されたお二方が，グローバルな広い視野でお話ししていただきましたが，私は現在，高校で進路指導をしていますので，現場の視点でお話をさせていただきたいと思っています。

令和6年度全国大学入学者選抜研究連絡協議大会  
(第19回)

『見過ごされがちな高大接続課題：  
不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足』

**「農業高校に入学してきた学力不足・  
不本意入学者を，四大には本意入学者  
へ変えていく取組み」**

熊本県立鹿本農業高等学校所属  
進路指導主事（部長） 宮田 晃宏

流れとしては，「農業高校の実態」，「私の本来の専門」，そして「心幹」について少しお話ししたいと思います。「心幹を育む指導の効果」という流れでお話ししていきたいと思っています。

## I 農業高校の実態

●菊池農業高校(偏差値35前後)へ赴任したのは2000年4月から2014年3月までで、14年間在籍。赴任当時はおそらく熊本県一荒れていたと思います。

●1年間の特別指導(停学・校長訓戒)の件数も延べ100件(全校生徒は500名程度)を超えている状態が何年も続いていました。

●この当時の職員からも「この学校は、殺人以外は何でもある。」といった言葉も複数名から聞いていました。

私の担当教科は農業で、採用は「食品製造」です。これは、私が2000年4月から14年間在籍していました熊本県立菊池農業高校です。恐らく当時、熊本県で一番荒れていたのではないかと思います。1年間の特別指導(停学・校長訓戒)の件数は全校生徒500名に対し、100件ぐらいありました。同時に職員からも、「この学校は殺人以外は何でもある」という言葉をよく耳にしていました。

●対教師暴力・暴言が珍しくない。恐喝、公共物破損、窃盗、暴走行為、いじめ、怠学、授業中に校舎内外徘徊(喫煙・飲酒・花火をする者もいた)、私服登校する生徒が2～3割位居る、土足で校内に上がってくる生徒も多数居て、不純異性交遊、援助交際、妊娠しておろすということを繰り返すといった生徒も居た。

●保護者や生徒から教育委員会等へクレームを電話が頻繁。喫煙を校外・校内でする生徒も多数居て、菊池農業高校生が使用するバス停は周辺の地域住民から生徒の言動に対してクレームが多すぎるので廃止にするかもという連絡がバス会社からあった。

●不動産の方より「お宅の生徒さんが目に余る状況があるから物件が売れにくい」と苦情の電話もあり。

指導理由は、対教師暴力・暴言、恐喝、公共物破損、窃盗、暴走行為、いじめ、怠学、授業中の校舎内徘徊です。ほかにも喫煙、飲酒、花火などをする生徒や私服登校や土足で校内に上がる、不純異性交遊などあらゆるものがあつたのではないかと思います。

保護者や生徒から教育委員会等へのクレームの電話が頻繁にありました。校外・校内で喫

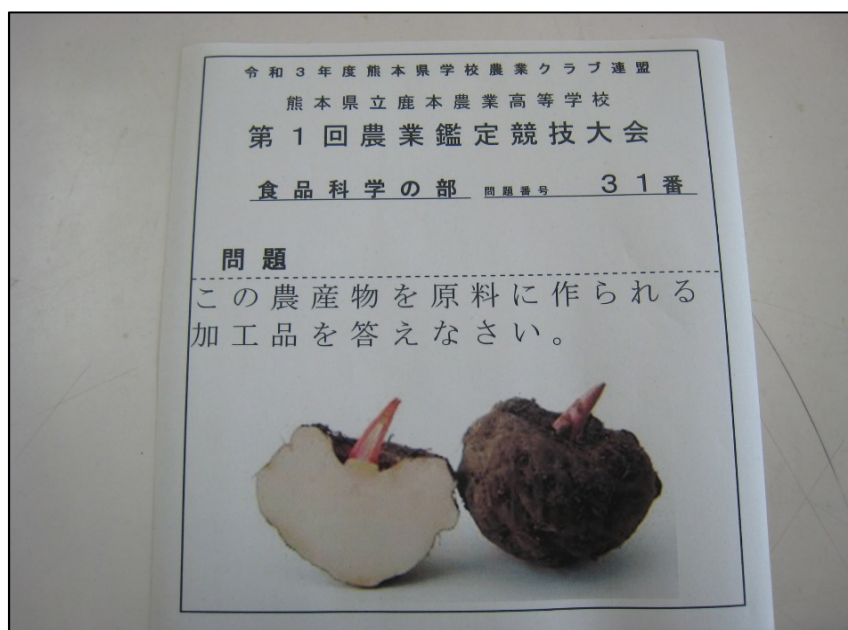
煙し、たばこのぼい捨てをするのでバス停の周辺、地域住民から、「火事なるだろう」という苦情や、不動産業者から「お宅の生徒さんが目に余るから物件が売りにくい。価値が下がる」などということも言われました。

## Ⅱ 私の本来の専門

- 1 学級経営
- 2 農業鑑定
- 3 進路指導

**これらを総括する心幹を育む指導**

このように各中学の最底辺の学力層の生徒が入学してくる高校です。冒頭で私の担当教科は農業と申しましたが、本当の専門は学級経営、農業鑑定、進路指導の3つだと思っています。一応、自分で少し勉強をして博士号なども取りましたが、これも経営学に近いもので、担当教科とはほとんど関係ありません。それから教員免許も10種類持っていますが、6つは社会科学系、2つは理科系で1種「農業」の免許以外は本来、不要の教員免許です。また、授業でせざるを得ないということで、去年は1種「情報」の免許も取りました。





問題番号	30	分野	食品製造
この機械の名前を答えなさい。			
			

前述の農業鑑定ですが、これは農業高校で、3年間の専門科目、技術などを実物鑑定方式で競う大会であります。この農業鑑定は、「全国大会実施基準」という全国統一の範囲で競技を行い、校内大会、県大会、全国大会と実施されるものです。一部ですが、写真で紹介させていただきます。

この写真はコンニャクイモです。最近、なかなか見かけないものではありません。（※写真なし：HACCPの図の問題と作物を見て種子が有胚乳かを問う等の問題も紹介）また、次の写真の正解はクリームセパレーターという機械です。農業鑑定ではこのような問題が出題されます。これらはある年の県大会の問題です。このような指導もやっています。

では、心幹とは？

**この「体幹」に対して人生における思考力・判断力・想像力等の心の部分における根幹となるものもある。これを私は「心幹（しんかん）」と考えている。**

さて、ここから本題ですが、「心幹」というのは心の幹という意味です。これは私が勝手

に作った造語です。体幹を鍛えることで、いろいろなスポーツの根本とするということをよく聞かれると思います。私はこの体幹に対して、思考力、判断力、想像力など、心の部分における根幹となるものを、「心幹」として捉えています。その心幹を育むための取り組みとして「書かせる指導」を、特に11年間みっちりやってきました。

## 心幹を育む「書かせる指導」

- ①欠席・遅刻・早退・欠課を極力「0」に近づける。
- ②提出物を期限内にきちんと仕上げ、全員漏れなく提出させるようにしておく。
- ③クラス内・学科内・学年内での「情報公開」の平準化。
- ④入学後1ヶ月以内に保護者・生徒の理解を得る。

ただ、「書かせる指導」を実践するためには事前指導が必要で、このスライドにあるように、四点を重要視して取り組んできました。

## 「書かせる指導」の具体的実践方法

期間：入学式の次の週から3年生の1学期期末考査1週間前まで実施。  
※定期考査1週間前から定期考査終了日までは実施しない。

方法：

- ①週に1～2本実施する。
- ②量は800～1,200（原稿用紙2～3枚）を求める。  
※最後の行まで書いてないものは受け取らない。

では「書かせる指導」とは実際、どのようなことなのか具体的にいいますと、毎週1～2本、文字量は800字から1,200字で身近なことから時事問題まで自分の思っていること

をクラス全員に書かせることです。期間は入学式の翌週から3年生の1学期までです。

**「書かせる指導」の具体的実践方法**

方法：

- ③内容は、身の周りの事・時事・職業・人物について考えたことを書くことから始めて、徐々に農業・食品について、そして、大学入試の小論文に挑んだり、コンテスト等に応募させたりしていく。
- ④提出させた作品は、必ず1週間以内に添削を丁寧に行って返却する。
- ⑤内容の優れた作品・示唆に富む作品を2～4本選んで、提出者全てに「手本」として配付し、次の自身の作品作成の参考とさせる。

提出させた作品は、私が必ず1週間以内に添削して返します。文通のイメージを持っていただければよいと思います。内容の優れた作品は、2～4本を選び、提出者全員に手本として配布していました。

**「書かせる指導」の具体的実践方法**

方法：

- ⑥1学期に3本前後は、生徒了承の下、保護者にも送付するか、又は手渡しする。
- ⑦未提出者については、反省文と一緒に提出させる。これにも従わなかった場合、家庭訪問をしてその場で書かせる。  
※反省文は新聞のコラム写し（600字程度）、コラムの感想（600字以上）、反省文（600字以上）の合計1,800字程度（原稿用紙4枚半）を1セットとする。

1学期に3本前後は、生徒了承の下、保護者に成績等と一緒に郵送していました。

この指導で大事なことは、真面目な生徒だけが、取り組むのではなく、クラス全員に漏れなく徹底して書かせるということです。もともと、小・中学校時代に学力面で置き去りにされてきたという生徒が多いものですから、ここでも置き去りにしたら意味がありません。徹底して、40人のクラス全員を指導し、その結果、未提出者は11年間で0人でした。具体的

な実践方法についてはスライドをご覧ください。

## 「書かせる指導」の具体的実践方法

方法：

⑧2年生からは、四大や公務員などを志望する生徒は特化して別メニューにて実施する。

※この指導は、放課後の部活動等がすべて終わる時間帯及び学校休業日に、週に2～3回実施する。また、私が所属する食品化学科の生徒だけではなく、他学年や他学科の生徒で、担任や学科の先生から依頼があった生徒も一緒に実施する。

2年生になると、生徒の進路希望がそれぞれに違ってきますので、四大への進学や公務員等、高い志望を持つようになった生徒にはクラスでの指導に加えて別メニューでも実施するようになりました。最初からいきなり書くといっても、非常に難しいので、最近の身近で起きた出来事などを5行ぐらいで書かせ、それに対して、私が返信するといった形です。

また、全員ではなかったのですが、特に大学に進学した生徒には、振り返って、自分史などを書かせたりもしました。筑波大学や九州大学に合格した生徒にも自分史を書かせ、これを志望理由などにもつなげていきました。この指導は今でもよくやっていて、現在の勤務校である鹿本農業高校では、3年生の専門学校・短大希望者も含めて進路希望者全員に対してまずは3,300字程度で、自分史を書かせて提出させ、その後にアドミッションポリシー等に沿った志望理由を専門学校・短大は2,000字以上で、四年制大学は4,000字以上で書かせるようにしています。

資料 6										
担任したクラスの出欠統計一覧表(平成8年度～平成21年度)										
番号	年号(年度)	勤務校	学科学年	「書かせる指導」の有無	在籍数	授業日数	出席率(欠席数)	遅刻	早退	学校内出席率順位 (3位内のみ記入)
1	平成8年度	芥明	食品科学科1年	全く無し	40	215	98.9%(98)	76	27	18クラス
2	平成9年度	芥明	食品科学科2年	全く無し	39	216	97.6%(200)	60	33	18クラス
3	平成10年度	芥明	食品科学科3年	全く無し	37	204	99.4%(42)	55	6	18クラス
4	平成11年度	芥明	食品科学科1年	週3回実施	42	215	99.9%(13)	9	1	1位/18クラス
5	平成12年度	菊池農業	食品化学科1年	週1回実施	41	214	99.4%(52)	84	16	1位/16クラス
6	平成13年度	菊池農業	食品化学科2年	週1回実施	40	211	99.1%(71)	56	21	1位/16クラス
7	平成14年度	菊池農業	食品化学科3年	週1回実施	40	183	99.0%(73)	73	55	1位/16クラス
8	平成15年度	菊池農業	食品化学科1年	週2回実施	40	195	99.4%(44)	13	6	1位/15クラス
9	平成16年度	菊池農業	食品化学科2年	週2回実施	39	187	99.6%(31)	31	6	1位/15クラス
10	平成17年度	菊池農業	食品化学科3年	週2回実施	39	179	99.6%(29)	32	14	1位/15クラス
11	平成18年度	菊池農業	食品化学科1年	週2回実施	40	193	99.9%(8)	4	0	1位/15クラス
12	平成19年度	菊池農業	食品化学科2年	週2回実施	39	194	100.0%(2)	3	1	1位/15クラス
13	平成20年度	菊池農業	食品化学科3年	週2回実施	39	183	99.9%(4)	5	3	1位/15クラス

この「書かせる指導」をクラスでやり始めてから、校内では出欠状況が常に一番良いクラスになるという効果がありました。私が担当していたクラスは11年間連続で校内一でした。「書かせる指導」をやっている気づいたのですが、この指導はクラス全体の全科目指導として全学校生活指導であり、「心幹」を育む指導と捉えるようになりました。

資料 1 2 - 1		
平成20年度 3年食品化学科 部活動・特別活動 記録表 (自立心の記録でもある。) 3/3 現在		
4	大鼓・鼓送	① 両陣営参加者 ② 大鼓隊副部長(鼓送係)・大鼓隊副部長(鼓送係)・大鼓隊副部長(鼓送係)・大鼓隊副部長(鼓送係)・大鼓隊副部長(鼓送係)・大鼓隊副部長(鼓送係)・大鼓隊副部長(鼓送係)・大鼓隊副部長(鼓送係)・大鼓隊副部長(鼓送係)・大鼓隊副部長(鼓送係) ③ 第1回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)・第2回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)・第3回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)・第4回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)・第5回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)・第6回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)・第7回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)・第8回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)・第9回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)・第10回全国高等学校吹奏楽コンクール(大鼓)
6	プロコン発表	① 音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン) ② 音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン) ③ 音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)・音楽コンクール(プロコン)
10	音楽発表	① 音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏) ② 音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏) ③ 音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)・音楽発表(演奏)
11	パノシオン 音楽発表特別発表	① 音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン) ② 音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン) ③ 音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)・音楽コンクール(パノシオン)

次に「部活動・特別指導 記録表」ですが、これは、いつも定期考査や通知票の成績等送付時に、学業成績だけではなく、部活動や特別活動など、生徒が行った活動の記録を常に更新して最新のデータを一覧表にして送っていました。出欠状況や「文章を書く」という事だけではなく、いろいろな分野で頑張って活躍してくれるようになったということで、参考までに載せています。



【中学校生活と高校生活の比較】		中学校 人数	→	高校 人数
①欠席数	1週間に1日以上	( 7名 )	→	( 0名 )
	1ヶ月に1日以上	( 2名 )	→	( 0名 )
	1学期に1日以上	( 10名 )	→	( 0名 )
	1年間に1日以上	( 10名 )	→	( 1名 )
	無欠席	( 10名 )	→	( 38名 )
②遅刻数	1週間に1日以上	( 7名 )	→	( 0名 )
	1ヶ月に1日以上	( 4名 )	→	( 0名 )
	1学期に1日以上	( 5名 )	→	( 0名 )
	1年間に1日以上	( 10名 )	→	( 2名 )
	無遅刻	( 13名 )	→	( 37名 )
③早退数	1週間に1日以上	( 2名 )	→	( 0名 )
	1ヶ月に1日以上	( 4名 )	→	( 0名 )
	1学期に1日以上	( 4名 )	→	( 0名 )
	1年間に1日以上	( 7名 )	→	( 0名 )
	無早退	( 12名 )	→	( 39名 )
④欠課数 (保健室へ行ったりした等)	1週間に1日以上	( 3名 )	→	( 0名 )
	1ヶ月に1日以上	( 6名 )	→	( 0名 )
	1学期に1日以上	( 8名 )	→	( 0名 )
	1年間に1日以上	( 13名 )	→	( 2名 )
	無欠課	( 9名 )	→	( 37名 )
⑤提出物	ほとんど未提出	( 8名 )	→	( 0名 )
	たまに提出	( 5名 )	→	( 1名 )
	半分程度提出	( 11名 )	→	( 5名 )
	たまに未提出	( 4名 )	→	( 6名 )
	ほとんど提出	( 11名 )	→	( 27名 )
⑥授業態度	常に駄目	( 5名 )	→	( 0名 )
	科目により変化	( 8名 )	→	( 3名 )
	人に迷惑はかけない	( 11名 )	→	( 15名 )
	周囲と同程度	( 14名 )	→	( 17名 )
	常に積極的	( 11名 )	→	( 14名 )
⑦家庭学習 (1日にどの位やっていたか?)	気が向いた時	( 31名 )	→	( 27名 )
	30分以上	( 6名 )	→	( 6名 )
	1時間以上	( 1名 )	→	( 5名 )
	2時間以上	( 1名 )	→	( 1名 )
	3時間以上	( 0名 )	→	( 0名 )
⑧礼儀(挨拶)	誰にもしない	( 0名 )	→	( 0名 )
	たまにする	( 8名 )	→	( 5名 )
	特定の人へのみ	( 6名 )	→	( 3名 )
	相手からした時のみ	( 5名 )	→	( 2名 )
	誰にもきちんと	( 20名 )	→	( 28名 )

次に高校2年生の3学期に、クラス全員に対して「中学校時代と比べてどうだったか?」というアンケートの回答結果です。少し見にくいですが、例えば中学校の時には週に1回欠席していた生徒が7名いましたが、高校入学後は0名になっております。

【中学校生活と高校生活の比較】		中学校 人数	→	高校 人数
⑨言葉遣い	敬語は遣わない	( 2名 )	→	( 0名 )
	敬語を遣えない	( 1名 )	→	( 0名 )
	特定の人にのみ	( 7名 )	→	( 1名 )
	だいたいきちんと	( 22名 )	→	( 24名 )
	誰にもきちんと	( 27名 )	→	( 14名 )
⑩服装頭髪	常に乱れていた	( 3名 )	→	( 0名 )
	横着の時のみきちんと	( 3名 )	→	( 5名 )
	先生次第	( 3名 )	→	( 2名 )
	だいたいきちんと	( 21名 )	→	( 25名 )
	常にきちんと	( 9名 )	→	( 7名 )
⑪行事参加	常に迷惑をかけていた	( 0名 )	→	( 0名 )
	何もしなかった	( 8名 )	→	( 2名 )
	最低限やった	( 14名 )	→	( 18名 )
	積極的	( 10名 )	→	( 10名 )
	役員なども務めた	( 7名 )	→	( 9名 )
⑫部活動	未加入	( 1名 )	→	( 7名 )
	途中でやめた	( 3名 )	→	( 8名 )
	他の部活に変わった	( 2名 )	→	( 2名 )
	一応3年間続けた	( 17名 )	→	( 18名 )
	3年間休まずに行った	( 16名 )	→	( 14名 )
⑬友人関係	友人ができなかった	( 0名 )	→	( 0名 )
	友人が1~2名	( 3名 )	→	( 1名 )
	友人が数名	( 3名 )	→	( 7名 )
	友人多数+親友	( 16名 )	→	( 10名 )
	友人多数+親友	( 20名 )	→	( 21名 )
⑭異性関係	嫌われていた	( 0名 )	→	( 0名 )
	間わりなし	( 7名 )	→	( 7名 )
	異性の友人はできた	( 8名 )	→	( 9名 )
	異性の友人と仲良かった	( 12名 )	→	( 4名 )
	交際した	( 12名 )	→	( 19名 )
◇中学校と比較して悪くなったものは? (①~⑭で記入)				
( ⑫ )				
合計 ( 1 ) 個				
◇中学校と比較して変わらないものは? (①~⑭で記入)				
( ⑩ ⑬ )				
合計 ( 2 ) 個				
◇中学校と比較して良かったものは? (①~⑭で記入)				
( ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑪ )				
合計 ( 10 ) 個				

他にも、欠席・遅刻・早退に加え、生活態度など、高校生になって大きな改善が見られました。そういった集計結果をここに記しています。

## 資料 7 - 1

### 熊本県立菊池農業高等学校食品化学科 農業鑑定「食品科学の部」表彰一覧

(平成 12 年度～平成 25 年度)

全国大会出場者延べ 30 名、優秀賞受賞 28 名。

★『熊本県は農業関係高等学校が 12 校あり、そのうち、9 校に食品関連学科・系列・コースがある。各学校 6 名の出場枠があり、だいたい 50 名程度で競われる。最優秀賞受賞者 1 名と優秀賞受賞者 2 名が全国大会出場となり、4 位・5 位も全国大会出場する場合もある。』

次にクラス全体ではなく、「心幹を育む指導の効果」が特に浸透した生徒の各種競技大会の結果になります。最初に少しお見せしましたが、農業鑑定競技は全国大会までつながっているといたしましたが、私が勤務していた菊池農業高校食品科学科から全国大会に行った生徒が延べ 30 名で、そのうち優秀賞を受賞した生徒が 28 名ということでありました。

## 資料 7 - 2

### 熊本県立熊本農業高等学校食品工業科 農業鑑定「食品の部」表彰一覧

(平成 28 年度～平成 30 年度)

全国大会出場者延べ 7 名、  
**最優秀賞受賞（日本一） 3 名、**  
優秀賞受賞 5 名。

菊池農業高校の後、2 年間の教育委員会勤務を経て熊本農業高校というところに赴任したのですが、ここには 3 年しかいませんでした。もともと学力が少し高めの生徒が入ってきますので、農業鑑定競技で日本一になった生徒が 3 名います。平成 28 年度に日本一になった生徒は、先日（令和 6 年 3 月）、九州大学大学院を卒業し、優秀論文賞のようなものを頂いたそうです。



**資料 7 - 4**

**熊本県立鹿本農業高等学校食品工業・科学科  
農業鑑定「食品の部」表彰一覧  
(令和元年度～)**

**全国大会出場者延べ6名、優秀賞受賞6名。**

今、私が勤務している鹿本農業高校（6年目）でも全国大会に6名、優秀賞も6名、去年も2人が全国大会に出場して、優秀賞を取ってくれました。こういうところにも「書かせる指導」が指導の根幹としてつながったのではないかと考えています。

また、せっかく「書かせる指導」で文章を書く機会が多くなりましたので、いろいろなコンテストに参加しました。菊池農業高校時代に松下政経塾が、中高生向けに立志論文コンテストを開催していたのですが、そこで日本一の最優秀賞を2回取らせていただきました。また全国大会レベルでも幾つか、賞を頂きました。

熊本農業高校でもそのようなコンテストに応募して、いくつかの表彰などを受けたりしました。

**資料 9**

**「卒業生数」**

年度卒 学科名	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
	H 9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21
菊池農業高校	農業科	27	19	31	28	25	32	30	29	35	30	37	33
	園芸科	26	30	24	26	19	32	33	34	33	31	32	38
	畜産科学科	20	28	36	35	33	37	32	39	38	34	40	28
	食品化学科	28	30	36	30	35	40	37	41	39	38	36	39
	生活文化科	22	27	24	23	31	32	39	38	29	33	33	34
	合 計	123	134	151	142	143	173	171	181	174	166	178	172

次は卒業生数です。菊池農業高校の定員は1学年200名（40名×5学科）ですが、スラ

イドを見ていただくと、1997年度の卒業生は123名で、60～70名が辞めていることがわかります。私が担任をした生徒が卒業したのは2002年度ですが、この年は173名が卒業しています。辞めている生徒もいますが、それでも数字の改善はかなり見られました。

**「四年制大学進学実績」**      平成21年3月31日現在

大学名	年度卒												合計	
	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09		
	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21		
国立	筑波大学						1		1		1		3	
	熊本大学				1								1	
	宮崎大学					1	1	1		1			4	
	鹿児島大学							1	1	1		1	4	
	長崎大学								1				1	
	琉球大学					1	1		1			1	4	
	岡山大学		1											1
	島根大学									1				1
	黒龍江大学(中国)						1							1

菊池農業高校食品系学科は1964年学科創設以来、合格者「0」であったが、私が菊池農業高校に赴任して最初に3年間持ち上がったクラスから2002年度に初めて合格者が出た。

次に四年制大学への進学者数です。菊池農業高校食品化学科は1964年に設置された学科ですが、それまで国公立大学には1人も合格者がいませんでした。ですが、2002年に私が担任し、「書かせる指導」を3年間おこなった生徒の中から琉球大学に1人合格しました。そこから毎年、食品化学科から、1人、2人、多い時には3人合格するという流れができていきました。

大学名	年度卒												合計	
	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09		
私立	東京農業大学		1	1	2	2	2	1	1	1	2		13	
	東海大学					1	3	2	2		3	2	13	
	熊本学園大学					3	4	4	2	5	4	7	29	
	崇城大学					2	2		1		3		8	
	九州看護福祉大学				1	1	1	1	2			1	7	
	九州ルーテル大学		1											1
	尚綱大学									1	1	2	4	
	南九州大学			1										1
	日本文理大学						1							1
	日本獣医畜産大学						1							1
	東海大学								1					1
	帝京科学大学						1							1
	中部大学								1		1			2
	酪農学園大学			1			1			1	2			5
	函館大学	1			1	1								3
	福岡経済大学										1			1
	聖学院大学										1			1
	立正大学								1					1
	九州産業大学											1		1
合計	1	4	4	3	12	19	11	15	11	18	16			

そして次に示しているスライドは私立大学も含めた四年制大学への進学状況です。1998

年から 2001 年の 4 年間の私大合格者は、1, 4, 4, 3 人です。それが、私が担任をした学年から 12 人と 2 桁に届くようになりました。このように全体的な効果にも繋がったのではないかと思います。もちろん私 1 人によるものだけではありませんが、波及効果はあったのではないかと思います。

## 資料 10

●当時九州大学アドミッションセンター準教授の渡辺哲司氏からも注目して頂き、著書『「書くのが苦手」をみきわめる』に掲載して頂いた。

●その後も幾度となく様々な機会を頂き、菊池農業高校にも2回来校された。現在、渡辺哲司氏は文部科学省の教科書調査官として活躍されているが、2023年1月1日発行の『指導と評価』では共同執筆して頂いた。

「心幹を育む指導の効果」についてであります。もともとはクラス独自の取組みだったのですが、思わぬ成果の拡がりから、講演会や、いろいろな講話とか、本日もそうですが全国で開催されるさまざまな研修会や研究・実践発表等に声をかけていただくようになりました。もう 100 回を超えるような依頼を頂いています。去年は特に企業経営者の研修会で 10 回ほど、「高校における人材育成」というテーマで講話をさせていただいたりもしました。

今、文科省におられる方ですが、九州大学でアドミッションセンター準教授をされていた渡辺哲司先生から、著書である『「書くのが苦手」をみきわめる』に少し紹介していただきました。また『指導と評価』という教育雑誌に共同執筆をさせていただいたりもしました。このようなことは全然思いもしないところでした。

## 5 卒業生からの聴き取り

★高校教員になっているのが、20名程います。

★大学に行った生徒は、周囲や先輩の学生のエントリーシートの志望理由書やレポートの援助をよくやっているようです。また、レポートや小論文を評価され、「表彰」を頂いたりしている。

最後に菊池農業高校で「書かせる指導」をおこなった生徒から30歳になった時点で聴き取った声を紹介させていただきます。

菊池農業高校の卒業生が「あの時はきつかったが、先生の『書かせる指導』を受けて非常に良かった」と耳にすることが頻繁にあったことから、彼らからアンケートを取ってみることにしました。その際、就職した生徒、大学に進学した生徒など、進路先は偏りがないようにまんべんなく取るようにしました。卒業生の3分の1ぐらいから回答がもらえたので、特に代表的なところを挙げさせていただきました。

菊池農業高校に14年いましたが、「書かせる指導」をおこなった生徒で、後に高校教員になった生徒が20名ほどいます。また大学に進学した生徒は、周囲や先輩の学生のエントリーシートや、志望理由書、レポートの指導や援助をやっていたとよく耳にしました。また、筑波大学に行った生徒が「あまり周りの人は文を書けないのですよね」というようなことを言っていたのは驚きました。大学に進学した生徒はレポートや小論文の評価が非常に高く、いろいろと大学の表彰等も頂いたという話もよく耳にしました。

## 5 卒業生からの聴き取り

★仕事で報告書作成等がスムーズにできる。

★営業成績がいいという話しもよく聴きます。

★昇進試験に役立った。

私が3年間担任した生徒については、留年することなく4年で大学を卒業しています。就職した生徒からは、仕事で報告書作成がうまくいったとか、営業成績につながっていますとか、昇進試験に役立ちましたという連絡をもらったり、女子生徒の結婚式（今まで110回程度出席）に行くと、勤務先のオーナーや店長の方と結婚しているケースが非常に多かったです。仕事をしっかりするので、かわいがられるようになり、認められてお付き合いをするようになるというパターンがほとんどだったようです。

## 5 卒業生からの聴き取り

★女子は、オーナーや店長と結婚するパターンが頻繁に見られる。

★保育園で保育士との信頼醸成に役立った。

★自分のこどもにもやらせたい。

また保育園では、保護者と保育士の間で連絡帳のやりとりをしますが、他の保護者さんは「よろしくお願ひします」など、1行ほどしか書かないそうですが、私が担任した生徒は、記入欄があったら絶対埋めなければいけないということが頭にあるので、保育士との信頼

醸成に大変、役立ったと耳にすることも多々あり、これも驚きました。自分の子どもにも先生の「書かせる指導」を受けさせたいということもよく言ってくれます。

## まとめ

これらの多方面の様々な結果から「書かせる指導」が強く影響していたと考えている。正に、「書かせる指導」は**クラス全体の全科目指導そして全学校生活指導**であり、「**心幹**」を育む指導であった。と私は捉えている。

まとめですが、これらの多方面のさまざまな結果から、私がやっていた「書かせる指導」が強く影響していたのではないかと考えています。「書かせる指導」は、クラス全体の全科目指導、そして全学校生活指導であり、「心幹」を育む指導と確信できるようになりました。

菊池農業高校から異動し、教育委員会に行ったり、熊本農業高校では同窓会の事務局の仕事を主でやったりなど、これまでとまったく違い、生徒との関りが薄い仕事内容が多くなってきました。また、現在は進路指導部長という仕事を主にやっていますが、これも担任ではない為、フルスペックでの指導が難しくなっています。クラス経営で3年間同じクラスを持ち上がって、指導をしてきたことが効率的に指導できた理由でもあるので、現在の置かれた状況は「書かせる指導」を実践するうえでは難しい環境となっています。しかし、さきほど紹介した教え子で教員になり、同じように「書かせる指導」を継承している者が一人はいることから、今後は後につながるようなことができればと思っています。また、教育現場以外での活用に最近は重きを置いています。

本日、お話しさせていただいたことは一学校、一教員のやったことで、視野が少々狭いものかもしれませんが、これで私の発表を終わらせていただきます。ただ、一教員でもこれくらいの成果を上げることができることも事実ではあります。

ご清聴ありがとうございました。

---

【山地・司会】 宮田先生、どうもありがとうございました。それでは最後に杉森先生、ご準備をお願いします。■

全体会 2 ○ 報告 4

学生の成長を最優先する大学へ：入学前教育、自校教育、初年次教育の包括的な取り組み

■ 杉森 公一（北陸大学 高等教育推進センター長，教授，教務部長）

どうぞよろしくお願いいたします。

本日は「学生の成長を最優先する大学へ」という演題でご依頼をいただいておりますが、私からは本学でどのような取り組みをしているかという大学の現場からのメッセージをご紹介させていただきたいと思っております。

**報告者の自己紹介** 杉森公一 すぎもりきみかず  
北陸大学高等教育推進センター センター長・教授・教務部長

**略歴**  
1998年富山県立砺波高等学校普通科卒業  
2002年筑波大学第一学群自然科学類卒業 学士(理学) 化学  
2004年筑波大学大学院修士課程教育研究科教科教育専攻修了  
修士(教育学) 理科教育  
2007年金沢大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了  
博士(理学) 計算化学  
2007年金城大学研究員 情報処理教育・統計・理系基礎教育  
2010年金城大学医療健康学部助手 2011年同 助教 理学療法  
2013年金沢大学大学教育開発・支援センター客員研究員(兼任)  
2013年金沢大学大学教育開発・支援センター准教授 FD・IR  
2016年金沢大学国際基幹教育院高等教育開発・支援部門准教授  
2018-2019年タフツ大学客員研究員。(サバティカル) FDセンターに修行へ  
2021年名古屋大学高等教育研究センター国内客員研究員(兼任)。ハ  
イフレックス(対面とオンラインの同時)授業設計  
2021年より現職。  
『ROBOT-Proof: AI時代の大学教育』 共訳、森北出版  
週刊医学界新聞(看護号)にて「教えるを学ぶエッセンス」連載中  
<https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/series/203>  
ほか、年間20件(大学)の学外研修講師、年間10件(高校探究)助言、  
大学基準協会・日本医学教育学会・SPARC・山梨県立大学など委員

私自身の自己紹介を少しさせていただきます。先ほど、山地先生からは過分なご紹介をしていただきましたが、私自身は富山県出身で、大学時代を除いては北陸 3 県から動いていません。富山県の地元の中学、高校の化学の教員を目指していたのですが、2000 年代というのは就職氷河期で、教員採用も大変厳しい時代でした。2 回受けて、2 回とも落ちて、地元の大学院に進学をして、縁があって、金城大学、金沢大学で、こういった仕事をさせていただきました。

私に縁があったのは理学療法教育です。情報処理教育ということで、コンピューター室の教務助手から始まり、進めていましたが、途中、大学院の母校である金沢大学では FD、データ分析の専門家としてオンライン教育の実施を支えることや、『ROBOT-Proof: AI 時代の大学教育』という本を共訳させていただいたり、保健系の教育に関与していたという縁で、週刊医学界新聞というところで、私がやってきた教育支援、大学の授業作りについて連載をさせていただいたりもしました。高校でも探究学習の支援が 2014 年ぐらいからずっと続いていて、県内を中心に年間 10 校ほど支援をさせていただいているところです。

## 北陸大学のプロフィール

- 石川県金沢市の私立大学、2キャンパス
- 1975年:薬学部のみ単科大学として創立
- 2017年:3学部を改組・新設
- 2020年:国際コミュニケーション学部  
心理社会学科 開設
- 2023年:医療保健学部 理学療法学科  
開設
- 2024年:経済経営学部:経済学科 開設  
予定、4学部7学科体制に
- 2025年:創立50周年

**建学の精神**  
「自然を愛し、生命を尊び、真理を究める人間の形成」

**使命・目的**  
「健康社会の実現」

**長期ビジョン**  
「2025年までに学生の成長力No.1の教育を実践する大学となる」

薬学部 薬学科	476
医療保健学部 医療技術学科	253
理学療法学科	62
経済経営学部 マネジメント学科	1,096
国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科	309
心理社会学科	154
計(2023/5/1時点)	2,350

次に本学のプロフィールを簡単にご紹介します。石川県金沢市にあります私立大学です。初めは薬学部のみ単科大学として創立して、先ほど倉部さんからのご指摘にもありましたが、薬学部が6年制になった時に、大変多く設置されたこともあり、国家試験合格についても苦戦をしているところです。しかしもうすぐ50周年ということで、北陸3県の薬局、調剤薬局、病院、ドラッグストア等の薬剤師は、本学出身者が大勢を占めるという伝統を持っているという大学です。

国際コミュニケーション学部では留学生も含めた国際教育を行ったり、理学療法学科を新設したりと、本学は医療系を中心としながらも、文系学部として経済経営学部と国際コミュニケーション学部を設置するなど、文理医にわたった総合大学として発展しています。建学の精神は「人間の形成」、そして「健康社会の実現」を目的としています。長期ビジョンとして掲げるのが本日の本題にあたります「学生の成長力 No.1 の教育を実践する」です。



## 概要に代えて

- 私立大学の多くは、定員割れとなっている現状を理解しつつ「変わることのできない大学(教員)」と「変えることのできない大学(法人)」とが双方で苦悩しているのが現状ではないだろうか。
- 先ず教員は、自大学を選んでくれた学生の成長を何よりも一番に考え、学生やその家族が満足感を感じることのできる心のこもった教育(対応)ができること。一言で言うと「学生の成長を最も考える大学であること」こそ、これからの社会で生き残ることができる大学と感じている。
- 例えば、入学前教育やリメディアル教育は何時から、どのように始めるべきか。入学までに身につけて欲しい学ぶ力(学力の3要素)への取り組みは、早く始めるに越したことはない。年内入試では、合格直後から、一人ひとりの入学予定者や家族に寄り添い、入学後やその先の目標達成のスタートとして意味のある活動を真剣に考えるべきではないか。
- もし、教職員及び法人が一体となって、入学前から有意な個別入学前アドバイスなどを独自に見出し、取り組むことができれば、入学後の中退者も減少するのではないだろうか。

4

このスライドは「概要に代えて」ということで、このタイトルをどうしようかということとを真っ先に相談した、普段高校生や高校の進路指導の教員と相対しているアドミッションセンターオフィサー職員の方からもらったメッセージです。

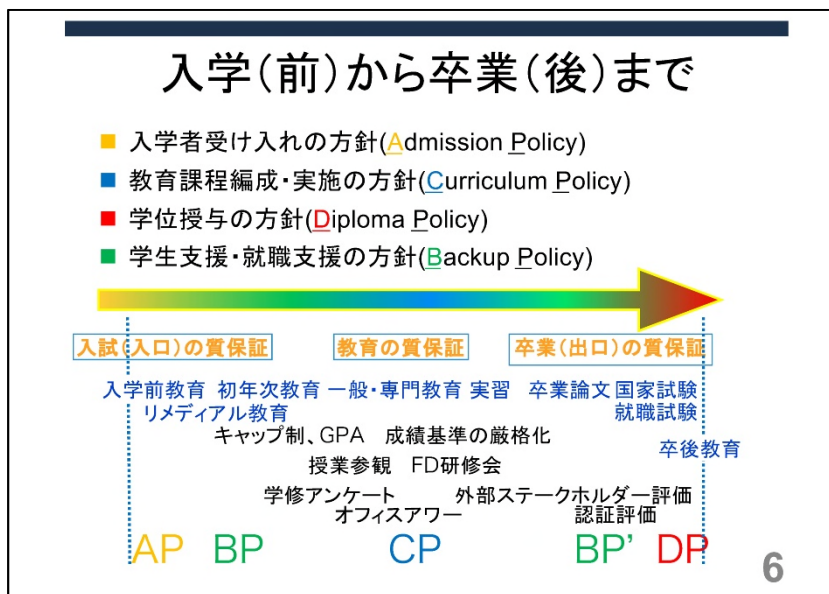
それによると、「私たちはこういう問題を抱えている。私立大学の状況もそうですし、教員は学生の成長を考えている。教育をしていかなければいけない。そうしないと社会で生き残る大学にはなれない」ということでした。ただ対応としては、「入学前教育やリメディアル教育、学力の3要素への取り組みに対して、どうにか入学予定者やその家族に寄り添いながら意味のある活動を真剣に考えていく。そのためには教職員と法人が一体となって、アドバイス、取り組みに務めていかなければいけないのではないか」ということです。

このように私は本日参加されているアドミッションセンターの皆さんと同じ立場の方の気持ちを、代弁したいと考えています。



さて、「入学前教育から初年次教育、学部教育と社会の『節目』をつなぐ」ということで、ここでは階段状に示していますが、私立大学、国公立大学はさまざまな差があるとはいえ、入試から入学前教育へ、入学前教育から初年次教育へ、そして初年次教育から高年次、4年次、6年次、そして社会への移行という、さまざまな節目があります。この節目節目で、大学生の中退や留年、国家試験の不合格などのさまざまなイベント、学生を支えなければいけないということがあるかと思えます。

お手元の資料には写真は載せていませんが、最近では4月に富山第一高校で1年生400名の探究学習支援をしました。車座になっていますが、大学1年生も同じです。690名が体育館に集まって、大学での学びを学部・学科を超えて話をします。ここからがスタートだということ、私の役割として幾つか仕掛けていくところです。



この節目を考えると、大学の方針は3つのポリシーと呼ばれるものを持っているということはもちろんですが、1つ足りないと考えてきました。Admission Policy, Curriculum Policy, そして Diploma Policy で、A と C と D があるのですが、以前、松本大学の教務部長からお聞きしてそのとおりだと思ったのは、B が足りないということです。Backup です。

Admission Policy は多様な入試形態を通じ、入口の段階で学力の3要素の保証は入試問題で行いますが、その補いとして入学前教育や初年次教育がありますし、リメディアル教育は私も長く担当をしています。

真ん中は Curriculum Policy で教育の中身の保証です。一般・専門教育、実習をどうするかということ。そして Diploma Policy, 出口の保証です。卒業論文をしっかりと書いて、国家試験、就職試験に備えて、そして卒業後教育にもつなげていくのです。

3 Policy それぞれの間(あいだ)には小道具と呼ばれるもの、GPA, 成績基準の厳格化, FD 研修会, 学生へのアンケート, 認証評価など、さまざまなものがあります。しかし、その Backup Policy には、大学生に対して、われわれ教職員がどのような手立て、例えば通常

の正課の仕組み以外に、どのように面談をしたり、サービス・プログラムを提供したりしていくかというポリシー、介入の度合いについては、まだまだ曖昧ではないかと思えます。



2025年までに学生の成長力№1の教育を実践する大学へ  
(Vision50)

大学ができることは

## 入学前教育、自校教育、初年次教育

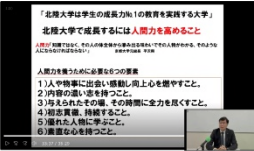

7

大学としてはサポートポリシーとして明文化されているところもありますし、ネットワーク組織を形成することで、包括的な支援をされている大学もあるかと思えます。

このように A, B, C, D の 4 つのポリシーを提案してきましたが、大学ができることは何でしょうか。本学のキャンパスに来ていただきますと、入った所にこのようなポスターが掲げてあります。大学に入った学生が卒業する時に、どのような像になっているかです。この 1 というフラッグのような物が並んでいますが、ありありと想像できるような形で、一人一人の物語を大切にしていける、まずはこれを示すということが必要ではないかと思えます。

## 入学前教育・自校教育

- 入学前: 理事長レクチャー
  - 大学リーダーが新生に語る  
大学の歴史・なりたち
  - 自大学の、入学後の学びを想像する
- フレッシュマンセミナー(入学時オリエンテーション)、  
「北陸大学の学び」「基礎ゼミナール」(初年次教育)
  - 学部混成690人の  
ワールドカフェ
  - 大学で学ぶことの  
目的と意義を  
分かち合う

8

具体的に、入学が決まった学生に大学はどのように支援をしているかと言いますと、入学時には、基礎的な学力に対するプレースメントテストを用意はしていますが、入学前にあたっては、知識面の確認の他に、自校教育に今年度は特に力を入れています。

理事長が直接語り掛けます。これは保護者、保証人の方にも見ていただきたいのです。北陸大学は約50年前に立ち上がり、そして加賀藩の松雲公が掲げた医療者教育を借りてきて、人間力を高めることを大切にしている伝統を持っていると、リーダーが新入生にオンデマンドビデオで語りかけ、歴史や成り立ちを知ります。大学に入学する前に知らないことは多いと思うので、自大学での入学後の学びを想像することからスタートします。

そして入学後、すぐに1週間の入学時オリエンテーションがあります。総合大学ですと、学部混成690人が、各学部・学科が混ざった形のワールドカフェと呼ばれる形式のアクティブラーニングの技法を使います。「えんたくん」という東京工業大学で開発された円形の模造紙を使い、言語化をします。

まずは口頭で4月から取り組みたいことについて話を聞きながら、見ながら、話しながら、そしてどんどん混ざっていくのです。他のグループに出かけてまた持ち帰ってきます。大学で学ぶことの目的と意義を分かち合っていきます。

そしてこのフレッシュマンセミナー「北陸大学の学び」という自校教育ですが、今週の月曜日に最終回が終わりました。この入学時のメンバーは各学部長、学科長、先輩からの体験談もビデオで学びながら、実は毎週月曜の1限に集まっているのです。今週の月曜日には、「学びの指針」、大学で卒業した時にどのような姿をもって、どのようなその目標を、なぜ、どのように達成していこうかということ、ラーニングコンパスとして作成し、グループ内共有を終えたところまでです。

## 初年次教育の設計の実際(医療保健学部)

週刊医学界新聞・連載第5回「初年次教育を成功させる工夫とは？」(杉森)

— 節目 (アーティキュレーション) :

- 高校3年生から大学1年生への変容を意識づける
- キャリア形成・多職種連携

— 深い学びと協働:

- ラーニングリテラシー(学ぶ力)をつける段階的な活動
- 基礎科目と初年次教育の相互乗り入れ
- カリキュラム=学びの履歴となるようにスキルを繰り返し活用し「統合」を促す

● 表 北陸大学医療保健学部医歯学系新学科の「基礎ゼミナール」授業計画・学習活動

※ 6/4日の授業が行われる「自然科学概論」では、多岐にわたる学習活動で不足しがちな個人での情報収集や探求を奨励とする。

日	主 題	学習活動
4/13 第1回	オリエンテーション	・授業ガイダンス ・ゼミの立ち上げ、担任紹介 ・ゼミメンバー自己紹介 ・メンバーグループ
4/20 第2回	ラーニングリテラシー① ノート作り	・ノート、メモの取り方 ・ノートについて
4/27 第3回	対人関係、心の健康について	・講義(スクールカウンセラー)
5/11 第4回	臨床検査技師、臨床工学技士の仕事について学ぶ	・講義(各職種の実験)
5/18 科目関連講義	自然科学概論:各名が興味あるサイエンスの話題を物販で紹介する	科学的読解を得る(書籍の利用法、図書館の利用法)
5/18 第5回	ラーニングリテラシー② サイエンス	・ライティングの基礎(文章動機と決意書)
5/28 科目関連講義	自然科学概論	・読書の作法(個人読書の準備)
5/28 第6回	ラーニングリテラシー③ 情報検索	・情報の検索(検索、文献、書籍、インターネット、図書館等を用いた検索) ・自然科学概論のテーマで、相互に支援しながら情報検索
5/30 科目関連講義	自然科学概論	・個人発表の美談(ポスター展示と30秒スピーチ)
6/3 第7回	ラーニングリテラシー④ ふりかえり	・ふりかえりの意味と方法 ・自然科学概論の発表をふりかえり ・第8-10回の導入 ・第8-10回のグループメンバー発表
6/8 第8回	読む力、まとめる力をつける①	・読書3通り ・グループでのテーマ(問い)を決める
6/15 第9回	読む力、まとめる力をつける②	・情報収集・分析・まとめ ・ポスター作成
6/22 第10回	読む力、まとめる力をつける③	・発表会(「ポスターツアー」)
6/29 第11回	第8-10回のふりかえり 科目と職業のつながり グループワーク①	・第8-10回のふりかえり ・第11-15回の導入 ・シナリオを読む ・教員インタビュー
7/6 第12回	科目と職業のつながり グループワーク②	・ポスター作成
7/13 第13回	科目と職業のつながり グループワーク③	・発表会
7/20 第14回	まとめる(前期のふりかえり)	・発表会
7/27 第15回	まとめる(前期のふりかえり)	・30秒プレゼン、キャリアワーク②

※1: 学習内容に関するポスターをグループで作成した後、グループを再編成し、全てのポスターの内容を発表し合って共有するグループワークの方法。  
 ※2: 成績表を提示して各発表を評価し合うが、感想や評価を共有し合う手法、グループの編成を行わないのがポスターツアーとの相違点である。

この自校教育は全学部の学生が集まっているのですが、各学部・学科では、「基礎ゼミナール」という形で、初年次教育を設計し実施しています。これは1年間通して、初年次教育を受けるのですが、スライドは一例です。医療保健学部という医療系の学部では、オリエンテーションから始まって、授業ガイダンスなどがありますが、ラーニングリテラシー、つま

146

り学ぶ力としてノートの取り方とか、対人関係の作り方、そして情報検索の仕方から、読む力、まとめる力、そして科目と職業がどうつながっていくかということで、ここでは教員にインタビューをしながら、自分たちの言葉でカリキュラムマップを作り直します。

「私が今、習っている基礎の化学や生物学がどのような臨床系の科目につながるのか」ということを描き、ポスター発表をすることで、科目を乗り入れながら、段階的にキャリア形成の力を付けていきます。これは節目、アーティキュレーションといいます。高校3年生から大学1年生になったばかりの私はまだ高校4年生、または中学9年生ぐらいかもしれません。それが今、大学に来たのだと、大学1年生になるということを目指しているものです。

基礎科目と初年次教育は相互に乗り入れしながら、学びの履歴を作っていく第一歩をいろいろなスキルを繰り返し使いながら、統合していきます。これは学ぶ力の話をしました。

**リテラシーの育成(データサイエンス教育)**

データの中から  
世界と未来が見えてくる。

データサイエンス  
AI教育プログラム始動。

2023.02.02 教員校とデータサイエンス教育の取り組み  
2022.12.21 Tableau企業分析AWARD2022で3位入賞！  
2022.12.10 神田外語大等「インバーティブ・クラスルーム」  
2022.12.01 第1回Tableau大学コンテストにて本学の  
2022.10.24 北見大学データサイエンス・AI教育プロジェクト

TOPICS  
TOPIC-08

<https://www.hokuriku-u.ac.jp/datascience/>

BYOD(1人1台ノートPC)、全学共通プログラム化  
モノのインターネット(Internet of Things: IoT)からあふれる圧倒的な情報の洪水から、分析を通してビッグデータを理解し活用する能力、情報の解釈と意味を見いだすことを可能にする「データリテラシー」を身につける

情報リテラシー科目

科目名	単位数	履修年次	履修人数	履修率
情報リテラシーⅠ	1	1	1,200	100%
情報リテラシーⅡ	1	1	1,200	100%
情報リテラシーⅢ	1	1	1,200	100%
情報リテラシーⅣ	1	1	1,200	100%
情報リテラシーⅤ	1	1	1,200	100%
情報リテラシーⅥ	1	1	1,200	100%
情報リテラシーⅦ	1	1	1,200	100%
情報リテラシーⅧ	1	1	1,200	100%
情報リテラシーⅧ	1	1	1,200	100%

心算計算入門科目

科目名	単位数	履修年次	履修人数	履修率
心算計算入門Ⅰ	1	1	1,200	100%
心算計算入門Ⅱ	1	1	1,200	100%
心算計算入門Ⅲ	1	1	1,200	100%
心算計算入門Ⅳ	1	1	1,200	100%
心算計算入門Ⅴ	1	1	1,200	100%
心算計算入門Ⅵ	1	1	1,200	100%
心算計算入門Ⅶ	1	1	1,200	100%
心算計算入門Ⅷ	1	1	1,200	100%
心算計算入門Ⅷ	1	1	1,200	100%



また、本学が一昨年度から力を入れているものにデータサイエンス教育があります。今は1人1台のPC、BYOD (Bring Your Own Device) といいますが、高校でも1人1台のPCが与えられます。GIGA スクール構想などでもあったように、2020年からは遠隔教育も含めて、小中高も大きく変わってきました。それと同時に、本学でも、1人1台ノートPCの状態、データサイエンス教育を共通科目で必須化しました。これは医科系だからできるとか、理系だからできるということではなくて、文系も理系も共通のものです。

共訳をした『ROBOT-Proof: AI時代の大学教育』という本の中で、これから人がAI時代の中で身に付ける力は、技術を知る力と、データを読み解く力と、人間だけが持つヒューマンリテラシーがないと、打ち勝っていけないということを書かせていただきました。

文部科学省  
令和5年度数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度  
**特に先導的で独自の工夫・特色を有するプログラムとして  
「プラス」に選定**

認定制度が始まった過去3年間で、  
**全国私立大学では5校目、文系では2校目**

数理・データサイエンス・AI教育プログラム

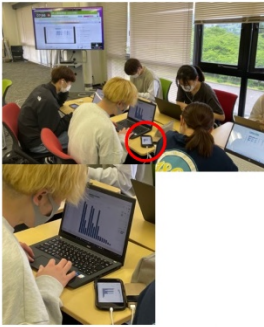
 <p>リテラシー レベル 全国 297大学 認定</p> <p>数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 リテラシーレベル</p> <p>認定有効期限：令和10年3月31日 ※令和5年8月25日現在</p>	 <p>リテラシーレベル -プラス-</p> <p>全国 23 大学が選定 「石川県内選定校」 北陸大学・金沢工業大学 「全国私立文系選定校」 北陸大学・大正大学</p> <p>※「プラス」校は、リテラシーレベル認定校から、特に先導的で独自の工夫・特色を有するプログラム校として選定されます。</p>
---	---

このデータリテラシー、分析を通じてビッグデータを理解して活用をする能力というのは、Excelとか、統計的な手法が使えないと身に付かないのではないかと、日本ではこのデータリテラシー教育はできないのではないかと、私は半信半疑でしたが、あっさりとできてしまいました。

Tableauというソフトを使うのですが、マウスの操作だけで、1万行から数十万行のデータを扱えるツールが、企業等ではもう標準に使われているのです。文系、理系を含む総合大学、しかも文系では2校目として、「リテラシーレベル -プラス-」という認定教育プログラムに選定されました。全国で23大学が選定されていますが、本学はそのうちの1つになりました。特にどのようにやっているかという一例です。

**教育方法・ツールの刷新：教室内反転授業**  
**「情報リテラシー」教室授業の流れの例**

1. タイピングテスト(7分)e-Typing、スコア投稿
2. 本日の授業の目的と到達目標の説明(3分)
3. Tableauハンズオン動画視聴(25分)
4. Tableau課題(ファイル&クイズ)の提出(5分)
5. 前回課題の解説(10分)
6. 情報リテラシーセクションの講義(10分)
7. 自校教材ハンズオン動画視聴(20~25分)
  - 内容によってはPDF資料を見ながらグループワークの場合もあり
8. 課題提出(5分)、終わらなかった学生は宿題



学生の多くはスマホでハンズオン動画を視聴しつつ、ノートPCを操作

これは 1 年生の授業の様子です。情報リテラシーの科目の中では、教育方法やツールの刷新を行い、Excel 教育から脱却した、教室内反転授業と呼ばれる方法です。もはや学生は講義を受けていません。これは注目です。

タブレットや PC の他に、自分の手元のスマホで何をやっているかという、ハンズオン動画を見えています。反転授業というのはお聞きになったことがある方がいるかと思いますが、予習として講義動画を先に見てきて、授業ではグループ学習や復習や宿題をします。授業と講義を反転させるということですが、これは教室内反転授業と呼ばれるものです。

操作のビデオというのは、大きなスクリーンで提示しても細かいところは見えませんし、時間のコントロールも不可能です。学生が早送りしたり、戻ったり、一時停止したり、早く終わった学生は他の学生に自然に教え合っています。終わらなかった学生は宿題ということですが、講義のビデオは改めて割り当てていますので、それを何度でも見返してもいいのです。

達成率は 90% 以上、必修ですので、文系の学生たちは特に喜んでます。今まで Excel が苦手だという学生たちも、学内の売店データとか、食券販売データという手触り感のある自分たちのデータや授業アンケートや学習アンケートなども使います。例えば学生アンケートの匿名化した物をお渡しして、学食がコロナ前後でどう変わっていったのかを調べて新メニューの提案をすとか、それから学内の環境の整備を自分たちはどのように求めていきたいのか、というように具体的な提案や課題解決まで行います。とても巨大なデータを簡単に扱うといった活動をしています。

さて、学生もこれで伸びていくのですが、実際には、全入の状態にありますので、国家試験がある学部もありますし、このような共通の科目群で、初年次教育を手厚くしていったとしても、大学で実際に起こっていることを可視化することが重要です。学生の成長と言いましたが、私は成長圧力や同調圧力を促す強制力を感じさせる言葉なので、実はあまり好きではなく、「微分係数」を最大化すると表現したいところです。4 年後、6 年後で伸びていくその伸び幅が最大の状態で社会につながっていけばいいのではないかと思います。

金沢大学バックアップポリシー

171001 修正  
教育戦略会議

金沢大学は、大学運営に課せられた教育の理念に基づき、多様な人材を育成する立場から、すべての学生が、十分な卒業、十分な就職にいかねるよう、できる限り有利な条件下で教育の提供に与ることができるよう、経済的支援、自律的活の支援、社会的責任の自覚の促進などを目的とした学修支援を行う。本ポリシーは、学生生活の質を向上させるため、その内容が卒業後の就職、かつポリシー（SP・OP・AP）の満足度を卒業後から見えるバックアップ・ポリシー（BP）として、以下の通り定める。

1. 学修支援  
すべての学生が、他者とともに学びあうことによって、学びを自己実践し主体的に学びに参画する自律的学習者（アクティブラーナー）となることを、学習者中心主義の立場から支援する。



KUGSサポートネットワーク 体制図（学生支援体制）



大学で起こっていることを可視化し、学生の成長＝微分係数を最大化する

## 包括的な学修支援へ

### ネットワーク組織から量・質データに基づいた分析 と可視化と実装へ結ぶ

13

これは前職の金沢大学で作ったサポートネットワーク図です。そしてバックアップポリシーです。実際にこれは形になったものもあります。こういったネットワーク組織から、量・質データに基づいた分析はどうすればいいかの事例を2つお伝えします。

### 可視化の事例(1)

- 入学前教育、基礎教育、教養教育、初年次教育、  
専門教育の分断をのりこえる
- 学部B: 留年率(者)の増加、成績評価基準のバラツキ

留年学生へのフォーカス・グループ・  
インタビュー(4セッション)  
↓  
インタビュアーによる洞察の共有  
↓↑  
ボトルネックとなる科目担当者を交えた  
成績評価の検証・検討ヒアリングへの陪席 (教育技法に関するFD活動)

授業時間外でのピアサポート活動への助言

学生代表・スチューデント・アシスタント(SA)へのフォーカス・グループ・インタビュー  
全学的なSA基礎研修(しつかり研修)と、正課外学修支援プログラムの開発  
全学的カリキュラム編成ワーキング、学習環境プランニング専門委員会の設置 **14**

今、私たちがやっている幾つかの事例をお見せしようと思います。入学前教育でやっていること、基礎教育でやっていることが専門教育や初年次教育につながっていく時に、留年率が増加します。成績評価基準にもばらつきがありました。

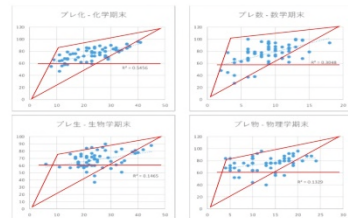
実際に何が起きているかを検討するために、留年学生のフォーカス・グループと呼ばれるインタビューセッションをやり、インタビュアー、私の洞察を加えます。全てのインタビューは文字起こしをしますが、それはそのままの状態では提供しません。インタビュアーによる洞察としてお返しするのですが、ボトルネックとなった科目担当者を交えた成績評価検証や、ヒアリングや陪席をしながら、実際にどのような評価をしていけばいいのかというFD活動とセットで行います。

そこで生まれたことは、授業だけではこれは到底難しいのではないかと、授業時間外でのピアサポート活動をしていかなければいけないのではないかとということで、スチューデント・アシスタントの制度を使いながら、私は基礎研修を行っていったりとか、正課外学習支援プログラムを実際に開発したり、学習環境の整備を行っていくという課題解決につなげていきます。



## 可視化の事例(2)

- 入学前教育、基礎教育・教養教育、初年次教育、専門教育の分断をのりこえる
  - 学部A: 入学前教育・リメディアル教育・基礎教育の連携の不足



データ統合(入学前教育の効果測定)  
→ ワーキンググループでの合意形成  
→ SAによる定期的な学習助言・補習

(学習環境の整備に関するSD活動)

学生代表・SAへのフォーカス・グループ・インタビュー  
全学的なSA基礎研修(しつかり研修)  
全学的カリキュラム編成ワーキング、学習環境プランニング専門委員会の設置

15

また、事例(2)は別の学部ですが、入学前教育やリメディアル教育をやっていても、その後の国家試験につながっていきません。では実際どうなっているかということ、これは横軸がプレースメントテストの結果で、縦軸が1年生科目の点数です。この2つの相関関係を見えています。これはなぜ逆三角形にしているかということ、初めは低かった学生が、ちゃんとこのリメディアル教育や学習支援のプログラムによって伸びていることが可視化されたのです。しかし伸びていない学生というか、しっかりと取得できない学生はどうすればいいのでしょうか。

これを見た上で、入学前教育の刷新、それから学習支援プログラムは個別からグループに変えました。このように分散しているデータを統合しながら、実際にワーキンググループで合意形成を図っていきます。

## 学修支援(SA・ピアサポート)

- 従来の補習教育
  - 成績下位or未履修科目に対するリメディアル
- ↓
- 学修支援
  - 所定の研修を受けた上級生(SA、ピアサポーター)が相談や質問対応を担う
  - 出張オフィスアワーとして、複数教員が自習スペースに待機
  - 演習課題、授業時間外学習の構造化  
「わかったつもり」から「わかった」へ  
＝ 頭に汗をかく、認知プロセスの外化(アウトプット)

16

従来は補習教育として成績下位者や未履修科目に対するリメディアルをベースに実施し

てきました。それを学修支援としてどのように変えてきたかについてご説明しますと、私が担当する所定の研修を受けた上級生が相談や質問対応を行ったりとか、他には出張オフィスアワーの形でピアサポーターや SA に任せるのではなく、複数の教員が自習スペースに待機したりといった形でサポートするようになりました。

演習課題や授業時間外学習を学生任せにせず構造化することで「わかったつもり」から「わかった」に変えていきます。頭に汗をかくこと、実際に演習をしていくことが大切なのです。いくら講義や研修や授業が良くなっても、アウトプットがないと、書いていかないと、これは実質化していきません。そして学生と共にこれは変えていきます。

### 学生とともに TA/SA開発・学修支援

学生とともに作る授業、TA/SA研修・ピアサポートの場を提供する  
⇒ 教員の授業設計だけではなく、学習環境設計・学修支援を支える



学生と共につくる学習支援や授業ですので、SA 研修やピアサポートの場を提供します。これは 2 年生や 3 年生の SA が著しい伸びを見せます。こういった研修、ロールプレイをしたり、一緒にどのようなプログラムを作っていけばいいのかを検討したりしていくのです。

### 教育の質を可視化(アセスメント)する

可視化	アセスメント	実装(開発)
中退学生・要支援学生の基礎情報(マクロな既存の量的データ)	散在する量的データの収集: 個別教科の成績情報・入試データ(ミクロな量的データ)	カリキュラムの再開発 学習支援体制整備 (TA/SA・ピアサポート研修)
プレ・ポスト分析 テキストの質的分析	新しい質的データの収集: 学生フォーカス・グループ・インタビュー	FD研修、マネジャー研修 (個別コンサルテーション) (授業設計ワークショップ)
支援活動の透明性を上げる ニュースレター、アニュアルレポート	混合アセスメント: 教職員フォーカス・グループ・ディスカッション	組織開発、トップ研修 (ワーキンググループの形成) (レポーティング)
尺度開発と統計 (SA活動報告書・アンケート)	観察調査、エスノグラフィー法 DPルーブリックの自己評価	(支援者・支援組織の配置) (データ収集の日常化)

- ・ **アセスメント**は日常的な学術的活動である(ウォルワード2013)
- ・ 大学パンフレットに「本学の学生は、批判的思考力を身につける」と謳ってれば、「本当に身につけているか」**何らかの形で確認**することは自然 → 学生の力、教職員による支援体制と「場」・環境の確認

18

教育の質を可視化することが大切です。中退学生や要支援学生の基礎情報や、新しい質的データの獲得です。私は学生がどうなっているのかというフォーカス・グループ・インタビューをよく実施しますが、この量的なデータと質的なデータを組み合わせた混合アセスメントです。特に教職員へのフォーカス・グループ・ディスカッションとか、実際に得られたデータというのは、IR 室がまとめて、日常的にデータを使って検討をするということはありませんが、データからは過去しか分かりません。それを使って実際に何らかの形で確認をしたら、学生の力をどう捉えていくのか、そして支援体制をどうしていくのかをカリキュラム開発、FD 研修、組織開発とトップ研修と組み合わせなければいけないのではないかと考えています。

### 大学のなかで可視化されたもの

- 「学生は未熟だ」という、教職員の思い込み
- 量的データ、質的データからの多面的洞察  
(教職員が見たい現実と、学生の実態とのギャップ)
- 学部と学部、部局と部局を横断的につなぐ  
 <結び目 knot>の不在
  - 伝統的な学習観との交渉と和解のプロセス
  - 協働的ネットワーク(再概念化と変化)の役割を担う「センター」

センター Faculty development system      Collaborative knotworking 協働的ネットワーク      学部など Workplace system  
 Negotiation 交渉      Reconceptualisation 再概念化      Reconciliation 和解  
 Transformation 変化  
 Innovation  
 Workplace practices

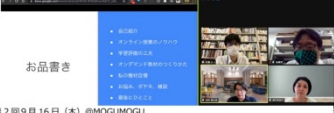
Elmberger, et al.  
 BMC Med Educ 20, 497 (2020).

今までの言説というものがあります。「学生は未熟だ。授業だけではなくて、入試でどのような学生でも入ってきているではないか。だから未熟だから私の授業ではもうこれ以上できません」という、実は思い込みがかつて教員にはありました。しかし実際に学生支援、学習支援で伸びたというデータを示しながら、教職員が見たかった現実と、学生が実際伸びていたりとか、獲得していたり、どこでつまづいているかという学生の実態とのギャップというものを多面的に見せていくのです。学部・学科も今までは分断されていました。


**教員とともに ファカルティ・ラーニング・コミュニティ**

- **学問分野の固有性に基づいた教育改善へ取り組む**
  - Discipline-Based Education Research (DBER)
  - 教員相互の実践共有を図る「実践コミュニティ」の形成


第1回 8月29日(月) 13:30~14:30 (Zoom)



第2回 9月16日(木) @MOGUMOGU




第3回 11月11日(月) @薬学アクセス



⇒北陸大学での実践コミュニティ  
(4例のファカルティ・カフェ)

第4回 1月5日(水) 12:50~14:10 (コミュニティハウス1階 学生ラウンジ)



私はセンターの人間で、唯一の学部外組織に所属しています。伝統的な学習観に対して、学部のセンターや専門家が交渉と和解をしながら、再概念化して変化をもたらすのです。これはネットワークングという考え方ですが、やはり会話とか対話の場がないとなると、思い込みで学生のことを断定してしまいます。教員と共にファカルティ・ラーニング・コミュニティということをやっていますが、学問分野の固有性に基づいた教育改善に取り組んでいます。

こういった実践コミュニティの形成とか、私は教員向けのコンサルテーションという相談をする専門家になっていますが、年間で延べ約 90 件、100 時間以上のコンサルテーションを引き受けています。そしてこういった4件から6件ぐらいのカフェイベントですが、このようなことをしながら、具体的に私たちはアクションを作っています。

**ユネスコ学習権宣言 (国際成人教育会議1985)**

学習権を承認するか否かは、人類にとって、これまでもまして重要な課題となっている。

- **学習権とは、**
  - 読み書きの権利であり、
  - 問い続け、深く考える権利であり、
  - 想像し、創造する権利であり、
  - 自分自身の世界を読みとり、歴史をつづる権利であり、
  - あらゆる教育の手だてを得る権利であり、
  - 個人的・集団的力量を発揮させる権利である。**
- **パウロ・フレイレによる「銀行型教育」への批判**

「生徒は、先生の言葉を記録するテープレコーダーではないし、知識を貯蔵する預金箱でもない」「自分の頭ばかりでなく、他人の頭も使って考え、社会的に思考を練り上げ・・・そういう対話への参加を促すこと、コミュニケーション能力を培うことが人間の「人間化をめざす教育の課題でもある」(里見112)

**22**

「まとめに代えて」です。大学ができることは何でしょうか。高校に押し付けるわけでもありません。「いや、待ってほしい。家庭からの問題だろう」ということもあります。キ

ンダーガーデン (K, 幼児教育) から K-12 年, K-16 年, 大学院まで含めれば 21 年ですか。K-21 年に向かって、生涯を通して学び続けて、社会を形成する者をライフロング・アクティブラーナーと言います。私たちは学びの在り方を変えていかなければいけないと思います。

ユネスコの学習権宣言を紹介したいと思います。「学習権を承認するか否かは、人類にとっても重要な課題となっている」という、これは 1985 年の宣言です。学習権とは、「読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり」ということが書かれています。これを裏返してみてください。これが保障されない学校や世界や社会があるから、この宣言があったのです。

自分自身の世界を読み取る力もなく、歴史をつづる権利を保障されず、あらゆる教育や手立てを得る権利が与えられない、サービスもないというか、考えられていないのです。個人的な力量や集団的な力量を発揮させる権利を保障するようなさまざまな学びの機会を、大学や高校や、あらゆる生涯学習の機会は提供できているか、考えられているのでしょうか。

「生徒は、先生の言葉を記録するテープレコーダーではない」とは、学習権宣言のベースにあるパウロ・フレイレによる「銀行型教育」への批判です。人間化をしていくというプロセスにどうやって私たちが向かっていくかです。これは大きな話です。

## 「測る」「量る」「秤」をこえて

- 測量しようとしている学習成果 (Output・Outcome ≠ 学力, Astin2017) は誰のものか、なぜ重要か

Diversity, Equity, and Inclusion の潮流

- 大学教育のユニバーサル・アクセス化 (Trow & Kitamura 1976)

- アクティブラーニングと形成的アセスメント

(Chickering & Gamson 1987, Angero & Cross 1993)

- 学生中心パラダイム (Barr & Tagg 1995)

- 学習者中心の教育学 (Weimer 2013)

⇒ 非伝統的の学生を含む、あらゆる学習者の多様性の包摂へ

- 学生エンゲージメント Student Engagement
- 学生の成功 Student Success
- 衡平 Equity

23

ここには入試に関わる方がお集まりになられていますが、測量しようとしている学力とは何でしょうか。基礎的な力、知っているかどうかだけではないですよ。「学力」というのは、私は誤訳だと思います。学びの力、アチーブメントというのは、さまざまな多様な多面的な力であるということで、3 要素と拡大しましたが、先ほど倉部さんからも提供があったフォロー、ユニバーサル・アクセス化です。これにはあと 2 つあります。

万人に開かれているアクセス化だけではなくて、これはトロウとその訳者である喜多村和之はあと 2 つ言っています。ユニバーサル・パーティシペーション型と、ユニバーサル・アクセプターンス型と言っているのですが、誰しものが大学に進学しなければいけないと強

制されるという後者のパターンは実は紹介されていないのです。

今はどうなっているのでしょうか。アクティブラーニングと形成的アセスメント、学生を中心にするパラダイムとか、その中心とする教育学には非伝統学生を含む、さまざまな学生が包摂されなければいけないということで、日本には導入されていないエンゲージメントや成功という考え方や、Equity, いろいろな段階のある学生をいろいろな手立てによって、イコールアクセスだけではなく Equity の状態、「衡平（こうへい）」の状態に持っていくということです。私たちが知っている「公平」と字が違うことに気を付けましょう。

### 参考文献

- 濱名篤(2007)「日本の学士課程教育における初年次教育の位置づけと効果」大学教育学会誌 29(1)
- Astin, AW(2012). Assessment for Excellence: The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education, 2nd ed. Rowman & Littlefield Publishers
- 杉森公一(2022)「連載:教えるを学ぶエッセンス」週刊医学界新聞, 第1回~第12回  
<https://www.jgaku-shoin.co.jp/paper/series/203>
- 杉森公一、山本拓哉、木林勉(2013)「理学療法教育におけるリメディアル教育の実践と初年次教育の展開」大学教育学会 第35回大会 2013.6.2
- 杉森公一(2014)「ルーブリックが結ぶ教育接続(12): 教師の学習(能力開発)を促すルーブリック」文部科学教育通信 349, 24-26 <http://hdl.handle.net/2297/43331>
- 名古屋大学高等教育研究センター(2005)「ティップス先生からの7つの提案<学生編>」  
<https://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/student/index.html>
- アウン(著)・杉森公一ら(共訳)(2020)『ROBOT-PROOF: AI時代の大学教育』森北出版
- Aoun, J. E. (2017) Robot-Proof: Higher Education in the Age of Artificial Intelligence. MIT press.  
北陸大学データサイエンス・AI教育プログラム <https://www.hokuriku-u.ac.jp/datascience/> 北陸大学高等教育推進センター Webサイト. <https://cahe.hokuriku-u.ac.jp/>

24

「『測る』『量る』『秤』をこえて」、私たちが入試をきっかけにして、どのように学生に学ぶ力を、手立てを一緒にはしごをかけていくかということを考えるきっかけにいただけたらと思います。

それでは私からの話題提供は以上としたいと思います。ありがとうございました。■

---

【山地・司会】 杉森先生、ありがとうございました。非常に密度の濃いご発表でした。ここから先は竹内先生、全体討論をよろしくお願いします。

## 全体会 2 ○ 全体討論

### 見過ごされがちな高大接続課題： 不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足

■朝比奈 なを（元高校教員，教育ジャーナリスト）/倉部 史記

（追手門学院大学客員教授，高大共創コーディネーター）/宮田 晃宏（熊本県立鹿本農業高等学校 進路指導部長）/杉森 公一（北陸大学 高等教育センター長，教授，教務部長）/竹内 正興（香川大学 アドミッションセンター長 ■司会）/山地 弘起（大学入試センター 試験・研究統括官 ■司会）

---

【竹内・司会】 香川大学の竹内です。それでは、ここからは全体討論の時間とさせていただきます。まず初めに繰り返しのようになりますが、4人のパネリストの先生方、本日は大変中身の濃い発表をしていただき、ありがとうございました。もう議論を始めたら、尽きることなく、今日は日が暮れてしまうかと思えます。時間も限りがありますので、討論会の進め方としては、まず4人のパネリストの先生方で、それぞれご質問があれば、それにお答えいただき、その後、時間があれば、視聴者の皆様から頂いたご質問について、先生方にお答えいただくという形にしたいと思います。

それではまず、パネリストの先生方から、他のパネリストの先生方に、ご質問・ご確認や、議論を深めたいということがありましたら、お願いできますか。

【倉部】 杉森先生にお伺いしたいのですが、本当に頭が下がる思いというか、非常に素晴らしい、いろいろな教育をされています。その教育の中身を例えば、地元の高校の先生や、高校生に伝えるための工夫のようなものはされていますか。自分の発表内容にもつながるかと思いました。

【杉森】 やはりオープンキャンパスや、進路指導の方への説明会、生徒への説明会が一番だと思いますが、全く伝わらないです。というのは、文科省の認定を取りましたとか、アクティブラーニングを推進しているということも、先ほど、スライドでお見せしましたが、高校の進路指導の方はあまり関心がありません。「Tableau を使ってこのようにできます」とデータサイエンスのシンポジウムをしたのですが、私が持っている200名のリストに呼び

かけても、高校からは3名しか参加されませんでした。理由は「高校だとできない。GIGAスクールが始まったばかりだ」とのことのようでした。リテラシーレベル「プラス」を取ってから3年ぐらい遅れて、ようやく探究学習でTableauを使いたいと、この4月になって2件連絡がありました。

探究学習支援が始まってから、2014年ぐらいから年間20校から30校の高校を回っているのですが、単発で呼ばれて話をさせていただいても、「大学は本当に変わるのか」と半信半疑です。今になって、やっと高校生全体に探究学習を体験してもらうということができていますが、まだ時間がかかります。

**【倉部】** ありがとうございます。探究については高校の先生もやはり困っていらっやっやっ、いろいろと情報を欲していることなのでしょうから、それとちょうどマッチした時に、結果的に大学でのいろいろなノウハウが伝わるといことはあるかもしれません。ありがとうございました。

**【竹内・司会】** 今、関心がある高校の数が少ないという杉森先生からのご回答でした。これについては本当に感覚的なことで恐縮なのですが、数が少なくても関心のある高校があったということは、そこから少しずつ広がっていくのではないかというイメージを持ったのですが、その点はいかがですか。

**【杉森】** 私たちは、付属高校を持っていません。私立高校を中心に連携校を持っていますので、探究学習の時間に、大学教員がゼミの担当として入り込んで、毎週通ったりとか、また逆に来ていただいて、探究学習の導入、仮説作りを私がサポートしたりしています。特に教員のサポートを中心にしていますが、コーディネーターを担当する教員は本当に悩まれています。私はその伴走支援をするという形になります。

また遠隔ですが、定時制高校での探究発表の講評に行ったりしています。接点は徐々に広がってきているかと思えます。ただし、入試難易度が高い大学に一般入試で入学する生徒がいるような進学校からは見向きもされないように感じます。私立大学には触れさせたくないのです。

**【竹内・司会】** これは先ほどの倉部先生のご講演ともつながる話ですね。分かりました。ただ、本日のこのような機会を通じて、少しでも広がっていればと考えています。ありがとうございます。他にパネリストの先生方から他のパネリストの先生方に何かご質問はありますか。

**【朝比奈】** 私も杉森先生にお伺いしたいのですが、入学前教育をいつぐらいからやり始めるのかということについて、アドミッションセンターの職員の方からのご質問があったかと思えます。例えば、ある高校では生徒が就職した場合に、モチベーションを上げていき、少しずつ技術を学んでもらうために、在学中の土日を使って、教育、研修を行っている事例



があるのですが、例えばそういうような入学前教育を継続的にやっていく、また合格後に継続してやっていくなどということはお考えになっていらっしゃるのでしょうか。

【杉森】 今、入学前教育は、学習支援業者さんと組んでスクーリングと通信添削と大学の教員が行うオンラインやスクリーニングを中心に、推薦など年内入試の学生に対しては、悉皆（しっかい）で全部やっています。ただ、一般入試だと入学時期まで期間が短いので、自校教育のオンデマンドビデオで本学の成り立ちは先に伝えておこうという形にしています。それは全員を対象にやっています。入学が決まったらすぐです。

【朝比奈】 分かりました。ありがとうございます。

【竹内・司会】 ありがとうございます。他はよろしいでしょうか。それでは、視聴者の皆様から朝比奈先生にいただいたご質問です。「本日の先生のご講演のキーワードの1つに学力不足、ミスマッチ入学というキーワードがあったかと思えます。高校から大学へのそういうキーワードがあったのですが、高校の中で基礎学力をもっと付けさせるような政策、場合によっては3年間ではなく、留年させてでも高校の中で基礎学力を付けさせるような政策とかそのような取り組みなども考えられるとは思いますが、先生はどのようにお考えになりますか？」というご質問が来ているのですが、いかがですか。

【朝比奈】 ご質問をありがとうございます。先ほど、お話しさせていただいたように、高校側は独自にやってはいるのですが、高校には大学教育と同じように高校教育がやるべき内容というものが、実際あることになっています。現実には学力が低い学校は、本当はそれをやらずに高校のカリキュラムの中で、徹底して基礎学力の定着を図るための勉強をやりたいと思っても、それは高校教育のカリキュラムの縛りがあるので、なかなかそれができないのです。

例えば先ほどお見せしたような場合ですと、少し余裕のあるような時間、ホームルームの時間とか、総合学習の時間などを作って、カリキュラムの中でシステムとして勉強をさせるという努力はしています。しかし多くの場合、高校のカリキュラムがあるので、それ以外の時間、例えば放課後に補習的な形で行うようなやり方はあります。

加えてもっと言ってしまうと、やはり6年間の積み重ねの中で、この子にはどういう問題があるか、この子にはどういう勉強のつまずきがあるかということを見つけられていなかった場合は、その問題の見つけ方から、つまりどこから間違っているかから始めなければいけなくなってきます。これは先送りというか、下の学校の段階によく言いがちではあるのですが、実は義務教育の段階では、少なくともそのつまずきの原因だけは見つけてほしいと個人的には思っています。

【竹内・司会】 本日は、高校と大学のインクルーシブというテーマなのですが、広い意味で捉えると、やはりずっと教育がつながっているということが改めて分かりました。ありが

とうございます。他のパネリストの先生方はよろしいですか。

私のほうで、4人の先生方のご講演を聞かせていただいて、倉部先生の中退という問題がやはりすごく大きいと思いました。その話を踏まえて宮田先生のお話を伺っている時に、「書かせる指導」は本当に現場の素晴らしいお取り組みだと思いました。宮田先生は、これは全員にやらせるということを強調されていたかと思います。具体的に全員に取り組みさせる時のポイントというか、先生だからできたのか、それとも組織的にやったのか、その辺りを差し支えない範囲で、宮田先生、お話ししていただけないでしょうか。

**【宮田】** 全員に取り組みさせるというのは、常に私がこだわってやっていたところです。最初はやはり強制的にやらないとなかなか難しいので、例えば6限目に私の授業がある時にシートを配布して、「今日、これを書いたら帰っていい」などというやり方をしていました。

もちろん、学校全体ではなく、クラスだからやれたところがあるかと思います。今まで講演会などで100回ぐらい話しましたが、私がしたことを、「効果が出るのならやってみよう」と思われる先生は1人もおらず、いつもご質問を頂くのは、「そんなに時間をかけて家族は大丈夫ですか」という働き方改革的なご質問です。「自分はしませんが、あなたは勝手にやってください」という感じのことが非常に多いです。

だから自分がやっていることを押し付けようという気もありませんが、もう少し効率良くやらなければいけないという点があります。ただ、最初はやはり少し強制的なところがあります。そのうち1年生の半年ぐらいを過ぎると、書く楽しさとか、自分のことをちゃんと考えて文にすることに慣れてきますので、生徒にやる気を出させるための工夫や力を注ぐという労力はかなり減ってきます。2年、3年生になると結構自然になっています。

四則演算もよくできないような生徒がたくさんいますから、そういう子たちでもどうにかクリアできる物を、最初の1カ月ぐらいは、少々嫌な顔をされても、こちらが用意してやらなければいけないのではないかと思います。そんな大それた仕組み、仕掛けというのではなく、少し強制力を働かせて最初はやっていますというぐらいです。

**【竹内・司会】** ありがとうございます。そういった取組の中でも当初は60~70人中退者いたということで、そうすると捉え方次第だと思うのですが、朝比奈先生が先ほどお話ししていただいた生徒たちは、その前段階といいますか、「置き去りにされた生徒たち」というのは少なくとも高校は中退していないので、それだけでもすごく頑張っているような印象もあるのですが、宮田先生はその辺りの高校中退率などの問題はどのように捉えられていますか。

**【朝比奈】** すみません。高校中退者ですが、多分、現職の宮田先生はお答えづらいと思いますので、私が代わってお答えさせていただきたいと思います。実は高校の中退者を減らそうという国の動きがあります。そして、高校はかなり頑張って学力や生活面で中退する可能性がある生徒を抱え込んでいます。抱え込まないで、高校を中退させてしまうと、彼らの将来に影響するからです。今、高校卒業というのは1つのパスポートのような感じになって

いますので。だからなるべく中退者を出さないでこうと、各高校は頑張っています。

ただありがたいことに、先ほど私立の広域通信制高校のお話をしましたが、勉強をどうしてもできなくて、3年では卒業できそうもない、そのような生徒たちの受け皿にも、大学の1つ下のバージョンのような感じになりますが、私立の広域通信制高校がなっているのです。

中退率の細かい数字は、間違いがあるといけませんので、今は言いませんが、おそらく高校の中退率は減っています。しかしその子たちは多分、より学校に行かないで、より自由度が高く、あまり熱心な指導をしていないような高校に転校をしています。現実にもそういう例を私自身ももちろん知っていますし、多分全国で行われていることだと思えます。

**【竹内・司会】** ありがとうございます。高校は中退者を減らす取り組みを政策的にもされているという話がありました。大学でも、先ほど杉森先生からも大学としても学生支援で中退者を減らす取り組みというお話もあったかと思えます。大学に置き換えて、倉部先生、杉森先生、何かコメントがありましたら頂きたいのですが。

**【倉部】** 中退を減らす仕組みは、個別の高校や大学でできることもあれば、やはり公共で用意をしなければいけないこともあると思えます。

私の話の内容で言うと、中退のデータベースという物は、本当は新聞社のような企業さんだとか、個々の学校がやるべきものの範疇（はんちゅう）を超えている気がします。やはり出しにくいです。あのようなデータを大学や高校もどのような形で出すかというのは、いろいろ配慮は必要だと思いますが、問題が起きているということを知り得る権利が、学校を選ぶ側にはあると思えます。「ここについては国が整備」、「でもここは個々の学校で取り組む」という議論は必要ではないかと思えます。

**【竹内・司会】** ありがとうございます。杉森先生から、この中退を減らすということについて、補足はありますか。

**【杉森】** 朝比奈先生がおっしゃった、カルテというのは1つ大切なことかと思えます。ただ本学では、例えば78%が北陸3県から入学をしてくれています。本学から中退してしまっても、家業を継ぐという学生さんたちはそれで戻ればいいのかも思いますが、中退した結果として非正規雇用になっていくと北陸3県がつぶれてしまいます。教育の質保証のためには、マルチステークホルダー・アプローチというのですか、教育のカリキュラムがどうなっているかを集めたデータは地元の企業さんと高校の先生方に第三者評価で入っていただいています。

これは集的に社会全体で、大学全体で考えなければいけないと思えます。学生個人のカルテ情報を個々の教員が抱え込むのではなく、教員集団で見るということです。分散型で私たちはIR分析をしているので、ほぼ全教職員が実は小さなデータから大きなデータまで共有をしているのです。個別の支援ではなく、総統合的なアプローチをした上で、どうなっているかについて、地域の方たちと一緒に地域で育てていくのです。これが小中高大で、何

とか7年間、9年間ぐらいで高校と一緒に組めればもっといいと思っています。前の前の職場では、高大一貫の担任制を敷くなど、かなり仕掛けを工夫しました。個別のアプローチで中退を悪として見るのではなく、4年間、6年間の失業率で判断するのではなく、1.5倍卒業率といいます。4年制であれば6年間卒業率とか、6年制であれば8年間卒業率がアメリカの基準でしょう。なぜ日本は4年間の失業率でみるのでしょうか。基準が間違っているのではないかと思ったりもします。

そういうことも含めて、もう少しアプローチを変えなければいけないのではないかと思います。

**【竹内・司会】** ありがとうございます。このような話をしている間に、お時間が来てしまいました。冒頭で山地先生からもあったのですが、いただいたQ&Aにやはり、全てお答えすることができませんでした。これについては今後、制作する『大学入試研究の動向』に反映させていきたいと思っておりますので、ご了承していただければと思います。

それでは本当に中途半端な状況だとお感じになられるかもしれませんが、お時間が来ていますので、最後にパネリストの先生方から、お1人ずつ、今後の高大のインクルーシブに向けてのまとめをお願いいたします。改めて重複しても構いませんので、一言ずつメッセージも頂けたらと思います。よろしく申し上げます。それではご講演の順番で、朝比奈先生からお願いたします。

**【朝比奈】** 私自身は実はこのようなテーマで大学関係者、高校関係者がみんなで1か所に集まってお話ができること自体が非常にうれしく思っています。

先ほど、杉森先生もおっしゃられておりましたが、人間を作っていくということはルソーではないですが、ずっと継続していくべきことです。学校段階全てが協力して、そして今の子どもたちをこれからの大変難しい時代に生きていけるだけの力、生き抜く力を付けなければいけないといつも考えています。

ぜひこれを機会に、多くの先生方が高大接続、そしてその中でも特に置き去りにされがちな高校生たちを思い出していただければ非常に幸いです。今日はどうもありがとうございました。

**【竹内・司会】** ありがとうございました。それでは倉部先生、お願いします。

**【倉部】** 今日はありがとうございました。私からは高校と大学、それぞれの関わりの中で、いまひとつかみ合っていない部分の課題をお伝えしました。逆に言えば、かみ合うことで結構解決する余地もたくさんあるような気もしています。

本当にわが国はリソースもないし、人口も減っていくし、お金もないわけで、せっかく学ぼうとしている人たちを放っておくような余裕もないのだと思うのです。生徒・学生さんの成長を願うということは、立場が変わってもみんな同じだと思います。若者たちの長い成長のためにできることをお互いにやれたらいいのかなと思います。今日はありがとうございました。

ました。

【竹内・司会】 ありがとうございます。では続きまして、宮田先生、お願いします。

【宮田】 私は農業高校で、朝比奈先生が指摘されたような学力に課題を持っているような生徒たちをずっと預かってきました。

ただ、そういう生徒でも、私はあのようなやり方をしましたが、関わり方によって、ちゃんと大学でやっていけるとか、大学だけではなく、就職や、その後のいろいろなところでちゃんとやっていけるような力を身に付けることができるというところは、少しお知りおきいただければと思います。

また、大学入試センター主催で申し訳ないのですが、よく学力ということをおっしゃられるのですが、私は農業高校ですから、食品製造とか、食品微生物などといった科目を教えています。いろいろ商業、工業、農業という専門科目を教えているのですが、大学入試センターの共通テストは、英国数社理が主です。学力はその5教科です。その英国数社理でないと測れないとか、明治以来ずっとそうだとかという話も聞いたことがありますが、学力というものが何なのかというところがあります。

それで私は先ほどの発表で農業鑑定というものを少し出させてもらいました。その学力というものが何なのかというところを、少し投げ掛けたいというか、そこだけで言われたら専門高校が低く見られるのは当たり前です。例えば私がやっている科目で、学力試験とかをやってもらったりすると非常にうれしいです。農学部であれば、私がやっている科目で一般入試をしていただくとか、そのようなことを少し考えるという割には、相変わらず英国数社理でずっと学力を測って、それで偏差値が出てきてと、教員になった当初からその辺りを疑問に思っていましたので、少し投げ掛けたいと思います。以上です。

【竹内・司会】 ありがとうございます。では最後に杉森先生、お願いします。

【杉森】 参加者の方から「選抜」というのをどう置き換えたらいいいのかという質問を頂いて、それが私はずっと引っ掛かっているのです。選抜をするというのは、教員や職員、大学側、または社会側が選抜をしてふるいに掛けるということです。

ただし、今、宮田先生からもご指摘があったように、いろいろな専門性を持っていたら、そのまま専門家につながっていきます。子どもは生まれながらにして科学者だと言われていのに、その興味関心を積んでいくという時期に、ふるいに当てはめるために、既定の学力と呼ばれるものに当てはめていくというところで、置き去りにされていくのではないのでしょうか。学びの二重構造と言いますが、1つできなければ、次ができず、次ができなければその次もできずとなると、小学校まで戻らなければいけません。

しかし完全習得ができるならば、全ての授業、講義がオンデマンドビデオでそれを見ながら、その場で、みんなで学び合っていくことが出来ます。そこには地域の方も教員も、大学生も、大学教員も、企業の方も一緒になって学びの場を作っていくのです。私が言っている

のは大学入試の解体と大学の解体をお話ししています。

そうなってくると選抜から接続へ、接続から、何でしょう。結いというか、つなぎ結ぶ、「中退」の字は入れ替えます。「中退」ではなく、「紐を帯びにする」と書いて「紐帯（ちゅうたい）」です。そういった場に転換していくならば、学習する社会、学び合う社会、全てのあらゆる年代の方が学ぶものになって、学生中心から、学習者の私たちの間に中心がずれていく、「脱中心」になっていくという世界が、これだけ知識社会・AIが進歩していくのなら、もうすぐやって来ると思います。そのような社会を一緒になって作っていかねばいけないのではないかと思いますし、すぐにやって来ると思います。パラダイムはとっくに変わっていると思います。またそういうことを考える機会をどこかで頂けたらと思っています。ありがとうございました。

**【竹内・司会】** ありがとうございました。各先生方から今後に向けてさまざまな示唆を頂くことができました。本日は大変密度の濃いお話をさせていただき、ありがとうございました。また討論のほうが、時間の関係もあったかもしれませんが、私がかうまく回せなかった点はご容赦していただければと思います。

それではこれをもちまして、全体会2を終了させていただきたいと思います。皆さま、どうもありがとうございました。

**【一同】** ありがとうございました。■

---

## 大会当日に取り上げることができなかつたご質問に対する回答

(質問1)

倉部先生のご報告につきまして

オープンキャンパスや模擬講義では、どうしても「よそ行き」の表現や内容になってしまい、通常の授業での雰囲気等は看取出来ないように思います。日常の授業を体験できるようになれば、授業内容の理解は難しくとも、少なくとも周囲の学生の雰囲気等が感じ取れ、自身にあったものかどうか、判断の素材となるように思います。

余談ですが、いくらオープンキャンパスでの模擬講義等の内容を工夫しても、アンケートの結果では、毎回「トイレが綺麗」などというのが、評価すべき点の上位に入ります。この点、既に行われているかも知れませんが、事前に高校の現場でも、大学のキャンパスでどのような点を見て執るべきか、ガイダンス等でご指導いただければ有難く存じます。

(質問1への回答) **【倉部】**

おっしゃる通り、事前指導が必要と思います。就職活動では業界研究、企業研究、自己分析、といった指導のスキームがありますね。進学についても学問理解、大学(の特色)理解、自己理解、といったガイドを設けておくと、オープンキャンパスで何を見に行くのか、学習

効果も高まるのかなと思います。

ウイークデーキャンパスビジットをやって分かったことですが、実際の授業を見た方からは、施設や設備についての感想がほとんど出ませんでした。オープンキャンパスという取り組み自体が、教育内容よりも施設にフォーカスしてしまう性質を持っている、という点もあるかと思います。

(質問 2)

杉森先生へ

高等学校から参加しています。データサイエンスを総合的な探究の学習で学ばせていきたいのですが、ご紹介いただいた Tableau を取り入れることは可能でしょうか。55分授業だとしたら、何時間くらいで生徒が使えるようになるかなど目安をご教示ください。

(質問 2 への回答) 【杉森】

25分・4つのハンズオン講座で習得しています。むしろグループでの学び合いや、課題解決学習の時間に多くかかるかもしれません。Tableau public は無料で使用でき、Tableau Desktop は申請することでアカデミック・ライセンスとして無料で使用できます。

(質問 3)

杉森先生へのご質問です。教育や学習の主語を転換していく中で、入学者の「選抜」という行為は、どう表現しなおすことが可能か、もしヒントをうかがえたら幸いです。

(質問 3 への回答) 【杉森】

以前まとめたブログ(トロウ・モデルの拡張)では、パーティシペーション型=参加ということなのですが、適切な訳語が見当たりませんので、入学者「接続」でしょうか。

<https://ed-science.blogspot.com/2014/01/trow-model-re-revisited.html>

他にも、中退から紐帯へ 教育から発育へ などいろいろ考えることもあります。

[https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2023/3511\\_05](https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2023/3511_05)

(質問 4)

入学前教育について、近隣ではない高校からの入学生についてはどの様に対応されているのでしょうか？

(質問 4 への回答) 【杉森】

本学は 78%が、北陸 3 県からの進学者ですので、通信添削やオンライン教育を中心に行っています。スクーリングについては、遠方の高校からは任意またはオンラインで対応しています。

(質問 5)

学生が書いたものに対して、最初は拙いものもあるかと思いますが、どの様に導いて行かれるのかについてはとても興味があります

(質問 5 への回答) 【宮田】

まずは、教材を作成する際、そのクラスにおいて一番底辺の生徒が頑張ればできる内容と量にすることが大切と考えていました。このことから、身の回りの出来事を 5 行ずつ 3 項目で書く「今週の出来事」と「最近の出来事」というシートを作成し、入学してすぐの時期はこれから始めていきました。ここで重要なものが最後の行まで必ず書かせるということです。これを徹底してやっておかないと、レベルを上げていったときに「こんなに難しいなら全行は書けない」と言う生徒を増やしてしまいます。そして、このように楽をする輪は瞬く間に広がってしまい、この指導をやる意義、効果が格段に下がってしまいます。また、義務教育で置き去りにされた生徒をさらに置き去りにすることにも繋がります。

ただ、生徒が何とか苦戦して全行書いた作品に対しては、どのような内容のものでも評価やコメントは 9 割肯定、1 割批判 (否定) で返すことは徹底していました。例えば、まったく何も書けないで (書く気がなく)、「何も書くことはありません」を繰り返して 800 字書いてきた生徒がいましたが、私は「よく 800 字埋めた。普通に書くより逆にきつかったと思う。粘り強さがあることも分かった。嫌だと思うことから逃げずに取り組めたことも素晴らしい。あなたが逃げなかったことでクラスの秩序も維持された。ただ、次回は自分の考えをあと一言くらい入れましょう。」というような評価をして返しました。すると、次回からは繰り返しの文はやめて、一言ではなく、彼なりに考えたことを全行埋めて出してきました。

このような取り組みを粘り強くやっていくことで、どの生徒も成長の階段を少しずつ上ってってくれます。そして、3 年生の 1 学期には、800 字であれば 40 名の生徒が 40 分で全員書けるようになります。平均すると 30 分くらいだったと記憶しています。また、スピードだけでなく、クラス全員が大学入試 (総合型選抜や推薦) の小論文にも取り組み、それなりのレベルで書けるようになってきます。中学校では、学力的に厳しく底辺にいて、置き去りにされていた生徒でもそのような成長をしてくれるのです。



## 「入試問題の出題・採点ミス防止のしくみとは」

司 会 : 横井 修司 (大阪公立大学 教授)  
 荘島 宏二郎 (大学入試センター 教授)

コーディネータ : 秋田 成司 (大阪公立大学 副学長, 教授)  
 大久保 敦 (大阪公立大学 特任教授)

趣旨説明	入試問題の出題・採点ミス防止のしくみとは .....	169
	秋田 成司 (大阪公立大学 副学長, 教授)	
報告 ①	入試ミスのパターンとその影響度～リスクマネジメントの視点から～ ....	173
	西郡 大 (佐賀大学 アドミッションセンター長, 教授)	
報告 ②	問題の作成や点検のポイント — 『作題ガイドライン』の概要 — .....	187
	荒井 清佳 (大学入試センター 研究開発部准教授)	
報告 ③	入試問題作成の手引きに関する考え方 — アンケート調査を基に — ...	198
	椎名 久美子 (大学入試センター 試験・研究副統括官, 研究開発部教授)	
報告 ④	模擬試験の作成・採点(記述)のしくみと大学入試について .....	209
	網野 輝也 (河合塾 教育企画開発部部長)	
報告 ⑤	「入試過去問題活用宣言」の現状と今後について .....	222
	齋藤 敦 (岐阜大学 教学事務部門学務部入試課長)	
全体討論	.....	231

### 内 容:

入学者選抜に伴うミス(以下「入試ミス」)は、受験者の人生が左右されかねない、社会的にも影響が大きいものであるにも関わらず、毎年、多数のミスが発生しているのが現状である。一方、入試ミスという題材が微妙で取り扱いに慎重さが求められる内容であることから、入研協大会の全体会においてもこれまでテーマとして取り上げられることが無かった。

入試ミスの種類は大きく、①試験実施に関するミス、②入試問題の出題・採点に関するミス、③合否判定に関するミス、④その他(事務手続き・コンピュータプログラム設定など)のミスの4つに分けられる。そこで全体会3では、このうち②入試問題の出題・採点に関する

ミスに焦点を当て、本企画を通して、リスクマネジメントの視点からミスの防止の一助となることをねらいとして企画した。

具体的には、まずリスクマネジメントの視点から、入試ミスのパターンとその影響度について報告いただく。続いて、各大学が安定した品質の試験や検査を継続的に実施するための方策として、問題作成や点検のポイントを文書化した作業指針を備えておくことが重要であるという視点から、大学入試センターで作成した『作題ガイドライン』の概要について報告していただき、これを受けて、このような作業指針についての考え方や整備状況が大学の設置形態や規模によってどのように異なるかという実態を、アンケート調査を基にご報告をいただく。一方、民間企業の模擬試験実施の立場から大学入試のミス防止につながる示唆を、さらに入試問題の出題ミスの防止につながる取り組みとして展開している「入試過去問題活用宣言」事業の事例について、それぞれご報告いただく。そして、これらの報告において共有された問題点や課題、あるいは実践事例を踏まえて全体討論を行い、入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみに資する議論を深める。

## 全体会 3 ○ 趣旨説明

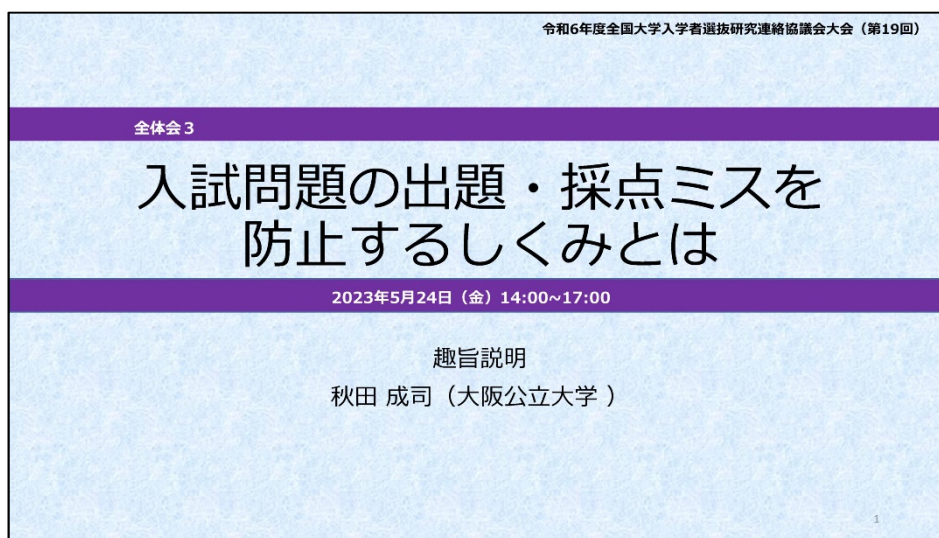
# 入試問題の出題・採点ミス防止するしくみとは

■ 秋田 成司（大阪公立大学 副学長，教授）

【荘島・司会】 全体会 3, 「入試問題の出題・採点ミス防止するしくみとは」を始めます。私は前半の司会を担当しています, 大学入試センターの荘島です。どうぞよろしくお願い致します。

それでは大阪公立大学の秋田先生より, 企画趣旨についてご説明していただこうと思います。秋田先生, よろしくお祈り致します。

【秋田】 それでは趣旨を説明させていただきます。ただいまご紹介いただきました, 大阪公立大学の秋田です。



本学が共催校として, 「入試問題の出題・採点ミス防止するしくみとは」というテーマで企画しました。

かなりデリケートな問題と言いますか, 人には聞きたいが, 答えにくい部分もあるというテーマになっています。ですから本日もなかなか答えられないようなこともあるかもしれません。そういったことも含めて, 活発なディスカッションをしていただけたらと思っています。

**入学者選抜に伴うミスの問題**

- ・ **入試ミス**
  - ・ 受験者の人生が左右されかねない
  - ・ 社会的にも影響が大きい
  - ・ にもかかわらず毎年多数の入試ミスが発生している
- ・ **入研協大会での扱い**
  - ・ 入試ミスは題材が微妙で取り扱いに慎重さが求められる内容
  - ・ 全体会テーマとして取り上げられることが無い

2

いわゆる入試ミスは、皆さんもご存じのとおり受験生の人生を左右しかねませんし、社会的にも大変影響が大きいです。一步間違えますと、大学にとっても信用問題、致命傷になりかねないような問題になります。

それにもかかわらず、毎年かなりの数の入試ミスが発生しています。本学も何年かに一度入試ミスをして、皆さんにご迷惑をおかけしているわけです。こういった入試ミスという題材が取り扱いに慎重さが求められる内容であることから、入研協大会の全体会においても、これまでテーマとして取り上げられることはありませんでした。今回、あえてこのテーマを取り上げさせていただきます。

**全大会3のねらい**

- ・ **入試ミスの種類**
  - ① 試験実施に関するミス
  - ② 入試問題の出題・採点に関するミス
  - ③ 合否判定に関するミス
  - ④ その他(事務手続き・コンピュータプログラム設定など)のミス

② 入試問題の出題・採点に関するミスに焦点

↓

ねらい：リスクマネジメントの視点からミスの防止の一助となること

3

次に入試ミスの種類です。1つ目は試験実施に関するミスです。試験監督者や実施要領等の読み込み不足でどうしてもミスが起きてしまったということです。

もう1つが入試問題の出題・採点に関するミスです。誤字・脱字程度から、学習指導要領を逸脱したような出題まで、さまざまなレベルのものがああります。こういった出題ミスが年度をまたぎ判明した場合には、入学者に対する賠償責任が生じるなど、入学者そのものに多

大な被害があります。

次が合否判定に関するミスです。

最後に④のその他（事務手続き・コンピュータプログラム設定など）のミスです。点数の配点を誤ってプログラムをして、合計点が間違っていたということもあるかと思えます。そういったミスを含めて、こういった類型に分けることができると思えます。

この全体会では②の「入試問題の出題・採点に関するミス」に焦点を当てて、リスクマネジメントの視点から、ミスの防止の一助となることを目的として、本共催企画を企画しました。

パネリスト及びサブテーマ	
14:10~14:30	①「入試ミスのパターンとその影響度～リスクマネジメントの視点から～」 西郡 大（佐賀大学 アドミッションセンター長，教授）
14:30~14:50	②「問題の作成や点検のポイント - 『作題ガイドライン』の概要 -」 荒井 清佳（大学入試センター 研究開発部准教授）
14:50~15:10	③「入試問題作成の手引きに関する考え方—アンケート調査を基に—」 椎名 久美子（大学入試センター 試験・研究副統括官，研究開発部教授）
15:10~15:30	④「模擬試験の作成・採点(記述)のしくみと大学入試について」 網野 輝也（河合塾 教育企画開発部部長）
15:30~15:50	⑤「入試過去問題活用宣言」の現状と今後について 齋藤 敦（岐阜大学 教学事務部門学務部入試課長）

こちらが本日のプログラムです。まずリスクマネジメントの視点から、「入試ミスのパターンとその影響度」について、佐賀大学アドミッションセンター長の西郡先生からご報告いただきます。

2番目に、各大学が安定した品質の試験や検査を継続的に実施するための方策として、問題作成や点検のポイントを文書化した作業指針を備えていくことが重要であるという視点から、大学入試センターでも策定されている『作題ガイドライン』の概要について、大学入試センター研究開発部准教授の荒井先生からご報告いただきます。

3番目に、これを受け、このような作業指針についての考え方や、整備状況が大学の設置形態や規模によってどのように異なるかという実態について、アンケート調査を基に大学入試センター試験・研究副統括官、研究開発部教授の椎名先生からご報告いただきます。

続いて、問題作成や採点方法について、民間企業の模擬試験実施の立場から、大学入試のミス防止につながる示唆を頂きたく、河合塾教育企画部開発部長の網野先生よりご報告いただきます。

最後に、入試問題の出題ミスの防止につながる取り組みとして展開されている「入試過去問活用宣言」事業の事例について、事務局を務められている岐阜大学教学事務部門学務部の入試課長であられる齋藤課長より、ご報告いただきます。

後半は、これらの報告において共有された問題点や課題、あるいは実施事例を踏まえて、

### 全体会3

全体討論を行います。入試問題の出題・採点ミスを防止する仕組みに資する議論を深めたいと考えています。皆さまからの活発な議論をお待ちしています。どうぞよろしくお願い致します。これで趣旨説明を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

---

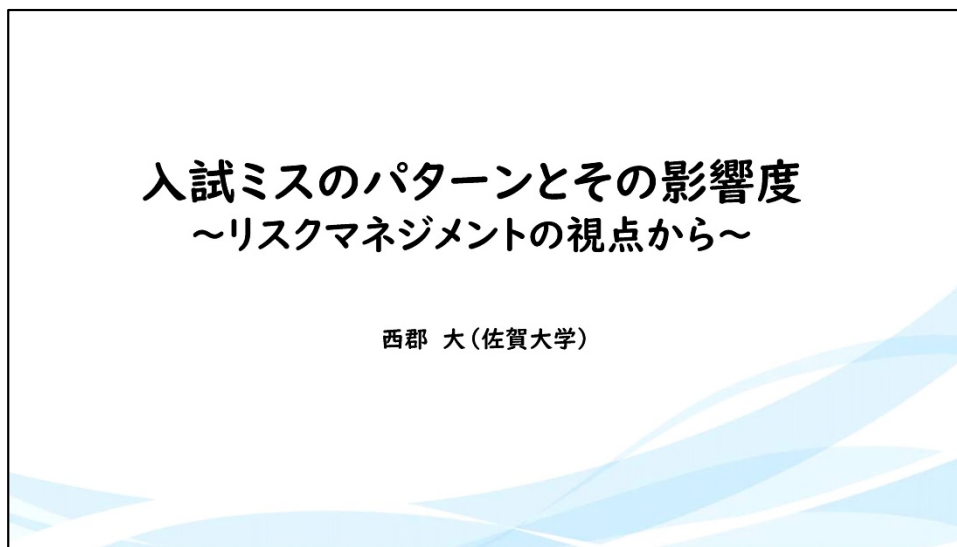
**【荘島・司会】** 秋田先生，ありがとうございました。それでは，最初の発表に移りたいと思います。佐賀大学の西郡先生より，「入試ミスのパターンとその影響度～リスクマネジメントの視点から～」という題目でご報告いただきます。西郡先生，よろしく申し上げます。



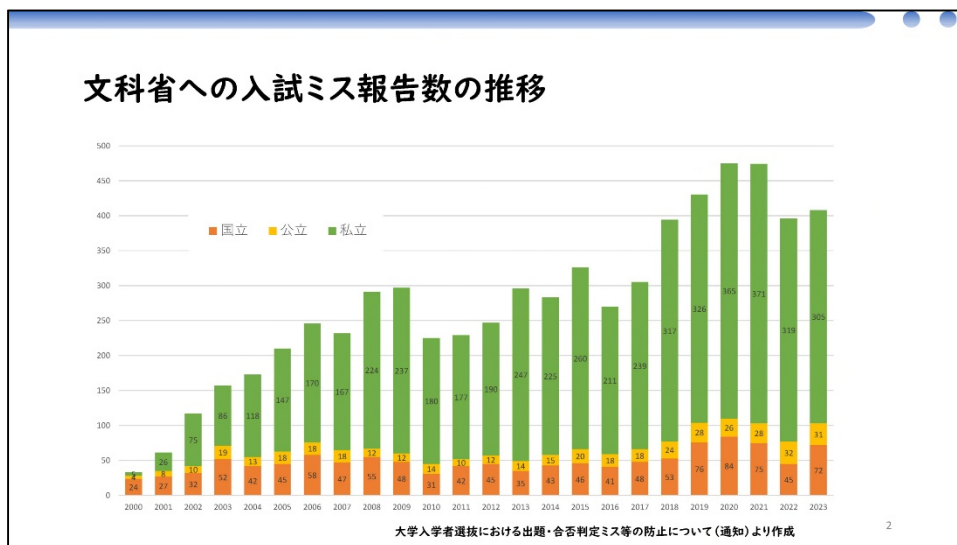
全体会 3 ○ 報告①

# 入試ミスのパターンとその影響度～リスクマネジメントの視点から～

■西郡 大 (佐賀大学 アドミッションセンター長, 教授)



佐賀大学の西郡です。今、ご紹介をしていただいたとおり、このようなテーマでご報告をさせていただきますと思います。よろしくお願いします。



まず、大学で入試ミスが生じた場合には、文部科学省への報告が求められています。これは2000年から2023年までの、国立・公立・私立大学の文部科学省への報告数の推移です。年を追うごとにその数は増えています。

ただしこの推移は、小さなものから大きなものまで、全ての入試ミスを報告することがしっかりと定着していることによるものだろうと思います。

## 入試ミスが生じる背景

- **入試業務の機密性とリソース**
  - 秘密を保持しながらの業務遂行
  - 作題, 点検, 採点に携わる教員の減少
- **選抜方法の多様化**
  - 評価方法・手続きの複雑化
  - 電算処理も含めた合否判定手続きの複雑化
- **情報公開による外部のチェック**
  - 試験問題や模範解答等の公開
  - 受験者本人への成績開示や入試情報の公開

入試ミスを0(ゼロ)にするのは極めて難しい

入試ミスのリスク分析が必要

3

どのような背景で入試ミスが生じるのかを整理したものです。まず1つ目に挙げられるのが、入試業務の機密性とリソースです。秘密を保持しながら学内で業務遂行をしなければならないため、試験作成を担当する先生たちは、他の人に自分が担当をすることを言えないということがあります。また、作題・点検・採点に携わる教員の数がどんどん少なくなってきており、そういった限られたリソースの中で遂行せざるを得ないため、目が行き届かずミスが生じてしまうという面はあるかと思えます。

また選抜方法の多様化によって、評価方法や手続きが煩雑化しています。複雑であるがゆえに、チェックが行き届かないということもあります。電算処理に関しても、傾斜配点、第1志望、第2志望、学内併願等の複雑な判定処理を行うため、ある時点でルールを変えた時に、その対応が十分に行われなかったということもあるかと思えます。

また3つ目に、情報公開による外部のチェック、視点により発覚するものがあります。試験問題や模範解答の公表により、外部から、「ここは少し違うのではないか」という指摘であるとか、昨今一般的になってきた受験生本人への成績開示により、受験生から「これはおかしい。これは合っていますか」というような問い合わせが来ることがあり、それらによって発覚するケースも挙げられると思えます。

そうしたことを考えると、入試ミスを半永久的にゼロに抑え続けるというのは極めて難しいため、何がリスクなのかという入試ミスの分析こそが必要ではないかと思えます。



## 新聞記事を素材に入試ミス进行分析

- ◆「聞蔵 Digital News Archives for librariesⅡ」  
(朝日新聞の記事検索システム)
- ◆期間：1990年1月1日～2007年12月31日(17年分)
- ◆検索方法：「入試」と「ミス」のAND検索 ⇒ 1,720件
- ◆対象入試：大学・短大の学部入試(大学院は除く)
- ◆対象方法：一般入試, 推薦入学, AO入試など  
(編入学試験や社会人入試等は除く)



【参考文献】  
 ・西郡大・倉元直樹,「新聞記事からみた『入試ミス』のパターンとその影響の検討」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』,第4号,pp.39-48,2009年.  
 ・西郡大,「大学入学者選抜における『入試ミス』の分類指標作成の試み」,東北大学大学院教育情報学研究所・教育部編『教育情報学研究』,第7号,pp.39-48,2008年.

3つのカテゴリー：「出題関連ミス」「試験実施・合格発表手続きミス」「合否判定ミス」

ここで紹介をしたいのは、以前、私が行った、新聞記事を素材に入試ミスを分類した研究です。当時、大学入試の公平性に関心があり、その公平性が揺るがされるような1つの場面としての入試ミスをテーマに研究を行いました。朝日新聞の記事検索システムを用いて、1990年から2007年までの17年分の記事を対象とし、「入試」と「ミス」のAND検索で、1,720件の記事を抽出して、それを一つずつチェックしていくという非常に大変な作業をしてまとめたものです。

その結果はスライドに記載した参考文献においてまとめていますが、今日はその内容について簡単に紹介したいと思います。

分類指標	該当件数
1. 出題者が意図した正答を導き出せない > 正解を導き出せない > 正解が複数ある > 問題文(図や表を含む)に誤りがある > 問題文が不十分である > 「出題ミス」とのみ記事に記されているもの	243
2. 単純な誤字・脱字	38
3. 募集要項で指定した出題範囲を逸脱している	24
4. 学習指導要領を逸脱している > 新旧課程の相違によるものを含む	13
5. 解答に有利・不利が生じる可能性がある > 漢字の書き取りで解答が他の設問等に存在する > 過去に出題した問題と同じ問題を出題した > 同じ問題冊子に綴じられている他教科にヒントが存在する > 一部の教科書に掲載されている問題を出題	13
6. リスニングテストにおける問題テープの編集ミス	7
7. 問題冊子に教示ミスがある > 選択すべき教科の指定など	5
8. 解答用紙にミスがある	3

【出題関連ミス】

分類の結果、「出題関連ミス」、「試験実施・合格発表手続きミス」、「合否判定ミス」という3つのカテゴリーに分けることができました。

まず1つ目の「出題関連ミス」について、一番多いのは「出題者が意図した正答を導き出せない」というものです。その他、「単純な誤字・脱字」、「募集要項で指定した出題範囲を逸脱している」、「学習指導要領を逸脱している」、「解答に有利・不利が生じる可能性がある」

といったものがありました。リスニングを実施している大学では、「テープの編集ミス」、「問題冊子に教示ミスがある」、「解答用紙にミスがある」といったものが報道されていました。

【試験実施・合格発表手続きミス】	分類指標	該当件数
	1. 問題用紙の配布ミス > 問題冊子の一部に乱丁・落丁 > 解答のヒントになるもの(計算過程や正解が記載されたもの)を配布	12
2. 解答用紙の回収ミス > 回収漏れ > 回収した解答用紙の紛失	2	
3. 試験時間に関するミス > 試験開始時間が遅延 > 試験時間が規定よりも短くなった > 試験時間が規定よりも長くなった	9	
4. 一般的な指示/確認/手続きミス	6	
5. 面接試験に関するミス	3	
6. 合格発表関連手続きミス > 追加合格に関する連絡 > 郵送(連絡)ミス	9	
7. その他	2	

2 つ目は「試験実施・合格発表手続きミス」です。今日は出題・採点がテーマですので、詳細には触れませんが、こういったものも入試ミスの分類に含まれるということをご紹介します。

【合否判定ミス】	分類指標	該当件数
	> 出題ミスが原因のもの > 採点ミスが原因のもの > 事務手続きのミスによるもの > コンピュータの合否判定プログラム設定ミス	118

影響度判別のための重要な指標

「判明時期」  
 「追加合格者の有無」  
 「影響年度」  
 「隠蔽(疑惑)」

この指標の組み合わせで影響度を分類

そして3つ目に、「合否判定ミス」です。出題や採点等のさまざまな理由によって、合否判定に最終的に影響をもたらすものです。該当件数は118件でした。

原因	判明時期	追加合格者	影響年度	隠蔽疑惑	件数	パターン
・ 出題ミス ・ 採点ミス ・ 事務手続きミス ・ コンピュータのプログラム設定ミス など	入学後	有	複数年	有	2	①
				無	9	②
			単数年	有	—	3
				無	64	④
		無	複数年	有	—	5
				無	—	6
			単数年	有	—	7
				無	17	⑧
	入学前	有	複数年	有	—	9
				無	—	10
			単数年	有	—	11
				無	26	⑫
		無	複数年	有	—	13
				無	—	14
			単数年	有	—	15
				無	389	⑯

さらに、この合否判定ミスに関する重要な指標として、いつ、そのミスが判明したのか、追加合格が出たのか、単年度なのか、複数年年度なのかの影響年度そして隠蔽（いんぺい）疑惑が生じたのか、生じなかったのかということがあると考え、影響度でも分類しました。

全部で 16 パターンあるわけですが、「判明時期」が「入学後」か「入学前」か、そして「追加合格者」、「影響年度」、「隠蔽疑惑」としています。記事として該当したものが、この①、②、④、⑧、⑫、⑯です。

### パターン ①: 最も深刻なパターン

#### 《事例》 入学後+追加合格(有)+複数年+隠ぺい疑惑

2年間に渡り、本来ならば合格であった十数名の受験生を不合格と判定。

採点コンピュータプログラムの設定ミスが原因。

その事実を隠蔽(疑惑)していたとされる。

#### 【記事から読み取れる対応や被害の概要】

- ・ 対象者全員へ一律20万円のお詫び金
- ・ 入学意思のある者には、他大学の入学金、予備校の授業料などを補償
- ・ 入学を諦めた者には、大卒者の生涯賃金との差額の一部を補償
- ・ 在学生の就職活動における風評被害を懸念し、県内企業への配慮要求
- ・ 複数の配分予算がゼロに。

「A大は、入試ミスを隠蔽していた。他の2大学とは状況が違う」(当時の文科省の担当者談)

ここではこの中からいくつか事例を紹介したいと思います。個別の名称は入っていません。

こちらは最も深刻なパターン①です。入学後に判明し、追加合格が出ました。そして複数年影響があって、隠蔽疑惑があったものです。事例としては、2年間にわたって、本来合格であった数十名の受験生を不合格と判定してしまいました。原因はプログラムの設定ミスで、その事実を隠蔽していたという記事でした。

記事から読み取れる対応や被害の概要としては、一律 20 万円のお詫び金、他大学の入学

金や予備校の授業料の補償，入学を諦めた者には大卒者の生涯賃金との差額の一部を補償すること，あとは在学生の就職活動における風評被害への配慮を求めること，あとは複数の配分予算がゼロになったということが挙げられます。

入試ミス隠していたという点で，他の事例とは状況が違っていると報道されていました。

**パターン ②**

**【特徴】 入学後+追加合格(有)+複数年**  
隠蔽(疑惑)がないという点においてのみ①と異なる  
原因:「事務手続きミス(4件)」「コンピュータプログラムミス(5件)」

《事例》  
5年間に渡り，本来ならば合格であった多数の受験生を不合格と判定。  
原因は，可否判定プログラムの設定ミス。対象とした事例では最大規模。

【記事から読み取れる対応や被害の概要】

- 対象者全員へ一律10万円のお詫び金
- 入学意思のある者には，他大学の入学金，予備校の授業料などを補償
- 各種配分予算が削減。

次のパターン②は，入学後に判明して追加合格があり，影響が複数年に及んだケースです。隠蔽疑惑がないという点において，①と異なります。原因としては，コンピュータプログラムミスや事務手続きミス等，複数ありました。

一番大きかったのは，5年間にわたって，本来だったら合格であった多数の受験生が不合格となりました。400名程度だったと記憶しています。一律に10万円のお詫び金であるとか，先ほど申しました補償であるとか，大学への配分予算が削減されたといったことが書かれています。

**パターン ④**

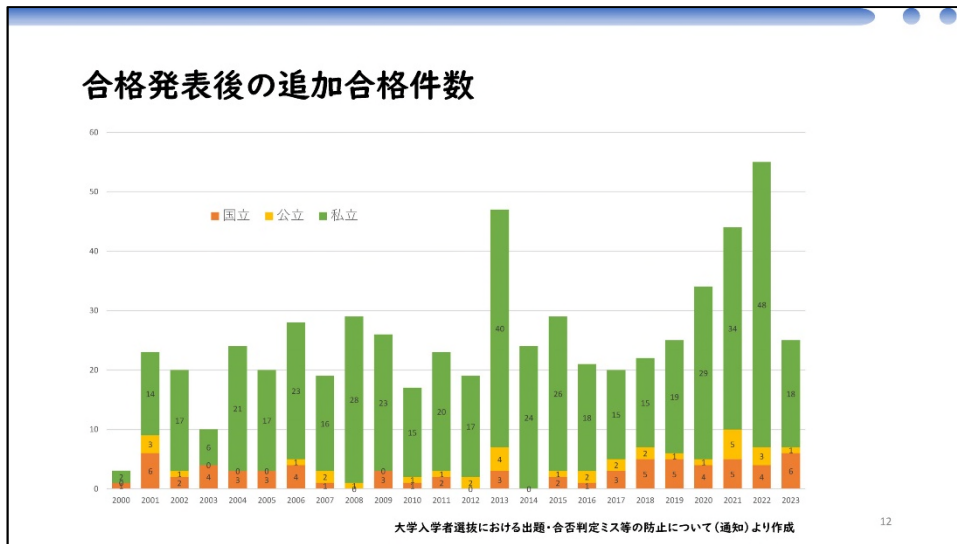
**【特徴】 入学後+追加合格(有)+単年**

- 被害影響が複数年ではないという点のみが②と異なる
- 原因は「出題ミス(44)」「採点ミス(13)」「事務手続きミス(5)」「コンピュータ設定ミス(2)」など。
- 該当事例は64件と比較的多い。
- 出題ミスや採点ミスは，予備校や受験関連の出版社から指摘されることが多い。
- 試験問題の公開，成績開示などを行ってれば，どの大学でも陥る生起頻度の高いミス。
- 結果的に4月から11月頃にかけて多く見られる傾向。

【記事から読み取れる対応や被害の概要】

- 対象者全員へのお詫び金
- 入学意思のある者には，他大学の入学金，予備校の授業料などを補償

パターン④は、入学後に判明して追加合格者が生じて、影響が単年度のみケースです。現在も比較的多く生じているケースではないかと思えます。影響年度が複数年ではないという点が②と異なるということで、出題ミスや採点ミスを原因とするものも多く見られます。出題ミスや採点ミスは予備校、受験関連の出版社から指摘されることが多いです。また試験問題の公開や成績開示などを行ってれば、どの大学でも陥る可能性のある頻度の高いミスになります。結果的に 4 月から 11 月ごろにかけて多く見られるパターンになります。



こちらは 2000 年から 2023 年までの追加合格件数の推移ですが、比較的増えているように見えます。近年、50 件を超えるという年もあったりします。可能な限り追加合格は避けたいところです。

**パターン ⑧**

**【特徴】 入学後+追加合格(無)+単年**

- 追加合格者が出ない点のみが④と異なる
- 原因は「出題ミス(14)」「採点ミス(2)」「コンピュータ設定ミス(1)」
- 一見すると、⑫よりも損失や被害などの影響度は小さい。
- ④に陥る危険性は紙一重であり、偶然性や運に作用される  
⇒ 受験者数や修正される点数の程度に影響を受ける

**【記事から読み取れる対応や被害の概要】**

- 公表のみで、具体的な被害の記述はほとんどない

No. 13

パターン⑧は、入学後に判明して、追加合格が出ない、そして単年度のみというケースです。これも原因としては、出題ミスや採点ミスがあります。一見すると、次に紹介する⑫よ

りも損失とか被害の影響度が小さく見えます。追加合格が出ないだけで影響度は小さく見えますが、その前に紹介した④に陥る危険性がありますので、偶然性や運に左右される非常に危ないパターンだと思われます。

### パターン ⑫

**【特徴】 入学前+追加合格(有)+単年**

- ・ 新年度(4月1日)開始前に,追加合格者が判明
- ・ 原因は、「出題ミス(18)」「採点ミス(2)」「事務手続きミス(3)」「コンピュータ設定ミス(3)」
- ・ 追加合格者に対して,新年度に間に合うように対応が可能。
- ・ 補償等発生。追加合格者の新年度からの生活を最低限補償できるのが救い。

**【記事から読み取れる対応や被害の概要】**

- ・ 入学意思のある者には,他大学の入学金,予備校の授業料などを補償

No. 14

そして⑫は入学前に判明して,追加合格が出ている,そして影響は単年度であって,入学前の3月までに判明したタイプのものであります。出題ミスや採点ミスが原因となっています。追加合格者に対して,新年度の新しい生活に間に合うように対応が可能というところが,入学年度をまたがないというところの1つの特徴になります。補償等は発生します。

### パターン ⑬

**【特徴】 入学前+追加合格(無)+単年**

- ・ 「入試ミス」として報道される大半を占める(389件)
- ・ ほとんどが些細なミス。
- ・ 原因は「出題関連ミス(346)」と「試験実施・合格発表手続きミス(43)」に大別。
- ・ 規模や状況に応じて対応は様々


No. 15

そして最後に最も多いのがパターン⑬で,入学前,追加合格が出ない,そして単年というケースです。入試ミスとして報道される大半を占めていました。ほとんどが些細なミスといえます。

### 過去の事例から学べること

- **合否判定に関わるミスは影響度が大きい**
  - 単なる出題ミスや採点ミスとは影響度が異なる。
- **情報公開は、入試ミス判明に繋がることに留意**
  - 成績開示や問題公表などは、入試ミスの指摘を受けやすい。
  - 原則開示の方向。非公開を貫くのは現実的に難しい。
- **入試ミスがあった場合は、公表が原則**
  - 隠蔽（疑惑を含む）は、大きな被害を招く。
  - そして、できるだけ迅速に。
- **できる限り対応可能な段階で抑える**
  - 新年度開始後のミス発覚は、対象者への対応が困難。

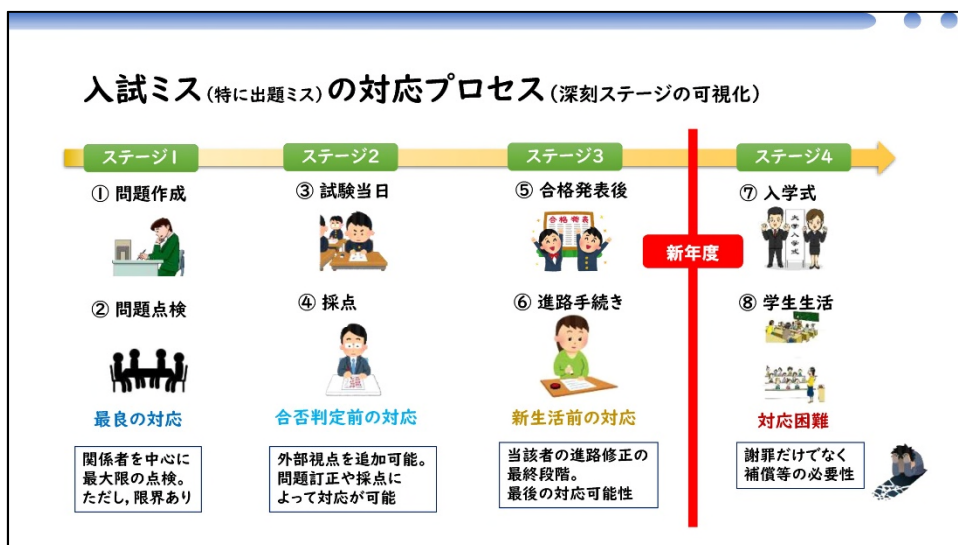
「入試ミス」と一括りにするのではなく、深刻な状況に発展する事象を構造的にとらえて、優先順位をつけることが必要



こういったパターンに分けてみると、その性格が見えてくるのですが、過去の事例から学べることとして、合否判定に関わるミスは当然影響が大きいです。単なる出題ミスや採点ミスとはインパクトが大きく異なります。また情報公開というのは入試ミス判明につながることに留意しておかなければいけません。当然のことですが、こういった開示や公表によって外部からの指摘を受けやすくなります。そして原則開示の方向にありますので、非公開を貫くというのは現実的に難しいと思います。

もし入試ミスがあった場合は、公表が原則です。受験生に配慮すると公表を控えたほうがいいのではないかなど、いろいろな考え方があられるかもしれませんが、隠蔽の疑いをかけられることになれば大きな被害となります。判明次第、迅速に公開・公表することが重要だと思います。

そして最後に、できる限り対応可能な段階で抑えたいということです。新年度開始後にミスが発覚すると、その対象者、受験生の対応が困難になります。



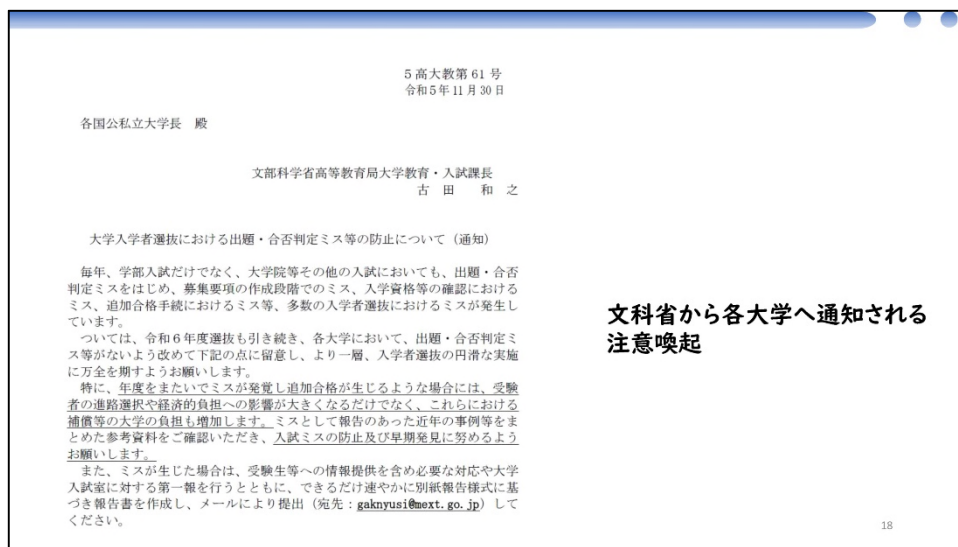
やはり入試ミスとひとくくりにするのではなくて、深刻な状況に発展する事象を構造的

に捉えることが必要だと思えます。

そういった入試ミスの対応について、そのプロセスを可視化してみました。

まずステージ1は問題作成・問題点検の段階です。この時点でしっかりと点検して対応ができれば、最良といえます。ステージ2は試験当日や採点の時、合否判定前の対応です。外部の視点を入れること、問題訂正や採点によって対応が可能な段階です。そしてステージ3は合格発表後です。入学手続きを行う2～3月の頃であり、対象者の進路修正の最終段階であるため、最後のチャンスと言いますか、対応可能性がある段階です。

しかし年度をまたぎますと、受験生も気持ちを切り替えて、新しい生活に向けて動いている時期での対応となり、困難な部分が多くあります。つまりこの新年度に移っているかという点は非常に重要なポイントになります。



そういったこともあり、文部科学省からも、このようにちゃんと下線を引いて、年度をまたいでミスの注意を促しているということがしっかりと通知されています。

実は数年前までは、年度またぎを強調した記載はなかったのですが、やはり年度またぎの入試ミスが大きな影響をもたらしているということで、こういった注意喚起がなされるようになったと思います。



### 「試験問題点検（試験前）」の修正チャンス

誤字・脱字等	記号, 単位, 数式, 漢字, 英語のスペル, 年号等の誤りや誤字脱字
出題範囲外からの出題	学習指導要領記載の範囲外からの出題。 募集要項上で出題範囲外としている分野からの出題。
正答の不存在, 複数存在	正答が存在しなかった。正答が複数存在した。 問題の前提条件が不十分で正答が導けない。
複合型	問題文中に誤記が存在し, 結果として正答が複数導ける状態。

点検員の増加?  
外部委託?  
↓  
限界がある。

出題ミスパターンを学習したAIの活躍を期待。

19

先ほどの入試ミスの対応プロセスをもう少し細かく見ていきたいと思います。試験問題点検、試験前の修正チャンスです。出題範囲外からの出題、正答の不存在、複数存在、複合型といった形式的なものをしっかりとチェックする必要があります。

この確認をさらに強化するための方策を考えると、点検員を増加するとか、外部に委託するといった選択肢があるかもしれませんが、これはどこまでコストをかけるかというところとも関わってきますし、やはり限界があります。そういった意味では、出題ミスのパターンを学習したAIの活躍を期待したいと個人的には思っています。

### 「試験時間終了」までの修正チャンス




本試験実施



問題作成委員以外の  
大学関係者（教員, 大学院生など）

➔

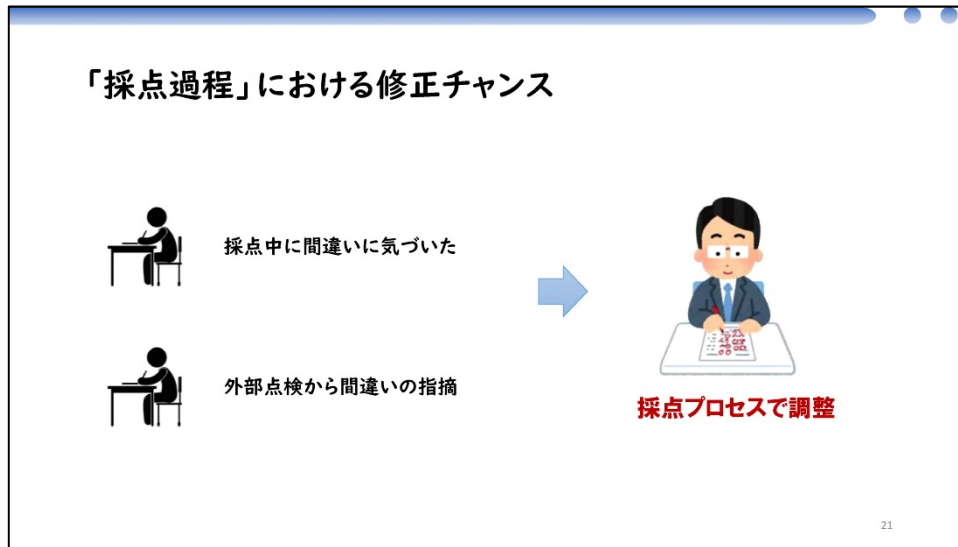
問題訂正



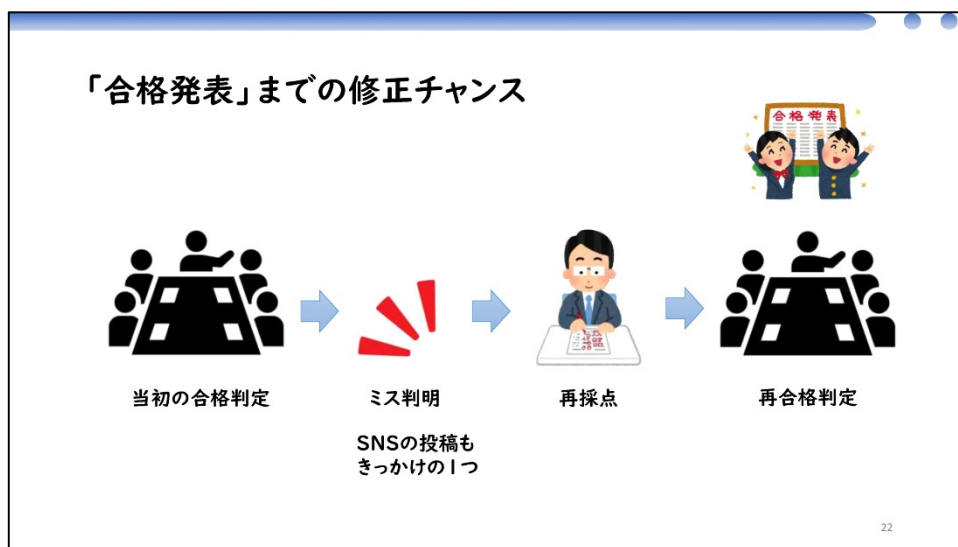
外部の回答者（委託, 高校教員）

20

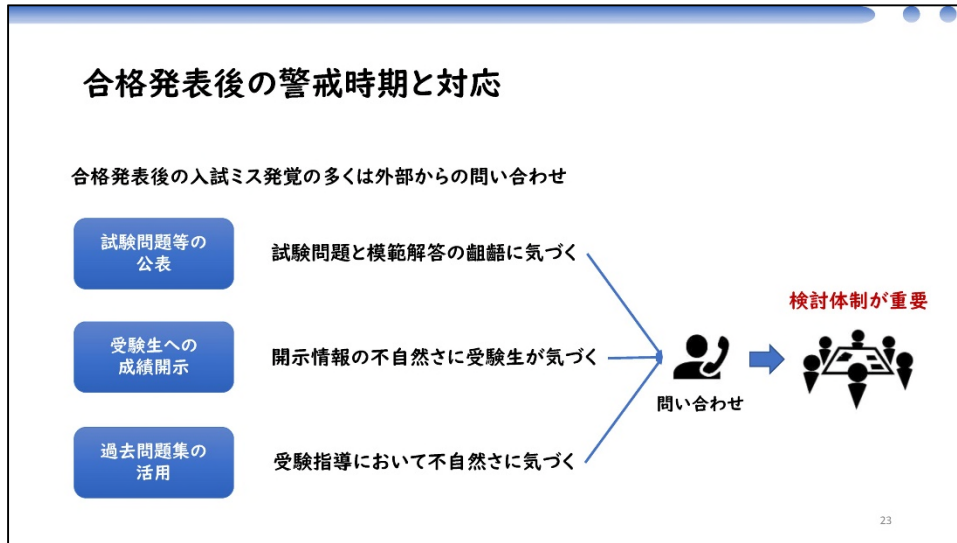
次は「試験時間終了」までの修正チャンスです。本試験を実施しているタイミングであり、受験生が試験問題を目にしています。同じ時間帯に、例えば問題作成委員以外の学内の教員や大学院生、あるいは委託した外部の回答者や連携協定等を結んだ高校の先生と一緒に解いてもらうことができます。そこで試験時間中にミスが判明すれば、問題訂正という形で対応ができます。こういった修正のチャンスがあります。



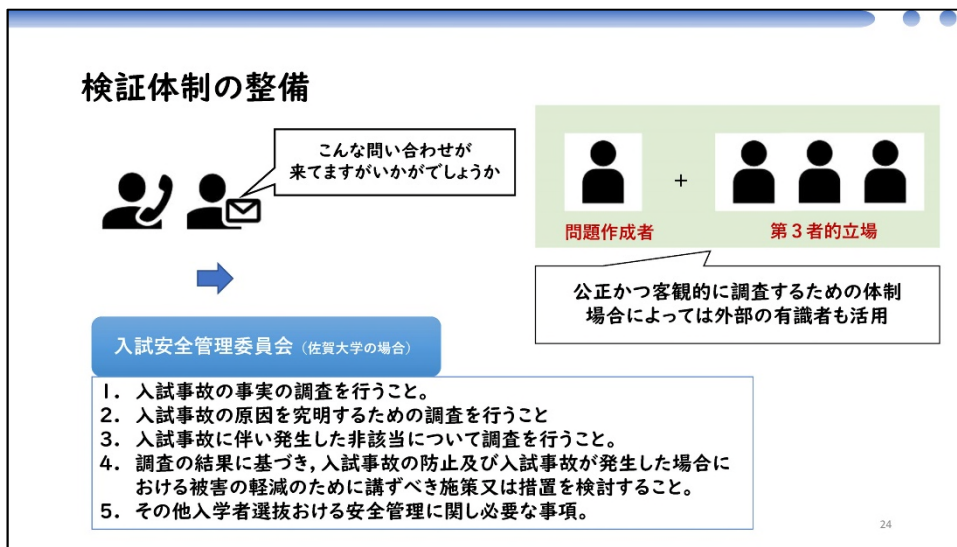
次に採点過程においても修正のチャンスがあります。採点中や、試験終了後に予備校等の外部機関に点検してもらった際に間違いに気付くケースがよくあります。そういった情報に基づいて、採点プロセスで修正するというのも1つのチャンスになります。



そして合格発表までの修正チャンスです。当初の合格判定後に、SNS への投稿など様々なきっかけによりミスの可能性が指摘されます。そういったものも重要な情報ととらえて検討し、ミスが確定次第、再採点、再合格判定を行うことができますので、修正チャンスといえます。



そこまでやっても、やはり合格発表後にも外部からの指摘はあるわけです。試験問題の公表や受験生への成績開示のタイミング、受験指導現場において過去問を活用している際に気づき、大学に問い合わせがあるということはよくあるケースだと思います。



その問い合わせに対して十分検討するための体制づくりが極めて重要だと思います。例えば「入試課にこのような問い合わせが来ていますが、いかがですか」と問題を作成した先生だけに聞いてしまうと、「それは大丈夫だ。問題はないのではないか」ということで終わってしまいかねません。

これは大きな問題につながるリスクがあります。問題作成者以外の第三者的な立場の方にも検討に加わってもらって、できる限り、客観的に調査する体制を整備することが重要になってくるかと思っています。

ちなみに佐賀大学でも安全管理委員会を立ち上げて、非常にグレーな問い合わせが来た時にはこういった委員会で検討をすることにしています。

### まとめ

- 入試ミスは発生させないことに限る(誰も望んでいない)。
- 入試ミスを完全にゼロに抑えるのはほぼ不可能。
- 年度をまたぐ追加合格者を出すことだけは避けたい。
- リスク分析を踏まえて、重点的チェック項目を洗い出す。
- 教科・科目の出題ミスパターンに関する研究が必要。
- 出題ミスのパターンや事象の蓄積を生かす仕組みの必要性。
- AIをはじめとする先端技術を活用した入試研究に期待。

25

以上のことをまとめます。入試ミスは発生させないことに限ります。誰も望んでいません。誰も幸せにならないし、みんな一生懸命やっているのですが、どうしても生じてしまいます。入試ミスを完全にゼロに、半永久的に抑えるのはほぼ不可能ということです。

しかし入試ミスにも軽微なものから重大なものまであることを考えれば、少なくとも年度をまたぐ追加合格だけは避けたいです。これだけは避けたいという思いで注力して取り組むことが必要だと思いますが、それでもやはり難しい面はあるかと思えます。

そういったリスク分析を踏まえて、重点的なチェック項目を洗い出すことが必要だと思います。入試全体という視点だけではなく、科目・教科の出題パターンに関する研究や知見も重要だと思います。

例えば数学の期待値という言葉は、数学 A の範囲になったり、数学 B の範囲になったりして、そのたびに「出題範囲外からの出題」という入試ミスになり得ます。

このような教科、科目ごとの生じやすい入試ミスのパターンという知見の積み上げは必要だと思います。

そして最後に、生成 AI をはじめとする先端技術を活用して、出題ミスを防ぐための技術開発に取り組んでいくことが必要なのではないかと思えます。以上で、私の報告は終わらせていただきます。ありがとうございました。

---

【莊島・司会】 西郡先生、ご発表をありがとうございました。さまざまな入試ミスについての過去の事例の分類とパターン別の対応方法についてご報告いただきました。

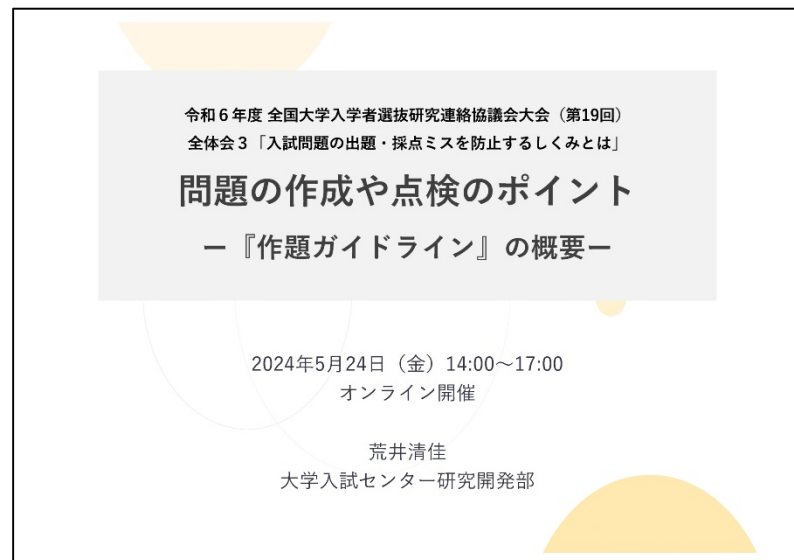
それでは大学入試センターの荒井先生より、「問題の作成や点検のポイント—『作題ガイドライン』の概要—」という題目でご報告していただきます。荒井先生、よろしく願います。■

**全体会 3** ○ 報告②

## 問題の作成や点検のポイント－『作題ガイドライン』の概要－

■ 荒井 清佳（大学入試センター 研究開発部准教授）

大学入試センター研究開発部荒井です。本日は、「問題の作成や点検のポイント」というタイトルで、大学入試センター研究開発部が作成しました『作題ガイドライン』の概要をご紹介します。



このガイドラインは問題作成や点検のポイントを文書化してまとめたものです。入試ミス防止の一助となればと思い、ご紹介させていただきます。

## 問題作成とは…

多肢選択形式の項目を作成する手順を説明したが、くり返し指摘してきたように、項目作成上の諸注意をまもり、その手順をふみさえすれば、自然により項目が作成されてくるというものではない。テスト項目作成の作業は創造的な作業なのである。思いつきの問題や既存の資料から適当にぬいてきた問題をよせ集めてよいテストを作ることはいできない。テストの出発点はテスト項目であり、テストは合成される項目以上のものとはなりえないのであるから、テスト作成者は、テスト項目を慎重に作成しなければならない。

肥田野直 (1972).テスト I (心理学研究法第7巻) 東京大学出版会.

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3
2

こちらは問題作成に関する『テスト I』という本の一節です。本報告は問題作成に焦点を当てたものなので、こちらのスライドを用意しました。2行目に「項目作成上の諸注意をまもり、その手順をふみさえすれば、自然により項目が作成されてくるというものではない。テスト項目作成の作業は創造的な作業なのである」とあります。良い問題を作ろうとされた方はお分かりになるかと思うのですが、作成自体に生みの苦しみのようなものがあり、この一節にある「創造的な作業」という言葉にご納得いただけるのではないかと思います。

しかし、本日注目したいのはこの文章の前段の部分です。「項目作成上の諸注意をまもり、その手順をふみさえすれば、自然により項目が作成されてくるというものではない」とあります。言い換えますと、少なくともその諸注意を守る必要はあるということになるかと思えます。本日、ご紹介します『作題ガイドライン』はこのような諸注意をまとめたただけのものではないのですが、それに近い存在のものと思っていただけたらと思います。

## テストの作成手順

### 問題の作成

1. どのような問題をつくるかを定める
  - ◆ その項目で測りたい内容 (分野, 能力など)
  - ◆ どのように問うか
  - ◆ 難易度
2. 実際に作成する
  - ◆ 文章, 図表, 問いかけ文, 選択肢…
3. 問題を見直す

### テストの作成

1. 問題を組み合わせる
2. テスト全体として見直す

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3
3

こちらはテストの作成手順を簡単にまとめたものです。問題作成前にどのような問題を

作るのかを決め、作成後には問題の点検や見直しを行います。いくつか問題が出来上がった後には、問題を組み合わせ、テスト全体として見直します。このように、実際の作成作業以外の部分の作業も付随します。これらは全部、『作題ガイドライン』に項目として入っている内容です。

### 「作題ガイドライン」の例

「言語運用力・数理分析力」試験の枠組み  
および作題ガイドライン (Ver. 2)

2019年5月発刊  
編者：大学入試センター 研究開発部

大学入試センター研究開発部(編)(2019).  
「言語運用力・数理分析力」試験の枠組み  
および作題ガイドライン(Ver. 2), 平成 28-  
30 年度理事長裁量経費研究「大学での学修  
に必要な基本的能力の評価方法に関する研  
究」報告書, pp. 127-172.

※研究の一環として作成したものであり、大学入学共通テストとは  
関係ありません

2024.5.24全国大学入学選抜研究連絡協議会大会 全体会3 4

こちらが『作題ガイドライン』です。大学入試センター研究開発部が作ったもので、発行した報告書の一部です。注意書きのとおり、こちらは研究開発部の研究の一環として作成したもので、大学入学共通テストとは関係がありませんのでご留意いただければと思います。

### 背景

- 「言語運用力・数理分析力」試験の開発 (大学入試センター研究開発部, 2016, 2019)
  - ・ 大学で学ぶための基本的な学力を既存の教科・科目別の学科試験とは異なる観点から評価することを目的とした試験

↓ この試験の枠組みに沿った問題を作成するための手引書

- 「言語運用力・数理分析力」試験の枠組みおよび作題ガイドライン(Ver.2)の作成 (大学入試センター研究開発部, 2019)
  - ・ 「テスト・スタンダード」(日本テスト学会, 2007)
  - ・ PISAにおける「評価の枠組み」
  - ・ 試作問題の作成・改良の過程における議論

2024.5.24全国大学入学選抜研究連絡協議会大会 全体会3 5

この『作題ガイドライン』の作成についてご説明します。約10年前、大学入試センター研究開発部では、『言語運用力・数理分析力』試験の開発」という研究を行っていました。この試験は、大学で学ぶための基本的な学力を既存の教科・科目別の学科試験とは異なる観

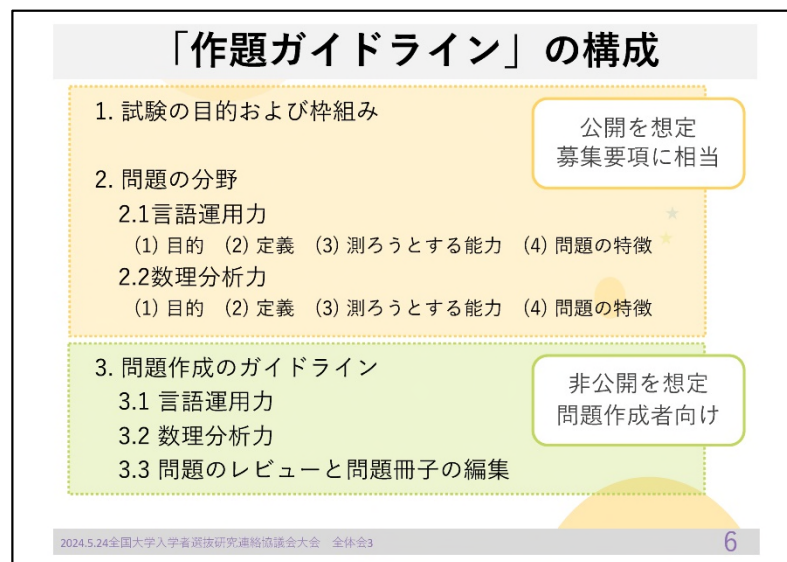
点から評価することを目的とした試験でした。試験というものは継続的に問題を作成していく必要がありますので、この試験の枠組みに沿った問題を作成するための手引書が必要でした。

そして出来上がったのが、『言語運用力・数理分析力』試験の枠組みおよび作題ガイドライン (Ver.2)』というものになります。本日はこれを『作題ガイドライン』と呼んでいます。

この『作題ガイドライン』の作成に当たっては、日本テスト学会が編集した『テスト・スタンダード』を参考にしました。『テスト・スタンダード』にはテスト開発の際に明確にするべき事項が挙げられています。なお、この『テスト・スタンダード』の基本条項 1.3 には、「質問項目作成のための手引書を用意すること」とも書かれていますので、それにもかなったものになっています。

またこちらの「言語運用力・数理分析力」試験は、教科・科目別ではない試験でしたので、PISA テストの『評価の枠組み』という冊子も参考にしました。

『Ver.1』を作成し、その後、作成・改良の過程や、作題に関わった方々の議論などを踏まえ、『Ver.2』が完成しました。



こちらが『作題ガイドライン』の構成です。3節に分かれています。1節と2節は受験者や外部への公開を想定した内容です。入試で言えば募集要項に相当するものではないかと思えます。「試験の目的および枠組み」、あるいは「問題の分野」について書いてあります。3節は非公開を想定していて、問題作成者に向けた内容になっています。

この『作題ガイドライン』自体は多肢選択式の問題を想定して作成されていますが、内容自体は選択式に限らず、短答式や記述式等の問題にも当てはまる内容だと考えています。本日はなるべく一般化してご紹介し、具体例として、時々この言語運用力のお話を混ぜていきたいと思っています。では次のスライドから各節の中身を見ていきます。



## 1節と2節

1. 試験の目的および枠組み  
2. 問題の分野  
2.1 言語運用力  
(1) 目的 (2) 定義 (3) 測ろうとする能力 (4) 問題の特徴  
2.2 数理分析力  
(1) 目的 (2) 定義 (3) 測ろうとする能力 (4) 問題の特徴

- 試験の目的、枠組み、想定される受験者等
  - ・例) 大学で学ぶための基本的な学力を既存の教科・科目別の学科試験とは異なる観点から評価することを目的とする
  - ・例) ○○入試での活用を想定
- 測定する能力の目的、定義、その下位特性、特徴等
  - ・例) ○○力とは、△△する能力のことである
  - ・例) △△する能力を、～～、～～、～～の3つの観点から測定する
  - ・例) 日本語または英語の文章が提示され、解答に必要な情報は問題の中で与えられる

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3 7

まず1節と2節です。こちらは受験者や大学関係者等への公開を想定しています。1節では、試験の目的や枠組み、想定される受験者等について書いてあります。2節では、測定する能力ごとに、目的や定義、問題の特徴等が記載されています。またその測定する能力をさらに下位の分野に分けて測定する場合には、その下位の分野、ここでは「下位特性」とありますが、その詳細等について書いてあります。

例としてお示ししているのは、言語運用力です。言語運用力とはどのような能力であるのか、目的や定義を示しています。また、言語運用力をさらに3つの能力に分けて測定していましたので、その3つの下位分野についての紹介もしています。

これを読んだだけではどのような問題が出題されるのかが分かりませんので、問題の特徴として、例えば「解答に必要な情報は問題の中で与えられる」ことが記されています。

この1節と2節の目的は、受験者が試験に対し不安を抱かないよう、どのような試験であるのかを理解してもらうことですので、サンプル問題を提示することも考えられます。

## 3節

3. 問題作成のガイドライン  
3.1 言語運用力  
3.2 数理分析力  
3.3 問題のレビューと問題冊子の編集

- 試験問題を作成する立場にある人が読むことを想定
- 測定する能力ごとに
  - ◆ 問題作成の基本方針
  - ◆ 能力の問い方
  - ◆ 構成要素
  - ◆ 問題冊子の構成
  - ◆ 例題
- 問題のレビューと問題冊子の編集時に考慮すべき事項

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3 8

3節は、試験問題を作成する立場にある方が読むことを想定しています。この『ガイドラ

イン』では3.1節では言語運用力について、3.2節では数理分析力について説明されています。測定する能力によって、3節の内容は異なってくると思いますが、共通する内容としては、問題作成の基本方針、能力の問い方、構成要素、問題冊子の構成、例題などがあると考えられます。

また最後の3.3節には、問題のレビューと冊子を編集する際に考慮すべき事項を示しています。

## テストの作成手順

**問題の作成**

1. どのような問題をつくるかを定める
  - ◆ その項目で測りたい内容（分野、能力など）
  - ◆ どのように問うか
  - ◆ 難易度
2. 実際に作成する
  - ◆ 文章、図表、問いかけ文、選択肢…
3. 問題を見直す

**テストの作成**

1. 問題を組み合わせる
2. テスト全体として見直す

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3 9

テストの作成手順を再び提示しています。まずは問題作成とテストの作成に関わるところを見ていきたいと思います。

## 3.1～3.2節 基本方針、能力の問い方

- 問題作成の基本方針
  - ◆ 問題に共通する方針を示す
    - ・例) 大学の学びにつながる題材を用いる
    - ・例) 解答に必要な情報が問題の中に含まれる状態を作る
  - ◆ 前提とする/前提としない知識や内容
    - ・例) 義務教育段階までの知識は前提としてよい
    - ・例) 特定の選択科目の履修を前提とした出題は避ける
- 能力の問い方
  - ◆ 各下位特性を測定しようとする際の問い方を例示
    - ・例) テキストで述べられた事実と合致するものを選ぶ
    - ・例) テキストの主張を補強するのに役立つ事項を選ぶ

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3 10

『作題ガイドライン』では3.1節から3.2節に相当します。まず、問題作成の基本方針が述べられています。その分野の問題全てに共通する方針を示しておきます。

言語運用力の例では、例えば「大学の学びにつながる材料を用いる」、「解答に必要な情報が問題の中に含まれる状態を作る」等、先ほどの1節、2節と重複する部分もありますが、重要な点を書いています。

また問題を解くに当たり、前提とする、あるいは前提としない知識等を示し、問題作成の際に留意しておくべきことをまとめています。

また「能力の問い方」も示しています。下位分野ごとに、典型的な問い方の例が考えられる場合には、それを示しておくものです。この問い方の例があることで、作成する際の助けにもなりますし、また試験を継続的に作成する場合には、試験としての統一感をもたせることができます。

### 3.1～3.2節 構成要素、問題冊子の構成

- 問題の構成要素
  - ◆ 問題を構成する各要素について、説明、種類、留意点等を示す
    - ・例) 「素材(文章や資料等)」の定義、選定時の留意点、分量
    - ・例) 「問いかけ文」の例
    - ・例) 「選択肢」の種類、数
  - ◆ 構成要素の組合せ方
- 問題冊子の構成
  - ◆ 問題数、時間、分量の目安
  - ◆ 問題冊子を構成する問題のバランス
    - ・例) 下位特性、「素材」の種類、「素材」の分量

2024.5.24全国大学入学志願者調査研究連絡協議会大会 全体会3
11

その他に、問題の構成要素があります。問題は、「問いかけ文」、「選択肢」、問う時の「素材」等、いくつかの要素から構成されています。言語運用力では、文章を読む問題がありましたので、その「素材」の定義、選定時の留意点、「問いかけ文」の例、「選択肢」の種類や数、「構成要素の組合せ方」などを掲載しています。

これらのことは、問題のミスを防ぐという意味で、重要なポイントの1つと考えています。問いかけ文が間違っていたり、曖昧であったりすると、答えられない問題になってしまいます。また選択式でマークシートを用いる場合には、マークシートごとに記号の種類や数が異なります。どのようなマークシートを使っているのかを明記しておらず、例えばマークシートにない記号を選択肢として作ってしまった場合には答えられない問題になってしまいます。非常に形式的なところですが、作成・点検の段階で必ず押さえておきたい内容となります。

また最後に「問題冊子の構成」について、問題を組み合わせて冊子を作ることがほとんどかと思います。問題数や時間、分量等の目安を示しておくことで、適切な問題冊子の構成につながることができます。

## テストの作成手順

**問題の作成**

1. どのような問題をつくるかを定める
  - ◆ その項目で測りたい内容（分野、能力など）
  - ◆ どのように問うか
  - ◆ 難易度
2. 実際に作成する
  - ◆ 文章，図表，問いかけ文，選択肢…
3. 問題を見直す

**テストの作成**

1. 問題を組み合わせる
2. テスト全体として見直す

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3 12

続いて、後半になります。テストの作成手順の見直しの部分です。「問題を見直す」、「テスト全体として見直す」という部分になります。

## 問題/ テストのレビュー

- 作成された問題がテストの目的に沿った内容となっているか
- 編集されたテストがテスト全体として適切であるか

**等を確認する過程**

- ◆ 問題作成者本人だけでは多数の観点から見直すことは困難
- ◆ 問題作成者以外の者を含むメンバーで行う

※ちなみに共通テストでは…

問題を作成する委員会

←

問題を点検する委員会

- 科目ごと
- 科目横断

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3 13

まず「問題/テストのレビュー」についてです。点検というと、作成より簡単な作業のように思われがちですが、むしろ点検と作成が一体になって進んでいくところがあると思います。問題のレビューでは、作成された問題がテストの目的に沿った内容となっているかどうかを確認します。テストのレビューでは、編集されたテストがテスト全体として適切であるかどうかを確認します。

問題を作成した本人は何回も問題を見たり、解いたりしているため、例えば誤字・脱字があったとしても、自分で見つけるのはなかなか難しい状態になります。そのため、問題作成者以外のメンバーで行うことが望ましいと考えられています。

ちなみに共通テストでは、問題作成・点検についてそれぞれ委員会があるとホームページ

上に書いてありました。

### 3.3.1節 問題のレビューの観点の例

問題のレビューにおいて考慮すべき事項の例

- (1) 出題意図が試験の目的に合致しているか
- (2) 問題の題意（何が問われているのか）が伝わるか
  - ◆ 作題者の意図と違った解釈をされるおそれがないか。
  - ◆ 問題の説明は受験者にとって十分に分かりやすいか。
  - ◆ 正答が一意に定まるかどうか。立場や読み方が違って、問題作成者が想定した正答が得られることを確認する。
  - ◆ 問題の表現が適切であるか。
- (3) 問題の並び順に配慮しているか
- (4) 問題の内容が適切であるか
  - ◆ 社会的に不適切な内容を含まないか。特定の受験者に有利あるいは不利になるような問題は作らない。

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3 14

3.3節の問題のレビューとテストのレビューについての記載は、全体としては2ページ少しです。問題の種類や測定する能力によらず、点検の際に考慮すべき観点の例を挙げてあります。

まず問題のレビューの観点として「(1) 出題意図が試験の目的に合致しているか」、 「(2) 問題の題意（何が問われているのか）が伝わるか」、 「(3) 問題の並び順に配慮しているか」、 「(4) 問題の内容が適切であるか」があります。

これらのうち、問題作成時のミスに特に関連するのはこの(2)ではないかと思います。例として「問題の説明が受験者にとって分かりやすいかどうか」を考えてみますと、たとえ良い問題であっても、作成者の独りよがりや受験者に伝わらない場合には、成立しない問題になってしまうことがあります。

また、「正答が一意に定まるかどうか」も重要です。正答が複数できてしまう、正答がないということがないように、立場や読み方が違っていても正答になるかどうかを確認する必要があります。例えば言葉の意味合いが年齢層によって変わってきている場合がありますが、そのような単語は避ける必要があります。入試問題であれば受験生の立場からの点検が必要になります。

### 3.3.2節 テストのレビューの観点の例

問題冊子の編集において考慮すべき事項の例

- (1) 問題冊子の構成
  - ◆ 出題文や問題形式、難易度等のバランスを検討する。
- (2) 分量や難度
  - ◆ 問題数や問題の難易度を試験時間に合わせて設定する。
- (3) 体裁
  - ◆ 読みやすいレイアウトにする。
- (4) 正解表の作成
  - ◆ 問題冊子の編集に合わせて、各設問の正答と配点を表形式でまとめる。

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3 15

続いて、テストのレビューです。問題冊子の構成のバランス、分量や難度、体裁、正解表の作成等について書いてあります。入試ミスとの関連を考えると「(4) 正解表の作成」が大切ではないかと思えます。

テストは多くの問題により構成されており、配点がそれぞれ異なることがあります。選択式だけならまだしも、記述式や短答式などが混ざっていたりすると、構成が複雑になっている場合があります。この正解表を作成することで、問題数や合計点に誤りがないか確認することができます。

解答用紙を作った場合にも、問題数と解答用紙がきちんと合っているかどうかの確認に役立ちます。従って採点時のミスを防ぐことにつながるのではないかと思います。

### まとめ

- 「作題ガイドライン」(大学入試センター研究開発部、2019)を紹介した。
  - ◆ 試験の枠組みに沿った問題を作成するための手引き書
  - ◆ 問題作成時に手元に置いておく
- 「テストの基本設計」に則って作成する
  - ◆ 試験の目的や測定する能力の定義
  - ◆ 問題作成の基本方針、能力の問い方、構成要素等
- 問題作成者以外の者を含むメンバーで点検する
  - ◆ 問題/テストのレビューの観点

2024.5.24全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 全体会3 16

最後に、まとめです。本報告では、大学入試センター研究開発部が作成した『作題ガイドライン』を紹介しました。この『作題ガイドライン』は試験の枠組みに沿った問題を作成す

るための手引書に当たります。問題作成時に手元に置いておくようなイメージです。

問題作成時のミスの防ぐ仕組みの1つとして、このようなガイドラインを用意し、テストの基本設計にのっとって作成することが挙げられると考えます。また、問題のレビューや点検は、非常に大切です。問題作成者本人による点検には限りがありますので、本人以外の者を含むメンバーで点検をすること、またその際には点検の観点を共有することが肝要ではないかと考えています。

### 引用文献

- 肥田野直 (1972). テスト I (心理学研究法第7巻) 東京大学出版会.
- 大学入試センター研究開発部(編) (2016). 『平成23-27年度特別研究 新しい試験の開発に関する調査研究「大学での学修に必要な基本的能力の測定」最終報告書』.
- 大学入試センター研究開発部(編) (2019). 『平成28-30年度理事長裁量経費研究「大学での学修に必要な基本的学力の評価方法に関する研究」報告書』.
- 日本テスト学会 (編) (2007). テスト・スタンダード：日本のテストの将来に向けて. 金子書房.

2024.5.24全国大学入学選抜研究連絡協議会大会 全体会3
17

報告は以上になります。ご清聴をありがとうございました。

【荘島・司会】 荒井先生、ご発表をありがとうございました。作題に関する入試ミスをいかに減らすかという観点から、『作題ガイドライン』が入試ミスを減らす下支えになるといったご報告でした。ガイドラインの中でも特に問題作成と、点検のポイントについて、焦点化していただき、ご紹介していただいたと思います。荒井先生、どうもありがとうございました。

続いて、大学入試センターの椎名先生より、「入試問題作成の手引きに関する考え方—アンケート調査を基に一」という題目でご報告していただきたいと思います。椎名先生、よろしくをお願いします。■

## 全体会3 ○ 報告③

# 入試問題作成の手引きに関する考え方—アンケート調査を基に—

■ 椎名 久美子 (大学入試センター 試験・研究副統括官, 研究開発部教授)

大学入試センターの椎名です。「入試問題作成の手引きに関する考え方—アンケート調査を基に—」についてご報告したいと思います。

全体会3「入試問題の出題・採点ミス防止のしくみとは」

## 報告③ 入試問題作成の手引きに関する考え方—アンケート調査を基に—

椎名久美子

(大学入試センター 試験・研究副統括官, 研究開発部教授)

2024/5/24

令和6年度入研協 全体会3

1

### 発表の構成

1. 入試問題作成の「手引き」とミス防止
2. 「問題作成の手引き」に関するアンケート調査について
  - 2.1 質問項目の構成
  - 2.2 調査の実施
  - 2.3 回答者の所属大学の属性に関する集計
3. 「問題作成の手引き」に関する回答の集計結果
  - 3.1 「問題作成の手引き」の実態(QD-1)
  - 3.2 「問題作成の手引き」についての考え(QD-2)
4. まとめ

2



本報告では、この全体会での私の報告の位置付けについてご説明した後、ご紹介するアンケート調査の質問項目とその集計結果について説明します。最後に、全体討論につながるかもしれない観点とともにまとめを示したいと思います。

1. 入試問題作成の「手引き」とミス防止

令和3年度の総合型・学校推薦型選抜に関する実態（荒井ほか, 2023）  
 「（共テ以外の）教科・科目テスト」を課す区分がある大学（総合型: 184大学, 学校推薦型: 234大学）のうち、  
 「問題の作成が負担である」が「やや当てはまる」「当てはまる」大学 } 総合型: 約70%, 学校推薦型: 約80%  
 「問題の点検が負担である」が「やや当てはまる」「当てはまる」大学 }

・ テストの開発, 実施, 利用, 管理にかかわる規準（日本テスト学会編, 2007）

1.3 質問項目の設計

質問項目の設計には、測定内容に関する十分な知識はもちろんのこと、その内容を測定するのにふさわしい質問形式や表現についての十分な知識と経験が必要である。開発者は、質問項目作成のための手引を用意する。また、質問項目は回答者が質問の意図や回答方法を正しく理解できるよう明快で統一のとれた表現を用いる。

→ 解説 (pp. 31-32)

開発者は目的に合致したテストを作成し、質問項目の特性を維持していくために、質問項目作成のための規準を整備し、質問項目に関する手引を用意することが望ましい。質問項目作成者は手引を活用し、担当者によって解釈が異なることがないように心がける。手引は質問項目作成の過程で随時改良し、作業の実状に合致した内容とする。

➤ 入試問題作成の「手引き」の活用 → 問題作成や点検の負担減 → ミスの防止に繋がるも期待  
 ➤ 入試問題作成の「手引き」の実態は？ 大学関係者の考えは？： 2023年度アンケート調査

3

大学入試センターの研究開発部が2021年度に実施したアンケート調査の中に、総合型や学校推薦型選抜における知識・技能、思考力・判断力・表現力等の評価の実態に関する質問項目があります。回答して下さった大学のうち、総合型や学校推薦型選抜において、「共通テスト以外の教科・科目別テストを課す区分がある」という大学が、総合型選抜では184大学、学校推薦型選抜では234大学ありました。それらのうち、「問題の作成や点検が負担である」と回答をした大学は、それぞれ7割、8割程度を占めていました。

この全体会3のテーマは「入試問題の出題・採点ミスの防止」ですが、このアンケート調査で示された問題の作成や点検の負担感は、「ミスを防止せねば」という緊張感にもつながるものと思われます。どうやったらこの負担感を軽減して、ミスの防止につながられるかという観点から、日本テスト学会が2007年に策定した『テスト・スタンダード』の中で参考になりそうな条項を探してみますと、「質問項目の設計」という条項があります。先ほどの荒井の発表でも触れられていた条項ですが、「開発者は、質問項目作成のための手引を用意する」という記述があります。この条項の「開発者」は、入試の文脈では各大学の入試を設計する人にあたると考えてよいかと思います。

この条項には「解説」があり、「開発者は目的に合致したテストを作成し、質問項目の特性を維持していくために、質問項目作成のための基準を整備し、質問項目に関する手引を用意することが望ましい」と述べられています。そして「手引は質問項目作成の過程で随時改良し、作業の実状に合致した内容とする」とあり、手引きを随時改良していく必要性についても述べられています。この手引き、すなわち問題作成の作業指針を文書化したものを活用することで、問題の作成や点検の負担が減り、ひいてはミスの防止にもつながると記載されています。

2. 「問題作成の手引き」に関するアンケート調査について

2.1 質問項目の構成

D. 貴大学が入学選抜のために作成する試験に関して、貴大学の実態を踏まえたあなたの考え等をうかがいます (QD-1～QD-3)。QD-1～QD-3に回答する前に、試験の「問題作成の手引き」に関する以下の説明をご一読ください。

< 「問題作成の手引き」に関する説明 >

「問題作成の手引き」とは

入学選抜で実施する試験や検査に関して、問題の作成や点検についてまとめた文書を、ここでは「問題作成の手引き」と呼ぶことにします。

「問題作成の手引き」は、安定した品質の試験や検査を継続的に実施するための拠り所として、問題作成者や点検者が作業指針として読む文書です。各大学が「問題作成の手引き」を備えておくことで、自大学の志願者に応じた内容や難度の問題を作成するのに活用することができます。

「問題作成の手引き」に記載される内容をイメージしていただくために、目次構成の例を以下に示します。

「問題作成の手引き」の目次構成の例

1. 問題作成の基本方針		
(1) 測ろうとする能力	(2) 出題内容・範囲	(3) 図表や資料の利用方針
2. 問題の形式		
(1) 解答形式 (マークシート方式、記述式等)	(2) 出題形式 (大問、小問)	
3. 問題の作成		
(1) 題材の選定	(2) 問題文	(3) 採点基準
4. 問題冊子の編集		
5. 問題の点検		
(1) 各問題の点検	(2) 問題冊子全体 (分量や分冊等) の点検	

< 「問題作成の手引き」に関する質問 >

- QD-1: 「問題作成の手引き」に相当する文書を備えているか (a)～(b)
- QD-2: 「問題作成の手引き」に関する考え (a)～(d)
- QD-3: 「問題作成の手引き」の必要性 (試験のタイプ別) (a)～(d)

<備考> 作題ガイドライン(Ver. 2) ← DL可能な状態で提示

4

本報告では、2023年度に行ったアンケート調査の結果から、入試問題作成の手引きの実態や、入試担当者の手引きについての考えの傾向について、ご紹介します。

本アンケート調査では、個別大学の入試改善に活用可能と考えられる幾つかの方策について、大学の考えや実態を尋ねる項目を中心としています。その中に、「入試問題作成の手引き」に関するセクションがあります。

「貴大学が入学選抜のために作成する試験に関して、貴大学の実態を踏まえたあなたの考え等を伺います」ということで、QD-1～3の3つの質問に回答してもらいました。

いきなり「問題作成の手引き」について質問をしても、回答をする方によって「手引き」という言葉からイメージするものがかなり違うだろうということで、その左側の枠内にありますように、「問題作成の手引き」がどういうものか、そしてどういう内容が記載されているものなのかを簡単にまとめ、この説明を読んでから右の質問に回答をしてもらうようにしました。左側の枠内の説明は、先ほど荒井から報告された作題ガイドラインに近い内容です。

このアンケートの回答は、ウェブフォームから入力してもらったのですが、右に示した3つの質問のうち、この報告ではQD-1と2に関する回答の集計結果をご紹介します。QD-3の「必要性」も含めた分析結果については、明日の研究会で発表します。

2.2 調査の実施

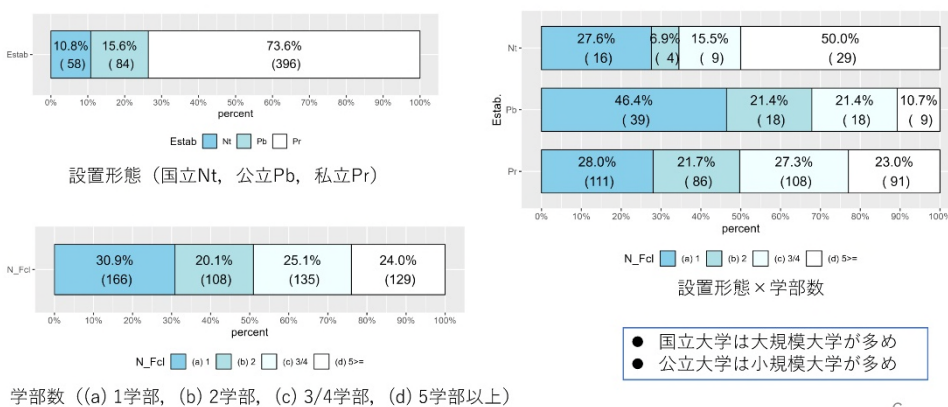
- 大学入試センター研究倫理審査を経て実施
- 調査対象：共通テスト利用大学
- 各大学の入試担当課宛に「入学者選抜の実施方法等を研究・検討している部署の方等、貴大学の入学者選抜を総合的に把握しておられる方」にご回答いただくよう手配を依頼
- webフォームから1大学1通で回答
- 回答期間R5年12月1日～R6年1月29日  
(当初予定は1月17日締切→能登半島地震を考慮して延長)
- 有効回答率70.4% (共テ利用大学764大学→有効回答数538大学)

5

調査対象は、共通テスト利用大学です。各大学の入試担当課宛てに、入学者選抜の実施方法等を研究・検討している部署の方、貴学の入学者選抜を総合的に把握しておられる方にご回答していただくよう依頼し、ウェブフォームから1大学1通で回答をしていただきました。

回答期間は昨年12月から今年1月とさせていただきました。入試で大変お忙しい時期に回答をお願いすることになりました点、非常にお忙しい中ご協力いただいた点に非常に感謝しています。有効回答率は70.4%で、538大学から回答いただきました。

2.3 回答者の所属大学の属性に関する集計

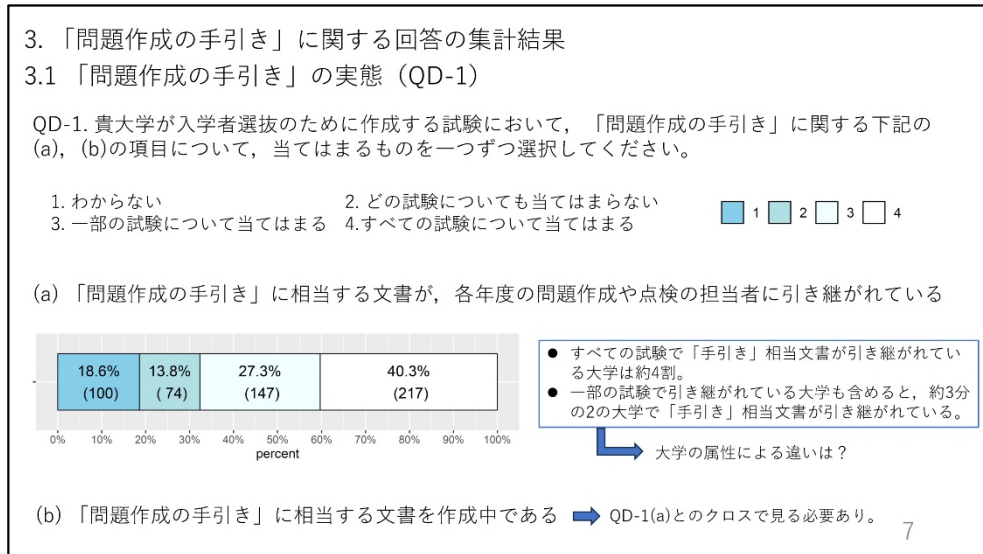


6

回答をしてくださった538大学について、左上は設置形態別の割合を、左下は学部数の4区分の割合を示したグラフです。共通テスト利用大学を対象としたため、私立大学が約4分の3を占めています。学部数については、4つの区分の中から1つを選択していただいたものです。

右のグラフは、設置形態と学部数区分の組み合わせの割合を示すものです。国立大学は5

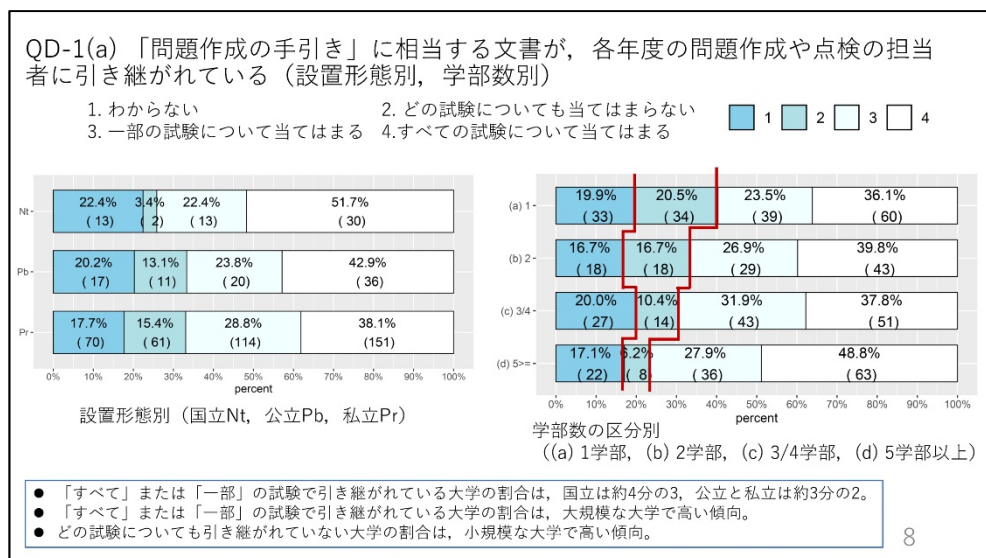
学部以上が半分を占めています。一方、公立大学は 1 学部と 2 学部を合わせると約 7 割を占める構成になっています。



まず、「問題作成の手引き」の実態に関する質問項目の集計結果です。QD-1 には、(a) と (b) という 2 つの項目があります。

「(a) 『問題作成の手引き』に相当する文書が、各年度の問題作成や点検の担当者に引き継がれている」という項目については、「4. すべての試験について当てはまる」という回答が 40.3% です。「3. 一部の試験について当てはまる」という回答が 27.3% あるのと合わせると、67.6% の大学が「手引き」に相当する何らかの文書をお持ちで、各年度の担当者に引き継がれていることが分かります。

では、大学の属性による違いはあるのかという点を見ていきます。なお、「(b) 『問題作成の手引き』に相当する文書を作成中である」という項目については、項目 (a) とクロスで見ると必要がありますので、その集計は 2 枚後のスライドでお示しすることにします。



左のグラフは QD-1 (a) の質問への回答を国公私立の設置形態別に示すものです。右のグラフは学部数の区別に回答選択肢の割合を示しています。

設置形態別に見ますと、「すべて」または「一部」の試験で手引き相当の文書が引き継がれている大学の割合は、国立では約 4 分の 3、そして公立と私立では約 3 分の 2 を占めています。

学部数の区別に見ますと、「すべて」または「一部」の試験で引き継がれている大学の割合は、学部数が多い大学の方が高くなっています。

一方、どの試験についても当てはまらない、つまりどの試験についても引き継がれていない大学の割合は、学部数が少ない大学で高い傾向です。

QD1-(a)と(b)のクロス集計 → 手引きの実態によるグループ分け(Group 0 とGroup 1)

(a) 「問題作成の手引き」に相当する文書が、各年度の問題作成や点検の担当者に引き継がれている  
 (b) 「問題作成の手引き」に相当する文書を作成中である

1. わからない 2. どの試験についても当てはまらない 3. 一部の試験について当てはまる 4. すべての試験について当てはまる

**163大学(30.3%)→Group 0**  
 (「手引き」の作成に消極的なグループ)  
 「手引き」が引き継がれていない or 状況不明で、「手引き」の作成作業無し or 不明。

**11大学(2.0%)**  
 現況では「手引き」が引き継がれていない (もしくは状況不明) だが、作成に前向き

**189大学(35.1%)**  
 一部 or すべての試験で「手引き」が引き継がれているが、「手引き」作成作業の継続は無し or 不明。

**175大学(32.5%)**  
 一部 or すべての試験で「手引き」が引き継がれており、「手引き」作成作業が続行されている。

Group 0 以外の 375大学  
 ↓  
 Group 1 (消極的でないグループ)

引き継がれている	QD-1(a)	QD-1(b) 作成中である				Total
		1	2	3	4	
1	90 (16.7%)	6 (1.1%)	3 (0.6%)	1 (0.2%)	100 (18.6%)	
2	3 (0.6%)	64 (11.9%)	3 (0.6%)	4 (0.7%)	74 (13.8%)	
3	34 (6.3%)	29 (5.4%)	79 (14.7%)	5 (0.9%)	147 (27.3%)	
4	23 (4.3%)	103 (19.1%)	3 (0.6%)	88 (16.4%)	217 (40.3%)	
Total	150 (27.9%)	202 (37.5%)	88 (16.4%)	98 (18.2%)	538 (100.0%)	

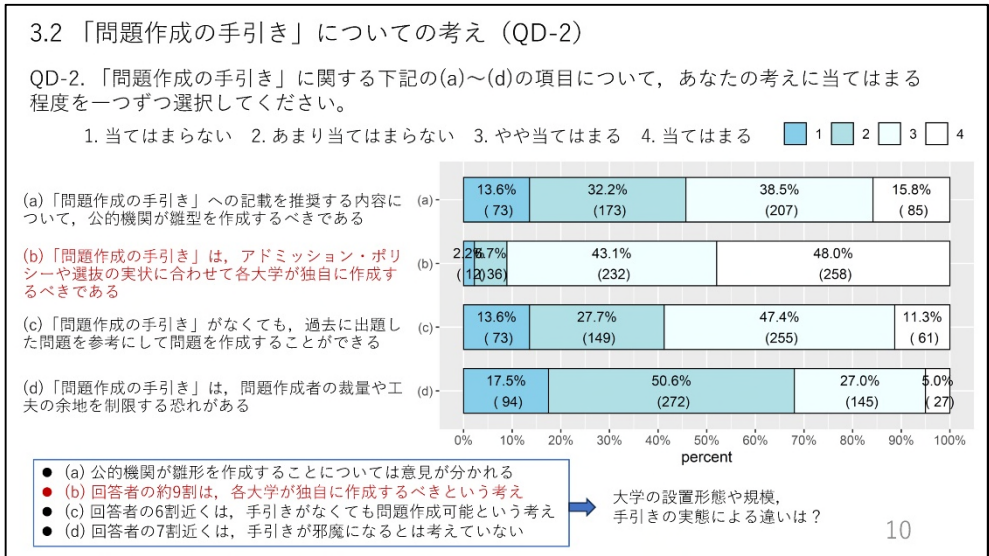
9

このスライドでは QD-1 の (a) と (b) の 2 つの質問のクロス集計表を示しています。すなわち、「『手引き』が引き継がれている」に関する選択肢と「『手引き』を作成中である」に関する選択肢のクロスになります。「作成中である」という項目は、「手引き」の整備状況と一緒に見ないと実態はつかめないだろうと考えて、両者を組み合わせて集計しました。

4×4 の 16 通りあるわけですが、それぞれの質問で 1・2 の選択肢を選んだか、3・4 の選択肢を選んだかによって、赤線で 4 つの領域に区切って考えました。左上のオレンジの領域の大学は、「手引き」が全く引き継がれていないかあるいは状況が不明であり、作成作業自体も行っていないあるいは状況不明ということですので、「手引き」に消極的なグループとみなせることになります。そういった大学が全体の約 3 割でした。

残りの 3 つの領域のうち、下の 2 つの領域は、「手引き」が少なくとも一部の試験では整備されていて、引き続き作成中のところもあればそうでないところもあるという状況です。

右上の領域は、「手引き」が引き継がれていないかまたは状況不明だが、「手引き」の作成には前向きという大学になります。以降では、左上以外の 3 つの領域の大学と、左上の「手引き」に消極的な大学とで、QD-2、つまり「手引き」についての考え方の回答がどう違うかを比較していきます。



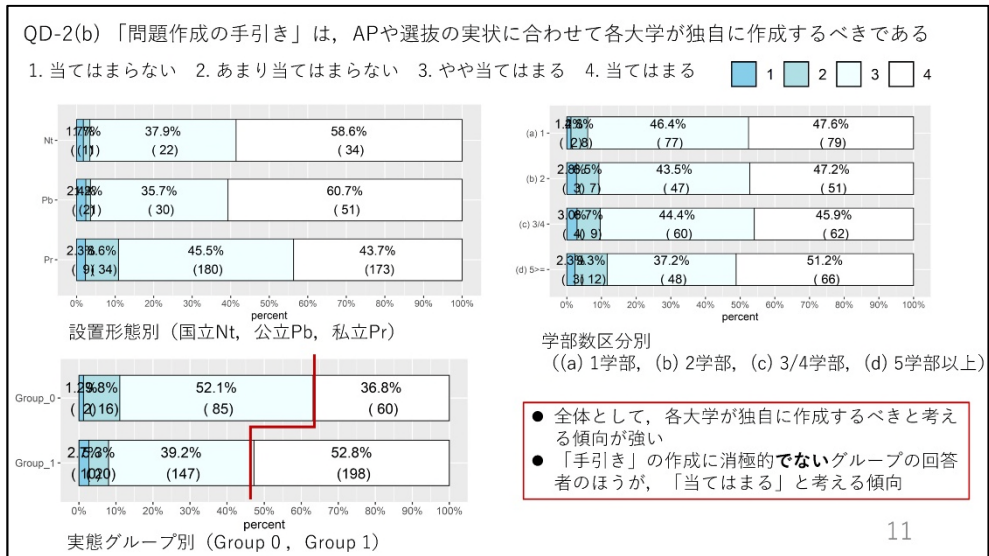
QD-2の「問題作成の手引き」についての考えを尋ねる項目では、(a)から(d)のそれぞれについて、当てはまる程度を4段階で評定してもらいました。なお、これは大学としての公式見解ではなくて、あくまで回答者の考えであることにご留意ください。

こちらが全体の傾向です。「(a)『問題作成の手引き』への記載を推奨する内容について、公的機関が雛型を作成するべきである」については、意見が二分しています。

「(b)『問題作成の手引き』は、アドミッション・ポリシーや選抜の実状に合わせて各大学が独自に作成するべきである」については、「3. やや当てはまる」と、「4. 当てはまる」を合わせると91.1%になり、各大学が独自に作成するべきという考えがかなり強いことが伺えます。

「(c)『問題作成の手引き』がなくても、過去に出題した問題を参考にして問題を作成することができる」については、「3. やや当てはまる」と、「4. 当てはまる」を合わせると58.7%になり、「手引き」がなくても作ることができると考えている回答者が過半数を占めています。

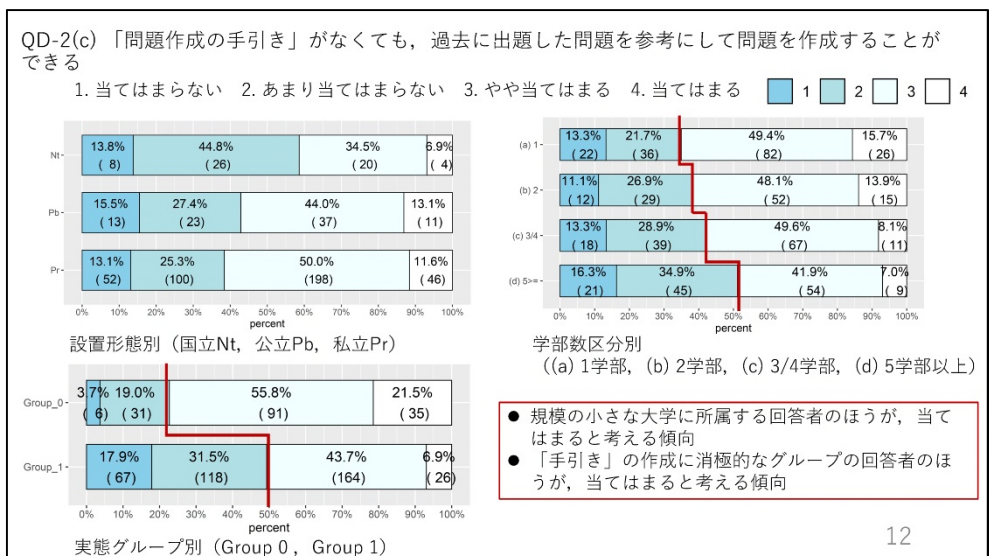
一方、「(d)『問題作成の手引き』は、問題作成者の裁量や工夫の余地を制限する恐れがある」に関しては、「1. 当てはまらない」と「2. あまり当てはまらない」を合わせると68.1%になり、「手引き」が邪魔になるとまでは考えていない回答者が過半数ということになります。



続いて、大学の設置形態や規模、そして先ほどの「手引き」に消極的かどうかで分けて集計した結果を見ていきます。(a)についてはあまり違いが見られなかったため、本報告では(b), (c), (d)について見ていくことにします。

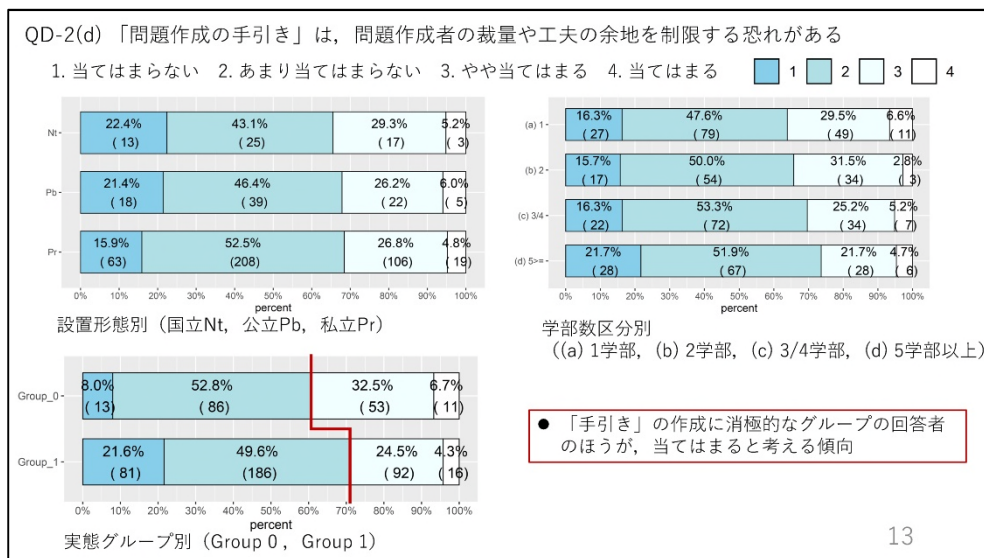
このスライドには、「(b)『問題作成の手引き』は、アドミッション・ポリシーや選抜の実状に合わせて各大学が独自に作成するべきである」についての回答選択肢の選択率を示しています。左上が設置形態別、そして右が学部数の区分別、そして左下は先ほどの「手引き」に消極的かどうかというグループ別の集計です。

左下のグラフに示すように、Group 1、すなわち「手引き」に消極的ではない大学に所属する回答者のほうが、Group 0、すなわち消極的な大学に所属する人たちよりも、「4. 当てはまる」と回答した割合が高くなっています。所属大学において、「手引き」が引き継がれているかどうかという実状と、各大学が独自に作成するべきであるという回答者の考えが対応するような結果となっています。



このスライドには、「(c)『問題作成の手引き』がなくても、過去に出題した問題を参考にして問題を作成することができる」という項目に関して、先ほどと同様に、設置形態別、学部数の区分別、「手引き」に消極的かどうかというグループ別に回答選択肢の割合を示しています。右側の学部数規模別のグラフを見ますと、「3. やや当てはまる」と、「4. 当てはまる」を合わせた割合は、規模の小さな大学のほうが高い傾向にあることが分かります。

左下のグラフを見ますと、「手引き」に消極的な大学に所属する回答者、つまり Group 0のほうが、「3. やや当てはまる」と、「4. 当てはまる」の選択率が高くなっています。「手引き」がないから過去問を基に作るということなのか、過去問を基に作ることができるから「手引き」を作っていないのかという点は分からないのですが、所属大学の「手引き」の実態によって回答者の考えがかなり違っているということがアンケート調査から示されています。



このスライドには、「(d)『問題作成の手引き』は、問題作成者の裁量や工夫の余地を制限する恐れがある」について、設置形態別、学部数の区分別、そして「手引き」に消極的かどうかをグループ別の集計結果を示しています。左下を見ますと、Group 0, Group 1ともに、「1. 当てはまらない」と「2. あまり当てはまらない」を合わせたほうが多数派です。しかし、「3. やや当てはまる」と「4. 当てはまる」の部分を見ると、「手引き」が問題作成の裁量や工夫の余地を制限するということへの恐れについては、「手引き」に消極的な大学に所属する回答者のほうが当てはまると考える傾向がやや強いことが伺えます。



## 4. まとめ

- 「手引き」相当の文書が各年度の問題作成や点検の担当者に引き継がれているか
    - ・ 「すべて」または「一部」の試験で引き継がれている：国立は約4分の3、公立と私立は約3分の2
    - ・ どの試験についても引き継がれていない大学の割合：小規模な大学で高い傾向
  - 「手引き」は、APや選抜の実状に合わせて書く大学が独自に作成するべきという考えが強い。
  - 「手引き」の記載する内容の雛形を公的機関が作成するべきかについては、意見が分かれる。
- ➡ 各大学のAPや選抜の実状に合った「手引き」  
 入試問題の品質維持や出題・採点ミス防止のために記載したほうがよい内容 } 両立させるには？
- 「手引き」がなくても過去問を参考にして問題作成できると考える傾向は、小規模な大学や「手引き」の作成に消極的な大学の回答者に強くみられる。← 過去問が「手引き」の役割？

## 引用文献

荒井清佳・伊藤圭・椎名久美子・桜井裕仁・大塚雄作・花井渉 (2023). 「令和3年度の総合型選抜・学校推薦型選抜における知識・技能、思考力・判断力・表現力等の評価資料の利用実態」『大学入試研究ジャーナル』33, 226-232.  
 日本テスト学会編(2007). 『テスト・スタンダード 日本のテストの将来に向けて』 金子書房.

14

以上の報告をまとめます。

一部の試験で引き継がれているというケースも含めると、かなり多くの大学で、「手引き」に相当する文書が各年度の問題作成や点検の担当者に引き継がれているという実態が示されています。どの試験についても引き継がれていない大学の割合は、学部数の少ない大学で高めという傾向です。

「手引き」はアドミッション・ポリシーや選抜の実状に合わせて各大学が独自に作成するべきという考えは全体として非常に強いですが、「手引き」に記載する内容のひな型を公的機関が作成するべきかどうかという点については、意見が分かれていました。

各大学のアドミッション・ポリシーは尊重されるべきなのですが、荒井からの報告②にありましたように、入試問題の品質維持や出題ミスの防止のために「手引き」に書いておくことが望ましい項目もありますので、そういったことと大学の独自性は両立可能だろうというのが、私の考えです。

また、「手引き」がなくても過去問を参考にして、問題が作成できると考える傾向は、小規模な大学に所属する方や、「手引き」に消極的な大学に所属する方に強く見られました。どの試験についても、「手引き」が引き継がれていない大学の割合が、小規模な大学で高かったという傾向等を考え合わせますと、「手引き」が引き継がれていないと回答した大学では、ある種、過去問が「手引き」のような役割を果たしているのかもしれませんが。この辺りは、出題や採点ミスを防止するために過去問をどう活用するかという観点からも議論ができるのではないかと考えています。ご清聴ありがとうございました。

---

【荘島・司会】 椎名先生、ありがとうございました。②番目の発表者である荒井先生からの「問題作成の手引き」や『ガイドライン』といったものが出題ミスを減らす一定の効果があるという報告を受け、それらの有無や、入試担当者の認識等に関する各大学の調査結果に

### 全体会3

ついでご報告いただきました。椎名先生，どうもありがとうございました。

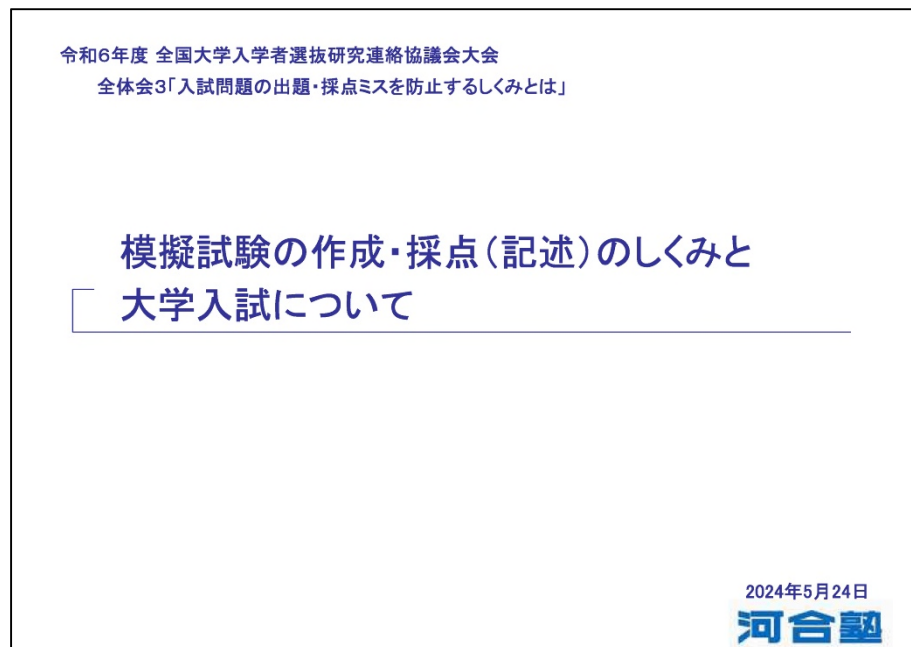
続いて，河合塾の網野先生より「模擬試験の作成・採点（記述）のしくみと大学入試について」という題目でご報告いただきます。網野先生，よろしくお願ひします。■

## 全体会 3 ○ 報告④

模擬試験の作成・採点（記述）のしくみと大学  
入試について

■ 網野 輝也（河合塾 教育企画開発部部長）

河合塾の網野です。よろしくお願いします。



私が所属する教育企画開発部は、河合塾の教材・模擬試験を作成する部署です。本日は、模擬試験の作成・採点の仕組みについて、お話をさせていただきたいと思います。河合塾での作成の仕方ということで、お聞きいただければと思います。

— 本日のアジェンダ
**河合塾**

1. 模擬試験（模試）の作成体制について
2. 模擬試験の品質維持・向上に向けて取り組んでいること
3. 問題訂正発生状況とその対応策
4. 採点基準と採点体制について
5. 課題とまとめ

全統模試案内

年間のべ受験者数: **266.1万人**(2023年度実績)が参加、  
大学入試必須アイテム

全統模試

- ① 全国屈指の母集団
- ② 受験生の流れを読んだ合格可能性評価

全統模試とは ▶

高校生・高卒生対象

大学入試に必要な力を正確に測定し、的確な評価とアドバイスを提供！

河合塾は高校生・高卒生を対象に年間30回以上の模擬試験を全国で実施しています。大学・短大進学をめざす受験生の多くがこの模試に参加し、その人数は年間のべ受験者数：266.1万人（2023年度実績）にもなります。

河合塾HPより

©Kawaijuku Educational Institution. **2**

河合塾の模擬試験については年間延べ 266 万人に参加いただいております。全国でも屈指の母集団を誇る模擬試験です。一民間企業の模擬試験ではありますが、この模擬試験の成績や判定結果を、高等学校様で生徒指導・進路指導にご活用いただいておりますので、生徒の一生を左右するという責任を持って作成・実施をさせていただきます。

— 1. 模試の作成体制について
全統模試 ラインアップ
**河合塾**

<p style="font-weight: bold; color: #0070c0;">国立大入試オープン</p> <p>東大・京大・名大（各年2回） 北大・東北大・一橋大・東京科学大 阪大・神大・九大</p>	<p style="font-weight: bold; color: #70ad47;">全統共通テスト模試（年3回）</p> <p style="font-weight: bold; color: #70ad47;">全統プレ共通テスト</p> <p style="font-weight: bold; color: #70ad47;">全統共通テスト高2模試</p>
<p style="font-weight: bold; color: #0070c0;">全統記述模試（全3回）</p> <p style="font-weight: bold; color: #0070c0;">全統記述高2模試</p>	<p style="font-weight: bold; color: #70ad47;">全統高2模試（年3回）</p> <p style="font-weight: bold; color: #70ad47;">全統高1模試（年4回）</p>
<p style="font-weight: bold; color: #e69d00;">プライムステージ</p> <p style="font-weight: bold; color: #e69d00;">高1プライムステージ</p>	<p style="font-weight: bold; color: #0070c0;">早慶レベル模試</p>

全20種類、32回実施

©Kawaijuku Educational Institution. **3**

河合塾の模擬試験には様々な種類があります。「国公立大入試オープン」という各大学別の模擬試験、共通テストのための「共通テスト模試」、記述式の模擬試験である「全統記述模試」と「全統高2模試」、「全統高1模試」を、それぞれ回数がありますが、実施をしています。またトップレベル生向けの「プライムステージ」、「高1プライムステージ」という模擬試験もありますし、「早慶レベル模試」という早慶大を目指す方のための模擬試験もあり

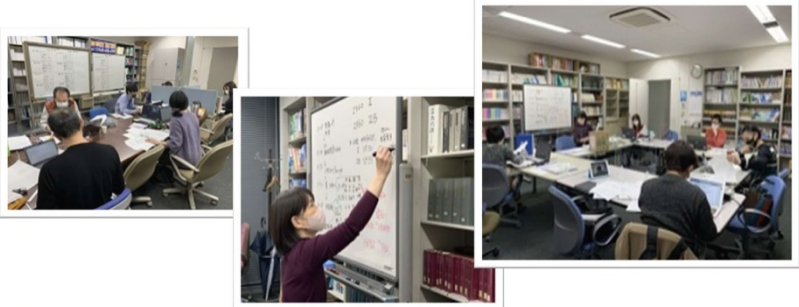
ます。全部で 20 種類、年間では合計 32 回実施しています。

「全統共通テスト模試」だけは客観式問題ですが、それ以外に関しては記述・論述式の問題を含んでいます。

**河合塾**

1. 模試の作成体制について

**問題作成・校正・採点基準作成まで、すべて「内製」**



各地区で講義・指導を行う「河合塾講師」から編成される  
**複数人のプロジェクト体制**で検討を重ね、全ての模試を制作

©Kawaijuku Educational Institution. 4

まず模擬試験の問題作成体制について、問題作成、校正、採点基準作成まで全て河合塾内で作成をしており、外注は一切していません。基本的には、各地区で講義・指導を行っている「河合塾講師」から編成される複数人のプロジェクト体制で検討を重ねて、全ての模擬試験を作成しています。こちらの写真は実際の模擬試験の問題を検討する会議の様子です。全国から講師が集まって、何度も会議を重ねて模擬試験の問題を作っています。

**河合塾**

1. 模試の作成体制 基本的な流れ

0. 立ち上げ会議-フレーム検討・出題方針確定
1. 問題原案作成
2. 問題原案検討会議
3. 解答解説検討会議
4. 入稿
5. 校正(初校・再校・3校・念校)
6. 校了・印刷
7. 採点基準原案作成
8. 採点基準検討会議
9. 採点基準完成 採点開始


0.~6.までで  
最低4~5ヶ月  
程度の期間を  
かける

©Kawaijuku Educational Institution. 5

最初の立ち上げ会議では、全部で大問が何題か、また出題はどのようにするのかという問題フレームを決定します。それを基に問題の原案を作成し、その原案を検討します。なお、

模擬試験では解答解説を全て公表しますので、この解答解説についても、執筆、検討会議を経て入稿します。そして5番目に校正です。初校・再校・3校・念校くらいまで行います。そして6番目に校了・印刷になります。この0から6までの工程で、河合塾では最低4カ月から5カ月程度の期間をかけています。

校了した後は、採点基準の原案を作成し、採点基準検討会議において採点基準が完成して、初めて採点を開始します。ここまで、問題作成のプロジェクト体制の責任下で実施されます。

参考) 模試を作成するうえで、我々が留意していること


- ① 各科目の履修範囲。高校でどのように、どんな順番で学んでいるか（極力逸脱がないように）
- ② 高校でのご指導に活用できるよう難易度に「傾斜」のある出題
- ③ 「差がつく」ための適切な配点設定
- ④ ターゲットとする大学の近年の入試出題傾向
- ⑤ 入試や他の模試（他社作成含む）との重複回避
- ⑥ 適切な難度設定。語彙レベルなどのコントロール
- ⑦ 著作権を侵害しないこと など

©Kawaijuku Educational Institution. 6

参考として模試を作成する上で、われわれが留意する点がこちらです。これまでのご報告にもありましたが、やはり各科目での履修範囲です。高校で何をどのような順番で学んでいるのかということから、極力逸脱がないように作成をしています。例えば、高校3年生向けの模擬試験のうち6月実施分と11月実施分では、数ⅢCをはじめ、履修の進行度が高校ごとによって違います。極力学習していないものを出题しないよう、範囲を決めて実施をしています。

そして、高等学校さままでのご指導に活用できるように、難易度に傾斜のある問題、そして差が付くための適切な配点設定をして、母集団の点数が平均点を中心にきれいな山を描くように作っています。

また、大学別の模擬試験や共通テスト対策模試等については、近年の入試出題傾向を重視して作成しています。

さらに、入試や河合塾の他の模試、他社様の作成されているものも含めた上で重複を回避するようにしています。適切な難易度の設定においては、例えば英語では語彙レベルなどのコントロールも行っています。そして一番重要な点として、著作権を侵害しないという意識を持ちながら作成を進めています。

河合塾

2. 模擬試験の品質維持・向上に向けて取り組んでいること

**(1)新課程分析 — 高校生がどのように学んでいるか**

©Kawaijuku Educational Institution 7

ここからは模擬試験の品質維持・向上のための取組みをご紹介します。まず新課程分析を行っています。模擬試験を受験いただく高校生がどのように学んでいるかということにおいては、中学校から含めて新課程の教科書の確認・分析をしています。

そして履修状況のチェックのために、高等学校さまを対象に、どの範囲を何月に生徒に学習させているかについてのアンケートにご協力いただいています。特に数学、理科、地歴などにおいては、大体何年生の何月までに数Ⅰが終わる、数Ⅱが終わる、この範囲が終わるということをしっかり定量化し、範囲の大きな逸脱がないよう問題作成に活用しています。

またやはり定期的に行われる学習指導要領の改訂に関しても、適時、それがどのような力を測るのか、また入試に影響するのかを分析しています。

河合塾

2. 模擬試験の品質維持・向上に向けて取り組んでいること

**(2)大学入試分析 — 最新の出題傾向を捉える**

毎年、全国の講師が分担し、入試問題(共通テスト含む)を分析。  
分析した結果を執筆講師に共有したうえで、模試作成に反映している。

参考 分析実績(昨年度)  
英語: 72大学 221学部/日程分  
数学: 120大学 2,500問

©Kawaijuku Educational Institution 8

(2) として、大学入試の分析が挙げられます。最新の出題傾向を捉えるため、毎年、全国の講師が分担して入試問題の分析をしています。分析結果は執筆講師に共有することで模試作成に反映しています。昨年度は、英語においては 72 大学 221 学部／日程分を、そして数学については、120 大学の 2,500 問を対象とし、どのような力を測っているのか、もしくは近年どのような範囲、問題が出現しているのかをしっかりと分析した上で、模擬試験を作成しています。

2. 模擬試験の品質維持・向上に向けて取り組んでいること 河合塾

**素材重複チェック** 例: 英語

<input type="checkbox"/>	詳細	BATAPO	TDOTLF	[試]	1999	人文／教育／医／前期>(1/6)	確定			3	詳細
<input type="checkbox"/>	詳細	LAHADC	ATSOAD	[試]	1999	三重大学 上立／教					
<input type="checkbox"/>	詳細	F1T2PA									
<input type="checkbox"/>	詳細	F1T2PA	RTLOBF	[試]	2024						
<input type="checkbox"/>	詳細	F1T2PA	RTLOBF	[模]	2023						

**各教科、独自のデータベースにて、  
入試問題と、模試問題との重複チェック**

©Kawaijuku Educational Institution 9

次に、素材の重複チェックです。河合塾では、素材の重複チェックの作業を一部システム化しています。例えばこれは英語の例ですが、データベース化をして、入試問題や教科書・河合塾の教材と模擬試験との重複をチェックしています。

2. 模擬試験の品質維持・向上に向けて取り組んでいること 河合塾

**素材重複チェック** 例: 国語(現代文・古文)

©Kawaijuku Educational Institution 10



また国語においても、素材の管理を行った上で、入試とのバッティングを避けています。

2. 模擬試験の品質維持・向上に向けて取り組んでいること

**単語レベルチェック(英語)**

**専用のしくみで単語レベルチェック**  
**⇒CEFRレベル、教科書学年レベルなどを確認**

[1] In developed countries, the gender gap has long favoured women by one measure at least: life expectancy. Throughout the past 100 years women have significantly outlived men, on whom war, heavy industry and cigarettes among other things have taken a heavier toll. But this gender gap is closing, and a new statistical analysis of life expectancy in England and Wales since 1950 suggests that, by the year 2032, men can expect to live as long as women, with both sexes sharing an average life expectancy of 87.2 years.

[2] The study, led by Prof. Mayhew, professor of statistics at Cass Business School, calculated how long a sample of 100,000 people aged 30 would live if they experienced the average mortality rates for each sex as they aged, projecting forward until the male and female life expectancy curves intersected.

[3] There are a number of factors that explain the narrowing gap, according to Mayhew. "A general fall in tobacco and alcohol consumption has disproportionately benefited men, who tended to smoke and drink more than women. We've also made great strides in reducing heart disease, which is more prevalent in men." Mayhew said. "And men are far more likely to engage in 'risky' behaviours, and far more likely to die in road accidents, which have fallen too."

[4] The life expectancy gender gap appears to be closing faster than was previously thought: research published in 2015 by Imperial College had indicated it would narrow to 10 years by 2030. The UK as a whole has slightly lower life expectancy, as life expectancy tends to be higher in England than the other constituent nations. In the years immediately after 1957, women's life expectancy increased faster than men's in England.

基本情報		原文	レマ化
総語数		560	560
単語数		261	255
FRF		42.62	47.85
FKGL		12.83	12.85

	原文		レマ化	
	総語	単語	総語	単語
中1	206	106	205	102
中2	84	47	76	42
中3	16	10	16	10
I	96	64	97	61
II	20	17	19	16
III	13	12	12	11

©Kawajuku Educational Institution 11

さらに、英語では、システムによる単語のレベルをチェックしています。使用予定の英文を読み込むと、中学1年生～高校3年生のいつ初出の単語なのか、もしくはどこにも出てこない単語なのかが分かるようになっていきます。CEFR レベルや、教科書学年レベル等を確認することで、リーダビリティ、いわゆる読みやすさの指標が入試と同じになるようにしています。少し難し過ぎるということが分かれば、高校生に適切な表現に書き替えるなど修正をしています。英語に関しては、こういった単語レベルにも気を配って進めています。

2. 模擬試験の品質維持・向上に向けて取り組んでいること

**予備校の「模試」ならではのジレンマ**

**<逆ズバリの的中>**

⇒入試問題が翌年の模試問題と一致してしまった

例: 高3生に受験で見た問題が浪人時の模試で出た  
 ←受験であれば生徒にとってラッキーだが、予備校としては卒生有利になり正確な平均点や合格可能性判定が出ない事態となり、受験生に正確な情報が伝わらないことに。

⇒予備校においても、差し替えを行うための「予備問題」の作成は必須

©Kawajuku Educational Institution 12

しかし、やはり予備校の模擬試験ならではのジレンマがあります。河合塾では「ズバリの

中」と呼んでいるものがあり、生徒が1年間使ってきたテキストや模擬試験の内容が入試で出題されることです。それについては、生徒にも喜んでいただけますし、河合塾としても模擬試験や教材の信頼性の高さとしてPRをさせていただいているわけですが、一方で「逆ズバリの中」ということも発生します。

これは入試問題が翌年の模擬試験の問題と一致してしまうことです。冒頭でご紹介したとおり、河合塾の模擬試験は4~5カ月かけて作っていますので、1月、2月に行われる入試問題を見た瞬間に、素材や問題がバッティングしたため、今まで作ってきた問題が使えなくなってしまうことがあります。

なぜそれが許されないのかと言いますと、高校3年生が入試で見た問題が浪人してすぐの模擬試験で同じ問題が出されたとすると浪人生が有利になり、予備校としては正確な平均点や合格可能性を判定できない事態に陥ってしまいます。

そうすると受験生に正確な情報が伝わらなくなってしまいますので、予備校においても、こういった事態が発生した際に差替えを行うための「予備問題」の作成は必須だと考えて実施をしています。特に素材文がある英語や現代文、古文については特に気を使って作成を進めています。

3. 訂正発生状況とその対応策

### 近年、訂正・ヒヤリハットが発生した主な箇所

#### 【1】 図表やグラフなどの資料

- ◆ 新課程下で、**図表・グラフ、広告、イラスト**などを扱う問題が増えてきた  
 ⇒見るべき箇所・分量が増加  
 ⇒図表内（画像）の**単語の綴りや、数値・単位表記の誤り**などが起こりやすくなった。

#### 【2】 数式、化学式

- ◆ コロナ禍もあり紙原稿のやりとりの時間短縮を狙い**web上の校正を実施**。しかし、上付き文字などを見誤るケースが複数発生      $50m/s \Rightarrow 50cm/s$       $X^2 \rightarrow X^3$

#### 【3】 年号

- ◆ 限られた講師陣で作成体制をとる教科科目 → 作成が重なり、十分なチェック時間の確保が困難になりがち。
- ◆ 経験豊富な講師が作成した原稿 → 他の講師たちのチェックが甘くなってしまったことも…

©Kawaijuku Educational Institution 13

次に近年、訂正・ヒヤリハットが発生した主な箇所です。先ほど荒井先生からもご報告がありました。まず(1)として、「図表やグラフなどの資料」が挙げられます。近年の入試では図表・グラフ、広告、イラスト等を扱う問題が非常に増えてきています。そのために、今までと異なる観点からチェックすべき箇所や分量が増加しており、図表内の画像の単語の綴りであるとか、数値や、単位表記に誤りが起こりやすくなりました。このように、問題の作り方やチェックの観点も入試の変化と共に変わってきています。

また(2)として、「数式、化学式」があります。コロナ禍において、印刷会社との直接の紙原稿のやりとりを廃止しましたが、時間短縮等のメリットがあることから、現在も

WEB上で校正作業をしています。これにより、上付き文字や単位等を見誤るケースが複数発生しています。

例えば 50m/s とするべきところを 50cm/s と記載したとか、 $x^2$ を  $x^3$ と間違えるというようなケースです。拡大をする機能は付いているものの、WEB上での校正に限界を感じている状況になっています。

そして(3)としては「年号」があります。限られた講師陣で作成体制を取る教科科目においては、十分なチェック時間の確保が困難になりがちで、ミスが発生することがあります。

また経験豊富な講師が作成した原稿は、他の講師が「あの先生が作成したのであれば大丈夫だろう」と考えてしまい、チェックが甘くなったこともあります。こういうところは河合塾としても非常に気を付けて進めています。

河合塾

3. 訂正発生状況とその対応策

**※実際に起こった事故例 2019年実施 九大オープン**

**化学 大問〔5〕(1)ウ**

〔5〕 次の文章(1)と(2)を読み、問1～問5に答えよ。(25点)

(1) 生物の細胞内に存在する核酸には、DNA(デオキシリボ核酸)とRNA(リボ核酸)があり、〔ア〕情報の伝達やタンパク質の合成などに関わる重要な役割を担っている。核酸は単量体であるヌクレオチドが縮合重合したポリヌクレオチドである。このうち、DNAは2本の鎖状のポリヌクレオチドどうしが〔イ〕結合している。〔ウ〕構造をもつ。

**生物 大問〔1〕問題文**

〔1〕 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。(25点)

遺伝子の本体であるDNAは、五炭糖である〔ア〕、塩基、リン酸からなるヌクレオチドが多数結合したヌクレオチド鎖が2本、相補的な塩基間の〔イ〕結合によりらせん状になった二重らせん構造をしている。DNAの複製は細胞周期の

化学の設問の答  
が生物の問題文  
に書かれていた

ここで実際に起こった事例をご紹介します。2019年に実施しました「九大オープン」(九州大学対策のための模擬試験)で起こったことです。化学の大問〔5〕の(1)の本文内のウというこの穴埋め問題の答えが、生物の問題の大問の問題文に答えが書かれていました。

化学、生物でそれぞれ違う講師が集まって作っていますので、科目間のやりとりが不十分だったことが原因です。物理・化学選択者や物理・生物選択者との間で差が出てしまう可能性があるため、この問題は廃問とし、物理受験者全員に一律加点としました。

各教科で、年号が間違っていないか、単位が間違っていないかという確認は常に行っていますが、他科目に答えが書かれていたといった非常に難しいことが起きることがあります。例えば他にも国語の漢字の書き取り問題で、第2問目の本文に同じ漢字が出ていたということもあります。どの大学様も気を付けているところだとは思いますが、河合塾でも同様に気を付けて作成しています。

この事故以来、理科科目内ではお互いにゲラをチェックする体制を整えています。

4. 品質維持・向上に向けて取り組んでいること

### 近年、問題訂正が発生した主な箇所⇒対応策例

#### 【1】 図表やグラフなどの資料

文字原稿部分…AI活用

専用チェック者

#### 【2】 数式・化学式など

従来どおりの紙校正との併用(目線の動かし方の異なりを活用)  
 冊子状にした状態での最終チェック

#### 【3】 年号

年号「だけ」を確認する専用チェックを強化

「どこで発生しやすいか」「教科特性」を意識することが大事

©Kawaijuku Educational Institution 15

近年、問題訂正が発生した主な箇所への対応事例をご紹介します。まず、図表やグラフなどの資料については、文字原稿部分にはAIを活用する、専用のチェック者を別に用意するなどの工夫を行い、品質を高めています。

また数式や化学式などについては、やはり従来どおりの紙校正との併用が重要と考えています。紙の校正に勝るものはなかなか出てきません。WEBだけ、もしくは紙だけということではなく、品質維持のために両方実施しています。

次に年号です。年号だけを確認する専用チェック者を強化するなどもありますが、どこで問題が発生しやすいか、ミスが発生しやすいかといったこれまでの蓄積を踏まえ、教科特性を意識することが大事ではないかと考えています。

5. 採点基準と採点体制について

### ● 採点基準

① 採点基準の適用範囲

② 採点基準の適用範囲

③ 採点基準の適用範囲

④ 採点基準の適用範囲

**全教科(英語)採点上の原則**

問題ごとの採点基準で採点されない場合は、以下を原則とす

- ★基本方針：
  - ① 採点の標準となる解答をくみ取り、増補が得られる場合には原則として採点標準、記号等の解答形式に対する指示に違反したものは、採点しない。
  - ② 採点標準を超過したものは、原則採点可とする。
- ★記号・番号・英単語等を解答する問題：
  - ① 記号・番号
  - ② 英単語
  - ③ 英単語
- ★日本語で
  - ① 解答例以外でも解答例の複製が認められていなければ、各ポイントに応じて採点し、増補を付す。
  - ② 英文和訳問題は、採点前と採点時。また、採点上の区分が示されている場合、各区分の採点を認めて採点しない。
  - ③ 翻訳もしくは単語の訳語だけを記しているようなものに対しては採点しない。ただし、完全に文として読解していない場合でも、膨大な数の採点作業を削減し、採点効率を向上させる。

1問あたり10~20ページほどの採点基準

**作成プロジェクトで採点基準原案作成**

⇒ **採点基準作成会議を実施し、すり合わせていく**

また、一部科目で採点者に対し**採点基準説明会を実施**

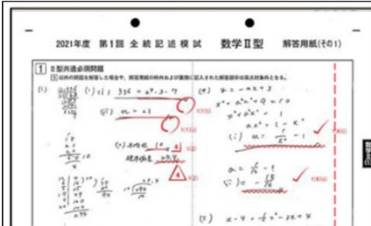
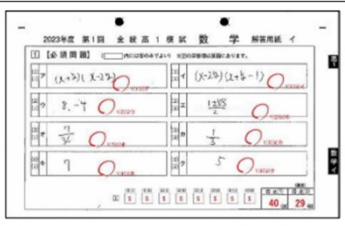
©Kawaijuku Educational Institution 16

次に採点基準です。大問 1 題あたり 10 ページから 20 ページほどの採点基準を作成しています。作成プロジェクトで採点基準作成会議を実施して擦り合わせていきます。また一部の科目においては、採点者に対して採点基準の説明会をしてから実施しています。

5. 採点基準と採点体制について

◆**答案採点：「模試採点センター」にて答案および採点者を一括管理。**

◆**採点⇒主に電子採点(K-WEB採点 採点者アプリ) を使用**

**採点開始前に模試採点センターで採点基準のチェック**

⇒ 不明な点や齟齬があれば、作成プロジェクトに確認

↓

**「K-WEBアプリ」にアップロード⇒全国で採点開始。**

⇒ 採点に関する不明点があれば、**専用のアプリで共有。**

**統一した基準での採点を実施。**

©Kawaijuku Educational Institution 17

採点については、河合塾の模擬試験専用開発した WEB アプリを使って、WEB 上で採点をしています。WEB アプリの利点としては、採点者からの質問を他の採点者と共有することができる事が挙げられます。なお、採点者からは答案の個人情報を見ることはできなくなっています。

5. 採点の質を維持・向上するために行っていること

**<模試作成プロジェクト>**

- ・ **実際の生徒答案を見て、基準案を調整**
- ・ **採点会議を実施。**複数の講師がチェックし精度を上げる
- ・ **全国にいる採点者にとってわかりやすい記載を工夫する**

英語：内容説明問題は採点がぶれやすい→採点例を特に充実させる  
○・×が明確に判断できる表現ではなく、  
**生徒が書きそうな「グレーな表現」を中心に基準に掲載**

数学：実際の答案からセレクトし「別解例」の提示      など

©Kawaijuku Educational Institution 18

模試作成プロジェクトでは、実際の生徒答案を見て、採点基準案を作成します。全国にい

る採点者にとって分かりやすい記載になるよう工夫していますが、一番重要なのは、受験者が書きそうな「グレーな表現」を中心に基準を作成することです。「これが正解、これが間違い」ではなく、「グレーな表現」をどのように採点すべきか、何点を与えるべきかをきちんと採点基準に示すことが重要になってきます。

5. 採点の質を維持・向上するために行っていること（一例）

**模試採点センター**

- 「FAQ」の確認と共有  
採点者が迷ったポイントがあればセンターで検討⇒すみやかにアプリ上で、**他の採点者にも共有**
- 採点終了後、採点センターにて**ランダム二重チェック**  
→不備があれば採点者にフィードバック、即修正対応  
→採点者のスキルアップも

<作成プロジェクト&模試採点センター>

- ★採点者から、**採点基準に関する意見・感想を収集**  
→作成部門にフィードバックし、次回の基準に反映
- ★採点センターと、作成プロジェクト間で**意見交換実施**

©Kawaijuku Educational Institution 19

また、模試採点センターにおいて、採点者と答案の一括管理をしています。先ほどの説明のとおり、「FAQ」においては他の採点者にも共有しますし、ランダム二重チェックも行い、不備があれば採点者にフィードバック、および再採点を実施しています。

さらに、採点基準については、採点者からの問い合わせ内容や、採点者から意見・感想を収集して、作成プロジェクト間で意見交換を実施しています。

6. 河合塾が抱える課題

- 素材選び、問題作成・解答解説執筆、採点基準作成まで、すべて同じ講師によるプロジェクト体制で行うことにより、**一貫した視点で、安定した質を保っている**
- 内部作成であるため、**最新の入試情報を踏まえた対応、高校のニーズやオーダーにビビッドに対応しやすい**

**課題**

- 多忙な講師陣による作成→**作成時間が十分にとれない時期がある**
- 教科科目によっては、**執筆者・作題者不足が続いている**

⇒いかに受験生・保護者・高校教員から期待されている  
**「河合塾品質」を保っていくか**

©Kawaijuku Educational Institution 20

最後に、河合塾が抱える課題です。河合塾では、素材選びをはじめ、問題作成に係る全てを同一のプロジェクト体制で行うことにより、一貫した視点で安定した質も保っています。また内部作成であるので、入試の最新情報を踏まえた対応がしやすい、また高校さまのニーズやオーダーにビビッドに対応しやすいということがあります。

しかし、河合塾は予備校ですので、作成を担当する講師陣は授業を受け持っています。多忙な中で作成時間が十分に取れない時期がありますし、教科科目においては、やはり執筆者・作題者不足が続いています。河合塾としてはいかに受験生・保護者・高校教員から期待されている「河合塾品質」を今後も保っていくかが非常に重要です。

さらには、SNSでの発信による事前実施の漏えいも課題の一つです。模擬試験ですので、高校さまの都合に合わせて受験できるように、かなり実施期間に幅を持って実施をしているため、事前実施の漏えいという問題もあります。正確な平均点や合格可能性判定に影響が出る可能性がある悩ましい問題ですが、対策を取ってもいたちごっこが続いています。

以上、私からのご報告とさせていただきます。ありがとうございます。

---

**【庄島・司会】** 1年を通して作題を行う河合塾の作題プロセスをのぞき見る非常に貴重なお話だったと思います。とても組織立っていて、われわれ大学関係者には大いに参考になるお話だったのではないのでしょうか。ありがとうございました。

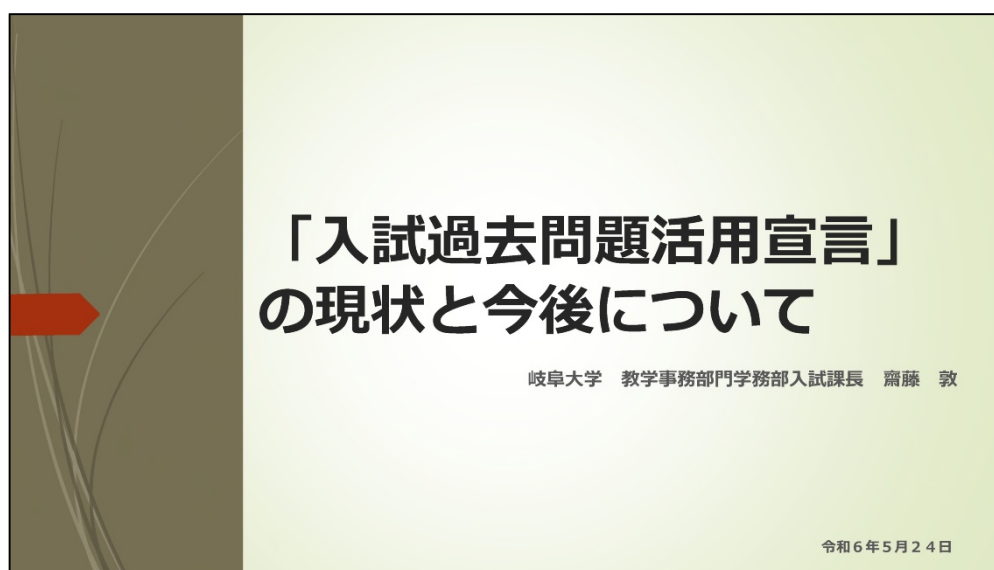
最後は岐阜大学の齋藤先生より、「『入試過去問題活用宣言』の現状と今後について」という題目でご報告をしていただきたいと思います。齋藤先生、よろしく申し上げます。■

## 全体会 3 ○ 報告⑤

# 「入試過去問題活用宣言」の現状と今後について

■ 齋藤 敦（岐阜大学 教学事務部門学務部入試課長）

岐阜大学入試課の齋藤です。このたびは報告・発表の機会を頂き、ありがとうございます。



「入試過去問題活用宣言」の幹事大学として、現状報告・本学の取り組みについて紹介させていただきます。

まず「入試過去問題活用宣言」について簡単にご説明します。これまで多くの受験の場で使用された入試問題は、膨大な数となり、その中には数々の良問が蓄積されているかと思えます。これらの入試問題は、各大学に帰属するものですが、同時に大学のコミュニティの共有財産としての側面を持っているのではとの考えに立ち、それぞれの大学の入試過去問題を共有財産として活用しようという基本的な理念から「入試過去問題活用宣言」の宣言をす



## 「入試過去問題活用宣言」に関するこれまでの経緯

- 平成17年11月7日** 国立大学協会総会において、当時の岐阜大学長からおよそ**20大学**の学長に非公式に趣旨を説明し、大方の賛意を得る。
- 平成18年1月5日** 「入試過去問題活用ネットワーク」趣意書を作成し、岐阜大学から**50数大学**に共同提案を呼びかける。
- 平成18年4月27日** 共同提案に賛同あるいは関心を持つ**23大学**が東京に集まり、問題点を検討する。岐阜大学、お茶の水女子大学、名古屋市立大学、順天堂大学から構成される準備委員会を結成する。  
同日、文科省高等教育局大学入試室に報告し、基本的な理解を得る。
- 平成18年5月26日** お茶の水女子大学において、準備委員会を開催し、「入試過去問題活用宣言」とする方針を決める。
- 平成18年6月2日** 「全国大学入学者選抜研究連絡協議会」（静岡市）におけるパネルディスカッションにて報告。  
入試文化を変えるものという評価を得る。  
準備委員会及び**23大学**間において、電子メール等を利用して「**入試過去問題活用宣言**」文書について検討。
- 平成18年10月27日** 趣意書を発送する。
- 平成19年1月31日** 第1回取りまとめ **平成19年3月31日** 第2回取りまとめ
- 平成19年4月23日** 「**入試過去問題活用宣言**」の実施について参加校に周知。
- 平成19年4月26日** 「**入試過去問題活用宣言**」のホームページを開設。
- 平成20年度入試から過去問題の活用を開始**

1

次に、経緯についてご説明させていただきます。まず平成17年11月7日に、国立大学協会の総会において、これは非公式ですが、当時の岐阜大学長から約20の大学の学長に趣旨をご説明した上で、賛意を頂いたところから展開していきます。

平成18年1月、「入試過去問題活用ネットワーク」の趣意書を作成し、五十数大学に共同提案を呼び掛けました。平成18年4月には共同提案に賛同、あるいは関心を持っていた23大学が東京に集まって、問題点を検討し、本学の他、お茶の水女子大学、名古屋市立大学、順天堂大学から構成される準備委員会を立ち上げて、同日、文部科学省高等教育局大学入試室にご報告し、基本的な理解を得ました。

平成18年5月に、お茶の水女子大学において準備委員会を開催し、「入試過去問題活用宣言」とする方針を定めました。

平成18年6月には、まさにこの「全国大学入学者選抜研究連絡協議会」のパネルディスカッションにおいて報告をさせていただいています。

そして平成18年10月、約400の大学に趣意書を発送し、「入試過去問題活用宣言」にご賛同いただいた参加大学の取りまとめを行い、平成19年4月23日に、「入試過去問題活用宣言」の実施について参加校に周知をした上で、平成19年4月26日にホームページを開設しました。

平成20年度の入試から、過去問題の活用を開始しましたが、その取り掛かりから活用開始に至るまでに、2年以上の歳月を費やしています。

## 「入試過去問題活用宣言」

入試過去問題活用宣言参加大学は、次に掲げる方針を宣言するものです。

1. 入試過去問題を大学コミュニティの共有財産との考えの基に、本宣言参加大学は、自大学の入試過去問題を参加大学間で使用することを承認します。
2. 本宣言参加大学は、入試過去問題を活用したとしても、それに安易に依存することなくアドミッションポリシーにしたがい、入試問題を作成します。
3. 入試過去問題をそのままの形で使用することも、一部改変して使用することも可能とします。
4. 入試過去問題使用の責任はすべて使用大学に帰します。
5. 入試過去問題活用宣言への参加は、入試要項などで事前に公表し、使用過去問題については、入試終了後、原問題作成大学に通知すると同時に、受験生に分かるような形で公表します。
6. 入試過去問題活用は平成20年度入試（平成20年2-3月実施）から開始します。

2

続いて、こちらは「入試過去問題活用宣言」の基本方針です。

1 つ目が、「入試過去問題を大学コミュニティの共有財産との考えの基に、本宣言参加大学は、自大学の入試過去問題を参加大学間で使用することを承認します」というものです。2 つ目が、「本宣言参加大学は、入試過去問題を活用したとしても、それに安易に依存することなくアドミッション・ポリシーにしたがい、入試問題を作成します」というものです。3 つ目が、「入試過去問題をそのままの形で使用することも、一部改変して使用することも可能とします」というものです。それから4 つ目が、「入試過去問題使用の責任はすべて使用大学に帰します」というものです。5 つ目が、「『入試過去問題活用宣言』への参加は、入試要項などで事前に公表し、使用過去問題については、入試終了後、原問題作成大学に通知すると同時に、受験生に分かるような形で公表します」というものです。最後が「入試過去問題活用は平成20年度入試（平成20年2-3月実施）から開始します」というもので、以上の6つの基本方針に基づき、宣言を行っています。

## 運 営 方 針

### 1. 宣言への参加資格

宣言に参加するための資格は、次に掲げる基準のすべてに該当するものとする。

- (1) 原則として、修業年限が4年制の大学（医学・薬学・獣医学にあっては6年制）(2) 過去問題が広く公表されていること。（出版社等によるものを含む）(3) 試験問題としての著作権が当該大学にあること。

### 2. 宣言への参加単位

原則として大学を単位とする。ただし、大学の学部でも大学として承認の得られているものにあつては、同様に取り扱うものとする。

### 3. 過去問題の利用について

- (1) 利用する過去問題は、公表された資料、問題集等とする。(2) 利用する過去問題は、原文又は改訂の制限を設けない。(3) 過去問題の作成経過年限については、制限はしない。

### 4. 宣言参加大学の義務について

- (1) 過去問題の利用は、アドミッションポリシーの実現のため必要と認める範囲で行うものとし、過去問題に依存することがあってはならない。  
 (2) 過去問題を利用することある旨を、入試要項やホームページ等で公表すること。  
 (3) 過去問題を利用した場合は、入試問題を公表する際に、問題作成大学名、年度、当該問題の改訂の有無を併せて公表すること。  
 (4) 過去問題を利用した大学は、公表と同時にその事実を問題作成大学及び幹事大学に報告すること。幹事大学は過去問題の利用状況を公表する。

### 5. 著作権の許諾について

- (1) 宣言参加大学間においては、過去問題の二次利用に関する著作権を許諾する。(2) 利用した過去問題に「著作物」の引用がある場合は、二次利用に係る著作権等の許諾手続きは利用した大学が行う。

### 6. 連絡委員会について

宣言大学間における連絡調整のため、大学入試過去問題活用宣言連絡委員会を置く。国公立大学6大学程度で構成する。

### 7. 幹事大学

連絡委員会に幹事大学を推挙し、幹事大学は連絡委員会で決定する。

### 8. ホームページの作成

- (1) 幹事大学は、ホームページを作成し、本宣言と参加大学を公表する。(2) 当分の間、ホームページの作成費は幹事大学が負担するものとし、その他の必要な費用が生じた場合は、その相関協議する。

3

続いて、運営方針です。詳細は省略しますが、大きな柱として8つの項目から構成されています。これも読み上げさせていただきます。1つ目が「宣言への参加資格」です。2つ目は、「宣言への参加単位」です。参加単位は原則として大学を単位とするということです。3つ目が、「過去問題の利用について」です。4つ目は、「宣言参加大学の義務について」です。詳細については、(1) から (4) まで4つの規定が設けられています。続いて、5つ目が「著作権の許諾について」です。こちらも詳細については、(1), (2) をご参照ください。6つ目の「連絡委員会について」は、「宣言大学間における連絡調整のため、大学入試過去問題活用宣言連絡委員会を置く」ということです。次の説明の中で、今の幹事大学を紹介させていただきます。

それから7つ目が「連絡委員会に幹事大学を置き、幹事大学は連絡委員会で決定する」というものです。最後、8つ目が「ホームページの作成」です。以上のことをホームページに掲載をした上で、どのような大学が参加しておられるか、どのような問題を各大学が利用したかということを今現在もホームページに掲載しています。

こちらは令和6年5月1日現在の「入試過去問題活用宣言」参加大学の一覧です。国立大学が44大学、公立大学が31大学、私立大学が93大学、そして省庁の設置する学校が1大学校ということで、合計169の大学にご参加いただいています。

**「入試過去問題活用宣言」参加大学** (令和6年5月1日現在)

**<国立> (44大学)**

空輝工業大学 帯広畜産大学 旭川医科大学 北見工業大学 弘前大学 岩手大学 秋田大学 山形大学 福島大学 茨城大学 筑波技術大学 宇都宮大学 群馬大学 埼玉大学 東京学芸大学 東京海洋大学 **○お茶の水女子大学** 横浜国立大学 新潟大学 富山大学 金沢大学 福井大学 山梨大学 信州大学 **○岐阜大学** 静岡大学 愛知教育大学 三重大学 滋賀医科大学 大阪教育大学 兵庫教育大学 奈良教育大学 鳥取大学 徳島大学 愛媛大学 高知大学 九州工業大学 佐賀大学 長崎大学 熊本大学 大分大学 宮崎大学 鹿児島大学 琉球大学

**<公立> (31大学)**

札幌医科大学 公立千歳科学技術大学 青森県立保健大学 宮城大学 山形県立保健医療大学 茨城県立医療大学 群馬県立県民健康科学大学 高崎経済大学 前橋工科大学 埼玉県立大学 新潟県立大学 公立小松大学 石川県立大学 石川県立看護大学 福井県立大学 山梨県立大学 公立諏訪東京理科大学 岐阜薬科大学 静岡県立大学 静岡文化芸術大学 **○名古屋市立大学** 三重県立看護大学 滋賀県立大学 京都府立大学 兵庫県立大学 岡山県立大学保健福祉学部・デザイン学部 新見公立大学 山陽小野田市立山口東京理科大学 高知工科大学 北九州市立大学国際環境工学部 長崎県立大学看護栄養学部

**<私立> (93大学)**

札幌大学 札幌学院大学 北海学園大学 酪農学園大学 青森大学薬学部 盛岡大学 石巻専修大学 尚絨学院大学 東北工業大学 東北医科薬科大学 東北公益文科大学 いわき明星大学 茨城キリスト教大学 共愛学園前橋国際大学 群馬バース大学 上武大学 高崎健康福祉大学 城西大学 女子栄養大学 聖学院大学 東京国際大学 城西国際大学 聖徳大学 千葉商科大学 中央学院大学 麗澤大学 和洋女子大学 跡見学園女子大学 **○桜美林大学** **○順天堂大学** 昭和大 昭和女子大学 創価大学 玉川大学 帝京科学大学 東京慈恵会医科大学 東京成徳大学 東京都市大学 東京農業大学 東京富士大学 東京未来大学 東邦大学 日本医科大学 日本社会事業大学 日本獣医生命科学大学 日本女子大学 ルーテル学院大学 関東学院大学 相模女子大学 湘南工科大学 東洋英和女学院大学 フェリス学院大学 横浜美術大学 新潟薬科大学 健康科学大学 静岡英和学院大学 愛知大学 愛知医科大学 愛知淑徳大学 植山学園大学 中部大学 藤田医科大学 皇学館大学 京都女子大学 総合大学 大阪経済法科大学 大阪工業大学 大阪産業大学 大阪樟蔭女子大学 関西医科大学 関西福祉科学大学 四天王寺大学 摂南大学 千亜会聖心大学 甲南大学 神戸学院大学 神戸国際大学 帝塚山大学 奈良大学 岡山商科大学 岡山理科大学 岡山医療専門学校 倉敷芸術科学大学 くらしき作陽大学 広島経済大学 広島工業大学 徳島文理大学 筑紫女学院大学 福岡工業大学 福岡看護大学 宮崎国際大学

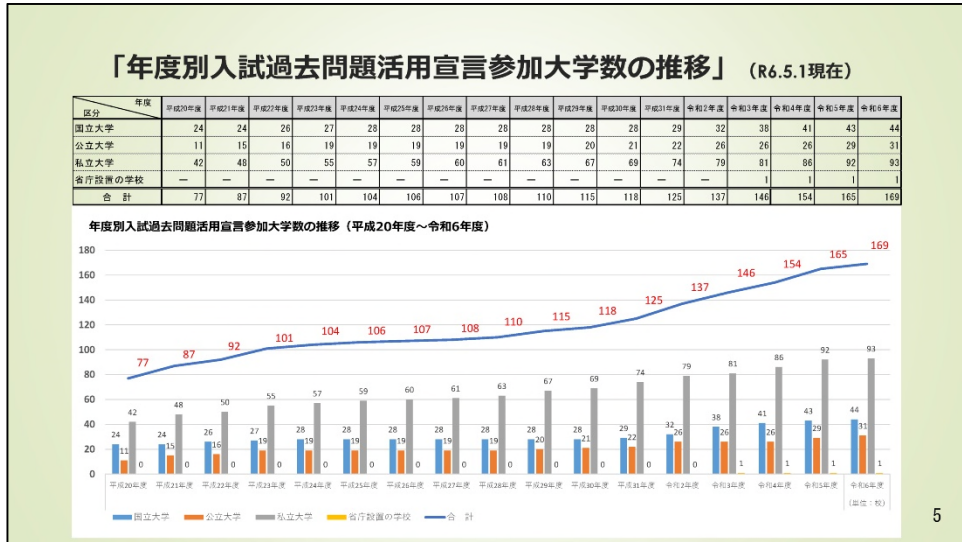
**<省庁の設置する学校> (1大学校)**

防衛医科大学校

**合計169大学**

4

幹事大学ですが、国立大学ではお茶の水女子大学、それから本学、岐阜大学に、公立大学では名古屋市立大学に、私立大学では桜美林大学と順天堂大学にお務めいただいております。



こちらは「年度別入試過去問題活用宣言参加大学数の推移」です。平成20年代から後半にかけては参加大学が極端に増えるということにはなかったのですが、令和に入ってから徐々に参加大学が増えてきています。このグラフからそのような状況が分かるのではないかと思います。

### 「年度別入試過去問題活用大学数及び出題数の推移」 (R5.3.31現在)

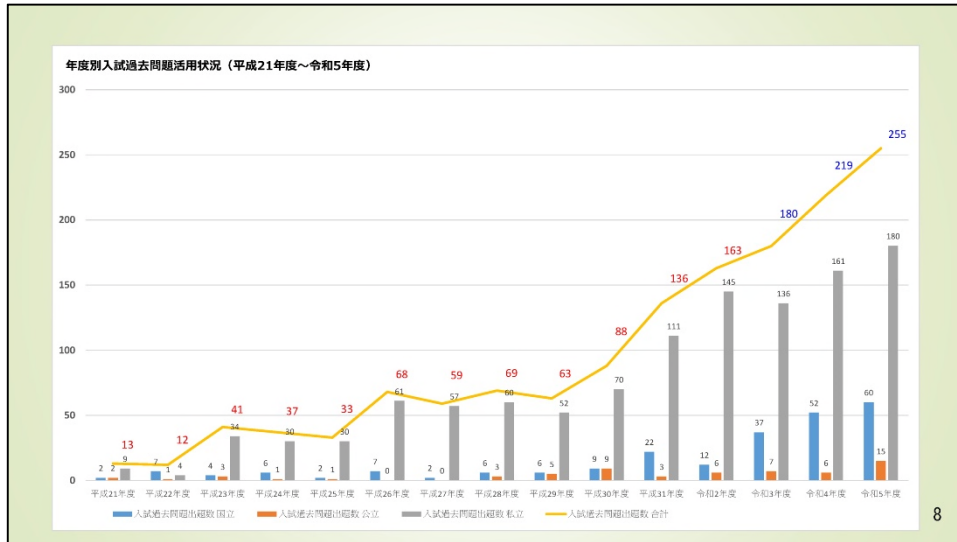
区分	入試過去問題活用大学数				入試過去問題出題数				問題改変の有無		
	国立	公立	私立	計	国立	公立	私立	計	有	無	計
平成21年度	2	1	6	9	2	2	9	13	11	2	13
平成22年度	4	1	3	8	7	1	4	12	10	2	12
平成23年度	2	3	5	10	4	3	34	41	35	6	41
平成24年度	4	1	6	11	6	1	30	37	37	0	37
平成25年度	2	1	9	12	2	1	30	33	30	3	33
平成26年度	4	0	6	10	7	0	61	68	59	9	68
平成27年度	2	0	10	12	2	0	57	59	50	9	59
平成28年度	5	2	12	19	6	3	60	69	56	13	69
平成29年度	2	3	14	19	6	5	52	63	52	11	63
平成30年度	5	5	12	22	9	9	70	88	83	5	88
平成31年度	10	2	15	27	22	3	111	136	124	12	136
令和2年度	5	3	18	26	12	6	145	163	150	13	163
令和3年度	7	3	17	27	37	7	136	180	160	20	180
令和4年度	15	2	23	40	52	6	161	219	195	24	219
令和5年度	12	6	24	42	60	15	180	255	237	18	255

6

続いて、「年度別入試過去問題活用大学数及び出題数の推移」です。令和5年3月31日現在、昨年度の状況です。平成21年度から令和5年度までの入試過去問題活用大学数、入試過去問題の出題数、問題の改変の有無について、各大学さまからのご報告に基づき取りまとめた表になります。

令和3年度から令和5年度にかけて、過去問題が使われた大学が多いことがお分かりいただけるかと思いますが。これは皆さまが推測されておられるとおり、コロナ禍が主な原因ではないかと考えられます。コロナ禍にあっては各大学で追試験がかなりの数実施されたことと思います。本学の出題委員からは、追試験に備えた予備問題の作成にあたり、過去問題

を活用したと聞いています。



こちらは先ほどの一覧表のうち過去問題の活用状況のみをグラフ化したものです。平成31年度から令和5年度にかけて、過去問題を活用される大学が増えてきていることがお分かりいただけると思います。

先ほどのグラフにも数値を掲載していますが、令和3年度は180題、令和4年度は219題、令和5年度は255題の過去問が活用されました。

### 過去問題を利用する背景

- (1) 過去問題の中には多くの良問が蓄積されている。
- (2) 出題できる教員の減少（人員削減など）
- (3) 予算的な問題（外部委託ができなくなるなど）
- (4) コロナ禍等、緊急時に備えた予備問題の確保
- (5) 作題・作問の教員の負担軽減と出題ミスの軽減
- (6) 学部・学科新設に伴う試験問題作成数の増加

私見も入りますが、過去問題を利用する背景についてご説明します。まず(1)として、過去問題の中には多くの良問が蓄積されていることです。(2)として、大学によって状況は異なりますが、人員削減などによって出題できる教員が減少してきているということです。それから(3)、予算的な問題も影響しているのではないかと思います。これまで外部委託していたが予算面で継続が困難になったというケースも聞いているところです。(4)ですが、コロナ禍等、緊急時に備えた予備問題の確保を目的とする場合もあります。(5)は作題・作

問の教員の負担軽減と出題ミスの軽減につながるのではないかとということです。(6)として、これは一部の大学かもしれませんが、学部・学科の新設等に伴う試験問題の作成数増加に対応するために利用したという話も聞いています。

### 過去問題を活用する利点

- (1) アドミッションポリシー に合った問題は、良問として活用できる。
- (2) 作題・作問教員の負担削減や出題ミスの減少
- (3) 活用宣言している大学間であれば、事前の許可なく利用できる。費用負担もなく報告のみで済む。
- (4) 出題者の、特に類似問題の存在に関する不安を取り除くことに繋がる。
- (5) 出題の効率を上げることに繋がる。

9

続いて、「過去問題を活用する利点」です。(1)「アドミッション・ポリシーに合った問題は、良問として活用できる」点です。(2)として、「作題・作問教員の負担軽減や出題ミスの減少」につながるのではないかとという点が挙げられます。(3)として、「活用宣言している大学間であれば、各大学に事前の許可なく利用・活用できる」点があります。また、費用負担なく、利用後の報告のみで済むところが利点と言えるかと思います。(4)は、出題者の、類似問題の存在に関する不安の解消につながるのではないかとという点です。(5)としては、出題の効率を上げることに少なからずつながる点です。

### 過去問題を活用する問題点（課題）

- (1) そのまま利用することは、難しいのではないかと。
  - ・ 高等学校の学習指導要領に合致しているかの確認
  - ・ 高等学校の範囲の逸脱や難易度は適当かなどの確認
- (2) 大学間で同じ問題が出題される可能性がある。
- (3) 新たに作題・作問することと同様の手間が掛かる。
- (4) アドミッションポリシー等を遵守した上で過去問題に頼り過ぎない様に活用する必要があるのではないかと。

10

次に過去問題を活用する問題点、課題を挙げています。(1)として、高等学校の学習指導要領に合致しているか、高等学校の範囲の逸脱や難易度などについての確認が必要であり、

過去問題をそのまま利用することは難しいのではないかとこの点です。

(2)として、大学間で同じ問題が出題される可能性がある点です。これは過去問題の活用に限った話ではありませんが、挙げさせていただいています。

それから(3)として、新たに作題・作問をすることと同様の手間がかかる点です。本学の出題委員の教員に確認したところ、同じとは言わないまでも、それなりの手間がかかるということです。

(4)として、問題点というわけではないのですが、アドミッション・ポリシーといった各大学のポリシー等を遵守した上で、過去問題に頼り過ぎないように活用する必要があるのではないかとこの点です。

## 本学の事例について

### 出題に関する取組み

- (1) 退職教員の活用（名誉教授など）
- (2) 非常勤講師等の活用
- (3) 高等学校退職教員の活用（高等学校長協会との連携と協力）

### 採点などのリスクを軽減する取組み

- (1) 解答例点検業務の委託（解答例を採点業務の参考とする）
- (2) 現役学生試験モニターの活用（当日問題を解いて内容等を確認）
- (3) 新聞掲載の解答例の活用

11

今回のテーマ、「入試問題の出題・採点ミス防止のしくみとは」に関連し、本学の主な取組みについて紹介させていただきます。

まず、「出題に関する取組み」についてです。本学においても、出題できる教員の数の減少が問題になっています。例えば、ある分野の教員がいないとか、1人しかいないといったことがあります。(1)として退職した名誉教授などにその出題の委員になっていただいているという事例があります。また、(2)として、本学の非常勤講師の先生方に出题委員になっていただいています。(3)としては、「高等学校退職教員の活用」があります。高等学校長協会に協力を依頼し連携しています。

当然、守秘義務等が課されますので、このような取組みがなかなか進んでいないという実態がありますが、近年では、高等学校を退職された教員の先生に出題委員になっていただいた事例もあります。

次に「採点などのリスクを軽減する取組み」についてです。(1)として「解答例点検業務の委託」を行っています。外部機関に作成いただいた解答例を採点業務の参考にしています。

(2)として、「現役学生試験モニターの活用」があります。当日の実施時間のおよそ1時間前に、主に1年生の学生にモニターとして当日の問題を解いてもらい、内容等に不備がないか確認しています。

(3) として、新聞に掲載される解答例を採点の時に活用した事例があります。

### 「まとめ」

- ・「入試過去問題活用宣言」に参加する大学が増えている現状がある。
- ・過去の入試問題には良問が蓄積されており、作問・作題教員の負担軽減に繋がる面もある。
- ・各大学のアドミッションポリシーなどを遵守した上で活用することはそれなりのメリットがあると思われる。
- ・データベース化などの問い合わせもあるが、予算面での課題もあり、会費等の費用負担が生じると退会される大学も出てくる可能性もあるため、現状維持が相応しいのではないかと考えている。ただし、参加大学からは、ホームページの改修などの意見もいただいております、今後の検討課題である。

12

まとめに入らせていただきます。近年、「入試過去問題活用宣言」に参加される大学が増えています。過去の入試問題には良問が蓄積されており、これらの活用は作問・作題教員の負担軽減につながる面もあるのではないかとことです。各大学のアドミッション・ポリシーなどを遵守した上で、活用することはそれなりのメリットがあると思っています。

データベース化に関する問い合わせも頂いているところです。こちらについては予算面の課題もあり、参加大学さまの費用負担も選択肢のひとつになるところです。しかし、参加のみにとどまる大学さまもあれば、多くの問題を活用・利用されている大学さまもおられることから、費用負担によって退会される大学さまが出てくる可能性があるため、現状維持が望ましいのではないかと考えています。

一方で、参加大学からはホームページの改修などの意見も頂いております、これについては今後の検討課題としていただいております。

これで報告を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

---

【荘島・司会】 齋藤先生、どうもありがとうございました。入試の過去問題を共有することの取り組みについての現状をご報告していただきました。過去問題は入試ミスという観点からは良問のプールなのかもしれません。

以上、5人の先生方のご発表が終わりました。どうもありがとうございました。■



## 全体会 3 ○ 全体討論

### 入試問題の出題・採点ミスを防止するしくみとは

■秋田 成司（大阪公立大学 副学長，教授）/西郡 大（佐賀大学 アドミッションセンター長，教授）/荒井 清佳（大学入試センター 研究開発部准教授）/椎名 久美子（大学入試センター 試験・研究副統括官，研究開発部教授）/網野 輝也（河合塾 教育企画開発部部長）/齋藤 敦（岐阜大学 教学事務部門学務部入試課長）/横井 修司（大阪公立大学 教授 ■司会）

【横井・司会】 それでは全体討論を始めます。ここからの司会は大阪公立大学の横井が務めます。よろしくお願ひします。基本的には頂いたご質問に対してお答えしていただきながら、コメントがあれば受け付けていきたいと考えています。

早速、1つ目のご質問です。「西郡先生が AI の利用を提案されましたが、入試問題を外部のサーバーにアップするのは機密保持上難しいのではないのでしょうか」というご質問です。西郡先生、いかがでしょうか。

【西郡】 私は AI や情報系の専門ではないのですが、技術の発展に期待したいというのが素直なところです。

例えば大学入試センターにおいて共通テストの問題チェックの際に AI を利用するようなシステムができ、各大学も利用できる仕組みが構築されるのが、個人的な理想形です。大学は自分の試験問題を大学入試センターに持ち込み、チェックをかけることが考えられます。もちろん、ネットワーク上でできればそれに越したことはないですが、将来的にそういった仕組みも 1つの形ではないかと思っています。

まだ越えなければいけないハードルはあると思いますが、そのようなイメージを持っています。

【横井・司会】 ありがとうございます。入試に対して、コンピューターの力をどこまで借りるかというところの線引きや、さまざまな課題についてはまだまだ議論の必要なおところではないかと思っています。他にこのご質問に対して、コメントはありますか。

【椎名】 大学入試センターの椎名です。質問者の方も書いておられますが、外部のサーバーにアップするというのが、最大の障壁ではないかと思います。入試問題についての日本の文化は、機密保持には非常に敏感です。試験問題の作成場所からいったん外に出すというのが、非常に大きなネックになるのではないかと思います。以上、コメントでした。

【横井・司会】 ありがとうございます。外部にあるサーバーに投げて AI に仕事をしてもらうことは、機密上、最大の障壁になると私も思います。

次の質問を頂いています。「入試センターの『作題ガイドライン』のお話がありました。これは、頂けるのでしょうか」というご質問です。

【荒井】 『作題ガイドライン』のダウンロードリンクをチャットに貼り付けますので、そこからダウンロードをよろしくお願いします。

【横井・司会】 ありがとうございます。

では、次のご質問ですが、佐賀大学の西郡先生へのご質問です。「AI 等の技術によるミス防止への期待とありましたが、実務利用が可能なレベルになるのはいつ頃と考えていらっしゃるでしょうか」というご質問です。

【西郡】 現時点では少し難しいのではないかという印象を受けました。もし河合塾さんのほうで、そういったサービスや仕組みが構築されるのであれば、利用しようかという大学もちらほらと出てくるのではないかと思います。私もこれは網野さんに聞いたかったことなのですが、どういう感触だろうかと思っています。

【網野】 まずご質問にお答えしますと、現在最先端を行っている Chat GPT-4 であってもあまり使えない状況です。特に数学、理科はもう壊滅的なことになります。英語においてもプロンプトを英語で書くと、GPT-3.5 で見つからないものがやっとな GPT-4 で見つかるようなレベルです。気軽に AI 万能論には乗らないほうがいいのではないかと思います。

しかしながら、ミスを素早く正確に発見することを考えると、やはり AI の力というのは非常に期待できますので、AI の専門家や大手出版社などの校閲部などとも協力しながら研究開発ができれば、非常に夢のある話が進むのではないかという感触があります。

【横井・司会】 ありがとうございます。網野先生には次のご質問までお答えしていただきました。私が読み上げなかったのですが、「問題修正の信頼度について」ということで、どの程度のミスを拾い上げられるのかという実感レベルで言うと、基本的には今の ChatGPT-4 のバージョンでも使えないということです。こちら側が相当工夫してやっと初めて答えが得られるかどうかと考えればいいですか。

【網野】 2つ目の質問になりますと、APIの導入はしていません。ただデータはどのようなものかという、テーマ英作文の答えに間違いがないかのチェックであるとかの、文章のチェックには少し活用させていただいています。

河合塾の中では、英作文の解答例を幾つか載せなければいけませんので、英作文の解答例を1回AIに書かせてチェックをしたり、英語・日本語の対話文の会話を作ってもらったりします。

設問に沿った日本語の対話を作るのは字数制限などもあり難しいものです。しかし共通テストに代表されるように、対話文を使った問題が非常に増えていますので、それをChat GPTなどに書いてもらう形で活用はしています。

【横井・司会】 ありがとうございます。

続いて岐阜大学の齋藤先生への質問です。「自大学の過去問題を活用した事例というのはどれくらいあるのでしょうか」ということで、自らの大学が何年か前の問題をもう一度出すといったような事例がどれくらいあるかというご質問だと思います。齋藤先生、よろしくお願ひします。

【齋藤】 よろしくお願ひします。これは岐阜大学、本学における入試過去問題の年度別（平成20年度～令和5年度）の利用状況です。全く使っていない年度もありますが、先ほど申し上げたとおり、令和3年度は11題、4年度が5題、5年度は13題の利用実績があります。特に本学においては化学、生物といった理科の問題で利用させていただいています。

こちらにつきましては、ホームページで年度ごとに各大学の活用状況を報告させていただいています。

【横井・司会】 ありがとうございます。岐阜大学さまだけでなく、他大学の活用状況についてもホームページで公開されているということです。もしご興味がありましたら、ホームページをご覧ください、他の大学の状況も含めて見ていただければと思います。

他の先生方で、これに対するコメント、あるいは何かご質問、ご議論はありますか。

【西郡】 西郡です。質問者の意図は、自分の大学の過去問を使ったことがありますかという質問だったと思うのですが、そのような事例はないのでしょうか。

【齋藤】 失礼しました。自分の岐阜大学の過去の問題を岐阜大学において使ったかどうかということですね。本学においては、当然使ったこともありますが、本学の申合わせにおいて、本学において使った過去5年間の問題は利用しないことが定められています。ただ他大学の過去問題については、5年という縛りはありません。以上です。

【横井・司会】 岐阜大学の例ということでご紹介をしていただきました。西郡先生、サポートをありがとうございます。他にないようでしたら、次のご質問にいきたいと思います。

次は「大学入試共通テストの過去問利用は、事前許可なく大学入試への利用可能であると聞いたことがありますか、間違いはないでしょうか」というご質問を頂いています。

**【大学入試センター事務局】** 大学入学共通テスト過去問題の著作権法に基づいた利用について、大学入試センターとして妨げるものではありません。

ただし、入試問題として利用された場合には、試験実施後に大学入試センター試験企画課までご報告いただけますと幸いです。

**【横井・司会】** ありがとうございます。

次のご質問ですが、「齋藤先生のお話では、令和5年の国立大学は12分の60ということで1大学当たり5問も利用されているようです。大変多いと感じますが、問題数をどのように数えられているのでしょうか」というもの。もう1つが、「解答例点検業務の委託について、タイミングや委託先等、可能な範囲で教えていただければありがたいです」というもので、2つの質問を頂いています。齋藤先生、よろしく申し上げます。

**【齋藤】** どうもありがとうございます。先ほどご説明したとおり、活用されました大学さまから利用した問題を一覧表等にして本学にご提出いただき、取りまとめています。

実際には、10～15問と利用される大学もありますし、1、2問しか利用しない大学もあります。単純にその平均を取ると5問になりますが、利用数は大学により異なります。

それから解答例の点検業務の委託につきましては、各科目の部会に対して、解答例が必要かどうかを確認した上で、必要がある部会について委託していますので、必ずしも全科目について委託するわけではありません。年度当初から確認を行い、全科目からの回答が出揃い次第、外部の受験産業さまに見積もり等をお願いする形です。当然、守秘義務等を記載した契約書を交わしています。

**【横井・司会】** ありがとうございます。

次の質問です。「入試ミスが発生した後の大学の対応事例を教えてください」ということで、西郡先生、よろしく申し上げます。

**【西郡】** 資料に載せていたものは新聞記事で調べたものなのですが、生データまでさかのぼらないと具体的な対応方法まで追うことはできません。今、いろいろ探したのですが、15年近く前の資料であり探しきれませんので、ここではお答えできません。申し訳ありません。

**【横井・司会】** ありがとうございます。確かに少し難しいと思います。

次は荒井先生への質問で、「マークシートの解答選択肢というのは、科目内では統一されているほうがいいのでしょうか。実態として複数人で作問をしており、『ア、イ、ウ』、『①、②』など、整っていない状態です」ということですが、ご回答をよろしく申し上げます。

【荒井】 ご質問をありがとうございます。個人的な感覚ではそろえられるならば、そろえておいたほうが良いだろうと思います。さまざまな選択肢があると、点検をする時に目がちらちらしてしまい、ミスを見つけづらくなるので、認知負荷は減らしておくほうが良いだろうと思います。

また、マークシートを利用されている場合には、印刷されている記号がマークシートごとに異なると思いますので、マークシートの記号に合わせておくことも重要です。これについて作題ガイドライン等に明記しておく、マークシート上にマークする場所がないというミス避けられると思います。以上です。

【横井・司会】 ありがとうございます。

では次にいかせていただきます。河合塾の網野先生へ、「単語レベルチェックの仕様を独自システムで販売されているのですか」というご質問。もう一つが「採点者は自宅から集まるのですか。どこで丸付けをしているのですか」というご質問です。よろしくお願いします。

【網野】 まず単語レベルチェックの仕様は独自システムです。活用形を原形に直した上で単語を当てるシステムですが、このリストはわれわれが研究、分析した蓄積を入力したものですので、販売はしていないということでお答えします。重複システムの仕様については、申し訳ありませんが、これは部外秘のものになりますので、詳しくお話はできません。著作権の関係がありますので、文章を丸々投入しているわけではないということだけお伝えしておきます。

電子採点については、採点者は自宅からパソコンでログインをして採点を行います。以上、お答えになります。

【横井・司会】 ありがとうございます。

次はコメントのご紹介です。「問題作成のミスを見る時に AI ということでお話がありましたが、外部サーバーにも送らずにスタンドアロンで利用可能な AI も現れつつあるので、それは候補になりそうです」ということです。

次は河合塾の網野先生へ、「大学入試では作題者の確保に苦慮していますが、予備校では講師の先生は模試の作成を快く引き受けてくださるでしょうか。固辞される方は少ないのでしょうか」というご質問です。

【網野】 固辞される方は非常に多いです。その要因としては、報酬に対するタイムパフォーマンスが非常に悪いということがあるかと思います。

【横井・司会】 続けて、「問題訂正、採点基準訂正などはどの程度、発生しているのでしょうか」というご質問も頂いています。

【網野】 およそ十数件程度になります。年によって上下しますので、10件を超える時と

超えない時があり、廃問は出てしまう年とない年があります。

【横井・司会】 ありがとうございます。「過去問題について齋藤さんに質問をします。教科横断的ないわゆる総合問題にも使える問題が過去問題の中にあるのでしょうか」というご質問で非常に内容に踏み込んだことですが、お答えいただけますか。

【齋藤】 ありがとうございます。過去問題の活用につきましては、今、宣言をさせていただいている大学さまにおかれては、例えば小論文なども利用できるかと認識をしています。

赤本やその大学のホームページ等に掲載してあるものであれば、基本的には利用ができるという認識でいます。以上です。

【横井・司会】 続いての質問です。「齋藤先生へのお伺いです。過去問題とは大問の全体の流れを利用するというのではなく、小問を利用するということなののでしょうか。例えば生物であれば、呼吸に関する大問の流れを全部利用するのではなく、ATPは何に分解されるのかというぐらいでしょうか。それでしたら過去問利用というレベルではないように思うのですが」ということです。齋藤先生、お答えできますか。

【齋藤】 ありがとうございます。大問、小問については、大学さまによって報告時の単位がまちまちではないかと思えます。おっしゃられる意味は理解するのですが、そこまで具体的な報告を頂いていないところもありますので、明確な回答は難しいです。申し訳ありません。

【横井・司会】 ありがとうございます。過去問にインスパイアされて似たような問題が作られるということ、過去問利用とするかしないかのご判断になると思えます。そういうものは過去問利用には当たらないだろうと考える方もいらっしゃるでしょうし、インスパイアされたのだから過去問利用になるのではないかとご判断をされる方もいらっしゃると思えます。

こういった線引きを事務局が決めるというのももしかすると違う話なのかもしれないとも思えます。ご理解いただければと思います。

頂いたご質問には大体お答えできたのではないかと思います。パネリストの先生方で、他にご意見・ご質問がある方はいらっしゃいますか。

それでは、私から西郡先生にお伺いします。私が所属している大学もそうですが、短い期間に前期、中期、後期と3つの試験が行われる体制の中で、修正等の作業を行っています。中期のスケジュールのタイトさについて、お考えはありますか。

【西郡】 ただでさえスケジュールがタイトな状態で、中期がある公立大学さんは大変な状況でやっているということがあると思えます。われわれは前期と後期だけでも大変な状況で、中期というところまでは考えたことがありませんでした。申し訳ありません。

先ほど頂いた「入試ミスが発生した後の大学の対応事例」について改めて回答します。解答用紙を紛失した場合の対応というのが見つかったのですが、当該科目を100点満点で処理して対応したが不合格となったというような内容だったようです。

**【横井・司会】** ありがとうございます。

中期を抱える大学は、中期の実施を大きな課題として考えているところだと思います。特に私が所属する大学は中期の規模が非常に大きいため、スケジュールが厳しいといつも思っているところです。

続いて、椎名先生に私からお聞きしたいことがあります。小規模の大学から「手引き」があまり必要ではないということ、あるいは過去問を見るだけで作ることができるというご意見を頂いているということでした。作題を担当する年度の間隔が非常に短い、あるいは「毎年、私が担当で、何なら『手引き』が自分である」という感覚で作題が行われているのかなと想像しました。そういうことが「手引き」は必要がない理由に当たるのでしょうか。

**【椎名】** 短い期間で担当者の方が変わる中でどのように作問するのかを念頭に作成した質問項目ですので、確かに小規模大学において、限られた作題者がずっと作っているような場合には、必要ないという考えにつながるのかもしれませんが。

ただ私は、何らかの作成方針を文書にしておくということは、ミスを防止する上では大事ではないかと考えています。

**【横井・司会】** 私も同感です。どんなに大学の規模や作題部会が小さくても、やはり指針を持ち、その見直し・修正を繰り返した上で作題が行われるべきではないかと思います。「手引き」が自分であると思ってしまうのは確かに危険な行為ではないかと思います。

ただそのように思いがちになってしまう面はあるかと思いますので、携わる方々の意識を毎年リセットするような、そういう思いをきちんと持ち直すというようなことはやはり大切なのではないかということを感じました。

終了時間になりました。押し気味で進みましたので、総合討論の時間がうまく取れなかったことと、質問がたくさんあり少し駆け足で進んでしまいました。十分なお答えができなかった部分、あるいは少し意図と違った部分があったかもしれません。

本日は本当にありがとうございました。非常に勉強になりましたし、発表・総合討論を含め今後の参考になりました。本企画をきっかけに、入試の質の向上・作題方法の改善が、負担のない形で進むことを期待してこの総合討論を終わりたいと思います。

これで全体会 3 を終了します。ご発表をいただいた先生方に拍手で終わりたいと思います。ありがとうございました。■

## 令和6年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第19回） 実施結果

### 1. 大会実施概要

期 日：令和6年5月23日（木）～25日（土）

主 催：独立行政法人大学入試センター

共 催：大阪公立大学

参加費：1人 3,000円（税込）

開催形式：Zoomによるオンライン開催

参加申込者数：496人（令和5年度参加者数 400人）

		国立大学	公立大学	私立大学	高等学校	その他	合計
参加申込者数		156(150)	94(83)	152(108)	60(37)	34(22)	496(400)
内 訳	教員・研究者	102(98)	58(45)	41(35)	59(36)	3(0)	263(214)
	事務職員等	54(52)	36(38)	111(73)	1(1)	31(22)	233(186)

単位：人 （ ）は前回大会の参加申込者数。

### 2. 日程・プログラム

日 程	プログラム	時 間
【1日目】 5月23日 (木)	○ 自主企画セッション 「個別入試への「情報」の出題」	10:00～12:00
	○ 全体会1（センターセミナー） 「大学入学者に対する追跡調査研究の現状と展望」	14:00～17:00
【2日目】 5月24日 (金)	○ 主催者挨拶，来賓挨拶	9:40～10:00
	○ 全体会2 「見過ごされがちな高大接続課題： 不本意入学，ミスマッチ入学，学力不足」	10:00～12:30
【3日目】 5月25日 (土)	○ 研究会（各研究会終了後に交流の場を30間設ける）	
	◆ オープンセッション（第1部）	
	・第1セッション〔志願者動向，入試方式〕	9:30～12:00
	・第2セッション〔入試広報〕	9:30～12:00
	・第3セッション〔選抜方法，追跡調査，CBT〕	9:30～12:00
◆ オープンセッション（第2部）		
・第4セッション〔多面的・総合的評価，入試研究〕	13:30～16:20	
・第5セッション〔高大接続，高大連携〕	13:30～16:20	
◆ クローズドセッション（第1部）〔選抜方法，入試運営〕		9:30～12:00
◆ クローズドセッション（第2部）〔高大接続，追跡調査〕		13:30～16:20





# 大学入試研究の動向

**42号**

令和6年12月

発行/独立行政法人大学入試センター

〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23

**<https://www.dnc.ac.jp/>** ☎03-3468-3311

編集/試験企画部試験企画課